Veritas NetBackup™ for Microsoft SQL Server 管理者ガイド

Windows

リリース 8.1.1

VERITAS™

Veritas NetBackup™ for Microsoft SQL Server 管理者ガイド

最終更新日: 2018-04-15

マニュアルバージョン: NetBackup 8.1.1

法的通知と登録商標

Copyright © 2018 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は Veritas Technologies LLC または同社の米国とその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、サードパーティの所有物であることをベリタスが示す必要のあるサードパーティソフトウェア (「サードパーティプログラム」) が含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このベリタス製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC は、本書の提供、内容の実施、また本書の利用によって偶発的あるいは必然的に生じる損害については責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202、「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。業務用またはホスト対象サービスとしてベリタスによって提供されている場合でも同様です。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

http://www.veritas.com

テクニカルサポート

テクニカルサポートは世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。サポートサービスとテクニカルサポートへの問い合わせ方法については、次の弊社の Web サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

https://my.veritas.com

既存のサポート契約に関する質問については、次に示す地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界全域 (日本を除く)	CustomerCare@veritas.com
Japan (日本)	CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページに最終更新日付が記載されています。最新のマニュアルは、次のベリタス Web サイトで入手できます。

https://sort.veritas.com/documents

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次のベリタスコミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

http://www.veritas.com/community/ja

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) の表示

ベリタスの Service and Operations Readiness Tools (SORT) は、時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章 NetBackup for SQL Server の概要 13

NetBackup for SQL Server の概要 13
NetBackup for SQL Server の機能 14
NetBackup for SQL Server の用語 16
NetBackup MS SQL クライアントのヘルプ 18

第 2 章 NetBackup for SQL Server のインストール 19

NetBackup for SQL Server のインストールの計画 19
オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認 20
NetBackup サーバーおよびクライアントの要件 21
NetBackup クラスタでの NetBackup for SQL Server の使用要件 22
NetBackup for SQL Server のライセンスについて 22

第 3 章 SQL Server インテリジェントポリシーのためのインスタンス管理 23

SQL Server インテリジェントポリシーのインスタンス管理について 23
SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて 24
SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する 27
SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定 29
NetBackup 検出サービスについて 30
インスタンス管理での SQL Server インスタンスとインスタンスグループの表示 30
インスタンスの処理について 32
インスタンスグループの処理について 33
SQL Server インスタンスの登録について 34
SQL Server インスタンスの登録 35
インスタンスグループへのインスタンスの登録 37
nbsqladm コマンドを使ってインスタンスを登録することを DBA に承認する 40
インスタンス管理への SQL Server インスタンスの手動追加 41

第 4 章 SQL Server インテリジェントポリシーを使用した SQL Server のバックアップの設定 43

SQL Server インテリジェントポリシーについて 44
SQL Server インテリジェントポリシーを使用する SQL Server のバックアップの設定について 44
新しい SQL Server インテリジェントポリシーの追加 45
ポリシー属性 47
スケジュールプロパティについて 47
SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式 49
ポリシーへのインスタンスの追加 51
ポリシーへのデータベースの追加 53
インスタンスプロパティ 56
［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブ 57
バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加 57
バックアップ対象リストへのファイルまたはファイルグループの手動による追加 59
バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加 59
SQL Server バックアップの調整パラメータについて 60
読み取り専用ファイルグループのバックアップ 64
読み書き可能なファイルグループのバックアップ 65

第 5 章 NetBackup for SQL Server の構成 67

分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 67
ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認 68
NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について 73
バックアップ操作を許可するジョブ数の設定 77
［1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)］の構成 78
SQL Server マルチストライプバックアップの構成 79
手動バックアップの実行 80

第 6 章 SQL Server のリストアの実行 81

NetBackup MS SQL Client の初回の起動 82
SQL Server のホストとインスタンスの選択 82
SQL Server バックアップイメージの表示 83
NetBackup for SQL Server のオプション 84
SQL Server データベースのバックアップのリストア 88
SQL Server データベースの完全復旧の実行 88
SQL Server ファイルグループのバックアップのリストア 89

読み書き可能なファイルグループバックアップからの SQL Server データベースのリカバリ 90
SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア 91
SQL Server データベースファイルのリストア 91
完全復旧を実行しない SQL Server トランザクションログイメージのリストア 92
SQL Server データベースの移動 93
SQL Server のページレベルのリストアの実行について 95
リダイレクトリストアの権限の構成 97
代替ホストへの SQL Server データベースのリダイレクト 99
マスターサーバーの選択について 100
リモート SQL Server インストール上でのリストアの実行 101
フルテキストカタログを含むデータベースのリストアについて 102
複数ストリームの SQL Server バックアップのリストア 102
複数のストリームを使った従来のバックアップについて 102
複数ストリームを使ったスナップショットバックアップ方式について 102
バックアップに使用されたデバイスよりも少ないデバイスでの複数ストリーム SQL Server バックアップのリストア 103

第 7 章 VMware バックアップを使用した SQL Server データの保護 104

VMware バックアップを使用した SQL Server データの保護について 104
Veritas VSS provider for vSphere について 105
SQL Server を保護する VMware ポリシーの使用に関する制限事項 105
SQL Server を保護する NetBackup for VMware バックアップの構成について 107
NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加 109
Veritas VSS provider for vSphere のインストール 109
SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定 110
SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーの構成 112
スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server を保護するための VMware ポリシーの構成 114
SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて 116
VMware バックアップからの SQL Server データベースのリストア 116

第 8 章 Snapshot Client を併用した NetBackup for SQL Server の使用 118

SQL Server 用の NetBackup Snapshot Client について 118
Snapshot Client を使用した SQL Server の操作 119
SQL Server スナップショットおよびインスタントリカバリバックアップの構成要件 122
SQL Server のスナップショットポリシーの構成 122
SQL Server のインスタントリカバリバックアップのポリシーの構成 124
コピーまたはクローキングしたスナップショットバックアップによる差分バックアップの影響 127
コピーのみバックアップを使用したサンプルバックアップスケジュール 128
コピーのみのバックアップの作成 (レガシー SQL Server ポリシー) 129
コピーのみではないインスタントリカバリバックアップの作成（レガシー SQL Server ポリシー） 130
SQL Server エージェントのグループ化バックアップについて (レガシー SQL Server ポリシー) 130
グループ化バックアップの要件 131
グループ化バックアップの進捗の表示 131
グループ化バックアップされたデータベースのリストア 132

第 9 章 高可用性 (HA) 環境での SQL Server の保護 134

SQL Server の高可用性 (HA) 環境について 134
SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について 135
可用性グループのバックアップの制限事項 136
SQL Server 可用性グループの優先レプリカの保護について (レガシーバックアップポリシー) 136
SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について 142
可用性グループが NetBackup ドメインをクロスするときの SQL Server バックアップの構成 146
SQL Server 可用性グループデータベースのプライマリとセカンダリレプリカへのリストア 149
SQL Server 可用性グループのデータベースのセカンダリレプリカへのリストア 152
可用性グループが NetBackup ドメインをクロスしたときの可用性グループデータベースのリストア 153
クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server インテリジェントポリシー) 154
クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server レガシーポリシー) 156

仮想 SQL Server インスタンスのリストアの実行 157
NetBackup for SQL Server のデータベースミラーリング機能について 157
データベースミラーリングをサポートするための NetBackup の設定 158
ミラー化されたパートナーの同時バックアップの実行 159
ミラーリングされたデータベースのバックアップイメージのリストア 159
データベースログ配布をサポートするための NetBackup の構成 161
ログ配布が設定された環境での SQL Server のバックアップ 161

第 10 章 バックアップおよびリカバリの概念 163

SQL Server のバックアップおよびリカバリの概念について 163
SQL Server システムデータベースの種類について 164
SQL Server データベースバックアップについて 164
SQL Server ファイルグループのバックアップについて 165
SQL Server の差分バックアップについて 166
NetBackup for SQL Server のコンポーネント 166
NetBackup での SQL Server ホストおよびインスタンス名の解決方法 168
NetBackup for SQL Server でのデータベースのバックアップ方法 170
NetBackup for SQL Server でのデータベースのリカバリ方法 171
SQL Server ファイルとファイルグループの保護 171
SQL Server ファイルとファイルグループのリカバリ時の注意事項について 172
読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小 173
SQL Server のバックアップまたはリストア操作時のデータ転送速度に影響を与える要素 173
SQL Server のリカバリでの考慮事項について 174
SQL Server のトランザクションログについて 174
リカバリ方針について 174
トランザクションログのバックアップについて 175
差分バックアップについて 175
ファイルとファイルグループのバックアップについて 176
データベースのリカバリについて 177
リカバリのステージングについて 177

第 11 章 複数の NIC を備えている場合の NetBackup for SQL Server の使用 179

複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について 180
プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成 181
複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー) 182
複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー) 183
複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する 184
複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー) 185
複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー) 186
複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップ用バッチファイルを作成する (SQL Server レガシーポリシー) 187
複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのリストアを実行する 188

第 12 章 クライアントとバッチファイルを使用した SQL Server レガシーポリシーでのバックアップの設定 191

SQL Server のレガシーポリシーについて 192
SQL Server レガシーポリシーを使用するバックアップの設定について 193
SQL Server のバックアップとリストアのための NetBackup サービスの設定 194
NetBackup レガシーバックアップポリシーのある SQL Server セキュリティについて 195
NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について 196
バッチファイルで使用するキーワードおよび値 197
バッチファイルの作成 208
バッチファイルの実行 209
新しい SQL Server レガシーポリシーの追加 209
スケジュールプロパティについて 210
レガシーポリシーのバックアップ形式 211
完全バックアップへの差分バックアップの変換 212
アプリケーションバックアップスケジュールの構成 213
アプリケーションバックアップスケジュールの例 214
自動バックアップスケジュールの構成 214
自動バックアップスケジュールの例 215

ポリシーへのクライアントの追加 215
バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 216
SQL Server ホストおよびインスタンスの選択 218
SQL Server バックアップ操作のオプション 218
バックアップ用に選択されたオブジェクトのプロパティの表示について 221
SQL Server データベースのユーザー主導型バックアップの実行 222
SQL Server トランザクションログのバックアップ 223
SQL Server データベースファイルグループのバックアップ 224
読み取り専用ファイルグループのバックアップ 225
SQL Server 読み取り専用バックアップセットの表示 226
読み書き可能なファイルグループのバックアップ 226
SQL Server データベースファイルのバックアップ 227
部分的なデータベースのバックアップの実行 228
リモート SQL Server インストールのバックアップの実行 229
NetBackup for SQL Server のファイルチェックポイントについて 230
失敗した SQL Server バックアップの自動再試行について 231

第 13 章 dbbackex によるユーザー主導操作の実行 233

dbbackex を使った SQL Server のユーザー主導の操作の実行 233
クライアントのスケジューラと dbbackex の併用 235

第 14 章 bplist を使用した SQL Server バックアップのリストの取得 236

bplist を使った SQL Server バックアップの取得について 236
NetBackup for SQL Server のバックアップ名について 237

第 15 章 SAP 環境の SQL Server のバックアップとリストア (レガシー SQL Server ポリシー) 240

SAP 環境での SQL Server バックアップおよびリストアについて 240
SAP 環境での SQL Server の自動バックアップ用バッチファイルの作成 241
SQL Server でのバックアップの監視 242
R/3 データベースのリストア 242
SAP 環境の SQL Server の手動バックアップについて 245
SAP 環境での SQL Server のポリシー構成について 245

第 16 章 トラブルシューティング 246

NetBackup for SQL Server の操作の監視について 247
SQL Server のトラブルシューティング用の NetBackup レポートについて 248

SQL Server のトラブルシューティング用のデバッグログについて 248
SQL Server のトラブルシューティング用のすべての NetBackup デバッグログの作成 249
SQL Server のバックアップ操作のデバッグログについて 249
SQL Server のリストア操作のデバッグログについて 250
デバッグレベルの設定 250
Veritas VSS provider ログ 251
NetBackup for SQL Server の最大トレースレベルの設定 252
インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング 253
大規模な SQL Server データベースのリストアにおけるタイムアウトエラーの最小化について 254
SQL Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング 255
バックアップジョブ完了の遅延 255
SQL Server の VMware バックアップ中に発生する SQL Server のログの切り捨てエラー 256
SQL Server の圧縮バックアップイメージを単一のストライプとして、または複数のストライプを含むイメージとしてリストアすると、SQL Server のリストアが失敗する 256
可用性グループクラスタに不正なバックアップイメージが表示される 257
SQL Server のホスト名または SQL Server データベース名の末尾にスペースがあると SQL Server データベースのリストアは状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する 257
SQL Server のホスト名、データベース名、データベース論理名の末尾にスペースがあると移動操作は状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する 258

第 17 章 SQL Server のディザスタリカバリ 259

SQL Server のディザスタリカバリについて 259
SQL Server のディザスタリカバリの準備 260
ディザスタリカバリの後の SQL Server のデータベースのリカバリ 260

付録 A バッチファイルの例 262

レガシー SQL Server ポリシーのサンプルバックアップバッチファイルについて 262
スクリプトによるデータベースのバックアップ 263
スクリプトによるストライプ化されたデータベースのバックアップの実行とストライプごとの複数の内部バッファの許可 263
スクリプトによる 1 つの操作の実行と SQL Server にログインするためのユーザー ID とパスワードの指定 263
スクリプトによる複数の操作の逐次的な実行 264

スクリプトによる一連の操作の並列実行 265
スクリプトによるバックアップの最大転送サイズとブロックサイズの指定 267
バックアップからインスタンスとデータベースをエクスクルードするための環境変数を使用するスクリプト 267
サンプルリストアバッチファイルについて 268
スクリプトによるデータベースのリストア 269
スクリプトによる複数のストライプからのデータベースのリストア 269
スクリプトによるファイルグループのバックアップ、複数ファイルバックアップ、トランザクションログのバックアップからのデータベースリストアの実行 270
スクリプトによる指定した時点までのデータベースのトランザクションログのリストア 273
スクリプトによるデータベースバックアップ、差分バックアップ、一連のトランザクションバックアップからのデータベースリストアの実行 273

付録 B 多重化されたバックアップ 276

SQL Server 多重バックアップの構成 276
多重化された SQL Server バックアップのリストア 277

付録 C 承認された場所の登録 278

NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録 278

1

NetBackup for SQL Server の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup for SQL Server の概要
- NetBackup for SQL Server の機能
- NetBackup for SQL Server の用語
- NetBackup MS SQL クライアントのヘルプ

NetBackup for SQL Server の概要

NetBackup for SQL Server は、Windows 版 NetBackup の機能を拡張したもので、SQL Server データベースのバックアップおよびリストアを行います。これらの機能は、UNIX 版または Windows 版 NetBackup マスターサーバーを使用する Windows クライアント用に提供されます。NetBackup for SQL Server には、SQL Server 上でさまざまな作業を実行するための、クライアントベースのグラフィカルユーザーインターフェース (GUI) プログラムが含まれています。

NetBackup は、次の形式の SQL Server バックアップポリシーを提供します。

- SQL Server インテリジェントポリシー。 単一のポリシーで、複数のクライアントにわたる複数の SQL Server インスタンスが保護されます。NetBackup 環境で自動的に検出されるインスタンスのリストからポリシーのインスタンスを選択します。
- クライアントとバッチファイルを使用したレガシーポリシー。これらのポリシーには、SQL データベースのクライアントのリストと、バックアップをスケジュール設定するときに実行する SQL バックアップコマンドが格納されたバッチファイルが含まれます。このバッチファイルは、手動でまたは NetBackup MS SQL Client インターフェースを介して作成できます。ユーザーは、このインターフェースを使用すると、オプションを選択してバッチファイルに保存できます。

NetBackup for SQL Server には、次に示すさまざまなアクティビティを SQL Server で実行するための NetBackup MS SQL Client が含まれます。

- データベースやデータベースコンポーネント (トランザクションログ、差分、ファイル、ファイルグループなど) のリストア
- リストアオプションの設定
- NetBackup for SQL Server のリストア操作の監視
- (SQL Server レガシーポリシー) データベースとデータベースコンポーネントのバックアップおよびバックアップオプションの設定

このマニュアルでは、Microsoft SQL Server を SQL Server と記述します。また、NetBackup for Microsoft SQL Server を NetBackup for SQL Server と記述します。

NetBackup for SQL Server の機能

表 1-1 に、NetBackup for SQL Server の機能を示します。

表 1-1 NetBackup for SQL Server の機能

機能	説明
NetBackup との統合	NetBackup マスターサーバーおよび Media Manager との完全な統合。サーバーと NetBackup MS SQL Client インターフェースでジョブを監視します。
SQL Server インテリジェントポリシー	インテリジェントポリシーには次の利点があります。 ■ 単一ポリシーを作成して複数の SQL Server インスタンスやインスタンスのデータベースを保護します。これらのインスタンスは複数のクライアントに分散できます。 ■ 同じポリシーに完全、差分、トランザクションログのバックアップを含めることができます。 ■ トランザクションログのバックアップ頻度をスケジュール設定できます。 ■ SQL Server コマンドに関する知識や、バッチファイルを記述して使用する必要はありません。その代わり、この機能は実行時に自動的にバッチファイルを生成します。
SQL Server インスタンス管理	NetBackup は自動的に環境内の SQL Server インスタンスを検出します。ユーザーは SQL Server インテリジェントポリシーを構築するのに使われている SQL Server インスタンスを表示し、登録できます。インスタンスを編成するためにインスタンスのグループを使うことも、必要に応じてインスタンスを自動的に登録することもできます。

機能	説明
認証およびクレデンシャル	SQL Server インテリジェントポリシーでは次がサポートされます。 ■ Windows 認証および Windows Active Directory 認証。 ■ 適切に設定すると、NetBackup サービスアカウントをクライアント上で SQL Server の特権ユーザーとして実行する必要がなくなります。 ■ SQL Server DBA が NetBackup 管理者とは関係なく SQL Server クレデンシャルとインスタンス登録を管理しできます。これには、nbsqladmコマンドを使います。
バックアップおよびリストア機能	NetBackup はデータベース、ファイル、ファイルグループ、トランザクションログのバックアップをサポートします。さらに、コピーのみのバックアップと読み書き可能なファイルグループのみのバックアップを実行できます。 管理者は、NetBackup MS SQL Server Client を使用して、バックアップを参照したり、リストアを行うバックアップを選択することができます。
自動バックアップ	管理者は、ローカルホストまたはネットワークを介したリモートホスト上のインスタンスに対して、自動的な無人のバックアップを行うスケジュールを設定することができます。これらのバックアップには完全バックアップ、差分バックアップ、トランザクションログのバックアップがあり、NetBackup サーバーによって中央サイトから完全に管理できます。管理者は手動バックアップを実行することもできます。
スナップショットバックアップおよびリストア	NetBackup では、スナップショット方式を使用して SQL Server のバックアップを実行できます。オフホストバックアップ、インスタントリカバリバックアップ、ハードウェアプロバイダを使うバックアップも利用可能です。
ストリームベースのバックアップおよびリストア	SQL Server の高速処理が可能な仮想デバイスインターフェースを使ったテープまたはディスクへの、ストリームベースでの SQL Server オブジェクトのバックアップとリストア
リダイレクトリストア	異なる場所に SQL Server オブジェクトをリストアできます。
レガシー SQL Server ポリシー	バッチファイルとクライアントリストを使うレガシーバックアップポリシーをサポートします。
パフォーマンスチューニング	バックアップストライプ、転送サイズ、バッファの使用状況、利用不能のデータベースをスキップするオプションなどのオプションを含むポリシー構成を使ってパフォーマンスを調整します。

機能	説明
高可用性 (HA) 環境のサポート	SQL Server インテリジェントポリシーで次の HA 環境を保護できます。 ■ SQL Server クラスタ ■ ログ配布 インテリジェントポリシーには SQL Server レガシーポリシーと同じ通告が存在します。 SQL Server レガシーポリシーで次の環境を保護できます。 ■ SQL Server クラスタ ■ SQL Server AlwaysOn 可用性グループ™ (AG) ■ データベースミラーリング ■ ログ配布 SQL Server がサポートする HA ソリューションについて詳しくは、SQL Server のマニュアルを参照してください。
圧縮	圧縮することによって、ネットワーク上のバックアップのパフォーマンスが向上し、ディスクまたはテープに格納されるバックアップイメージのサイズが縮小します。ユーザーは NetBackup の圧縮または SQL Server の圧縮を選択できます。同じポリシーに対して両方のオプションを有効にすることはできません。
NetBackup の暗号化	[暗号化 (Encryption)] 属性が有効な場合には、NetBackup はポリシーに示されているインスタンスまたはクライアントのバックアップを暗号化します。
複数ストリーム	バックアップ中に複数のストライプを使うための機能です。
SQL Server を保護する VMware バックアップのサポート	VMware インテリジェントポリシーを使用した、VMware コンピュータのアプリケーションで一貫したバックアップのサポート。VMware インテリジェントポリシーは NetBackup for SQL Server がサポートする VMware スナップショット、レプリケータディレクタ (RD) スナップショット、アクセラレータ の 3 つの機能を含みます。VMware インテリジェントポリシーのこの 3 つのバリエーションでは、完全バックアップのみがサポートされます。Hyper-V は現時点でサポートされていません。 VMware インテリジェントポリシー、RD、およびアクセラレータについて詳しくは、次のドキュメントを参照してください。 『NetBackup for VMware 管理者ガイド』 『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』

NetBackup for SQL Server の用語

表 1-2 に、SQL Server データベース管理者または NetBackup 管理者にとって重要な新規用語を示します。

表 1-2 NetBackup for SQL Server の用語

用語	定義
バッチファイル (batch file)	SQL Server オブジェクトのバックアップまたはリストアに使用されるスクリプト。データベースエージェントは、バッチファイルを使用してすべての操作を実行します。バッチファイルは、通常、*install_path*¥dbext¥mssql¥ ディレクトリに格納されます。NetBackup Microsoft SQL Client から直接実行される操作の場合は、一時バッチファイルが次のディレクトリに格納されます。 ¥Veritas¥Netbackup¥dbext¥mssql¥temp ディレクトリ
完全バックアップ (full backup)	すべてのデータファイルとログファイルが含まれるデータベースの完全なバックアップ。(完全バックアップでは、トランザクションログは切り捨てられません。)
差分バックアップ (differential backup)	最後の完全バックアップ以降に変更されたブロックのバックアップ。
トランザクションログ (transaction log)	データベースに対して実行された更新に関する進行中のレコード。
トランザクションログのバックアップ (transaction log backup)	トランザクションログのアクティブではない部分のバックアップ。通常、トランザクションログのこの部分はバックアップ後に切り捨てられます。
リストア (restore)	データを SQL Server オブジェクトにコピーして戻すこと (「リカバリ」を参照)。
リカバリ (recovery)	リストアの結果としてデータベースをオンラインにすること。
SQL ホスト (SQL host)	SQL Server が存在するホストマシン。SQL Server のインストールをサポートするクラスタの仮想名を指すこともあります。
SQL インスタンス (SQL instance)	SQL Server のインストール。インスタンスが指定されていない場合は、SQL ホストのデフォルトの SQL インスタンスと見なされます。
ソースクライアント (source client)	ホストマシンを識別する NetBackup 用語。通常、ソースクライアントはホストのネットワーク名です。クライアント構成での識別方法に応じて、IP アドレスまたはクラスタ名を指す場合もあります。
バックアップストライプ (backup stripes)	SQL Server オブジェクトのバックアップまたはリストアに使用されるデータストリーム。ユーザーは、バックアップのストライプ数を指定します。NetBackup は、指定されたストライプごとに個別のジョブを実行します。
多重化 (multiplex)	同じテープに複数のバックアップストライプが同時に書き込まれること。

用語	定義
複数ストリーム (multistream)	複数のバックアップストライプが含まれるバックアップまたはリストアを NetBackup で管理するための一般的な方法。複数ストリームの一例に多重化があります。NetBackup では、個々のストリームをそれぞれのドライブに書き出して複数ストリームバックアップを実行することもできます。
ODBC	NetBackup for SQL Server で SQL Server と通信するときに使用されるオープンインターフェースプロトコル。
VDI	仮想デバイスインターフェース。SQL Server によって提供されるバックアップおよびリストア用の独自のインターフェース。このインターフェースは、スナップショット操作とストリーム操作の両方に使用されます。VDI 接続は、COM オブジェクトとして管理されます。

NetBackup MS SQL クライアントのヘルプ

NetBackup MS SQL クライアントインターフェースのオンラインヘルプファイルは、次のディレクトリにあります。

install_path¥Veritas¥Help¥nbmssql.chm

2

NetBackup for SQL Server のインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup for SQL Server のインストールの計画
- オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認
- NetBackup サーバーおよびクライアントの要件
- NetBackup クラスタでの NetBackup for SQL Server の使用要件
- NetBackup for SQL Server のライセンスについて

NetBackup for SQL Server のインストールの計画

表 2-1 に、NetBackup for SQL Server を実行するために必要となる主要なインストール手順を示します。各手順には、関連する手順および概念へのリンクが 1 つ以上含まれています。

表 2-1 NetBackup for SQL Server のインストール手順

手順	処理	説明
手順 1	オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性を確認します。	p.20 の「オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認」を参照してください。 NetBackup 互換性リストを参照してください。
手順 3	NetBackup for SQL の NetBackup サーバーとクライアントの要件を確認します。	p.21 の「NetBackup サーバーおよびクライアントの要件」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 4	バックアップを作成するするデータベースが存在するコンピュータに、NetBackup クライアントソフトウェアをインストールします。	次の点に注意してください。 ■ VMware 環境では、SQL Server を実行している仮想マシンに NetBackup クライアントソフトウェアをインストールします。 ■ SQL Server 可用性グループ (AG) の場合、AG の各ノードに NetBackup クライアントをインストールします。 ■ SQL Server クラスタ環境では、クラスタ内のそれぞれのノードに NetBackup クライアントをインストールします。 ■ 複数の NIC を備えている場合は、プライベートインターフェース名を使って NetBackup クライアントをインストールします。 ■ SQL Server クライアントがマスターサーバーまたはメディアサーバーとは別のホストに存在する場合、そのホストに NetBackup クライアントをインストールする必要があります。
手順 5	SQL のサーバーソフトウェアがインストールされ、NetBackup クライアントで稼働中であることを確認します。	
手順 6	クラスタに NetBackup をインストールした場合は、その環境の要件を確認します。	p.22 の「NetBackup クラスタでの NetBackup for SQL Server の使用要件」を参照してください。
手順 7	マスターサーバーに NetBackup for SQL Server の有効なライセンス、NetBackup オプション、または使用するアドオンがあることを確認します。	p.22 の「NetBackup for SQL Server のライセンスについて」を参照してください。

オペレーティングシステムおよびプラットフォームの互換性の確認

ご使用のオペレーティングシステムまたはプラットフォームで NetBackup for SQL Server エージェントがサポートされていることを確認してください。

オペレーティングシステムおよび互換性を確認する方法

1 次の Web ページに移動します。

http://www.netbackup.com/compatibility

2 文書のリストで、次の文書をクリックします。

アプリケーション/データベースエージェント互換性リスト

3 Snapshot Client でのサポート情報については、次のマニュアルを参照してください。

Snapshot Client 互換リスト

4 VMware でのサポートについて詳しくは、次のマニュアルを参照してください。

『仮想環境における NetBackup のサポートに関する記述 (仮想化テクノロジ)』

NetBackup サーバーおよびクライアントの要件

NetBackup サーバーが次の要件を満たしていることを確認します。

- NetBackup サーバーソフトウェアが NetBackup サーバー上にインストールされ、実行可能な状態である。
  『NetBackup インストールガイド』を参照してください。
  すべての NetBackup サーバーには、デフォルトで NetBackup クライアントソフトウェアが含まれています。そのため、NetBackup サーバーまたはクライアントで NetBackup for SQL Server を使用できます (NetBackup for SQL Server がプラットフォームでサポートされている場合)。
- ストレージユニットで使用されるバックアップメディアが構成されている。必要なメディアボリュームの数は、いくつかの要因によって異なります。
  - 使用中のデバイスとメディアのストレージ容量
  - バックアップを行うデータベースのサイズ
  - アーカイブを行うデータの量
  - バックアップのサイズ
  - バックアップまたはアーカイブの間隔
  - バックアップイメージの保持期間

  『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

NetBackup クライアントが次の要件を満たしていることを確認します。

- バックアップするデータベースが存在するコンピュータ上に NetBackup クライアントソフトウェアがインストールされている。

データベースがクラスタ化されている場合、クラスタ内の各ノードで同じバージョンの NetBackup を使う必要があります。

- NetBackup 8.1.1 の NetBackup for SQL Server に含まれる新しい機能を使うには、NetBackup for SQL Server クライアントを NetBackup 8.1.1 にアップグレードする必要があります。 NetBackup メディアサーバーは NetBackup for SQL Server クライアントと同じまたはそれ以上のバージョンを使う必要があります。

NetBackup クラスタでの NetBackup for SQL Server の使用要件

NetBackup クラスタに構成された NetBackup サーバー上で NetBackup for SQL Server を使用する場合、次の要件を満たしていることを確認します。

- NetBackup がお使いのクラスタ環境をサポートしている。
  ソフトウェアの互換性リスト (SCL)を参照してください。
- NetBackup サーバーソフトウェアが NetBackup クラスタ内にインストールされ、動作するように構成されている。
  『NetBackup インストールガイド』を参照してください。
  『NetBackup マスターサーバーのクラスタ化管理者ガイド』を参照してください。
- NetBackup のクライアントソフトウェアが、NetBackup によるフェールオーバーが可能な各ノード上にインストールされ、実行可能な状態である。
- NetBackup サーバーが存在する各ノード上に、NetBackup for SQL Server の有効なライセンスが存在する必要があります。

NetBackup for SQL Server のライセンスについて

NetBackup for SQL Server エージェントは NetBackup クライアントソフトウェアとともにインストールされます。個別のインストールは必要ありません。エージェントの有効なライセンスがマスターサーバーに存在する必要があります。

ライセンスを追加する方法に関する詳細情報を参照できます。

『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

NetBackup クラスタの場合、NetBackup サーバーが存在する各ノード上に、NetBackup for SQL Server の有効なライセンスが存在する必要があります。

3

SQL Server インテリジェントポリシーのためのインスタンス管理

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server インテリジェントポリシーのインスタンス管理について
- SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて
- SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する
- SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定
- NetBackup 検出サービスについて
- インスタンス管理での SQL Server インスタンスとインスタンスグループの表示
- SQL Server インスタンスの登録について
- インスタンス管理への SQL Server インスタンスの手動追加

SQL Server インテリジェントポリシーのインスタンス管理について

インスタンス管理は、NetBackup 管理コンソールの［アプリケーション (Applications)］>［Microsoft SQL Server］ノードで検出するインスタンスを表示します。また、手動で追加するすべてのインスタンスがこのノードに表示されます。インスタンスが登録されると、SQL Server インテリジェントポリシーを構築できます。

DBA のコマンドライン

バックアップ管理者がマスターサーバーの特定のユーザーおよびホストを承認する場合、DBA は NetBackup クライアントで nbsqladm を実行できます。『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で nbsqladm の説明を参照してください。

複数の NIC を使うホスト

NetBackup が複数の NIC を使う SQL Server ホストを検出すると、NetBackup クライアント名でそのホストを追加します。パブリックインターフェース名を使って NetBackup クライアントをインストールした場合、バックアップを実行するにはさらに設定が必要です。

p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。

p.182 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)」を参照してください。

インスタンス管理での SQL Server クラスタ

SQL Server クラスタまたは複数の NIC を備えた SQL Server クラスタでは、NetBackup は単一エントリまたは 1 つのインスタンスをインスタンス管理に追加します。クラスタでは、そのインスタンスのホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。複数の NIC を備えた SQL Server クラスタでは、そのインスタンスのホスト名は SQL Server クラスタのパブリック仮想名です。バックアップを実行するには、これら両方の環境でさらに設定が必要です。

p.154 の「クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server インテリジェントポリシー) 」を参照してください。

p.185 の「複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)」を参照してください。

SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて

SQL Server インテリジェントポリシーを使ってインスタンスグループまたはインスタンスを保護するには、そのグループまたはインスタンスをクレデンシャルと一緒に登録する必要があります。お客様の環境に最適なオプションを判断するには、表 3-1を参照してください。

SQL Server インスタンスは、バックアップとリストア操作を実行するための適切なアクセス権を持った Windows 資格情報を使って登録する必要があります。インテリジェントポリシーは、Windows 認証と Windows Active Directory 認証をサポートします。混在モードまたは SQL Server 認証をサポートしません。データベースレベルでは、クレデンシャルはサポートされません。

表 3-1　クレデンシャルを登録するオプション

クレデンシャルを登録するオプション (Option to register credentials)	環境または構成	注意事項
これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)	■ SQL Server DBA が SQL Server ユーザークレデンシャルを NetBackup 管理者に提供する。 ■ SQL Serer DBA がクライアント上で特権のある SQL Server ユーザーとして NetBackup サービスを実行することを要求しない。	(推奨) Veritas はこのオプションを使用してクレデンシャルを登録することをお勧めします。 p.26 の「特定の資格情報を使ってインスタンスを登録する場合の必要条件」を参照してください。
クライアントでローカルに定義されたクレデンシャルを使う (Use credentials that are defined locally on the client)	■ NetBackup をインストールしたユーザーアカウントが SQL Server の特権アカウントとして既に使用されています。 ■ SQL Server DBA がインスタンスを登録するためのクレデンシャルを提供することを要求しない。 ■ NetBackup 管理者が SQL Server クレデンシャルへのアクセス権を持っていない。	NetBackup サービスはクライアント上で特権のある SQL Server ユーザーとして動作します。 p.26 の「ローカルで定義された資格情報を使ってインスタンスを登録する場合の必要条件」を参照してください。
グループに追加し、グループクレデンシャルを使用して登録 (Add to group and register using group credentials)	次の 1 つ以上を実行できるようにします。 ■ 何らかの方法で、インスタンスを論理的にグループ化する。 ■ グループ内の各インスタンスのパフォーマンスを向上させるために、特定の調整パラメータを使う。 ■ (任意) 新しいインスタンスが自動的に登録され、グループに追加されるようにする。	グループのクレデンシャルは、特定のセットのクレデンシャルを使うように設定できます (各インスタンスで同じクレデンシャルを使う)。または、ローカルで定義されたクレデンシャルを使うようにグループを設定することもできます (各インスタンスがそのインスタンスに定義されたクレデンシャルを使う)。 p.37 の「インスタンスグループへのインスタンスの登録」を参照してください。
コマンドライン (Command line)	■ DBA が NetBackup 管理コンソールへのアクセス権を持っていない。 ■ NetBackup 管理者が SQL Server のクレデンシャルを持っていない。 ■ DBA がバックアップ管理者から独立して、SQL Server のクレデンシャルを保守することを要求している。	p.26 の「コマンドラインからのクレデンシャルの設定」を参照してください。

特定の資格情報を使ってインスタンスを登録する場合の必要条件

[これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)]オプションを使用して 1 つのインスタンスまたはインスタンスグループ内のインスタンスを登録するときは、次の要件が適用されます。

- ユーザーには、SQL Server「sysadmin」ロールが必要です。
- ユーザーは、Windows Administrators グループのメンバーである必要があります。
- NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントは、SQL システム管理者またはローカルシステムのいずれかです。これらのサービスは、同一のログインアカウントを使う必要はありません。

  p.27 の「SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する」を参照してください。
- NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service には、[認証後にクライアントを偽装 (Impersonate a client after authentication)]と[プロセスレベルトークンの置き換え (Replace a process level token)]を実行するための権限が必要です。

  p.29 の「SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定」を参照してください。

ローカルで定義された資格情報を使ってインスタンスを登録する場合の必要条件

[クライアントでローカルに定義されたクレデンシャルを使う (Use credentials that are defined locally on the client)]オプションを使用して 1 つのインスタンスまたはインスタンスグループ内のインスタンスを登録するときに、NetBackup は NetBackup をインストールしたユーザーのクレデンシャルを使用します。このオプションには、次の必要条件が適用されます。

- ユーザーには、SQL Server「sysadmin」ロールが必要です。
- ユーザーは、Windows Administrators グループのメンバーである必要があります。
- NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントは、SQL システム管理者またはローカルシステムのいずれかです。これらのサービスは同じログオンアカウントを使う必要があります。

  p.27 の「SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する」を参照してください。

コマンドラインからのクレデンシャルの設定

コマンドラインからインスタンスを登録するには、次の設定が必要です。

- NetBackup 管理者は特定のホストの特定の DBA またはユーザーに対して `nbsqladm` コマンドを承認する必要があります。

  NetBackup マスターサーバーで、`nbsqladm` を使ってユーザーを承認してください。

  ```
  nbsqladm [-S master_server] -add_dba host_nameuser_name
  ```

複数の NIC がある場合、SQL Server ホストのプライベートインターフェース名を使用して DBA を承認します。 SQL Server クラスタでは、クラスタ内の各ノードについて DBA を認可します。(SQL Server クラスタの仮想名を使用して DBA を認可しないでください。)-host *name* では、SQL クラスタ内のノード名の 1 つを指定します。複数の NIC がある SQL Server クラスタの場合、SQL Server クラスタ内のノードそれぞれのプライベートインターフェース名を使用して DBA を承認します。

- nbsqladm コマンドの使用が承認されると、DBA はローカルクレデンシャル(-local_credentials))または他の特定のクレデンシャル(-user name -domain name)と一緒にインスタンスを登録できます。

nbsqladm コマンドの詳しい説明については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

SQL Server ホストがクラスタ化されている、または複数の NIC を使用している場合のインスタンスの登録

NetBackup が SQL Server クラスタを検出すると、インスタンス管理に 1 つのエントリを追加します。このインスタンスはクラスタ内のすべてのノードを表します。ホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。このインスタンスを登録するときに NetBackup はアクティブノードでクレデンシャルを検証します。クレデンシャルはクラスタのすべてのノードに対して有効である必要があります。

NetBackup が複数の NIC を使用する SQL Server ホストを検出すると、NetBackup のクライアント名を使用してインスタンス管理にエントリを追加します。パブリックインターフェース名を使用して NetBackup クライアントをインストールした場合、プライベートインターフェース名として NetBackup クライアント名を構成する必要があります。次にインスタンスをプライベートインターフェース名で登録します。複数の NIC を使用する SQL Server クラスタでは、インスタンスを追加して SQL Server クラスタの仮想プライベート名で登録します。

p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。

資格情報の検証

詳しくは、クレデンシャルの検証のトラブルシューティングで確認できます。

p.253 の「インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング」を参照してください。

SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する

NetBackup は、バックアップやリストアを実行する際に、NetBackup Client サービスおよび NetBackup Legacy Network Service を使用して SQL Serverにアクセスします。

適切な設定により、これらのサービスは、ローカルシステムアカウントまたは必要な権限を持つ別のアカウントを使ってログオンできます。

これらのサービスのログオンアカウントには次の項目が必要です。

- SQL Server の「sysadmin」ロール。
- ログオンアカウントでローカルシステムを使う場合、要件は SQL Server バージョンによって異なります。
  - SQL Server 2008 では、sysadmin ロールは自動的に NT AUTHORITY¥SYSTEM および BUILTIN¥Administrators グループに適用されます。
  - SQL Server 2012 以降の場合、最初に sysadmin ロールを手動で NT AUTHORITY¥SYSTEM または BUILTIN¥Administrators グループに適用する必要があります。
- SQL Server クラスタの場合は、クラスタのノードごとに NetBackup サービスを設定します。
- 追加の要件は、インスタンスを登録するために選択したクレデンシャルのオプションによって異なります。
  - ［これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)］の場合、NetBackup サービスでローカルシステムログオンアカウントを使うことができます。別のログオンアカウントを使う場合、そのアカウントには［認証後にクライアントを偽装 (Impersonate a client after authentication)］と［プロセスレベルトークンの置き換え (Replace a process level token)］を実行するための権限が必要です。p.29 の「SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定」を参照してください。両方のサービスが同じログオンアカウントを使うか、別々のログオンアカウントを使うことができます。
  - ［クライアントのローカルで定義されているクレデンシャルを使用 (Use credentials that are defined locally on the client)］の場合、サービスのログオンアカウントは SQL システム管理者またはローカルシステムのいずれかです。両方のサービスが同じログオンアカウントを使う必要があります。
- VMware バックアップの場合、サービスのログオンアカウントで異なる設定が必要となります。
  p.110 の「SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定」を参照してください。

SQL Server のバックアップやリストアのために NetBackup サービスを設定するには

1. sysadmin ロールと必要なローカルセキュリティ権限のあるアカウントで、Windows ホストにログオンします。
2. Windows のサービスアプリケーションを開始します。
3. ［NetBackup Client Service］エントリをダブルクリックします。

4 ［ログオン］タブをクリックします。

5 ［ローカルシステムアカウント (Local System account)］または SQL Server 管理者アカウントが設定されていることを確認します。

［クライアントのローカルで定義されているクレデンシャルを使用 (Use credentials that are defined locally on the client)］設定を使ってインスタンスを登録する場合は、両方のサービスが同一のログオンアカウントを使う必要があります。［これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)］設定を使ってインスタンスを登録する場合は、これらのサービスで同じログオンアカウントを使うか、別々のログオンアカウントを使うことができます。

6 ［OK］をクリックします。

7 NetBackup Legacy Network Service エントリをダブルクリックします。

8 ［ログオン］タブをクリックします。

9 ［ローカルシステムアカウント (Local System account)］または SQL Server 管理者アカウントが設定されていることを確認します。

［クライアントのローカルで定義されているクレデンシャルを使用 (Use credentials that are defined locally on the client)］設定を使ってインスタンスを登録する場合は、両方のサービスが同一のログオンアカウントを使う必要があります。［これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)］設定を使ってインスタンスを登録する場合は、これらのサービスで同じログオンアカウントを使うか、別々のログオンアカウントを使うことができます。

10 ［OK］をクリックします。

11 別のログオンアカウントを選択した場合は、サービスを再起動します。

p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。

SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定

［これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)］オプションを使ってインスタンスを登録する場合、使うアカウントに特定のローカルセキュリティの権限が必要になります。NetBackup for SQL Server エージェントは、データにアクセスするときに SQL Server ユーザーとしてログオンするため、こうした権限が必要になります。

メモ: この構成は、ローカルセキュリティの権限にのみ適用されます。ドメインレベルの権限については、ドメイン管理者に問い合わせてください。

ローカルセキュリティの権限を構成する方法

1 ［ローカルセキュリティポリシー (Local Security Policy)］を開きます。

2 ［ローカルポリシー (Local Policies)］をクリックします。

3 ［ユーザー権利の割り当て (User Rights Assignment)］では、次のポリシーにアカウントを追加してください。

   - 認証後にクライアントを偽装 (Impersonate a client after authentication)
   - ［プロセス レベル トークンの置き換え (Replace a process level token)］

4 この変更を有効にするために、グループポリシーの更新コマンド (グループポリシーの更新) を実行します。

```
gpupdate /Force
```

5 NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service がこのアカウントを使ってログオンする場合、これらのサービスを再起動する必要があります。

p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。

NetBackup 検出サービスについて

デフォルトでは、このサービスは、アプリケーションのインスタンスを検出すると、マスターサーバーにレポートします。ただし、ユーザーは bpsetconfig ユーティリティを使用して、特定のクライアントの検出をオフにすることができます。『NetBackup 管理者ガイド』で REPORT_CLIENT_DISCOVERIES オプションを参照してください。

インスタンス管理での SQL Server インスタンスとインスタンスグループの表示

NetBackup 管理コンソールで、［アプリケーション (Applications)］、［Microsoft SQL Server］の順に選択してノードを展開します。このノードには次のサブノードがあります。

- すべてのインスタンス
  このノードは、NetBackup が検出するか、またはユーザーが手動で追加したすべての SQL Server インスタンスの完全なリストを備えています。
  最後の検出の実行以降に環境に追加したすべての新しいインスタンスを迅速に検出するには、［処理 (Actions)］、［インスタンスの検出 (Discover Instances)］の順に選択します。
  p.32 の「必要に応じたインスタンスの検出」を参照してください。
- インスタンスグループ (Instance Groups)

このノードは、作成したインスタンスグループを表示します。インスタンスグループを使用してインスタンスを編成したりすべてのインスタンスを単一のセットのクレデンシャルでグループに登録したりすることができます。

表 3-2 は、インスタンスとインスタンスグループのプロパティについて説明します。

表 3-2　　インスタンス管理のプロパティ

列	説明
クラスタの種類	クラスタの種類
エディション (Edition)	SQL Server のエディション。
ホスト	インスタンスが存在するホストの名前。このホスト名は、NetBackup カタログ内のバックアップに使われる名前です。 マルチインターフェースネットワーク接続 (複数 NIC) を使用するホストの場合、NetBackup は NetBackup クライアント名を使用してホストを検出および追加します。NetBackup クライアントをパブリックインターフェース名でインストールした場合、インスタンスをプライベートインターフェース名でも追加および登録する必要があります。次にプライベートインターフェース名でインスタンスをバックアップポリシーに追加します。 SQL Server クラスタの場合、ホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。複数の NIC を備えた SQL Server クラスタの場合は、インスタンスを追加して仮想 SQL Server のプライベート名で登録する必要もあります。
インスタンスグループ (Instance Group)	このインスタンスが含まれるインスタンスグループ名。このフィールドは、インスタンスがインスタンスグループに属していなければ空白です。
インスタンス名 (Instance Name)	インスタンス名。 SQL Server クラスタの場合、NetBackup はインスタンス管理に対して単一のエントリまたは 1 つのインスタンスを追加します。そのインスタンスのホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。
OS	ホストのオペレーティングシステム。
ポリシー (Policies)	インスタンスまたはインスタンスグループが表示されるインテリジェントポリシーの名前。レガシーのポリシー (クライアントおよびバッチファイルを使用) はここには反映されません。
登録済み (Registered)	インスタンスが有効なクレデンシャルで登録された日時が反映されます。インスタンスが登録されていない場合、このフィールドは空白です。
リリース (Release)	SQL Server のリリース名。
SP	SQL Server のサービスパック番号。
状態 (State)	有効 (Active) - インスタンスは NetBackup によるバックアップに利用可能です。 非アクティブ (Inactive) - このインスタンスは非アクティブであり、バックアップを作成できません。この状態は、NetBackup 管理者が意図的に NetBackup のインスタンスを「非アクティブ」とマーク付けしたことを意味します。たとえば、インスタンスが保守中の場合です。

列	説明
バージョン (Version)	SQL Server のバージョン番号。

必要に応じたインスタンスの検出

検出処理は連続的に実行されないため、環境に追加する SQL Server インスタンスをすぐに検出して NetBackup データベースに追加するわけではありません。次の手順では、NetBackup Discovery を起動して新しいインスタンスを検出する方法について説明します。

最後の検出後に追加した SQL Server インスタンスを検出するには

1. ［アプリケーション (Applications)］ > ［Microsoft SQL Server］ > ［インスタンス (Instances)］を開きます。
2. ［処理 (Actions)］メニューで［インスタンスの検出 (Discover Instances)］を選択します。

インスタンスの処理について

表 3-3 では、［処理 (Actions)］メニューから SQL Server インスタンスに対して実行できる処理または操作について説明します。

表 3-3　インスタンスの処理

処理	説明
新規 (New) > インスタンス (Instance)	インスタンスを手動でインスタンス管理に追加します。 p.41 の「インスタンス管理への SQL Server インスタンスの手動追加」を参照してください。
プロパティ (Properties)	インスタンスプロパティを表示します。 p.35 の「SQL Server インスタンスの登録」を参照してください。
登録 (Register)	インスタンスを登録します。 p.35 の「SQL Server インスタンスの登録」を参照してください。
削除 (Delete)	インスタンス管理からインスタンスを削除します。 ポリシーの一部であるインスタンスは削除できません。最初に、ポリシーの［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブからインスタンスを削除します。
有効化 (Activate)	NetBackup で無効にしたインスタンスをバックアップで利用できるようにします。
無効化 (Deactivate)	インスタンスを NetBackup で無効にし、バックアップから除外します。たとえば、インスタンスが保守中の場合です。

処理	説明
グループから削除 (Remove from Group)	インスタンスを追加先のインスタンスグループから削除します。インスタンスは、インスタンスグループのメンバーである場合、それが持つ同一のクレデンシャルを使って個別に登録されます。
インスタンスを含む新しいグループ (New Group with Instances)	1 つ以上のインスタンスを新しいグループに追加します。 インスタンスを以前に登録している場合、グループのクレデンシャルがそのインスタンスに適用され、設定済みの以前のクレデンシャルを置換します。 p.38 の「インスタンスグループへのインスタンスの追加」を参照してください。
自動登録 (Auto Registration)	p.33 の「インスタンスグループの処理について」を参照してください。
インスタンスの検出 (Discover Instances)	前回の検出プロセス以降に環境に追加した新しいインスタンスが即座に検出されます。
インスタンスのクリーンアップ	このオプションを使って、孤立したインスタンスをインスタンス管理から自動的に消去するように NetBackup を設定できます。孤立したインスタンスは一度に検出された、登録されたことがないインスタンスです。 インスタンスのクリーンアップを有効にするには、[後でクリーンアップ (Clean up after)]を選択します。次に、NetBackup でインスタンスのクリーンアップを実行する頻度 (日) を選択します。

インスタンスグループの処理について

表 3-4 では、[処理 (Actions)]メニューから SQL Server インスタンスグループに対して実行できる処理または操作について説明します。

表 3-4　　インスタンスグループの処理

処理	説明
[新規 (New)]、[インスタンスグループ (Instance Group)]	新しいインスタンスグループを作成します。 p.37 の「インスタンスグループへのインスタンスの登録」を参照してください。
プロパティ (Properties)	インスタンスグループのプロパティを表示します。
削除 (Delete)	インスタンスグループを削除します。 ポリシーの一部であるインスタンスグループは削除できません。最初に、ポリシーの[インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブからインスタンスグループを削除します。

処理	説明
自動登録 (Auto Registration)	新たに検出されたインスタンスを自動的に登録するようにインスタンスグループを設定します。 NetBackup では、選択したインスタンスグループに新たに検出されたインスタンスが追加されます。すべての新しいインスタンスが自動的に登録され、そのグループのクレデンシャル設定が使われます。1 つのインスタンスグループのみの自動登録を設定できます。 p.39 の「インスタンスの自動登録」を参照してください。 p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。
インスタンスの検出 (Discover Instances)	前回の検出プロセス以降に環境に追加した新しいインスタンスが即座に検出されます。
インスタンスのクリーンアップ	p.32 の「インスタンスの処理について」を参照してください。

SQL Server インスタンスの登録について

SQL Server インテリジェントポリシーの一部として保護するインスタンスはすべてクレデンシャル付きで登録する必要があります。これらのクレデンシャルには特定の権限が必要です。

p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールのアプリケーションユーティリティを使ってインスタンスを登録することを推奨します ([NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[アプリケーション (Applications)]、[Microsoft SQL Server]の順に選択)。希望する場合、NetBackup 管理者は DBA が特定のホスト上のインスタンスをすることを承認することもできます。

インスタンスは、次のいずれかの方法で登録できます。

- 手動: 個々のインスタンスの場合。
  アプリケーションユーティリティで、新たに検出されたインスタンスを選択し、個別に登録します。
  p.35 の「SQL Server インスタンスの登録」を参照してください。
- 手動: インスタンスグループにインスタンスを追加する。
  アプリケーションユーティリティで、インスタンスグループを作成し、そのグループにインスタンスを追加します。インスタンスには、グループに対して設定したクレデンシャル設定が使われます。
  p.37 の「インスタンスグループへのインスタンスの登録」を参照してください。
- 自動: 新たに検出されたインスタンスを自動的に登録するようにインスタンスグループを設定する。

アプリケーションユーティリティで、インスタンスグループを作成し、そのグループに自動登録を設定します。新しく検出されたインスタンスはグループに自動的に追加され登録されます。インスタンスには、グループに対して設定したクレデンシャル設定が使われます。

- 手動: `nbsqladm` コマンドを使う。
  NetBackup 管理者は、DBA が `nbsqladm` コマンドを使って特定のホスト上のインスタンスを登録することを承認できます。
  p.40 の「`nbsqladm` コマンドを使ってインスタンスを登録することを DBA に承認する」を参照してください。

SQL Server インスタンスの登録

この項では、アプリケーションユーティリティで SQL Server インスタンスを手動で登録する方法について説明します。その他の登録オプションについては、次のトピックを参照してください。

p.37 の「インスタンスグループへのインスタンスの登録」を参照してください。

p.180 の「複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について」を参照してください。

p.40 の「`nbsqladm` コマンドを使ってインスタンスを登録することを DBA に承認する」を参照してください。

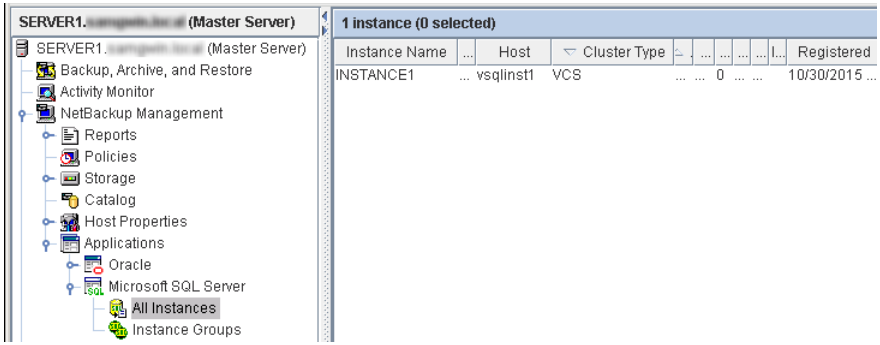
SQL Server インスタンスを登録する方法

1. NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[アプリケーション (Applications)]>[Microsoft SQL Server]を展開します。
2. [すべてのインスタンス (All Instances)] をクリックします。

   右ペインはインスタンスのリストを表示します。以前に登録されたインスタンスは、[登録済み (Registered)]の列に日時を表示します。

3 登録するインスタンスを選択します。

SQL Server クラスタの場合、NetBackup はインスタンス管理に対して単一のエントリまたは 1 つのインスタンスを追加します。そのインスタンスのホストは、SQL Server クラスタの仮想名です。



4 ［処理 (Actions)］、［登録 (Register)］の順に選択します。

［インスタンスの編集 (Edit Instance)］ダイアログボックスが表示されます。

5 クレデンシャルを追加するには、［編集 (Edit)］をクリックします。

6 ［インスタンスの登録 (Register Instance)］ダイアログボックスで、使用するクレデンシャルを選択します。

これらのクレデンシャルと関連付けられているユーザーアカウントには、SQL Server のバックアップとリストア、インスタンスの登録を実行する適切な権限が必要です。お使いの環境に最適なオプションを判別するのに役立つ詳細を利用できます。

p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。

7 ［OK］をクリックします。

NetBackup は、クレデンシャルを検証し、インスタンスに登録済みとマークして、NetBackup データベースにインスタンスを追加します。NetBackup では NetBackup クライアントに対してインスタンスについての詳細情報が要求され、Microsoft SQL Server > インスタンスノードに表示されます。

SQL Server クラスタの場合、NetBackup はアクティブノードでクレデンシャルを検証します。クラスタのすべてのノードのクレデンシャルを有効にする必要があります。

検証が失敗した場合、メッセージが表示されます。ユーザーは次のオプションを使用できます。

- ［いいえ (No)］をクリックし、別のクレデンシャルを入力します。検証エラーについての詳細情報を利用できます。

p.253 の「インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング」を参照してください。

- 検証エラーにかかわらず、クレデンシャルを保存してインスタンスを追加するには、[はい (Yes)]をクリックします。この場合は、検証が失敗してもインスタンスは登録済みとしてマークされます。NetBackup では有効なクレデンシャルなしでこのインスタンスを正常に保護することはできません。

8 NetBackup 管理コンソールの右ペインの[登録済み (Registered)]列でインスタンスが登録されていることを確認します。

9 登録する他のすべてのインスタンスで続行します。

インスタンスグループへのインスタンスの登録

インスタンスグループには、SQL Server ポリシーを作成するときに次のメリットがあります。

- インスタンスグループをポリシーに追加すると、その単一のポリシーを使って多数のインスタンスをバックアップできます。
- 新しく検出されたインスタンスを自動的にグループに追加するようにインスタンスグループを設定できます。複数のインスタンスを即座に登録できます。p.39 の「インスタンスの自動登録」を参照してください。
- グループ内のすべてのインスタンスは同一のクレデンシャル設定を使います。[これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)]を選択すると、これらのクレデンシャルを一度だけ入力する必要があります。
- アプリケーションユーティリティでは、どのポリシーがどのインスタンスグループを保護するかを簡単に確認できます。

次の手順は、インスタンスを追加するインスタンスグループの作成方法を示しています。

インスタンスグループを作成するには

1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[アプリケーション (Applications)]>[Microsoft SQL Server]を展開します。

2 [インスタンスグループ (Instance Groups)]を右クリックして、[新しいインスタンスグループ (New Instance Group)]を選択します。

3 [インスタンスグループ名 (Instance Group Name)]を指定します。

4 使うクレデンシャルを選択します。

このユーザーアカウントには、特定の権限が必要です。詳お使いの環境に最適なオプションを判別するのに役立つ詳細を利用できます。p.24 の「SQL Server インテリジェントポリシーで使われるクレデンシャルについて」を参照してください。

5 ［OK］をクリックします。

6 作成したグループにインスタンスを追加するには、次のトピックを参照してください。

p.38 の「インスタンスグループへのインスタンスの追加」を参照してください。

インスタンスグループへのインスタンスの追加

このトピックでは、インスタンスグループにインスタンスを追加する方法について説明します。1 つのグループ内のインスタンスはすべて同じクレデンシャル設定を使います。

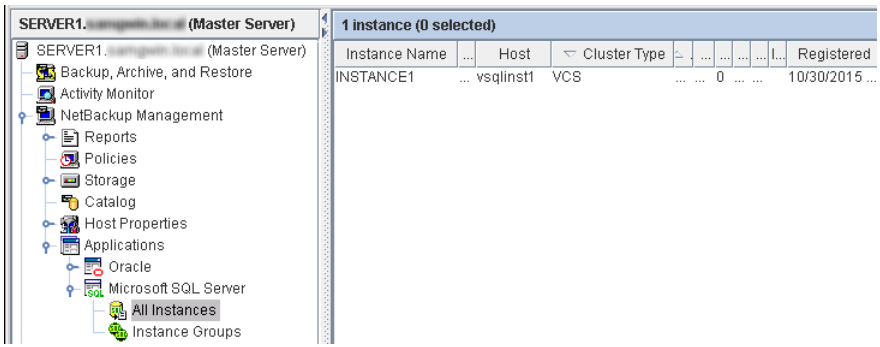
インスタンスグループにインスタンスを追加するには

1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］>［アプリケーション (Applications)］>［Microsoft SQL Server］を展開します。

2 ［すべてのインスタンス (All Instances)］をクリックします。

3 1 つのインスタンスグループに追加する 1 つ以上のインスタンスを選択します。

SQL Server クラスタでは、NetBackup はインスタンス管理に単一エントリまたは 1 つのインスタンスを追加します。そのインスタンスのホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。



4 ［処理 (Actions)］メニューから［登録 (Register)］を選択します。

5 ［インスタンスの登録 (Register Instance)］ダイアログボックスで、［グループに追加し、グループクレデンシャルを使用して登録 (Add to group and register using group credentials)］をクリックします。

6 ［インスタンスグループ (Instance Group)］リストで、インスタンスを追加するインスタンスグループを選択します。

7 ［OK］をクリックします。

以前にインスタンスを登録した場合、クレデンシャルはそのグループクレデンシャル設定に自動的に変更されます。NetBackup はインスタンスのグループクレデンシャルを検証します。

検証が失敗した場合、グループを保存するか、別のクレデンシャルを入力するかを選択できます。p.253 の「インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング」を参照してください。クレデンシャルがそのインスタンスで有効でない場合には、インスタンスのバックアップに失敗します。

インスタンスの自動登録

NetBackup では、自動登録を使って、選択したインスタンスグループに新しく検出されたインスタンスを追加します。1 つのインスタンスグループのみの自動登録を設定できます。すべての新しいインスタンスが自動的に登録され、そのグループのクレデンシャル設定が使われます。

メモ: このインスタンスグループが作成される前に検出されたインスタンスは自動的にグループに追加されません。

インスタンスを自動的に登録する方法

1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］>［アプリケーション (Applications)］を展開します。

2 必要に応じて、インスタンスのグループを作成します。

3 ［Microsoft SQL Server］をクリックし、［処理 (Actions)］ > ［自動登録 (Auto Registration)］を選択します。

4 ［自動登録 (Auto Registration)］ダイアログボックスで、［新しく検出したインスタンスを自動的に登録 (Automatically register newly discovered instances)］を選択します。

5 ［インスタンスグループ (Instance Group)］リストで、新しく検出されたインスタンスを追加するインスタンスグループを選択します。

6 ［OK］をクリックします。

グループ内のインスタンスのクレデンシャルを検証するには、次のトピックを参照してください。

p.40 の「インスタンスグループのクレデンシャルの検証」を参照してください。

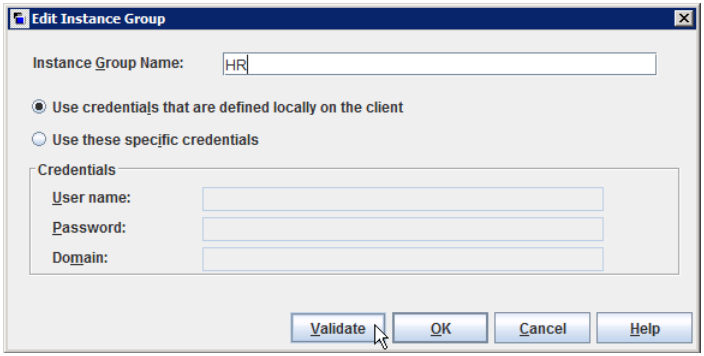
インスタンスグループのクレデンシャルの検証

次の手順は、インスタンスグループのクレデンシャルを検証する方法を示しています。インスタンスが自動的に登録される場合、クレデンシャルは検証されません。グループ内のインスタンスのクレデンシャルを定期的に検証する必要があります。

SQL Server クラスタのインスタンスをインスタンスグループに追加する場合は、NetBackup がアクティブノードでクレデンシャルを検証します。クラスタのすべてのノードのクレデンシャルを有効にする必要があります。

グループのクレデンシャルを検証するには

1. インスタンスグループを選択します。
2. [処理 (Actions)]>[プロパティ (Properties)]の順に選択します。
3. [インスタンスグループの編集 (Edit Instance Group)]ダイアログボックスで、[検証 (Validate)]をクリックします。



検証が失敗した場合、グループを保存するか、別のクレデンシャルを入力するかを選択できます。クレデンシャルがインスタンスに対して有効でない場合、インスタンスのバックアップが失敗します。

p.253 の「インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング」を参照してください。

nbsqladm コマンドを使ってインスタンスを登録することを DBA に承認する

NetBackup 管理者は、DBA が独自に SQL Server クレデンシャルを管理することを要求する場合、DBA が nbsqladm を使ってインスタンスを登録することを承認します。NetBackup 管理者は、マスターサーバーから、NetBackup クライアントで nbsqladm を実行できるユーザーとホストのリストを制御できます。

たとえば、NetBackup 管理者は、次のコマンドを使って、ホスト winserver.domain.com 上のユーザー john_smith を承認できます。

```
nbsqladm -add_dba winserver.domain.com john_smith
```

NetBackup クライアントから、winserver.domain.com、john_smith はインスタンスを登録して管理できます。たとえば、次のように、DBA はローカルクレデンシャルにインスタンスを登録できます。

```
nbsqladm -S NBUmaster1 -register_instance hr_city1
- host winserver.domain.com -local_credentials
```

nbsqladm コマンドの詳細情報を入手できます。『NetBackup コマンドガイド』を参照してください。

インスタンス管理への SQL Server インスタンスの手動追加

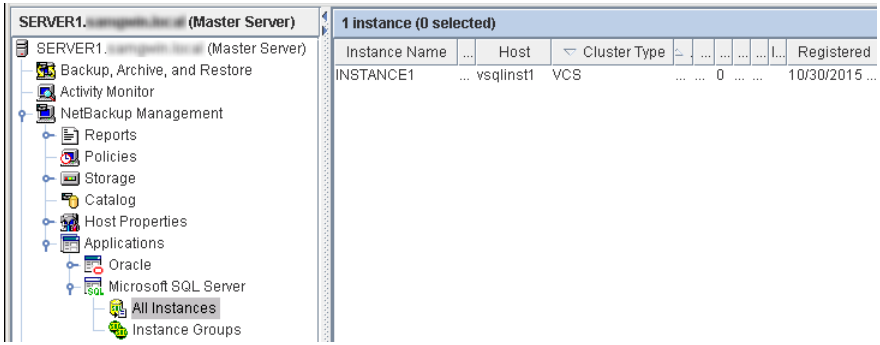
クライアントで新しく検出された SQL Server インスタンスは、NetBackup データベースに自動で追加されます。ところが、検出サービスが新しいインスタンスを検出するのを待ちたくない場合があります。この場合に、インスタンスを手動で追加できます。

インスタンス管理で SQL Server インスタンスを手動で追加する方法

1. NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[アプリケーション (Applications)]>[Microsoft SQL Server]を展開します。
2. [すべてのインスタンス (All Instances)]を右クリックして、[新しいインスタンス (New Instance)]を選択します。

3 ［インスタンス名 (Instance Name)］と［ホスト (Host)］を入力します。

SQL Server クラスタまたは複数 NIC 環境では、単一エントリをインスタンス管理に追加します。クラスタの場合、ホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。クラスタの各ノードをインスタンス管理に追加する必要はありません。複数 NIC 環境の場合、ホスト名は SQL Server ホストまたは仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名です。



4 ［編集 (Edit)］をクリックして、クレデンシャルを入力し、インスタンスを登録します。

p.35 の「SQL Server インスタンスの登録」を参照してください。

NetBackup データベースに新しいインスタンスを追加する際にクレデンシャルを省略することができます。インスタンスは登録解除済みとしてマーク付けされ、右ペインの［登録済み (Registered)］列が空になります。NetBackup では登録されないインスタンスが保護されません。

メモ: 必要に応じて、SQL Server データベース管理者にクレデンシャルの正しいセットを問い合わせてください。NetBackup 管理者が承認した場合、DBA も `nbsqladm` を使用して手動でインスタンスを追加できます。この処理は、DBA がバックアップ管理者とクレデンシャルを共有してない場合に便利です。

4

SQL Server インテリジェントポリシーを使用した SQL Server のバックアップの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server インテリジェントポリシーについて
- SQL Server インテリジェントポリシーを使用する SQL Server のバックアップの設定について
- 新しい SQL Server インテリジェントポリシーの追加
- ポリシー属性
- スケジュールプロパティについて
- SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式
- ポリシーへのインスタンスの追加
- ポリシーへのデータベースの追加
- インスタンスプロパティ
- ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブ
- バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加
- バックアップ対象リストへのファイルまたはファイルグループの手動による追加

- バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加
- SQL Server バックアップの調整パラメータについて
- 読み取り専用ファイルグループのバックアップ
- 読み書き可能なファイルグループのバックアップ

SQL Server インテリジェントポリシーについて

SQL Server インテリジェントポリシーでは、1 つのポリシーを作成して、1 つのインスタンス内の複数の SQL Server インスタンスまたはデータベースを保護することができます。これらのインスタンスは複数のクライアントに分散できます。NetBackup 環境で自動的に検出されるインスタンスのリストからポリシーの SQL Server インスタンスを選択できます。

SQL Server インテリジェントポリシーには、次の条件があります。

- 使用するストレージユニットおよびストレージメディア
- ポリシー属性
- バックアップスケジュール: 完全、差分増分、トランザクションログ
- インスタンス、インスタンス内のデータベース、またはバックアップ対象のインスタンスグループ
- バックアップ対象: データベース全体、ファイルグループ、またはファイル

NetBackup では SQL Server ポリシーを設定する次の方法を提供します。

- NetBackup 管理コンソールのポリシー構成ウィザード。このウィザードでは、ほとんどの設定で最適な値を自動で選択するセットアップ処理を行います。
- NetBackup 管理コンソールの SQL Server ポリシーユーティリティ: このユーティリティには、SQL Server インテリジェントポリシーを作成または変更するのに必要なすべての設定とパラメータが含まれています。

p.44 の「SQL Server インテリジェントポリシーを使用する SQL Server のバックアップの設定について」を参照してください。

SQL Server インテリジェントポリシーを使用する SQL Server のバックアップの設定について

このトピックでは、SQL Server インテリジェントポリシーを使用して SQL Server のバックアップを実行できるように、環境を設定する手順について説明します。

表 4-1　SQL Server インテリジェントポリシーを使用する SQL Server のバックアップを設定する手順

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の SQL Server 構成が存在することを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。
手順 2	NetBackup サーバーと SQL Server ソフトウェアの必要条件を満たしていることを確認します。	p.21 の「NetBackup サーバーおよびクライアントの要件」を参照してください。
手順 3	SQL Server のバックアップとリストア用に NetBackup サービスを設定します。	p.110 の「SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定」を参照してください。
手順 4	SQL Server のローカルセキュリティの権限を設定します。	p.29 の「SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定」を参照してください。
手順 5	SQL Server インスタンスを登録します。	p.23 の「SQL Server インテリジェントポリシーのインスタンス管理について」を参照してください。 p.35 の「SQL Server インスタンスの登録」を参照してください。
手順 7	SQL Server インテリジェントポリシーを設定します。	p.45 の「新しい SQL Server インテリジェントポリシーの追加」を参照してください。
手順 8	SQL Server がクラスタ化されている場合は、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定する必要があります。	マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。 p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。
手順 9	SQL Server がクラスタ化されている場合は、環境内のホストの自動検出マッピングを確認する必要があります。	NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。 p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

新しい SQL Server インテリジェントポリシーの追加

この項では、SQL Server データベース用の新しいバックアップポリシーを追加する方法について説明します。

新しい NetBackup for SQL Server インテリジェントポリシーを追加する方法

1. マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。
2. NetBackup 管理コンソールを起動します。
3. サイトに複数のマスターサーバーが存在する場合は、ポリシーを追加するマスターサーバーを選択します。
4. 左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]を展開し、[ポリシー (Policies)]を選択します。
5. [処理 (Actions)]>[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]を選択します。
6. [新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスの[ポリシー名 (Policy name)]ボックスに、新しいポリシーの一意の名前を入力します。
7. [OK]をクリックします。
8. [ポリシーの変更 (Policy Change)]ダイアログボックスで、[ポリシー形式 (Policy type)]リストからMS-SQL-Serverを選択します。
9. [属性 (Attributes)]タブの入力を完了します。

   p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。
10. その他のポリシー情報を次のように追加します。
    - インスタンスまたはインスタンスグループを保護することを選択します。
      インスタンスオプションを選択した場合、個々のインスタンスまたはデータベースのいずれかを選択できます。
      p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。
      p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。
      p.59 の「バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加」を参照してください。
    - スケジュールを追加します。
      p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
    - (省略可能) バックアップする特定のファイルグループまたはファイルを選択します。デフォルトでは、NetBackup はデータベース全体をバックアップします。
      p.57 の「バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加」を参照してください。
    - (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
      p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。
11. ポリシー構成を完了したら、[OK]をクリックします。

ポリシー属性

いくつかの例外を除き、NetBackup では、データベースのバックアップに対して設定されたポリシー属性をファイルシステムのバックアップと同じように管理します。その他のポリシー属性は、ユーザー固有のバックアップ戦略やシステム構成によって異なります。

表 4-2では、NetBackup for SQL Server ポリシーに利用可能なポリシーの属性のいくつかを説明します。ポリシー属性について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

表 4-2 NetBackup for SQL Server ポリシーのポリシー属性の説明

属性	説明
ポリシー形式 (Policy type)	ポリシーを使用してバックアップできるクライアントの種類を指定します。SQL Server データベースの場合、ポリシーの種類 MS-SQL-Server を選択します。
ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)	NetBackup がこのポリシーで同時にバックアップできるインスタンスの最大数を設定します。
圧縮 (Compress)	NetBackup によるバックアップの圧縮を有効にします。NetBackup の圧縮を有効にした場合、SQL Server の圧縮を有効にしないでください。 圧縮の利点と欠点について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。
キーワード句 (Keyword phrase)	MS-SQL-Server ポリシー用のキーワード句は作成できますが、NetBackup for SQL Server のバックアップイメージでは、この情報は記録されません。
Snapshot Client と Replication Director (Snapshot Client and Replication Director)	このグループには Snapshot Client と Replication Director を併用したバックアップが可能になるオプションが含まれています。 p.118 の「SQL Server 用の NetBackup Snapshot Client について」を参照してください。 p.114 の「スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server を保護するための VMware ポリシーの構成」を参照してください。

スケジュールプロパティについて

このトピックでは、SQL Server インテリジェントポリシーの特定のスケジュールプロパティを設定する方法について説明します。その他のスケジュールプロパティは、ユーザー固有のバックアップ方針やシステム構成によって異なります。他のスケジュールプロパティについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

表 4-3 では、スケジュールプロパティが SQL Server インテリジェントポリシーにどのように影響するかを説明します。

表 4-3　スケジュールプロパティの説明

プロパティ	説明
バックアップ形式 (Type of backup)	このスケジュールで制御できるバックアップ形式を指定します。バックアップ対象のリストには、構成するポリシーに適用されるバックアップ形式だけが表示されます。 p.49 の「SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式」を参照してください。
スケジュール形式 (Schedule Type)	次のいずれかの方法でバックアップをスケジュールできます。 ■ 間隔 (Frequency) 間隔 (Frequency) は、このスケジュールで次のバックアップ操作が開始するまでの期間を指定します。たとえば、バックアップ間隔を 7 日に設定して、正常なバックアップが水曜日に行われるように設定したとします。次の完全バックアップは、次の水曜日まで行われません。通常、増分バックアップは、完全バックアップより短い間隔で行います。 間隔は時間、日、または週単位で指定できます。トランザクションログバックアップの場合、間隔も分単位です。 ■ カレンダー (Calendar) 特定の日付、週の特定の曜日または月の特定の日に基づいてバックアップ操作をスケジュールすることができます。
保持 (Retention)	バックアップコピーを削除するまでの保持期間を指定します。スケジュールの保持期間により、スケジュールバックアップが実行された場合の NetBackup により記録が保持される期間が制御されます。データベースの 2 つ以上の完全バックアップが保持されるように期間を設定します。このようにすると、1 つの完全バックアップが失われた場合に、リストアする完全バックアップがもう 1 つあります。 次のとおり、保持期間は選択するスケジュール形式に影響されます。 ■ 間隔に基づくスケジュールを行う場合 スケジュールに対する間隔の設定より長い保持期間を設定します。たとえば、間隔の設定を 1 週間にする場合、保持期間が 1 週間より長くなるように設定します。NetBackup スケジューラは、バックアップスケジュールの最新の記録と、そのバックアップスケジュールの間隔を比較します。この比較により、バックアップの実行時間がせまっていることを判別します。これにより、記録の期限切れが早すぎるような保持期間を設定した場合、スケジュールバックアップの間隔を予測できなくなります。ただし、必要以上に長い保持期間を設定した場合、NetBackup カタログにより不要な記録が蓄積されます。 NetBackup は、バックアップイメージの期限が切れても、SQL Server に通知しません。SQL Server を使って、期限切れのバックアップセットを SQL Server レポジトリから定期的に削除します。 ■ カレンダーに基づくスケジュールを行う場合 保持期間の設定は、カレンダーに基づくスケジュールには重要ではありません。

プロパティ	説明
メディアの多重化 (Media multiplexing)	多重化は、同じテープドライブを使用して同時に多数のバックアップを作成する場合に有効です。ただし、SQL Server がリストア時にストリームを要求する方法によっては、SQL Server のリカバリが妨げられる可能性があります。ほとんどの場合、Veritas は複数の SQL Server ストリームを同じバックアップから 1 つのテープに多重化することはお勧めしません。 p.276 の「SQL Server 多重バックアップの構成」を参照してください。

SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式

[バックアップ形式 (Type of backup)]属性は、そのスケジュールが制御するバックアップ形式を指定します。

スケジュールを設定する場合は、次のガイドラインを参照してください。

- トランザクションログのバックアップについて 24 時間制スケジュールが必要な場合は、トランザクションログバックアップスケジュール用の個別のポリシーを作成します。
  p.50 の「高い頻度のトランザクションログバックアップの設定」を参照してください。
- 選択したバックアップ形式において特定のデータベースのデータベースリカバリモデルがサポートされない場合には、そのデータベースのバックアップ操作はスキップされます。p.50 の「スケジュールとサポートされないリカバリモデル」を参照してください。
- 差分バックアップを実行するときにデータベースまたはファイルグループの完全バックアップがまだ存在しない場合は、NetBackup でバックアップを完全バックアップに変換できます。同様に、NetBackup はデータベースの完全バックアップがすでに存在しない場合にトランザクションログのバックアップを変換できます。この動作は、[差分バックアップを完全バックアップに変換する(完全バックアップが存在しない場合)(Convert differential backups to full (when no full exists))]または[ログバックアップを完全バックアップに変換する(完全バックアップが存在しない場合)(Convert log backups to full (when no full exists))]オプションで有効化できます。
  スナップショットバックアップポリシーの場合は、NetBackup に差分バックアップから完全バックアップに正常に変換させるために[完全バックアップ (Full Backup)]スケジュールを作成する必要があります。
  p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。
- 読み取り専用のファイルグループの場合は、読み取り専用と読み書き可能なファイルグループのバックアップの指示それぞれに従います。
  p.173 の「読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小」を参照してください。

表 4-4 に、指定可能な のバックアップ形式を示します。

表 4-4　SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式

バックアップ形式	説明
完全バックアップ (Full Backup)	すべてのデータファイルとログファイルが含まれるデータベースの完全なバックアップ。(完全バックアップでは、トランザクションログは切り捨てられません。)
差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)	最後の完全バックアップ以降に変更されたブロックのバックアップ。差分増分バックアップを設定する場合は、完全バックアップも設定する必要があります。
トランザクションログのバックアップ (Transaction Log backup)	トランザクションログのアクティブと非アクティブな部分のバックアップ。デフォルトにより、非アクティブな部分は正常なバックアップ後に切り捨てられます。トランザクションログのバックアップは、完全リカバリモデルで実行するように設定されたデータベースに対してのみ実行できます。 [Microsoft SQL Server]ページで切り捨てをオフにできます。p.50 の「高い頻度のトランザクションログバックアップの設定」を参照してください。トランザクションログのバックアップを高い頻度で実行するように設定する場合は、推奨事項を確認してください。p.77 の「バックアップ操作を許可するジョブ数の設定」を参照してください。

高い頻度のトランザクションログバックアップの設定

トランザクションログのバックアップを設定する場合は、次の点を考慮します。

- トランザクションログのバックアップイメージ用に専用ストレージユニットを作成する。
- トランザクションログのバックアップと完全(差分)バックアップのそれぞれに個別のポリシーを作成する。
- バックアップ操作を許可するジョブの数を設定する。p.77 の「バックアップ操作を許可するジョブ数の設定」を参照してください。

スケジュールとサポートされないリカバリモデル

NetBackup では、特定の状況においてデータベースバックアップがスキップされます。最初のケースは、データベースのデータベースリカバリモデルが選択したバックアップ形式をサポートしない場合です。たとえば、単純リカバリモデルではトランザクションログのバックアップは許可されません。2 番目のケースは、完全データベースバックアップ以外のすべてのバックアップでスキップされるマスターデータベースの場合です。マスターデータベースのバックアップを作成するには、完全バックアップスケジュールを作成し、バックアップの選択で[データベース全体 (Whole database)]を選択する必要があります。具体的には、差分、ファイルグループ、ファイルグループの差分、ファイル、トランザクションログのバックアップ形式ではマスターデータベースがスキップされます。

これらの場合、NetBackup は、データベースのバックアップをスキップしますが、ポリシーが保護するその他のデータベースのバックアップは続行されます。バックアップは状態 0 で完了し、ジョブの詳細にデータベースがスキップされたことが示されます。

ポリシーのバックアップスケジュールの例

表 4-5 は、単一の SQL Server インテリジェントポリシーに対して作成できるスケジュールの例を示しています。

表 4-5 バックアップスケジュールの例

スケジュール	間隔	バックアップ処理時間帯 (Backup Window)
完全バックアップ (Full Backup)	週単位 (Weekly)	日曜日 12 時間
差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)	日単位 (Daily)	月曜日から土曜日 夕方の 2 時間
トランザクションログのバックアップ (Transaction Log backup)	RTO と RPO ごと	日曜日から土曜日 24 時間 **メモ:** ポリシーの完全または差分スケジュールを実行すると、そのスケジュールが完了するまでトランザクションログのバックアップは実行されません。

ポリシーへのインスタンスの追加

この項では、[インスタンスの保護 (Protect instances)]オプションを選択するときにポリシーにインスタンスを追加する方法について説明します。同一のポリシーに個々のデータベースを追加することもできます。

p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。

ポリシーにインスタンスを追加する方法

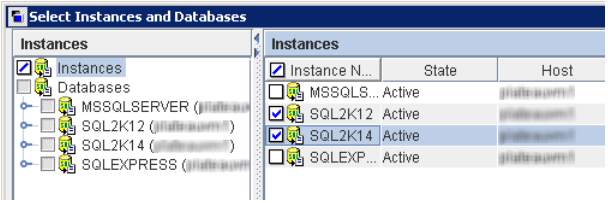
1. ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［インスタンスの保護 (Protect instances)］をクリックします。
2. ［新規 (New)］をクリックします。

   ［インスタンスとデータベースを選択 (Select Instances and Databases)］ダイアログボックスに、アプリケーションユーティリティに登録されているすべてのインスタンスが表示されます。

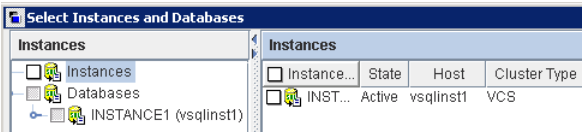
   このリストのプロパティの説明は利用可能です。

   p.56 の「インスタンスプロパティ」を参照してください。
3. 左ペインで、［インスタンス (Instances)］を選択します。

4 右ペインで、リストに追加する各インスタンスに対して、その横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。

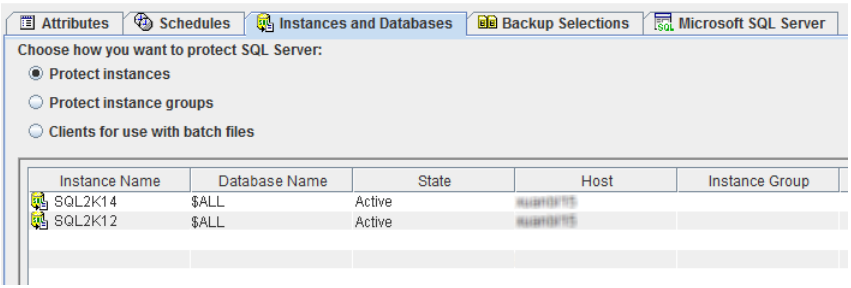


メモ: SQL Server クラスタの場合、クラスタに対して表示される 1 つのエントリのみです。このエントリはクラスタ内のすべてのノードを表します。ホストは SQL Server クラスタの仮想名です。



5 ［OK］をクリックします。

バックアップ対象リストで選択したオブジェクトは、このタブのリストに追加するインスタンスまたはデータベースのみに適用します。



ポリシーへのデータベースの追加

この項では、［インスタンスの保護 (Protect instances)］オプションを選択するときにポリシーにデータベースを追加する方法について説明します。同一のポリシーにインスタンスを追加することもできます。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

インスタンスとインスタンスグループを混在させることはできません。インスタンスまたはデータベースを使ってポリシーを作成し、後で[インスタンスグループの保護 (Protect instance groups)]オプションを選択する場合は、そのインスタンスまたはデータベースがポリシーから削除されます。

ポリシーにデータベースを追加する方法

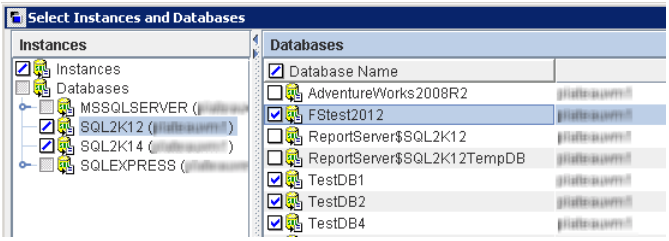
1. [インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブで、[インスタンスの保護 (Protect instances)]をクリックします。
2. [新規 (New)]をクリックします。

   [インスタンスとデータベースを選択 (Select Instances and Databases)]ダイアログボックスに、アプリケーションユーティリティに登録されているすべてのインスタンスが表示されます。

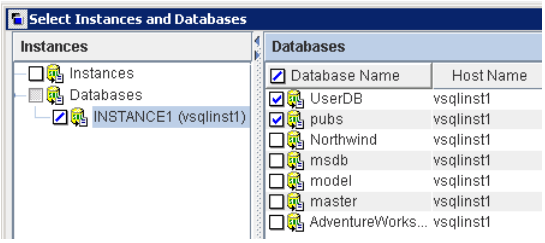
   p.56 の「インスタンスプロパティ」を参照してください。は、このリストのインスタンスおよびデータベースに対して表示されるプロパティを示しています。
3. 左ペインでは、[データベース (Databases)]ノードを展開し、保護するデータベースが含まれているインスタンスを選択します。

4 右ペインで、リストに追加する各データベースに対して、その横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。

個々のデータベースを選択する場合、環境内の新しいデータベースを手動でポリシーに追加する必要があります。この場合、実行時にデータベースのリストが動的に作成されません。

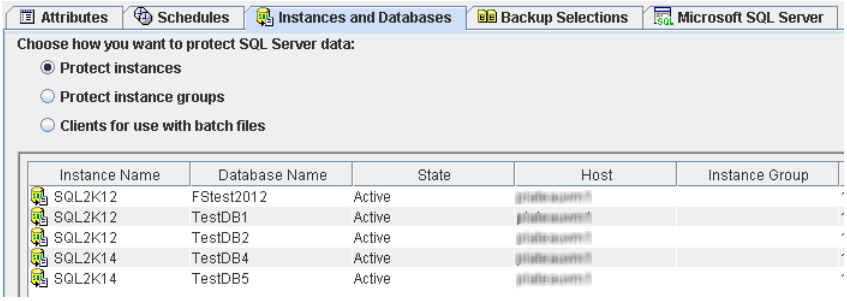


SQL Server クラスタにホストされているデータベースの場合、[ホスト名 (Host Name)] は SQL Server の仮想名を表します。(次の図を参照してください。)



5 [OK]をクリックします。

バックアップ対象リストで選択したオブジェクトは、このタブのリストに追加するインスタンスまたはデータベースのみに適用します。



インスタンスプロパティ

表 4-6 では、[インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブで追加するインスタンスとデータベースまたはインスタンスグループについて表示できるプロパティについて説明します。

表 4-6 [インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブのインスタンスプロパティ

フィールド	説明
インスタンス名 (Instance Name)	インスタンスの名前 SQL Server クラスタの場合、NetBackup はインスタンス管理に対して単一のエントリまたは 1 つのインスタンスを追加します。そのインスタンスのホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。
データベース名 (Database Name)	$ALL は、各インスタンスのすべてのデータベースがバックアップに含まれていることを示します。バックアップ時に、バックアップするデータベースのリストが動的に作成されます。このリストには、SQL Server の環境に追加された新しいデータベース、またはポリシーを作成した後に削除したデータベースが反映されます。 個々のデータベースを選択した場合、この列には選択したデータベース名が表示されます。環境に新しいデータベースを追加する場合、それらのデータベースを手動でポリシーに追加する必要があります。この場合、実行時にデータベースのリストが動的に作成されません。
状態 (State)	有効 (Active) - インスタンスは NetBackup によるバックアップに利用可能です。 非アクティブ (Inactive) - このインスタンスは非アクティブであり、NetBackup でバックアップできません。この状態は NetBackup の管理者が意図的にインスタンスを「非アクティブ」とマーク付けしたことを意味します。たとえば、インスタンスが保守中の場合です。
クラスタの種類	クラスタ化されたインスタンスの場合は、クラスタの種類を示します。たとえば、VCS または WSFC (Windows Server フェールオーバークラスタ) です。
ホスト (Host)	インスタンスが存在するホストの名前。このホスト名は、NetBackup カタログ内のバックアップに使われる名前です。 マルチインターフェースネットワーク接続 (複数 NIC) を使用するホストの場合、NetBackup は NetBackup クライアント名を使用してホストを検出および追加します。NetBackup クライアントをパブリックインターフェース名でインストールした場合、インスタンスをプライベートインターフェース名でも追加および登録する必要があります。次にプライベートインターフェース名でインスタンスをバックアップポリシーに追加します。 SQL Server クラスタの場合、ホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。
インスタンスグループ (Instance Group)	インスタンスがメンバーになっているインスタンスグループの名前を示します。このフィールドは、インスタンスがインスタンスグループに属していなければ空白です。
登録済み (Registered)	インスタンスが有効なクレデンシャルで登録された日時が反映されます。インスタンスが登録されていない場合、このフィールドは空白です。

［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブ

［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、バックアップする SQL Server オブジェクトの種類を選択します。リストに表示されるファイル名は、ファイルの物理名ではなく、論理名です。

データベース全体 (Whole database)	デフォルトで、［データベース全体 (Whole database)］オプションが選択されます。このオプションを選択すると、データベース全体が保護されます。
ファイルグループ (Filegroups)	個々のファイルグループを参照するには、［参照 (Browse)］をクリックします。 手動でファイルグループの名前を追加するには、［新規 (New)］をクリックします。
ファイル (Files)	個々のファイルを参照するには、［参照 (Browse)］をクリックします。 手動でファイルの名前を追加するには、［新規 (New)］をクリックします。

バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加

この項では、バックアップ対象リストに追加するファイルグループまたはファイルを参照する方法について説明します。

バックアップポリシー内の特定のデータベースと特定のファイルグループまたはファイルを選択すると、インスタンス全体（`DATABASE $ALL`）を選択する場合とは異なる方法で、NetBackup は失敗したファイルグループまたはファイルのバックアップを報告します。次のシナリオを検討します。

- シナリオ 1 - `SQLINSTANCE1`（`DATABASE $ALL` またはすべてのデータベース）の場合、ファイルグループ `FG1`、`FG2`、`FG3` をバックアップする。NetBackup が `FG1`、`FG2` または `FG3` をバックアップできない場合、NetBackup はそのデータベースのファイルグループのバックアップをスキップします。親ジョブは状態 0 により完了します。
- シナリオ 2 - `SQLINSTANCE1` の `DATABASEA` と `DATABASEC` の場合、ファイルグループ `FG1`、`FG2`、`FG3` をバックアップする。NetBackup が `DATABASEA` または `DATABASEC` のこれらのファイルグループのいずれもバックアップできない場合、親ジョブは状態 2 により完了します。ジョブの詳細には、選択したファイルグループの 1 つ以上がバックアップされなかったことが示されます。

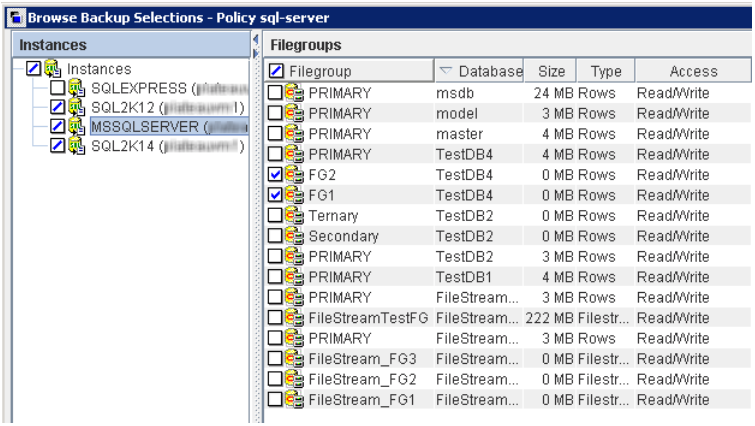
バックアップ対象リストにファイルグループまたはファイルを追加するには

1. 編集するポリシーを開くか、新しいポリシーを作成します。
2. ［ファイルグループ (Filegroups)］または［ファイル (Files)］を選択します。

3 ［参照 (Browse)］をクリックします。

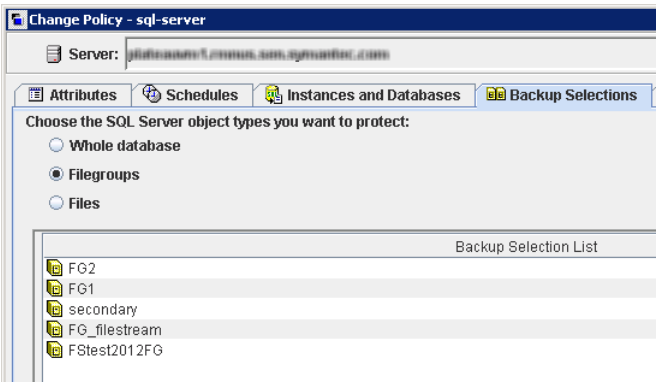
4 左ペインで、含まれているファイルグループまたはファイルを表示するインスタンスを選択します。

5 右側のペインで、ファイルグループまたはファイルを選択します。



6 ［OK］をクリックして、選択したファイルグループまたはファイルをバックアップ対象リストに追加します。

メモ: ファイルグループまたはファイルをバックアップ対象リストに追加した場合、その前のファイルグループまたはファイルが含まれるポリシーのすべてのデータベースのオブジェクトがバックアップされます。



バックアップ対象リストへのファイルまたはファイルグループの手動による追加

この項では、バックアップ対象リストに SQL Server データベースのファイルグループまたはファイルを手動で追加する方法について説明します。

バックアップ対象リストにファイルまたはファイルグループを手動で追加する方法

1. 編集するポリシーを開くか、新しいポリシーを作成します。
2. ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブをクリックします。
3. バックアップする SQL Server オブジェクトのいずれかの種類を選択します。
   - ファイルグループ (Filegroups)
   - ファイル (Files)
4. ［新規 (New)］をクリックします。
5. ファイルグループまたはファイルの名前を入力し、［追加 (Add)］をクリックします。

   この手順を繰り返して、他のファイルグループまたはファイルを追加します。
6. ［OK］をクリックして、選択したオブジェクトのリストをバックアップ対象リストに追加します。
7. ［OK］をクリックして、バックアップ対象リストを保存します。

バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加

このトピックでは、SQL Server インテリジェントポリシーにインスタンスグループを追加する方法について説明します。インスタンスとインスタンスグループを混在させることはできません。たとえば、インスタンスグループがあるポリシーを作成し、後で［インスタンスの保護 (Protect instances)］オプションを選択すると、そのインスタンスグループはポリシーから削除されます。

SQL Server インテリジェントポリシーにインスタンスグループを追加するには

1. 編集するポリシーを開くか、新しいポリシーを作成します。
2. ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで［インスタンスグループの保護 (Protect instance groups)］をクリックします。

3 ［新規 (New)］をクリックします。

［インスタンスグループを選択 (Select Instance Group)］ダイアログボックスに、アプリケーションユーティリティで作成されたすべてのインスタンスが表示されます。

4 追加するインスタントグループを選択し、［OK］をクリックします。

ここに表示されるインスタンスグループのリストによって、バックアップ対象リストの作成時に参照して選択できるインスタンスが制御されます。

グループ内のすべてのインスタンスのリストを表示するには、インスタンスグループを選択し、［インスタンスをプレビュー (Preview Instances)］をクリックします。

SQL Server バックアップの調整パラメータについて

［Microsoft SQL Server］ページには、バックアップのパフォーマンスを改善できる調整パラメータが含まれています。これらの設定とパフォーマンスに影響するほかの要因については、次のトピックで説明されています。

p.73 の「NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について」を参照してください。

注意: ポリシーが複数のストライプを使用するようにも構成されている場合、スケジュールの多重化を有効にしないでください。1 つのバックアップポリシーに対して多重化と複数のストライプの両方が構成されていると、リストアに失敗します。

表 4-7 SQL Server バックアップの調整パラメータ

フィールド	説明
バックアップストライプ数 (Number of backup stripes)	このオプションでは、バックアップ操作を複数の並列実行ストリームに分割します。ストリームはアクティビティモニターのジョブに対応します。たとえば、値が 3 の場合、各データベースは 3 つのジョブを使用してバックアップされます。この構成は、テープドライブによる書き込み速度より SQL Server によるデータのダンプ速度が速い場合に適用されます。 このオプションのデフォルト値は 1 です。範囲は 1 から 32 です。 p.79 の「SQL Server マルチストライプバックアップの構成」を参照してください。
ストライプあたりのクライアントバッファ (Client buffers per stripe)	(ストリームベースのバックアップのみ)このオプションはバッファ領域の可用性に影響します。NetBackup では、このパラメータを使用して、バックアップ操作時に各データストリームの読み込みまたは書き込みのために割り当てるバッファ数が決定されます。より多くのバッファ数を割り当てることによって、NetBackup から NetBackup マスターサーバーへのデータ送信を高速化できます。 このオプションのデフォルト値は 2 で、Double Buffering を有効にします。この値を大きくすると、パフォーマンスがわずかに向上する場合があります。範囲は 1 から 32 です。

フィールド	説明
最大転送サイズ (Maximum transfer size)	(ストリームベースのバックアップのみ)このオプションは、SQL Server バックアップイメージの読み込みと書き込みに使われるバッファサイズです。 通常、この値を大きくすると、SQL Server のパフォーマンスが向上します。このオプションは、個々のバックアップ操作に対して設定できます。64 KB * 2^MAX_TRANSFER_SIZE のように計算されます。64 KB から 4 MB の範囲でサイズを指定できます。デフォルトは 4 MB です。
バックアップするブロックサイズ (Backup block size)	このオプションはストリームベースのバックアップのみに適用されます。 SQL Server がバックアップイメージの読み込みと書き込みのために使用する、増分サイズを設定します。このサイズは個々のバックアップ操作に対して設定できます。 512バイト * 2^BLOCK_SIZE のように計算されます。このオプションの値の範囲は 0.5 KB から 64 KB です。デフォルトは 64 KB です。
並列バックアップ操作 (Parallel backup operations)	このオプションでは、データベースインスタンスごとの、同時に開始するバックアップ処理の数を指定します。 範囲は 1 から 32 です。デフォルトは 1 です。 2 つ以上の並列バックアップ操作を設定する場合は、その他のオプションを設定する必要がある場合があります。 p.77 の「バックアップ操作を許可するジョブ数の設定」を参照してください。
Microsoft SQL Server チェックサム (Microsoft SQL Server checksum)	SQL Server のバックアップチェックサムに、次のオプションのいずれかを選択してください。 ■ [なし (None)]。バックアップチェックサムを無効にします。 ■ バックアップの前にチェックサムを検証するには、次のオプションのいずれかを選択してください。これらのオプションでは、バックアップ操作またはリストア操作でパフォーマンスが低下することに注意してください。 　■ エラー時続行 (Continue on error)。バックアップ時に検証エラーが発生した場合でも、バックアップは続行します。 　■ エラーによる失敗 (Fail on error)。バックアップ時に検証エラーが発生した場合、バックアップは停止されます。
Microsoft SQL Server の圧縮を使用 (Use Microsoft SQL Server compression)	SQL Server を使用してバックアップイメージを圧縮するには、このオプションを有効にします。SQL Server の圧縮を有効にした場合、NetBackup の圧縮を有効にしないでください。 SQL Server の圧縮は、スナップショットバックアップではサポートされません。
[利用不可能なデータベース(オフライン、リストア中など)をスキップ (Skip unavailable (offline, restoring, etc.) databases)]	NetBackup では、正常にバックアップできない状態のデータベースをスキップします。これらの状態にはオフライン、リストア中、リカバリ中、緊急モード、などがあります。 NetBackup は利用できないデータベースのバックアップをスキップしますが、ポリシーに含まれている他のデータベースのバックアップを続行します。バックアップは状態 0 で完了し、ジョブの詳細にデータベースがスキップされたことが示されます。 p.49 の「SQL Server インテリジェントポリシーのスケジュールバックアップ形式」を参照してください。

フィールド	説明
コピーのみバックアップ (Copy-only backup)	このオプションでは、SQL Server によって帯域外（アウトオブバンド）のバックアップが作成されるため、通常のバックアップシーケンスは妨げられません。デフォルトでは、データベースの完全インスタンスリカバリバックアップの場合を除き、チェックマークが付いていません。 p.127 の「コピーまたはクローキングしたスナップショットバックアップによる差分バックアップの影響」を参照してください。
読み取り専用ファイルグループをスキップ (Skip read-only file groups)	このオプションでは、バックアップから読み取り専用のファイルグループが除外されます。その結果、イメージにすべてのファイルグループが含まれないため、バックアップは部分的なイメージになります。部分的なイメージには、読み書き可能なファイルグループのデータ、プライマリファイルグループのデータが含まれます。 このオプションは、[データベース全体 (Whole database)]のバックアップ選択にのみ適用されます。 p.64 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。 p.65 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

フィールド	説明
差分バックアップを完全バックアップに変換する（完全バックアップが存在しない場合）(Convert differential backups to full (when no full exists))	データベースまたはファイルグループに対して以前の完全バックアップが存在しない場合は、NetBackup は差分バックアップを完全バックアップに変換します。 エージェントは、各データベースの完全バックアップが存在するかどうかを確認します。以前の完全バックアップが存在する場合は、差分バックアップが次のように完全バックアップに変換されます。 ■ 差分バックアップのデータベースを選択すると、バックアップは完全データベースバックアップに変換されます。 ［読み取り専用ファイルグループをスキップ (Skip read-only file groups)］オプションを選択すると、バックアップが読み書き可能なファイルグループの完全バックアップに変換されます。 ■ 差分バックアップでファイルグループを選択すると、NetBackup は次を行います。 ■ 選択したファイルグループがデフォルトのデータベースファイルグループである場合には、NetBackup はバックアップを完全ファイルグループバックアップに変換します。 ■ 選択したファイルグループがセカンダリファイルグループであり、プライマリファイルグループのバックアップが存在しない場合には、NetBackup はバックアップを部分的な完全データベースバックアップに変換します。このバックアップには、選択したファイルグループとデフォルトのファイルグループが含まれます。 ■ 選択したファイルグループがセカンダリファイルグループであり、プライマリファイルグループのバックアップが存在する場合には、NetBackup は選択したファイルグループの完全ファイルグループバックアップにバックアップを変換します。 ■ スナップショットバックアップポリシーの場合は、差分バックアップから完全バックアップに正常に変換するために、［完全バックアップ (Full backup)］スケジュールを作成する必要があります。 注意: NetBackup は、データベースまたはファイルグループで完全バックアップを実行したことがない場合にのみ差分バックアップを変換します。完全バックアップが NetBackup カタログに存在しないにもかかわらず、SQL Server が既存の完全 LSN を検出する場合には、NetBackup は完全バックアップではなく差分バックアップを実行します。この場合は、ネーティブツールを使った完全バックアップのリストアや、NetBackup MS SQL Client を使った差分バックアップのリストアが可能です。または、NetBackup でバックアップを期限切れにすると、完全バックアップを NetBackup カタログにインポートできます。その場合は、NetBackup MS SQL Client を使って完全と差分の両方のバックアップをリストアできます。
バックアップ後にログを切り捨てる (Truncate logs after backup)	このオプションでは、トランザクションログをバックアップし、トランザクションログのアクティブでないエントリを削除します。デフォルトではこのオプションは有効です。

フィールド	説明
ログバックアップを完全バックアップに変換する(完全バックアップが存在しない場合)(Convert log backups to full (when no full exists))	データベースに対して以前の完全バックアップが存在しない場合は、NetBackup はトランザクションバックアップを完全バックアップに変換します。 このオプションでは、完全リカバリデータベースが単純リカバリモデルに切り替えられ、完全リカバリモデルに戻されたかどうかも検出されます。このシナリオでは、ログチェーンは分割され、SQL Server は、以降のログバックアップを作成するには、その前に差分バックアップを必要とします。NetBackup がこの状況を検出した場合は、バックアップはデータベースの差分バックアップに変換されます。 注意: NetBackup は、データベースで完全バックアップを実行したことがない場合にのみトランザクションログのバックアップを変換します。完全バックアップが NetBackup カタログに存在しないにもかかわらず、SQL Server が既存の完全 LSN を検出する場合には、NetBackup は完全バックアップではなくトランザクションログのバックアップを実行します。この場合は、ネーティブツールを使った完全バックアップのリストアや、NetBackup MS SQL Client を使った差分バックアップとログバックアップのリストアが可能です。または、バックアップが NetBackup で期限切れになっている場合は、完全バックアップを NetBackup カタログにインポートできます。その場合は、NetBackup MS SQL Client を使って完全バックアップ、差分バックアップ、ログバックアップをリストアできます。

読み取り専用ファイルグループのバックアップ

バックアップ方針で読み取り専用および読み書き可能ファイルグループを使用する場合、メディアの使用量の合計を縮小し、バックアップ操作にかかる時間の合計を短縮できます。読み取り専用ファイルグループをバックアップするには、まず、このバックアップ形式用に異なるポリシーを作成する必要があります。すべての読み取り専用ファイルグループがバックアップされていることも確認できます。

p.65 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

p.173 の「読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小」を参照してください。

p.226 の「SQL Server 読み取り専用バックアップセットの表示」を参照してください。

読み取り専用ファイルグループをバックアップする方法

1. 読み取り専用ファイルグループを保護する新しいポリシーを作成します。
2. ポリシーの属性を選択します。

   p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。

3 ［完全 (Full)］バックアップスケジュールを作成し、［保持 (Retention)］レベルを［無制限 (Infinite)］に設定します。

完全バックアップまたは個々のファイルグループおよび個々のファイルのバックアップの組み合わせに、すべての読み取り専用ファイルグループを含める必要があります。このバックアップは一度だけ実行する必要があります。p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。

4 インスタンスまたはインスタンスグループを保護することを選択します。

p.59 の「バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加」を参照してください。

5 ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、［ファイルグループ (Filegroups)］を選択します。

p.57 の「［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブ」を参照してください。

6 バックアップを行うファイルグループを選択します。

7 ポリシーの構成が完了したら、［OK］をクリックします。

8 読み取り専用ファイルグループをバックアップします。

9 必要に応じて、読み取り専用バックアップセットを表示することで、すべての読み取り専用グループがバックアップされていることを確認します。

読み書き可能なファイルグループのバックアップ

バックアップ戦略で読み取り専用および読み書き可能ファイルグループを使用する場合、メディアの使用量の合計を縮小し、バックアップ操作にかかる時間の合計を短縮できます。読み取り専用ファイルグループのバックアップに関する詳細情報を参照できます。

p.64 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

メモ: ファイルグループを読み書き可能から読み取り専用に変更した場合は、すぐにそのファイルグループをバックアップしてください。

読み書き可能なファイルグループをバックアップする方法

1 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。

2 ポリシーの属性を選択します。

p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。

3 完全バックアップ、差分増分バックアップ、トランザクションログのバックアップのスケジュールを作成します。

p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。

4 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［インスタンスの保護 (Protect instances)］を選択します。

5 読み書き可能なファイルグループを含むインスタンスまたはデータベースを追加します。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

6 ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、［データベース全体 (Whole database)］を選択します。

7 ［Microsoft SQL Server］タブをクリックします。

8 ［読み取り専用ファイルグループをスキップ (Skip read-only file groups)］にチェックマークを付けます。

p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

9 ポリシー構成を完了したら、［OK］をクリックします。

5

NetBackup for SQL Server の構成

この章では以下の項目について説明しています。

- 分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定
- ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認
- NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について
- バックアップ操作を許可するジョブ数の設定
- ［1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)］の構成
- SQL Server マルチストライプバックアップの構成
- 手動バックアップの実行

分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定

この構成は SQL Server クラスタまたは SQL Server 可用性グループ (AG) のリストアに必要です。マスターサーバーの分散アプリケーションリストアマッピングホストプロパティで、これらのマッピングを設定します。

分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングを設定するには

1. マスターサーバーで NetBackup 管理コンソールを開きます。
2. ［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］>［ホストプロパティ (Host Properties)］>［マスターサーバー (Master Server)］を選択します。
3. 右ペインで、マスターサーバーをダブルクリックします。

4 ［分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)］を選択します。

5 ［追加 (Add)］をクリックします。

6 アプリケーションホスト名とコンポーネントホスト名を指定します。

参照先「SQL Server のエントリの例」

SQL Server のエントリの例

表 5-1 SQL Server のエントリの例

環境	アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
FCI (2 つのノードから成るクラスタ)	SQL Server クラスタの仮想名	*Node 1* の物理名
	SQL Server クラスタの仮想名	*Node 2* の物理名
AG (プライマリとセカンダリ)	WSFC 名	プライマリ名
	WSFC 名	セカンダリ名
1 つの FCI (プライマリ FCI またはセカンダリ FCI) から成る AG	WSFC 名	プライマリ FCI 名
	WSFC 名	セカンダリ FCI 名
	SQL Server クラスタの仮想名	*Node 1* の物理名
	SQL Server クラスタの仮想名	*Node 2* の物理名
VMware	VM 表示名、VM BIOS UUID、VM DNS 名 (［VM ホスト名 (VM hostname)］以外のプライマリ VM 識別子)	VM のホスト名

ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認

特定のシナリオでは、NetBackup ホストは他のホストと特定の名前を共有したり、クラスタに関連付けられた名前が付けられたりします。NetBackup for SQL Server で正常にバックアップおよびリストアを実行するには、NetBackup によってお使いの環境から検出されたすべての有効な自動検出されたマッピングを承認しておく必要があります。これらのマッピングは、マスターサーバーのホスト管理プロパティに表示されます。マッピングを管理す

る nbhostmgmt コマンドも使うことができます。ホスト管理プロパティについて詳しくは、『セキュリティおよび暗号化ガイド 』を参照してください。

複数のホスト名がある構成の例は、次のとおりです。

- ホストが完全修飾ドメイン名 (FQDN) および短縮名または IP アドレスに関連付けられる
- SQL Server がクラスタ化されている場合は、ホストはノード名とクラスタの仮想名に関連付けられます。

クラスタの自動検出されたマップ

SQL Server クラスタ環境で次が該当する場合にはノード名をクラスタの仮想名にマッピングする必要があります

- バックアップポリシーにクラスタ名 (または仮想名) が含まれている
- NetBackup クライアントがクラスタ内の複数のノードにインストールされている NetBackup クライアントが 1 つのノードにのみインストールされている場合にはマッピングは必要ありません。

クラスタの自動検出されたマッピングを承認するには

1. NetBackup 管理コンソールで、[セキュリティ管理 (Security Management)]、[ホスト管理 (Host Management)]の順に展開します。
2. [ホスト (Hosts)]ペインの下部にある[承認待ちのマッピング (Mappings for Approval)]]タブをクリックします。

   お客様の環境のホストが一覧表示されるほか、これらのホストに対して NetBackup によって検出されたマッピングまたは追加のホスト名が一覧表示されます。ホストには、マッピングごと、またはマッピングに関連付けられている名前ごとに 1 つのエントリがあります。

   たとえば、ホスト client01.lab04.com と client02.lab04.com で構成されるクラスタの場合は、次のエントリが表示されます。

ホスト (Host)	自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)
client01.lab04.com	client01
client01.lab04.com	clustername
client01.lab04.com	clustername.lab04.com
client02.lab04.com	client02
client02.lab04.com	clustername
client02.lab04.com	clustername.lab04.com

3 マッピングが有効な場合は、ホストのエントリを右クリックし、[承認 (Approve)]をクリックします。

たとえば、次のマッピングが client01.lab04.com で有効な場合は、それらのマッピングを承認します。

自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)	名前が有効なホスト
client01	クライアントの短縮名
clustername	クラスタの仮想名
clustername.lab04.com	クラスタの仮想名の FQDN

4 ホストの有効なマッピングの承認が完了したら、ホスト (Hosts)]ペインの下部にある[ホスト (Hosts)]タブをクリックします。

ホスト client01.lab04.com と client02.lab04.com に対し、次のような[マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)]が表示されます。

ホスト (Host)	マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)
client01.lab04.com	client01.lab04.com、client01、clustername、clustername.lab04.com
client02.lab04.com	client02.lab04.com、client02、clustername、clustername.lab04.com

5 NetBackup によって自動的に検出されなかったマッピングは、手動で追加することができます。

[ホスト (Hosts)]タブをクリックし、[ホスト (Hosts)]ペイン内を右クリックして、[共有マッピングとクラスタマッピングの追加 (Add Shared or Cluster Mappings)]をクリックします。たとえば、名前にはクラスタの仮想名を指定します。[ホストを選択 (Select Hosts)]をクリックして、その仮想名をマッピングするクラスタ内のノード名を選択します。

表 5-2 において、FCI は SQL Server フェールオーバークラスタインスタンスを意味します。AG は可用性グループを意味します。WSFC は Windows Server フェールオーバークラスタを意味します。

表 **5-2** SQL Server 環境用にマッピングされたホスト名の例

環境	ホスト	マッピング済みのホスト名
FCI (2 つのノードから成るクラスタ)	*Node 1* の物理名	SQL Server クラスタの仮想名
	Node 2 の物理名	SQL Server クラスタの仮想名
AG (プライマリとセカンダリ)	プライマリ名	WSFC 名
	セカンダリ名	WSFC 名
1 つの FCI (プライマリ FCI またはセカンダリ FCI) から成る AG	プライマリ FCI 名	WSFC 名
	セカンダリ FCI 名	WSFC 名
	Node 1 の物理名	SQL Server クラスタの仮想名
	Node 2 の物理名	SQL Server クラスタの仮想名

複数 NIC 環境での SQL Server クラスタ用に自動検出されたマッピング

複数 NIC 環境に SQL Server クラスタがある場合は、その環境のホストごとに有効な自動検出されたマッピングを承認する必要があります。プライベート ネットワーク上の SQL Server クラスタの仮想名を、各 SQL Server クラスタノードのプライベート名にマッピングする必要があります。

複数 NIC 環境で SQL Server クラスタ用に自動検出されたマッピングを承認するには

1. NetBackup 管理コンソールで、[セキュリティ管理 (Security Management)]、[ホスト管理 (Host Management)]の順に展開します。
2. [ホスト (Hosts)]ペインの下部にある[承認待ちのマッピング (Mappings for Approval)]]タブをクリックします。

   お客様の環境のホストが一覧表示されるほか、これらのホストに対して NetBackup によって検出されたマッピングまたは追加のホスト名が一覧表示されます。ホストには、マッピングごと、またはマッピングに関連付けられている名前ごとに 1 つのエントリがあります。

   たとえば、ホスト `client01-bk.lab04.com` と `client02-bk.lab04.com` で構成される複数 NIC 環境のクラスタの場合は、次のエントリが表示されます。

ホスト (Host)	自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)
client01-bk.lab04.com	clustername bk.lab04.com
client02-bk.lab04.com	clustername bk.lab04.com

3. マッピングが有効な場合は、ホストのエントリを右クリックし、[承認 (Approve)]をクリックします。

   たとえば、次のマッピングが `client01-bk.lab04.com` で有効な場合は、そのマッピングを承認します。

自動検出されたマッピング (Auto-discovered Mapping)	名前が有効なホスト
clustername bk.lab04.com	プライベート ネットワーク上の SQL Server クラスタの仮想名

4 ホストの有効なマッピングの承認が完了したら、ホスト (Hosts)]ペインの下部にある[ホスト (Hosts)]タブをクリックします。

ホスト `client01-bk.lab04.com` と `client02-bk.lab04.com` に対し、[マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)]に次の値が表示されます。

ホスト (Host)	マッピング済みのホスト名/IP アドレス (Mapped Host Names / IP Addresses)
client01-bk.lab04.com	clustername bk.lab04.com
client02-bk.lab04.com	clustername bk.lab04.com

5 NetBackup によって自動的に検出されなかったマッピングは、手動で追加することができます。

[ホスト (Hosts)]タブをクリックし、[ホスト (Hosts)]ペイン内を右クリックして、[共有マッピングとクラスタマッピングの追加 (Add Shared or Cluster Mappings)]をクリックします。たとえば、名前にはクラスタの仮想名を指定します。[ホストを選択 (Select Hosts)]をクリックして、その仮想名をマッピングするホストを選択します。

複数 NIC 環境の SQL Server クラスタ用にマッピングされたホスト名の例

表 5-3 複数 NIC 環境の SQL Server クラスタ用にマッピングされたホスト名の例

ホスト	マッピング済みのホスト名
Node 1 のプライベート名	プライベート ネットワーク上の SQL Server クラスタの仮想名
Node 2 のプライベート名	プライベート ネットワーク上の SQL Server クラスタの仮想名

NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について

SQL Server や NetBackup のハードウェア環境と設定を含む多くの要因が、バックアップのパフォーマンスに影響を与える可能性があります。SQL Server バックアップ用にシステムを最適化するための最初の手順は、標準バックアップ操作用に環境を調整することです。詳しくは『NetBackup バックアップ計画とパフォーマンスチューニングガイド』を

参照してください。この調整が完了したら、SQL Server に固有のいくつかのことを調整できます。

メモ: 次に示す要素の一部は、SQL Server のストリームベースの処理にのみ適用され、スナップショットバックアップまたはリストアには影響しません。

SQL Server インテリジェントポリシーの場合は、これらのパラメータを[Microsoft SQL Server]ページでポリシーに設定します。バックアップバッチファイル (レガシー SQL Server ポリシー) またはリストアバッチファイルの場合は、NetBackup MS SQL Client インターフェースでこれらのパラメータを設定します。NetBackup クライアントプロパティのこれらのパラメータを保存してセッションで使います。

次の要素が、パフォーマンスに影響する場合があります。

- 「NetBackup for SQL のバッファ領域パラメータについて」
- 「ストライプと並列バックアップ操作」
- 「共有メモリの使用」
- 「代替バッファ方式」
- 「[Microsoft SQL Server チェックサム (Microsoft SQL Server checksum)]」
- 「インスタントデータファイルの初期化」
- 「読み書き可能なファイルグループと読み取り専用ファイルグループの使用」

NetBackup for SQL のバッファ領域パラメータについて

[最大転送サイズ (Maximum transfer size)]、[バックアップするブロックサイズ (Backup block size)]、[ストライプあたりのクライアントバッファ (Client buffers per stripe)]によって、SQL Server のバッファ領域が増加する可能性があります。SQL Server にはこれらの値の増加をサポートするために利用可能なリソースがある必要があります。バッファ領域パラメータは、ストリームベースのバックアップのためにのみ適用可能です。

[最大転送サイズ (Maximum transfer size)]パラメータは、各バックアップ操作またはリストア操作に対して設定できます。[最大転送サイズ (Maximum transfer size)]は、SQL Server バックアップイメージの読み込みおよび書き込みに使用されるバッファサイズです。通常、この値を大きくすると、SQL Server のパフォーマンスが向上します。

[バックアップするブロックサイズ (Backup block size)]パラメータは、各バックアップ操作に対して設定できます。リストアに対しては、NetBackup によって、バックアップに使用したサイズと同じサイズが自動的に選択されます。[バックアップするブロックサイズ (Backup block size)]は、SQL Server バックアップイメージの読み込みおよび書き込みに使用される増分サイズです。

[ストライプあたりのクライアントバッファ (Client buffers per stripe)]によって、バックアップ操作またはリストア操作時に各データストリームの読み込みまたは書き込みのために割

り当てるバッファ数が決定されます。この要素を 1 より大きい値に設定すると、データ転送時のマルチバッファが有効になります。より多くのバッファ数を割り当てることによって、NetBackup から NetBackup メディアサーバーへのデータ送信を高速化できます。マルチバッファは、バックアップまたはリストア操作中に Producer-Consumer で短期的な不均衡が発生するのを防ぎます。バッファ数には 32 まで設定できますが、通常は値を 2 または 3 に設定すれば十分です。

ストライプと並列バックアップ操作

データベースのサイズと数によっては、バックアップストライプまたは並列バックアップ操作の値を増やすとパフォーマンスとスループットが向上します。

ストライプを設定するために SQL Server エージェントにオーバーヘッドを追加することになってもパフォーマンスの向上のほうが重要な大規模データベースで、複数のストライプ ([バックアップストライプ数 (Number of backup stripes)]) を有効にすると役立ちます。より小さい規模のデータベースを保護するときは、ストライプの使用によってパフォーマンス速度が低下する可能性があります。一般に、SQL Server インスタンスに少数の大規模データベースのみがある場合は、ストライプの使用によってパフォーマンスは改善します。インスタンスに多数の小規模データベースがある場合は、[並列バックアップ操作 (Parallel backup operations)]の量を増加することが、パフォーマンスを改善するにはよりよい選択です。ストライプおよび並列バックアップ操作の両方を同時に高めることができますが、システムリソースにかかる負荷が高くなりすぎないように注意します。

p.77 の「バックアップ操作を許可するジョブ数の設定」を参照してください。

注意: ポリシーが複数のストライプを使用するようにも構成されている場合、スケジュールの多重化を有効にしないでください。1 つのバックアップポリシーに対して多重化と複数のストライプの両方が構成されていると、リストアに失敗します。

共有メモリの使用

NetBackup サーバーを NetBackup for SQL Server と同じホスト上にインストールすると、パフォーマンスを最適化することができます。データの転送にソケットではなく共有メモリを使った場合にも最適化されます。共有メモリはデフォルト構成です。`install_path¥NetBackup¥NOSHM` ファイルを作成しないかぎり、共有メモリが使用されます。

代替バッファ方式

NetBackup for SQL Server では、代替バッファ方式をサポートしています。この方式では、NetBackup と SQL Server 間でデータを転送することなく、同じメモリバッファを共有できるようにすることによって、CPU の使用が最適化されます。

通常、バックアップおよびリストアの代替バッファ方式では、CPU 使用率のみが改善され、データ転送速度は向上しません。代替バッファ方式の使用中、転送速度が大幅に低

下する場合があります。転送速度を上げるには、バックアップの[最大転送サイズ (Maximum transfer size)]を最大値である 4 MB に設定します。

バックアップ操作での代替バッファ方式について

次のすべての条件に当てはまる場合、この方式がバックアップに対して自動的に選択されます。

- NetBackup 共有メモリが使用されている。
- バックアップがストリームベースである。
- バックアップが多重化されていない。
- バックアップポリシーで、NetBackup 圧縮または NetBackup 暗号化のどちらも指定されていない。
- NetBackup のバッファサイズと SQL Server のブロックサイズが同じである。
  NetBackup のバッファサイズのデフォルトは 64 KB ですが、この値は次の設定で変更できます。
  install_path¥NetBackup¥db¥config¥SIZE_DATA_BUFFERS (テープバックアップ用) または
  install_path¥NetBackup¥db¥config¥SIZE_DATA_BUFFERS_DISK (ディスクバックアップ用)
- NetBackup for SQL Server エージェントを、NetBackup Client Service と同じアカウントを使用して起動している。
  自動バックアップポリシーから開始されたバックアップは、NetBackup Client Service で開始されるため、同じアカウントが使用されます。ただし、NetBackup for SQL Server または dbbackex によって SQL Server バックアップを開始できます。この場合、ログオンアカウントが NetBackup Client Service アカウントと同じである必要があります。その後、バックアップは代替バッファ方式で行うことができます。

リストア操作での代替バッファ方式について

バックアップの条件として、代替バッファ方式を使用する必要があります。リストアの場合も、バックアップが代替バッファ方式で行われている必要があります。代替バッファ方式が使用されたことを検証できます。Using alternate buffer method という文字列を検索します。これは、dbclient ログおよび進捗レポートに表示されます。

[Microsoft SQL Server チェックサム (Microsoft SQL Server checksum)]

バックアップを実行する前に、チェックサムを実行することを選択できます。このオプションを有効にすると、バックアップ操作またはリストア操作でパフォーマンスが低下します。

レガシーバックアップポリシーの場合は、スクリプトを作成するときに[ページ検証 (Page verification)]値を設定します。リストアスクリプトの場合は、スクリプトの作成時に[リストアは実行せずに、バックアップイメージを検証 (Verify backup image, but do not restore)]オプションを選択します。

インスタントデータファイルの初期化

データベース、ファイルグループまたはデータベースファイルをリストアする場合、SQL Server によってファイル領域がゼロにリセットされてからリストア操作が開始されます。この処理によって、リカバリ時間の合計が 2 倍になる可能性があります。ファイルの初期化を回避するには、SE_MANAGE_VOLUME_NAME に割り当てられた Windows アカウントで MSSQLSERVER サービスを実行します。詳しくは、SQL Server と Windows のマニュアルを参照してください。

読み書き可能なファイルグループと読み取り専用ファイルグループの使用

読み書き可能なファイルグループのみを定期的にバックアップした場合、必要なバックアップ時間およびストレージメディアを大幅に削減できます。その場合、読み取り専用ファイルグループのバックアップを 1 つだけ保持します。これは無制限に保持されます。スケジュールの保持レベルを設定できます。

バックアップ操作を許可するジョブ数の設定

NetBackup が SQL Server のバックアップを開始するときに、ジョブの数が作成されます。ポリシーの設定によっては、[バックアップストライプ数 (Number of backup stripes)] と[並列バックアップ操作 (Parallel backup operations)]などを設定した場合、追加のジョブが作成されます。(レガシーポリシーの場合、これらに相当する設定は、[ストライプ (Stripes)]設定と BATCHSIZE キーワードです。)

作成するジョブの数を増やしたり、制限できます。ストレージユニットに送信するジョブの数を制御することもできます。次の設定を考慮します。

ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)	NetBackup で各ポリシーで同時にバックアップできるインスタンスの最大数を設定します。この設定は、ポリシーの属性で設定します。 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。
1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)	ポリシーで、クライアントごとに許可するジョブ最大数。この設定は、すべてのポリシーのすべてのクライアントに適用されます。[グローバル属性 (Global Attributes)]ノードのマスターサーバーホストプロパティで設定します。 p.78 の「[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]の構成」を参照してください。
最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)	NetBackup からストレージユニットへ一度に送信可能なジョブの最大数。この設定は、ストレージユニットプロパティで設定します。 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)	NetBackup でこのストレージユニットへのジョブのために一度に使うことができるテープドライブの数。この設定は、ストレージユニットプロパティで設定します。 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]の構成

[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]では、1 インスタンスまたはデータベース(インテリジェントポリシー)で並行して実行できるバックアップの最大数を指定します。ポリシーで指定される各インスタンスまたはデータベースにより、新しいバックアップジョブが作成されます。レガシーポリシーの場合、この設定は 1 クライアントあたりの最大数を示します。

[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]を構成する方法

1. NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]を展開します。
2. [マスターサーバー (Master Servers)]を選択します。
3. 右ペインで、サーバーのアイコンをダブルクリックします。
4. [グローバル属性 (Global Attributes)]をクリックします。
5. [1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]の値を任意の値に変更します。

   デフォルトは 1 です。

インテリジェントポリシーの場合、次の式を使って、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]の設定に使うより小さい値を計算することができます。

1 クライアントあたりの最大ジョブ数 = *number_of_database_objects* X *number_of_streams* X *number_of_policies*

レガシーポリシーの場合、次の式を使って、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]の設定に使うより小さい値を計算することができます。

1 クライアントあたりの最大ジョブ数 = *number_of_streams* X *number_of_policies*

次の定義を参照してください。

number of database_objects	(インテリジェントポリシー)並列でバックアップするデータベース、ファイルグループまたはファイルグループの数。

number_of_streams データベースサーバーと NetBackup 間のバックアップストリームの数。ストライピング (分散化) しない場合、クライアント上で、ストリームごとに新しいバックアップジョブが開始されます。ストライピングする場合、それぞれの新しいジョブは、ストライプごとに 1 つのストリームを使用します。

number_of_policies このクライアントのバックアップを同時に実行できるポリシーの数。この数は、2 以上です。たとえば、2 つの異なるデータベースのバックアップを実行するために、1 つのクライアントを 2 つのポリシーに設定できます。これらのバックアップ処理時間帯は、重なる場合があります。

SQL Server マルチストライプバックアップの構成

SQL Server では、ストライプと呼ばれる複数のデータストリームを介したデータベースのバックアップがサポートされています。各ストライプは、NetBackup によって個別のイメージとして格納されます。この機能を使用すると、複数のテープデバイスを使用してデータの転送速度を改善することができます。

バックアップイメージは、使用可能なドライブよりも多いテープに書き込まれることがあります。この種類のバックアップイメージをリストアするときは、リストアバッチファイルで利用可能であるドライブの数を指定します。

p.102 の「複数ストリームの SQL Server バックアップのリストア」を参照してください。

注意: 複数のストライプを使用したバックアップにも構成されるスケジュールの多重化を有効にしないでください。多重化を 1 つ以上のストライプを使用するスケジュールで有効にすると、リストアに失敗します。

マルチストライピングされたバックアップを作成するには、次を構成します。

- バックアップポリシーで、使う[ストライプ (Stripes)]の数を選択します。
  SQL Server インテリジェントポリシーの場合は、[Microsoft SQL Server]ページでこのオプションを設定します。レガシー SQL Server ポリシーの場合は、バックアップバッチファイルを作成するときに[ストライプ (Stripes)]オプションを設定します。
- ポリシーのスケジュールで、[メディアの多重化 (Media multiplexing)]を、多重化を無効にする 1 に設定します。
  レガシー SQL Server ポリシーの場合、[アプリケーションバックアップ (Application Backup)]スケジュールの多重化を無効にします。多重化を無効にすると、リストア中にすべてのストリームが同時に利用可能になるため、リストア操作は正常に実行されます。
- ストレージユニットにストライプと同数のドライブが存在することを確認します。
- ストライピングされたバックアップの実行時に十分な数のドライブが利用可能になるように、バックアップスケジュールを構成します。

手動バックアップの実行

環境のサーバーおよびクライアントを設定した後、手動バックアップで構成設定のテストを行うことができます。作成した自動バックアップスケジュールを手動バックアップで実行します。状態コードおよびその他のトラブルシューティング情報の説明が参照できます。

『NetBackup 状態コードリファレンスガイド』を参照してください。

『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。

手動バックアップを実行する方法

1. マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。
2. NetBackup 管理コンソールを起動します。
3. 左ペインで、[ポリシー (Policies)]をクリックします。
4. [すべてのポリシー (All Policies)]ペインで、テストするポリシーを選択します。
5. [処理 (Actions)]>[手動バックアップ (Manual Backup)]を選択します。
6. 手動バックアップに使うスケジュールを選択します。
7. SQL Server インテリジェントポリシーの場合は、手動バックアップに含めるデータベースまたはインスタンスを選択します。レガシーの SQL Server ポリシーの場合は、手動バックアップに含めるクライアントを選択します。
8. バックアップの状態を確認するには、NetBackup 管理コンソールで[アクティビティモニター (Activity Monitor)]をクリックします。

   アクティビティモニターおよびスクリプトの出力には、バックアップ操作の状態が示されます。

6

SQL Server のリストアの実行

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup MS SQL Client の初回の起動
- SQL Server のホストとインスタンスの選択
- SQL Server バックアップイメージの表示
- NetBackup for SQL Server のオプション
- SQL Server データベースのバックアップのリストア
- SQL Server データベースの完全復旧の実行
- SQL Server ファイルグループのバックアップのリストア
- 読み書き可能なファイルグループバックアップからの SQL Server データベースのリカバリ
- SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア
- SQL Server データベースファイルのリストア
- 完全復旧を実行しない SQL Server トランザクションログイメージのリストア
- SQL Server データベースの移動
- SQL Server のページレベルのリストアの実行について
- リダイレクトリストアの権限の構成
- 代替ホストへの SQL Server データベースのリダイレクト
- リモート SQL Server インストール上でのリストアの実行

- フルテキストカタログを含むデータベースのリストアについて
- 複数ストリームの SQL Server バックアップのリストア

NetBackup MS SQL Client の初回の起動

この項では、NetBackup MS SQL Client の初回の起動方法について説明します。以降のセッションのために、エージェントは指定された情報を記憶しています。

NetBackup MS SQL Client の初回の起動方法

1. SQL Server 統合セキュリティを使用する場合、SQL Server バックアップとリストアを実行する権限を持つ Windows アカウントで Windows ホストにログオンします。
2. NetBackup MS SQL Client を起動します。
3. ログオンパラメータを指定するように求められたら、[OK]をクリックします。
4. [SQL Server の接続のプロパティ (SQL Server Connection Properties)]ダイアログボックスで、ログインする SQL Server のホストおよびインスタンスを選択します。
5. SQL Server ホストおよびインスタンスで標準または混合セキュリティを使用する場合、SQL Server ユーザー ID とパスワードを指定します。
6. [適用 (Apply)]をクリックします。
7. [閉じる (Close)]をクリックします。

SQL Server のホストとインスタンスの選択

NetBackup MS SQL Client がアクセスする SQL Server ホストおよびインスタンスを設定する手順は、次のとおりです。

(レガシー SQL サーバーポリシー)ユーザー ID とパスワードは、ホストが標準または混合のセキュリティを使う場合にのみ必要となります。該当する場合、最初に NetBackup MS SQL クライアントを開くときにのみ、これらのクレデンシャルを指定する必要があります。

SQL Server ホストおよびインスタンスを選択する方法

1. NetBackup MS SQL Client を起動します。
2. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。

3 ［SQL Server の接続のプロパティ (SQL Server connection properties)］ダイアログボックスで、［ホスト (Host)］ドロップダウンメニューから、SQL Server ホストを選択します。

ホスト名がドロップダウンメニューに表示されない場合は、入力することができます。リモートホストを選択して［適用 (Apply)］をクリックすると、［ホストの種類 (Host type)］が［リモート (remote)］に指定されます。

4 ［インスタンス (Instance)］ドロップダウンメニューから、SQL Server インスタンスを選択します。

インスタンス名がドロップダウンメニューに表示されない場合は、入力することができます。［インスタンス (Instance)］フィールドを［デフォルト(default)］または空 (空白ではない) に設定すると、デフォルトのインスタンスを指定することができます。

5 変更を保存するには、［適用 (Apply)］をクリックします。

6 ［閉じる (Close)］をクリックします。

SQL Server バックアップイメージの表示

この手順では、利用可能なバックアップイメージの表示方法について説明します。目的のバックアップイメージを表示した後、特定の SQL Server オブジェクトをリストアする手順に従ってください。

バックアップのための特定のネットワークインターフェースを使う場合、次の手順を参照してください。

p.184 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する」を参照してください。

バックアップイメージを表示する方法

1 アクセスするホストおよびインスタンスを変更します。

p.82 の「SQL Server のホストとインスタンスの選択」を参照してください。

2 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)］を選択します。

3 ［バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)］ダイアログボックスで、表示するバックアップイメージが存在する［SQL ホスト (SQL Host)］を選択するか、その名前を入力します。

p.99 の「代替ホストへの SQL Server データベースのリダイレクト」を参照してください。

4 必要に応じて、[ソースクライアント (Source Client)]を指定します。

ほとんどの場合、バックアップイメージを参照するときは、[SQL ホスト (SQL Host)]名を指定するだけですみます。NetBackup クライアント名とホスト名が異なるときは、[ソースクライアント (Source Client)]の名前を提供する必要もあります。たとえば、NetBackup クライアント名がネットワークインターフェース名の場合があります。インテリジェントポリシーの場合、NetBackup クライアント名と異なるホスト名を用いるインスタンスを追加するか登録するには、[ソースクライアント (Source Client)]を示す必要もあります。

5 検索する日付範囲を選択します。

6 [OK]をクリックします。

7 オブジェクトのリストア方法についての指示に従います。

p.88 の「SQL Server データベースのバックアップのリストア」を参照してください。

p.88 の「SQL Server データベースの完全復旧の実行」を参照してください。

p.89 の「SQL Server ファイルグループのバックアップのリストア」を参照してください。

p.90 の「読み書き可能なファイルグループバックアップからの SQL Server データベースのリカバリ」を参照してください。

p.91 の「SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア」を参照してください。

p.91 の「SQL Server データベースファイルのリストア」を参照してください。

p.92 の「完全復旧を実行しない SQL Server トランザクションログイメージのリストア」を参照してください。

p.93 の「SQL Server データベースの移動」を参照してください。

p.95 の「SQL Server のページレベルのリストアの実行について」を参照してください。

NetBackup for SQL Server のオプション

表 6-1 では、リストアを実行する場合に使用可能なオプションについて説明します。[ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択すると、これらのオプションが[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスに表示されます。

表 6-1　リストア操作のオプション

オプション	説明
スクリプト (Scripting)	データベースイメージからリストアする場合に使用できます。 ■ 選択したオブジェクトをリストア (Restore selected object) データベースのリストアを実行するスクリプトを生成します。このスクリプトは、デフォルトのオプションです。 ■ 移動テンプレートの作成 (Create a move template) 選択したデータベースを移動するためのスクリプトテンプレートを作成します。 ■ 読み取り専用ファイルグループをリストア (Restore read-only filegroups) 読み取り専用ファイルグループすべての最新のバックアップをリストアします。 ■ ページリストアテンプレートを作成 (Create a page restore template) 選択したバックアップイメージに格納されているページからデータベース、ファイルグループまたはファイルをリストアするためのテンプレートを作成します。Microsoft SQL Server サービスには、フォルダ *install_path*¥netbackup¥dbext¥mssql¥temp へのフルアクセス権がある必要があります。 ■ リストアは実行せずに、バックアップイメージを検証 (Verify backup image, but do not restore) このオプションを使用できるのは、ページ検証オプションを使用してイメージをバックアップした場合だけです。NetBackup は、エラーがないかどうかイメージを検証しますが、リストアは実行しません。
REPLACE オプションを使用する (Use replace option)	SQL Server の REPLACE オプションを使用してリストアします。
リカバリ (Recovery)	SQL Server リカバリオプションを 1 つ指定します。 ■ 復旧しない (Not Recovered) 現在のリストアの後に追加のバックアップイメージをデータベースに適用する必要がある場合は、リストアの実行中にこのオプションを選択します。このオプションを使用すると、データベースはロード状態のままです。 ■ 復旧する (Recovered) このオプションは、リストア順序の最後のイメージをリストアする場合に選択します。リカバリ操作後、データベースは使用可能な状態になります。このオプションを選択しなければ、データベースは中間状態になり、使用可能できません。中間バックアップの適用時に[復旧する(Recovered)]を選択した場合、バックアップのリストアを続行できません。この場合、リストア操作を最初からやりなおす必要があります。 ■ スタンバイ (Standby) トランザクションログおよびデータベースのリストア時に、スタンバイデータベースを作成して保持します。このオプションには、スタンバイ UNDO ログ (デフォルトの位置は *install_path*¥NetBackup¥logs¥SQLStandBy¥) が必要です。Microsoft SQL Server サービスを実行するアカウントには SQLStandBy フォルダへのフルアクセス権がある必要があります。このデータベースは、リストア後、スタンバイ状態になります。

オプション	説明
一貫性チェック (Consistency check)	リストア後に実行する一貫性チェックを選択します。一貫性チェックからの出力は、SQL Server クライアントの進捗ログに書き込まれます。データベースがリカバリ済みの状態にリストアされていない場合は、一貫性チェックを選択できません。リカバリで一貫性チェックを選択した場合、最後のリストアの後にチェックが実行されます。 ■ なし (None) 一貫性チェックを実行しません。 ■ インデックスを含まない完全チェック (Full check, excluding indexes) 一貫性チェックからインデックスをエクスクルードします。インデックスをチェックしない場合、一貫性チェックの実行速度は大幅に向上しますが、完全にはチェックされません。一貫性チェックでは、各ユーザー表のデータページおよびクラスタ化インデックスページだけが対象となります。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ 物理チェックのみ (Physical check only) 少ないオーバーヘッドで SQL Server データベースの物理的一貫性をチェックする場合に選択します。このオプションでは、ページヘッダーおよびレコードヘッダーの物理構造の整合性のみをチェックします。また、ページのオブジェクト ID やインデックス ID と割り当て構造の間の一貫性もチェックします。 ■ インデックスを含む完全チェック (Full check, including indexes) 一貫性チェックにインデックスを含めます。エラーはログに記録されます。 ■ カタログのチェック (Check catalog) 指定したデータベースのシステムテーブル内およびシステムテーブル間の一貫性をチェックします。
ページ検証形式 (Page verification type)	**メモ:** ページ検証を使用すると、パフォーマンスが低下することがあります。 このオプションは、[破損ページの検出 (torn page detection)]または[チェックサム (checksum)]検証を使用してソースオブジェクトをバックアップした場合にのみ使用できます。 ■ 検証を実行しない (Do not perform verification) リストアスクリプトにページ検証を指定しません。 ■ 検証を実行する (Perform verification) リストアスクリプトにページ検証を指定します。
完全復旧する (Stage full recovery)	NetBackup が検出したリカバリセットを使用してデータベースをリカバリするには、このオプションを選択します。選択したトランザクションログがリカバリセットに属していない場合、このオプションは無効になります。
選択したトランザクションログのみをリストアする (Restore only the selected transaction log)	選択したトランザクションログのみをリストアする場合に選択します。選択したトランザクションログがリカバリセットに属していない場合、このオプションは無効になります。

オプション	説明
トランザクションログリカバリオプション (Transaction log recovery options)	このリストには、トランザクションログをリストアするための制御が含まれています。トランザクションログが出力された時刻より前の時点に、トランザクションログをリストアできます。このグループの個々のエントリは、トランザクションログのバックアップを選択した場合にのみ有効になります。 ■ 指定した時点 (To point in time) このオプションは、トランザクションログを指定した時点にリカバリする場合に選択します。 ■ トランザクションログマーク (To transaction log mark) このオプションは、トランザクションログをトランザクションログマークまでリカバリする場合に選択します。このオプションを使用する場合、トランザクションログマークの名前を入力する必要があります。 ■ 指定した日時以降のトランザクションログマーク (To transaction log mark but after) このオプションは、指定した時点の後のトランザクションログマークまでトランザクションログをリカバリする場合に選択します。このオプションを使用する場合、トランザクションログマークの名前を入力する必要があります。 ■ トランザクションログマークの前 (Before transaction log mark) このオプションは、トランザクションログマークより前の指定した時点にトランザクションログをリカバリする場合に選択します。このオプションを使用する場合、トランザクションログマークの名前を入力する必要があります。 ■ 指定した日時以降のトランザクションログマークの前 (Before transaction log mark but after) このオプションは、指定したトランザクションログマークより前で、指定した時点より後に、トランザクションログをリカバリする場合に選択します。このオプションを使用する場合、トランザクションログマークの名前を入力する必要があります。
トランザクションログマーク (Transaction log mark)	このリストは、リストアのデータベースのトランザクションログを選択した場合に有効になります。トランザクションログには 1 つ以上のトランザクションログマークが含まれ、次のトランザクションログのリカバリオプションの 1 つが選択されています。 ■ トランザクションログマーク (To transaction log mark) ■ 指定した日時以降のトランザクションログマーク (To transaction log mark but after) ■ トランザクションログマークの前 (Before transaction log mark) ■ 指定した日時以降のトランザクションログマークの前 (Before transaction log mark but after)
YYYY、MM、DD、HH、MM、SS 午前、午後	リストアするトランザクションログの日時を指定します。これらのフィールドは、次のいずれかのトランザクションログのリカバリオプションを選択した場合にのみ有効になります。 ■ 指定した時点 (To point in time) ■ 指定した日時以降のトランザクションログマーク (To transaction log mark but after) ■ 指定した日時以降のトランザクションログマークの前 (Before transaction log mark but after)
すぐに実行する (Launch immediately)	バックアップ操作をすぐに開始します。 ローカルホスト上ではない SQL Server インスタンスにログインすると、[すぐに実行する (Launch immediately)] が無効になります。ローカル以外のホスト用のスクリプトを生成した場合、スクリプトはそのホスト上で実行する必要があります。
保存 (Save)	スクリプトを生成して後で実行します。

オプション	説明
リストア (Restore)	リストアを開始するか、リストアスクリプトを生成します。リストアするオブジェクトを選択していない場合、このボタンは無効になります。

SQL Server データベースのバックアップのリストア

この項では、データベースの完全バックアップまたは差分バックアップからデータベースをリストアする方法について説明します。

データベースのバックアップをリストアする方法

1. リストアするバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3. データベースを展開します。

4. 次のように、リストアするデータベースイメージを選択します。

   - 完全バックアップをリストアするには、データベースバックアップのイメージを選択します。
   - 完全バックアップおよびデータベースの差分バックアップをリストアするには、プラス (+) 記号をクリックし、差分バックアップを選択します。
     差分を選択すると、完全バックアップが自動的に選択されます。

5. リストアオプションを選択します。

   リストア終了後にすぐに使用できるようにデータベースをリカバリモードにするには、［リカバリ (Recovery)］リストから［復旧する (Recovered)］を選択します。ただし、データベースがリカバリモードになると、追加の差分バックアップまたはトランザクションログのバックアップを使用してデータベースを更新できないことに注意してください。

   p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

6. ［リストア (Restore)］をクリックします。

7. リストアの進捗状況を表示するには、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

SQL Server データベースの完全復旧の実行

この項では、データベースの完全復旧を実行する方法について説明します。

データベースの完全復旧を実行する方法

1 リカバリする時点までのバックアップイメージを表示します。

p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3 リストアするトランザクションログのバックアップを含むデータベースの横の[+]をクリックします。

4 リカバリする時点からのトランザクションログイメージを選択します。

5 [完全復旧する (Stage full recovery)]を選択します。

目的のトランザクションログイメージを含むイメージセットが存在し、このイメージセットがデータベースの完全復旧を実行するのに必要な条件を満たしている場合は、[完全復旧する (Stage full recovery)]が有効になります。トランザクションログのプロパティを表示すると、[リカバリセット (Recovery Set)]タブが表示されます。

復旧用のリカバリセットには、完全復旧を実行するのに必要な条件を満たすバックアップイメージの組み合わせを含めることができます。たとえば、完全データベース、ファイルグループ、差分などを含めることができます。

6 [リストア (Restore)]をクリックします。

7 リストアの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

SQL Server ファイルグループのバックアップのリストア

このトピックでは、ファイルグループのバックアップを復元する方法について説明します。スケジュールバックアップに読み書き可能なファイルグループのみが含まれる場合、次のトピックを参照してください。

p.90 の「読み書き可能なファイルグループバックアップからの SQL Server データベースのリカバリ」を参照してください。

p.91 の「SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア」を参照してください。

メモ: データベースの前回のバックアップファイルをリストアせずに、後続の差分バックアップのリストアを試行すると、SQL Server では、ロード処理が停止します。4305 や 4306 などのエラーが表示されます。単一の差分バックアップをリストアする場合は、最初にデータベースのバックアップファイルをリストアする必要があります。この問題を回避するには、一連の全トランザクションログをバックアップします。または、差分バックアップおよびバックアップファイルを同じ NetBackup サーバーにバックアップします。その後、一連の全バックアップオブジェクトをリストアできます。

メモ: p.88 の「SQL Server データベースの完全復旧の実行」を参照してください。

ファイルグループバックアップをリストアする方法

1. リストアするバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスおよびデータベースを展開します。

3. 次のように、ファイルグループを展開して、リストアするファイルグループイメージを選択します。

   - 完全バックアップをリストアするには、ファイルグループのバックアップイメージを選択します。
   - ファイルグループの差分バックアップをリストアするには、完全バックアップの横のプラス (+) 記号をクリックし、差分バックアップを選択します。

4. リストアオプションを選択します。

   p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

5. ［リストア (Restore)］をクリックします。

   リストアの進捗状況を表示するには、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

読み書き可能なファイルグループバックアップからの SQL Server データベースのリカバリ

リストア対象のトランザクションログイメージを選択すると、NetBackup for SQL Server によって最も効率的なリカバリパスが自動的に生成されます。バックアップ方針で読み書き可能なファイルグループを使用する場合、リカバリパスは読み書き可能なファイルグループに基づいて作成されます。読み書き可能なファイルグループをリストアした後、読み取り専用ファイルグループが破損していなければ、読み取り専用ファイルグループをリストアしなくても、データベースをオンラインに戻すことができます。

読み書き可能なファイルグループからデータベースをリカバリする方法

1. リストアするバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3. リストアする読み書き可能なファイルグループを含むデータベースを選択します。

4 トランザクションログのバックアップを選択します。

5 トランザクションログバックアップを右クリックして、[プロパティ (Properties)]を選択します。

6 [リカバリセット (Recovery Set)]タブで、完全なバックアップセットが利用可能であることを確認します。

7 [OK]をクリックします。

8 データベースのリストアを開始するには、[リストア (Restore)]をクリックします。

リストア完了後、データベースはオンラインに戻ります。ただし、読み取り専用ファイルグループは、リストアされるまでリカバリできません。

p.91 の「SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア」を参照してください。

SQL Server 読み取り専用ファイルグループのリストア

このトピックでは、読み取り専用ファイルグループをリストアする方法について説明します。

読み取り専用ファイルグループをリストアする方法

1 リストアするバックアップイメージを表示します。

p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

[日付によるフィルタリング (Time filter)]の開始日付が、読み取り専用ファイルグループの最初のバックアップのタイムスタンプより前の日付になっていることを確認します。

2 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3 リストアする読み取り専用ファイルグループを含むデータベースを選択します。

[スクリプト (Scripting)]リストで、[読み取り専用ファイルグループをリストア (Restore read-only filegroups)]を選択します。

読み取り専用ファイルグループの完全なセットが利用可能な場合は、[リストア (Restore)]オプションが有効になります。

4 [リストア (Restore)]をクリックします。

5 リストアの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

SQL Server データベースファイルのリストア

この項では、データベースファイルをリストアする方法について説明します。

データベースファイルをリストアする方法

1 リストアするバックアップイメージを表示します。

p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、データベースインスタンスおよびデータベースを展開します。

3 リストアするファイルを含むファイルグループを展開します。

4 ファイルを展開します。

5 リストアするデータベースファイルイメージを選択します。

6 リストアオプションを選択します。

p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

7 [リストア (Restore)]をクリックします。

リストアの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

完全復旧を実行しない SQL Server トランザクションログイメージのリストア

このトピックでは、完全復旧を実行しないでトランザクションログイメージをリストアする方法について説明します。

完全復旧を実行せずにトランザクションログをリストアする方法

1 リストアするバックアップイメージを表示します。

p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3 リストアするトランザクションログイメージを選択します。

目的のトランザクションログイメージを含むイメージセットが存在し、このイメージセットがデータベースの完全復旧を実行するのに必要な条件を満たしている場合は、[完全復旧する (Stage full recovery)]が有効になります。トランザクションログのプロパティには、[リカバリセット (Recovery Set)]タブが含まれています。

4 ［選択したトランザクションログのみをリストアする (Restore only the transaction log that you selected)］を選択します。

5 ［リストア (Restore)］をクリックします。

リストアの進捗状況を表示するには、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

SQL Server データベースの移動

メモ: NetBackup は、バックアップがストリームベースである場合、FileStream が有効化されているバックアップのデータベースの移動のみをサポートします。

データベースを移動すると、すべてのバックアップイメージを使用して、既存のデータベースを名前の異なる場所にコピーできます。データベースの移動操作は、選択項目にデータベースイメージが含まれている場合のみ実行できます。データベースバックアップイメージを直接選択するか、または NetBackup でデータベースバックアップイメージを含むリカバリセットが検出された場合に実行できます。

リダイレクトリストアについて詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.99 の「代替ホストへの SQL Server データベースのリダイレクト」を参照してください。

データベースを移動する方法

1 リストアするバックアップイメージを表示します。

p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2 ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3 リストアするデータベースバックアップイメージを選択します。

4 ［リストアオプション (Restore options)］の［スクリプト (Scripting)］リストから［移動テンプレートの作成 (Create a move template)］を選択します。

移動用のスクリプトを作成する場合、すぐに実行することはできません。特定の宛先パラメータを指定するためにスクリプトを編集する必要があります。

5 リストアオプションを選択します。

p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

6 ［リストア (Restore)］をクリックします。

7 ファイル名を指定し、［保存 (Save)］をクリックします。

8 ［Save Script As］ダイアログボックスで、［はい (Yes)］をクリックして、メモ帳 (NOTEPAD) でテンプレートを開きます。

9 テンプレート内のデータベース名を、リストア先のデータベースの名前に変更します。

次に例を示します。

```
#  Replace the database name in the following line with the name of the database that
you
#  want to move to. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <DATABASE>.
#
# DATABASE "DatabaseA"
```

次のように変更します。

```
#  Replace the database name in the following line with the name of the database that
you
#  want to move to. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <DATABASE>.
#
DATABASE "DatabaseB"
```

10 リストアするデータベースファイルのパスを変更します。

1 つ以上のファイルをアンコメントする必要があります。次に例を示します。

```
#  Replace the file path <C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DBA_FG1_File1.ndf>
#  with a new file path. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <TO>.
#  The target of the MOVE keyword must be "DBA_FG1_File1".
MOVE  "DBA_FG1_File1"
#TO  "C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DBA_FG1_File1.ndf"
```

次のように変更します。

```
#  Replace the file path <C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DBA_FG1_File1.ndf>
#  with a new file path. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <TO>.
#  The target of the MOVE keyword must be "DBA_FG1_File1".
MOVE  "DBA_FG1_File1"
TO  "C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DBB_FG1_File1.ndf"
```

11 データベースファイルのパスを変更します。

次に例を示します。

```
#  Replace the file path <C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DatabaseA.mdf>
#  with a new file path. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <TO>.
#  The target of the MOVE keyword must be "DatabaseA".
MOVE  "DatabaseA"
#TO  "C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DatabaseA.mdf"
```

次のように変更します。

```
#  Replace the file path <C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DatabaseA.mdf>
#  with a new file path. Also remove the hash mark <#> which precedes the keyword <TO>.
#  The target of the MOVE keyword must be "DatabaseA".
MOVE  "DatabaseA"
TO  "C:¥Microsoft SQL Server¥MSSQL.3¥MSSQL¥DATA¥DatabaseB.mdf"
```

12 差分バックアップまたはトランザクションログバックアップを移動する場合も、テンプレートに同様の変更を加えます。

13 テンプレートの修正が終了したら、それを保存します。

14 リストアを実行するには、[ファイル (File)]>[スクリプトファイルの管理 (Manage script files)]を選択し、作成したスクリプトを選択して[開始 (Start)]をクリックします。

15 [はい (Yes)]をクリックして、リストアを開始します。

リストアの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

SQL Server のページレベルのリストアの実行について

メモ: ページレベルのリストアは、SQL Server のレガシーバックアップポリシーにのみ適用できます。

ハードウェアの障害により SQL Server データベースが部分的に破損した場合は、ページレベルのリストアを使用できます。ページレベルのリストアを使用して破損したページだけをリカバリできます。リストアを必要とするページ数が比較的少ない場合は、ページレベルのリストアを使用することにより、総停止時間を短縮できます。多数のページが破損している場合は、データベースの完全リカバリの方が時間を短縮できる場合があります。

ページリストアオプションを選択すると、NetBackup for SQL Server によってページリストアテンプレートが作成されます。

このテンプレートには、次の構成要素が含まれています。

- ページリストア操作。リストアするページ ID を挿入して修正します。
- 一連のトランザクションログイメージ。現在の時点にデータベースをリカバリするために使用されます。
- 最終ログのバックアップおよびリカバリ操作。データベースをオンラインに戻す場合に必要です。

SQL ページレベルのリストアの要件と制限事項について

SQL Server ページレベルのリストアを実行する場合、次の要件および制限事項があります。

- ページは、データベース、ファイルグループ、読み書き可能なファイルグループ、部分的なデータベースといったバックアップ形式からリストアできます。
- SQL Server では、完全復旧モデルまたは一括ログ復旧モデルのいずれかを使用する必要があります。
- 要求したページにデータベース自体を定義する重要な情報が含まれている場合、それらのページは SQL Server によってリカバリされない場合があります。たとえば、データベースファイルの先頭ページに対してページレベルのリストアは使用できません。ページレベルのリストアが機能しない場合は、データベースの完全復旧を使用する必要があります。
- ページレベルのリストアによって、バックアップイメージから最大 1000 ページをリカバリできます。

SQL Server のページレベルのリストアの実行

このトピックでは、ページレベルのリストアを実行する方法について説明します。Microsoft SQL Server サービスにはフォルダ `install_path¥netbackup¥dbext¥mssql¥temp` に完全なアクセス権限が必要であることに注意してください。

ページレベルのリストアを実行する方法

1. データベース内の破損ページのリストを取得します。

   SQL Server Books Online では、破損ページのリストを取得するための方法をいくつか提案しています。これらの方法の 1 つに、SQL Server Management Studio からコマンド `DBCC checkdb` を実行する方法があります。

2. リストアするバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

3. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。
4. データベースを展開します。
5. リストアするページを含むデータベースバックアップページを選択します。

6 ［リストアオプション (Restore options)］の［スクリプト (Scripting)］リストから［ページリストアテンプレートを作成 (Create a page restore template)］を選択します。

7 ［リストア (Restore)］をクリックします。

8 ［Save Script As］ダイアログボックスで、ページリストアスクリプトのファイル名を指定し、［保存 (Save)］をクリックします。

9 ［はい (Yes)］をクリックして、メモ帳 (NOTEPAD) でテンプレートを開きます。

10 ページのファイル ID とページ ID を必要な値に編集します。

次に例を示します。

```
#
# Create one or more page restore requests. These use the following format
#PAGE file-id:page-id
```

次のように変更します。

```
#
# Create one or more page restore requests. These use the following format
PAGE 1:14
PAGE 1:20
```

11 テンプレートの修正が終了したら、それを保存します。

12 リストアを実行するには、［ファイル (File)］>［スクリプトファイルの管理 (Manage script files)］を選択し、作成したスクリプトを選択して［開始 (Start)］をクリックします。

13 ［はい (Yes)］をクリックして、リストアを開始します。

リダイレクトリストアの権限の構成

特定のリストア手順または環境では、リダイレクトリストアの権限を構成する必要があります。この構成により、クライアントは別のクライアントが実行したバックアップのリストアを許可します。リダイレクトリストアについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

次の操作を実行する場合は、リダイレクトリストア用のマスターサーバーを構成する必要があります。

- *ClientA* のリストアを *ClientB* にリダイレクトする
- データベースミラーリング環境のリストアをデータベースミラーリングパートナーのいずれかにリダイレクトする

以下の設定のリダイレクトリストアを設定する必要はありません。代わりに、これらの環境では、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定する必要があります。また、環境内のホストの自動検出マッピングを確認する必要があります。

- SQL Server クラスタのデータベースをクラスタ内の任意のノードにリストアする
- 可用性グループ (AG) のデータベースを AG の任意のノードにリストアする
- プライベートインターフェースを使用して、複数の NIC を備える環境でクラスタデータベースをリストアする

p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。

特定のクライアントまたはホストにリダイレクトリストアの実行を許可する方法

1. マスターサーバーで、リダイレクトリストアの実行権限を付与する各クライアントまたはホストに altnames ファイルを作成します。

   たとえば、リストアをリダイレクトする HostB 権限を付与するには、次のファイルを作成します。

   Windows の場合:

   install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥HostB

   UNIX の場合:

   /usr/openv/netbackup/db/altnames/HostB

2. altnames ファイルに、要求元クライアントがリストアを要求するファイルが存在するホストの名前を追加します。

   たとえば、HostA からのリストアをリダイレクトする権限を HostB に付与する場合、HostA を HostB ファイルに追加します。

複数の NIC を装備した環境でバックアップをリストアする権限を SQL Server ホストに付与する方法

1. SQLHOST-NB など、ホストのプライベート名を付けた altnames ファイルを作成します。

   Windows の場合:

   install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥SQLHOST1-NB

   UNIX の場合:

   /usr/openv/netbackup/db/altnames/SQLHOST1-NB

2. altnames ファイルに、要求元クライアントがリストアを要求するファイルが存在するホストの名前を追加します。

   たとえば、SQLHOST2-NB からのリストアをリダイレクトする権限を SQLHOST1-NB に付与する場合、SQLHOST2-NB を SQLHOST1-NB ファイルに追加します。

代替ホストへの SQL Server データベースのリダイレクト

この項では、バックアップを実行したクライアントとは異なるクライアントにバックアップをリダイレクトする方法について説明します。データベース移動操作を実行することによって、リストアをリダイレクトします。NetBackup によってテンプレートが作成され、これを編集してリストアのリダイレクト先として使用するホストおよび場所を指定します。新しい場所は、同じホストの異なるインスタンス、異なるホストまたは異なるファイルパスです。また、移動操作では、元の名前とは異なる名前でデータベースをリストアすることもできます。テンプレートを編集した後、[ファイル (File)]、[スクリプトファイルの管理 (Manage script files)]を選択して起動します。

メモ: 移動先またはリストア先のホストおよびインスタンスは、ログインするホストおよびインスタンスです。移動またはリストアの操作の場合、移動元 (参照元) のホストとインスタンスは[ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択するときに指定します。

代替ホストの代替パスにデータベースをリダイレクトリストアする方法

1. マスターサーバーにリダイレクトされたリストア用の権限を設定します。

   p.97 の「リダイレクトリストアの権限の構成」を参照してください。

2. リストアするデータベースをバックアップしたサーバーは、宛先ホストのサーバーリストに表示される必要があります。サーバーがリストに表示されない場合は、追加します。

   p.100 の「マスターサーバーの選択について」を参照してください。

3. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。
4. [ホスト (Host)]リストから、リストア先のホストを選択します。
5. [インスタンス (Instance)]リストから、データベースインスタンスを選択します。

   [<デフォルト> (<default>)]を選択するか、フィールドを空のままにしておくと、デフォルトのインスタンスを指定することができます。

6. [適用 (Apply)]および[閉じる (Close)]をクリックします。
7. [ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティの設定 (Set NetBackup client properties)]を選択します。

8 ［NetBackup クライアントのプロパティ (NetBackup Client Properties)］ダイアログボックスで、［現在の NetBackup サーバー: (Current NetBackup Server)］リストから、NetBackup マスターサーバーを選択します。

このサーバーは、宛先ホストでリストアしたい SQL Server バックアップイメージを含みます。クライアントはどちらも同じマスターサーバーを使う必要があります。

p.100 の「マスターサーバーの選択について」を参照してください。

9 ［OK］をクリックします。

10 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)］を選択します。

11 ［バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)］ダイアログボックスで、［SQL ホスト (SQL Host)］リストから、リストアするデータベースが存在するホストを選択します。

12 必要に応じて、［ソースクライアント (Source Client)］を指定します。

ほとんどの場合、バックアップイメージを参照するときは、［SQL ホスト (SQL Host)］名を指定するだけですみます。NetBackup クライアント名とホスト名が異なるときは、［ソースクライアント (Source Client)］の名前を提供する必要もあります。たとえば、NetBackup クライアント名がネットワークインターフェース名の場合があります。インテリジェントポリシーの場合、NetBackup クライアント名と異なるホスト名を用いるインスタンスを追加するか登録するには、［ソースクライアント (Source Client)］を示す必要もあります。

13 ［OK］をクリックします。

14 移動するデータベースを表示します。

15 ［リストアオプション (Restore options)］の［スクリプト (Scripting)］リストから［移動テンプレートの作成 (Create a move template)］を選択します。

16 ［リストア (Restore)］をクリックします。

NetBackup でテンプレートを保存するためのメッセージが表示されます。

17 ［名前を付けて保存 (Save As)］ダイアログボックスで、ファイル名を入力し、［保存 (Save)］ をクリックします。

18 ［はい (Yes)］をクリックして、テンプレートを開きます。

19 テンプレートを編集して宛先データベースに使う名前を指定します。また、使用する各データベースファイルへのパスを含めます。

マスターサーバーの選択について

移動を実行する場合、バックアップイメージは、宛先ホストの NetBackup マスターサーバーとして機能するホストマシン上で利用可能である必要があります。このサーバーが宛先ホストのサーバーリストに表示される場合、［ファイル (File)］>［NetBackup クライアント

のプロパティの設定 (Set NetBackup client properties)]を選択して、現在のマスターサーバーとして選択できます。

サーバーが宛先ホストのサーバーリストに表示されない場合、リムーバブルメディアにイメージを重複させる必要があります (一意のID を使用)。次に、宛先ホストが使用するマスターサーバーにそのメディアを転送し、そのサーバーにイメージをインポートします。イメージをインポートした後、移動を行うための手順を実行します。サーバーは、リモートであったりアクセス制限があるという理由でサーバーリストに表示されない場合があります。

p.93 の「SQL Server データベースの移動」を参照してください。

リモート SQL Server インストール上でのリストアの実行

NetBackup for SQL Server を使用して、リモートホストのデータベースをリストアできます。生成されたバッチファイルは、リモートホストに保存する必要があります。ローカルインストールされた NetBackup for SQL Server から操作を実行できます。

リモート SQL Server インストール上でリストアを実行する方法

1. アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

   p.82 の「SQL Server のホストとインスタンスの選択」を参照してください。

2. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。

3. 操作のオプションを選択します。

   p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

   [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、[保存する (Save)]が有効になっています。生成したスクリプトはログオンしているリモートホストで実行する必要があるため、[すぐに実行する (Launch immediately)]は無効になっています。

4. [リストア (Restore)]をクリックします。

5. [Save Script As]ダイアログボックスで、リモートホストの *install_path*¥NetBackup¥DbExt¥MsSql¥ フォルダに移動し、そのフォルダにバッチファイルを保存します。

6. ローカルインストールされた NetBackup for SQL Server から操作を実行します。

フルテキストカタログを含むデータベースのリストアについて

SQL Server 2008 以降では、フルテキスト検索カタログはデータベースバックアップに含まれ、リカバリ処理の一環としてリストアされます。ファイルグループをリストアする場合、NetBackup はフルテキストインデックスファイルとファイルグループの他のファイルをリストアします。フルテキストカタログとインデックスのバックアップとリストアについて詳しくは、次の Microsoft 社の記事を参照してください。

https://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms142511.aspx

SQL Server 2005 からアップグレードしたフルテキストカタログをバックアップおよびリストアする場合は、次の Microsoft 社の記事を参照してください。

https://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms142490.aspx

複数ストリームの SQL Server バックアップのリストア

NetBackup MS SQL Client を使用すると、同じ数のストライプを使用して、複数のストライプを使用したバックアップが自動的にリストアされます。リストアするオブジェクトを選択します。NetBackup によって、関連するすべてのバックアップが検出され、リストアされます。リストア時には、すべてのストリームが同時に利用可能になっている必要があります。

複数のストリームを使った従来のバックアップについて

スナップショットではないバックアップに複数のストライプを指定すると、指定した数のバックアップストリームが作成されます。たとえば、これらのストリームには、次のような名前が付けられます。

```
juneberry.MSSQL7.COLE.db.pubs.~.7.001of003.20140908200234..C
juneberry.MSSQL7.COLE.db.pubs.~.7.002of003.20140908200234..C
juneberry.MSSQL7.COLE.db.pubs.~.7.003of003.20140908200234..C
```

独自のバッチファイルを作成してストライピングしたオブジェクトリストアを実行する場合は、NBIMAGE キーワードを使用して、最初のストライプ名だけを指定します。残りのストライプ名は、NetBackup for SQL Server によって自動的に検出されます。SQL Server オブジェクトに使用するバックアップ名について、詳細な情報を参照できます。

p.236 の「bplist を使った SQL Server バックアップの取得について」を参照してください。

複数ストリームを使ったスナップショットバックアップ方式について

Snapshot Client バックアップで、ストリームを使用して Frozen Image をテープにバックアップする場合に複数のストライプを指定すると、コンポーネントファイルがストライプと同

じ数に分割されます。ファイル数が指定したストライプ数より少ない場合、エージェントはファイルと同じ数のストライプのみを使用してバックアップを実行します。

メモ: NetBackup ではインスタントリカバリバックアップの複数ストリームの指示句は無視されます。

SQL Server バックアップを Snapshot Client で実行すると、すべてのバックアップストリームは、次のように同じ名前で NetBackup によって識別されます。

```
juneberry.MSSQL7.COLE.db.Northwind.~.7.001of003.20141012131132..C
```

NetBackup では、これらをバックアップ ID によって区別します。

バックアップに使用されたデバイスよりも少ないデバイスでの複数ストリーム SQL Server バックアップのリストア

リカバリ環境によっては、バックアップに使用されたドライブよりもリストア用のドライブが少ない場合があります。そのような場合、SQL Server は、追加のバックアップイメージがマウントされるのを待機している間にタイムアウトします。このタイムアウトを回避するには、リカバリバッチファイルを変更して、リストアに使用できるドライブの数を指定します。

たとえば、5 つのドライブを使用してバックアップを実行した場合に、リカバリでは 2 つのドライブのみが利用可能であるとします。リカバリバッチファイルで、ストライプパラメータを `STRIPES 5` から `STRIPES 2` に変更します。この変更により、SQL Server では、5 つのイメージがすべてリストアされるまで、一度に 2 つのバックアップイメージが要求されます。

7

VMware バックアップを使用した SQL Server データの保護

この章では以下の項目について説明しています。

- VMware バックアップを使用した SQL Server データの保護について
- SQL Server を保護する NetBackup for VMware バックアップの構成について
- NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加
- Veritas VSS provider for vSphere のインストール
- SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定
- SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーの構成
- スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server を保護するための VMware ポリシーの構成
- SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて
- VMware バックアップからの SQL Server データベースのリストア

VMware バックアップを使用した SQL Server データの保護について

VMware のバックアップポリシーを使用することで、NetBackup では仮想マシンに存在する SQL Server データベースの一貫した完全バックアップを作成できます。VMware ポリシーのサポート対象のアプリケーションを保護する場合、バックアップ中に新しいジョ

ブまたはフェーズがあります。アプリケーション状態キャプチャ (ASC) ジョブは、VMware の検出ジョブの後で、スナップショットジョブの前に実行されます。この ASC ジョブはゲストの仮想マシンの NetBackup クライアントにアクセスします。ASC ジョブは、アプリケーションリカバリに必要な特定のデータを収集してカタログ化します。

VMware バックアップでは次のことを実行できます。

- ゲスト OS とデータベースで SQL Server のすべてのインスタンスを静止できるシングルパス VMware バックアップを実行します。
- 既存の SQL Server のリストア処理を使って VMware バックアップからデータをリストアおよびリカバリします。1 つの VMware バックアップから、ボリュームレベルのリストア、ファイルレベルのリカバリ、またはデータベースのリストアのリストアオプションを選択できます。また、ログを切り捨てるかどうかを選択できます。
- VMware バックアップから代替クライアントにデータベースをリストアおよびリカバリします。ターゲットとなる宛先クライアントには、物理コンピュータまたは仮想マシンを使うことができます。

Veritas VSS provider for vSphere について

Veritasは Veritas VSS provider の使用を推奨します。ログを切り詰めるには、Veritas VSS provider を使用し、完全 VSS バックアップを作成する必要があります。VMware VSS プロバイダでは、ログを切り捨てるための基準として使うことができない、コピーのみバックアップが作成されます。

Veritas VSS provider がインストールされ、NetBackup が仮想マシンのスナップショットを開始すると、VMware ツールはファイルレベルの一貫したバックアップのために VSS ライターを静止するように Veritas VSS provider に要求します。ログの切り捨てがポリシーで有効になっている場合、VMware スナップショットが完了するとログが切り捨てられます。

メモ: Veritas VSS provider は個別にインストールする必要があります。

p.109 の「Veritas VSS provider for vSphere のインストール」を参照してください。

SQL Server を保護する VMware ポリシーの使用に関する制限事項

SQL Server を保護する VMware ポリシーを構成するときには、次の制限事項があります。

- このリストは VMware ポリシー制限の包括的なリストではありません。仮想環境の NetBackup のサポートについて詳しくは次の Web サイトを参照してください。
  https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.000006177

- SQL Server の VMware 増分バックアップは、このバージョンの NetBackup ではサポートされません。ただし、アクセラレータを使用すると、完全バックアップの速度が上がります。
- VMware バックアップからの特定の時点へのリストアはサポートされません。
- SQL Server はクラスタ化できません。
- 可用性グループ (AG) では VMware アプリケーションのバックアップはサポートされていません。
- 次のいずれかの操作を行うと、アプリケーション状態キャプチャ (ASC) ジョブは失敗し、データベースは保護されません。
  - ［仮想マシンの静止 (Virtual machine quiesce)］オプションを無効にします。
  - ［ディスクの除外 (Exclude Disks)］ タブで、VMware ポリシーから任意のディスクデータを除外します。除外するディスクに SQL Server データが含まれないようにしてください。
- データベースは VMware バックアップのためにサポートされる構成に存在する場合にのみカタログ化され、保護されます。保護できるデータベースが存在する限り、ASC ジョブは続行されます。サポートされているディスクとサポートされていないディスクに存在するデータベースをバックアップ用に選択すると、ASC ジョブは状態 1 (部分的に成功) を生成します。ASC ジョブではこれらの状況が検出され、ジョブの詳細にはバックアップ処理の結果が含まれます。

  SQL Server データベースが次の場所にある場合は、データベースはカタログ化されず、バックアップされません。
  - Raw デバイスマッピング (RDMs) (Raw device mapping (RDMs))。SQL Server 仮想マシンがデータベースとトランザクションログのストレージとして RDM を使わないことを確認します。
  - 独立としてマークされている仮想マシンディスク (vmdk) ボリューム。SQL Server データベースとトランザクションログが独立したディスクに保存されないことを確認します。
  - マウントポイントボリューム。
  - 仮想ハードディスク (VHD)。
    NetBackup が VHD ディスク上のデータベースオブジェクトを検出すると、ASC ジョブは失敗し、SQL Server の内容はカタログ化されません。バックアップのすべてのオブジェクトは、VHD に存在しないものも含めてカタログ化されません。
  - RAID ボリューム。
  - ReFS ファイルシステム。
  - 除外された Windows ブートディスク。ASC ジョブは、この種類のディスクを検出し、それを独立したディスクと同様に処理します。

VMware バックアップでは、いかなる理由でも NetBackup がインストールされているディスクをエクスクルードできません。たとえば、NetBackup がブートドライブ (通常 C:) にインストールされている場合、[ブートディスクのエクスクルード (Exclude boot disk)] オプションを選択しないでください。

- VMware のポリシーでは、VMware のバックアップから特定の仮想ディスクを除外します。特定の SQL Server コンポーネントを除外する場合は、MS-SQL-Server ポリシーを使用します。

SQL Server を保護する NetBackup for VMware バックアップの構成について

表 7-1　SQL Server を保護する VMware バックアップの構成手順

手順	処理	説明
手順 1	VMware 環境と NetBackup を構成します。	『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。 データベースをホスティングする各 ESX Server には、NetBackup for SQL Server ライセンスと Enterprise Client ライセンスがある必要があります。 SQL Server を実行している仮想マシンに、NetBackup クライアントソフトウェアをインストールします。
手順 2	Veritas VSS provider をインストールします。	Veritas VSS provider が完全バックアップを作成することにより、VMware バックアップはログを切り捨てることができます。ログは、既存の完全バックアップがある場合のみ切り捨てることができます。 p.109 の「Veritas VSS provider for vSphere のインストール」を参照してください。
手順 3	NetBackup サービスのログオンアカウントを構成します。	NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントは、特定の要件を満たす必要があります。 p.110 の「SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定」を参照してください。
手順 4	(SQL Server 2012 以降) ログを切り捨てることを選択した場合、Microsoft SQL Server サービスを実行するアカウントに NetBackup レガシーネットワークサービスの `temp` ディレクトリに対する完全な権限があることを確認してください。	このディレクトリは `C:¥Users¥user¥AppData¥Local¥Temp` で、*User* が NetBackup Legacy Network Service を実行するアカウントになります。

手順	処理	説明
手順 5	Replication Director を使って VMware スナップショットとスナップショットレプリカを管理する場合は、ストレージライフサイクルポリシー (SLP) を作成します。	この機能には、NetBackup Replication Director ライセンスが必要です。 『NetBackup レプリケーションディレクタソリューションガイド』を参照してください。
手順 6	VMware ポリシーの構成。	p.112 の「SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーの構成」を参照してください。 p.114 の「スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server を保護するための VMware ポリシーの構成」を参照してください。 『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。 ログを切り捨てる場合、まずログの切り捨てなしでの完全バックアップを実行する必要があります。詳しくは、次の項を参照してください。 p.116 の「SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて」を参照してください。 VMware の完全バックアップを高速化する可能性のあるアクセラレータの使い方については追加情報が利用可能です。 p.109 の「NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加」を参照してください。
手順 7	[VM ホスト名 (VM hostname)] ではなく [プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)] を使用する場合は、VM のホスト名にその識別子をマッピングする必要があります。	マスターサーバーの [分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)] ホストプロパティで、このマッピングを設定します。 p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。
手順 8	環境内のホストの自動検出マッピングを確認します。	NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの [ホスト管理 (Host Management)] プロパティで、この設定を実行します。 p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加

[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]オプションを選択して、NetBackup アクセラレータを使うと、VMware の完全バックアップが高速化される可能性があります。バックアップ時間の短縮によって、VMware バックアップをバックアップ処理時間帯内に簡単に完了できるようになります。この機能を使うには、最初に[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]を有効にして初回バックアップを実行する必要があります。以降のバックアップ時間はかなり減らすことができます。

SQL Server 向けのアクセラレータのサポートは、現在、完全スケジュール形式のバックアップのみに制限されています。この制限は、SQL Server を保護する VMware バックアップをアクセラレータなしで実行する場合にも適用されます。

p.112 の「SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーの構成」を参照してください。

クライアントの変更検出の新しい基準を定期的に確立するには、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを有効にして個別のポリシースケジュールを作成します。

この機能は MSDP または PureDisk のストレージユニットと[データ保護最適化オプション (Data Protection Optimization Option)]のライセンスを必要とします。VMware バックアップでアクセラレータを使用する方法について詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

Veritas VSS provider for vSphere のインストール

Veritas VSS provider を使うには、Windows クライアントの NetBackup のインストール後に手動でインストールする必要があります。VMware VSS プロバイダがインストールされている場合はインストールプログラムによって削除され、コンピュータの再起動が必要になることがあります。

Veritas VSS provider をインストールする方法

1. 次の場所を参照します。

   install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥goodies¥

2. [vSphere 用の Veritas VSS provider (VSS provider for vSphere)]のショートカットをダブルクリックします。

3. プロンプトに従います。

4 ユーティリティが完了したら、メッセージが表示される場合はコンピュータを再起動します。

5 再起動後、ユーティリティが再開されます。プロンプトに従って、インストールを完了します。

Veritas VSS provider をアンインストールする方法

1 ［コントロールパネル］で、［プログラムの追加と削除］または［プログラムと機能］を開きます。

2 ［vSphere 用の Veritas VSS provider (VSS provider for vSphere)］をダブルクリックします。

アンインストールプログラムでは、VMware VSS プロバイダは自動的に再インストールされません。

SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定

NetBackup は VMware のバックアップとリストアを実行するとき、SQL Server にアクセスするために NetBackup クライアントサービスおよび NetBackup レガシーネットワークサービスを使用します。VMware バックアップの場合、ログオンアカウントは次の要件を満たす必要があります。

- ログオンアカウントとしてローカルシステムアカウントを使うことはできません。
- Replication Director を使用した VMware バックアップの場合、アカウントは NetApp ディスクアレイの CIFS 共有にアクセスできます。
- アカウントには固定サーバーロール「sysadmin」があります。ドメインアカウント、BUILTIN¥Administrators のメンバー、またはこのロールがある別のアカウントを使用できます。
- 両方のサービスが同じログオンアカウントを使う必要があります。
- (SQL 2012 以降) ログを切り捨てることを選択した場合は、Microsoft SQL Server サービスを実行するアカウントに NetBackup レガシーネットワークサービスの `temp` ディレクトリに対する完全な権限があることを確認してください。
  このディレクトリは `C:¥Users¥user¥AppData¥Local¥Temp` で、*User* が NetBackup Legacy Network Service を実行するアカウントになります。

メモ: リストアを実行するために使用するホストおよびバックアップを参照するために使用するホストで、サービスのログオンアカウントを設定します。

SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスを設定するには

1. sysadmin ロールと必要なローカルセキュリティ権限のあるアカウントで、Windows ホストにログオンします。
2. SQL Server のホストとインスタンスで標準または混合セキュリティを使用する場合、次の手順を実行します。
   - NetBackup MS SQL Client を起動します。
   - ［ファイル (File)］>［SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)］を選択します。
   - SQL Server のユーザー ID とパスワードを指定します。
   - ［適用 (Apply)］をクリックします。
   - ［閉じる (Close)］をクリックします。
3. Windows のサービスアプリケーションを開始します。
4. ［NetBackup Client Service］エントリをダブルクリックします。
5. ［ログオン (Log On)］タブをクリックします。
6. ログオンアカウントの名前を指定します。

   ログオンアカウントを変更するには、管理者グループ権限が必要です。

   アカウントは、ユーザーアカウントが後ろに続くドメイン名 *domain_name¥account* を含む必要があります。たとえば、recovery¥netbackup です。
7. ［OK］をクリックします。
8. ［NetBackup Legacy Network Service］エントリをダブルクリックします。
9. ［ログオン (Log On)］タブをクリックします。
10. ログオンアカウントの名前を指定します。

    ログオンアカウントを変更するには、管理者グループ権限が必要です。

    アカウントは、ユーザーアカウントが後ろに続くドメイン名 *domain_name¥account* を含む必要があります。たとえば、recovery¥netbackup です。
11. ［OK］をクリックします。
12. NetBackup クライアントサービスおよび NetBackup レガシーネットワークサービスを停止し、再度開始します。
13. サービスアプリケーションを終了します。

SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーの構成

次の手順では、SQL Server データベースの VMware バックアップを構成する方法を示します。

SQL Server を保護する VMware バックアップポリシーを構成する方法

1. マスターサーバーに管理者としてログオンします。
2. NetBackup 管理コンソールを起動します。
3. 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。
4. ［ポリシーの変更 (Change Policy)］ダイアログボックスで、［属性 (Attributes)］タブをクリックします。
5. ［ポリシー形式 (Policy type)］リストから、［VMware］を選択します。
6. ［ポリシーストレージ (Policy storage)］フィールドで、ディスクストレージユニットを選択します。

   NetBackup アクセラレータを使う場合は、PureDisk ストレージユニット形式 (MSDP または PureDisk) を選択します。サポート対象のストレージ形式はすべて、NetBackup のデバイスマッピングファイルにリスト表示されています。
7. NetBackup アクセラレータを使う場合は、［アクセラレータを使用 (Use Accelerator)］をクリックします。

   アクセラレータは初回の完全バックアップを使って基準を確立します。アクセラレータを使って実行される以降のバックアップは非常に高速に実行できます。［アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)］オプションを有効にするための追加のポリシースケジュールを作成することもできます。このオプションにより、次回のアクセラレータバックアップ用の新しい基準が確立されます。NetBackup アクセラレータについて詳しくは、次を参照してください。

   p.109 の「NetBackup アクセラレータを使った VMware の完全バックアップの速度の増加」を参照してください。

   『NetBackup for VMware 管理者ガイド』

   アクセラレータを有効にすると、［VMware］タブで［Block Level Incremental（BLI）バックアップを有効にする (Enable block-level incremental backup)］オプションも選択され、灰色で表示されます。
8. ［スケジュール (Schedules)］タブで、完全バックアップのスケジュールを作成します。
9. ［クライアント (Clients)］タブで、［問い合わせを使用して自動的に選択 (Select automatically through query)］をクリックします。
10. ［仮想マシンの自動選択を実行するための NetBackup ホスト (NetBackup host to perform automatic virtual machine selection)］と使うホストを選択します。

11 バックアップする仮想マシンを選択する規則を作成するには、クエリービルダーを使います。

クエリービルダーについて詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

12 ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブをクリックします。

このタブには、［クライアント (Clients)］タブで作成したクエリーが表示されます。

13 ［VMware］タブをクリックします。

このダイアログボックスのオプションについて詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

14 バックアップのカタログ化に使う［プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)］を選択します。

15 ［VM バックアップからのファイルリカバリを有効にする (Enable file recovery from VM backup)］をクリックします。

SQL Server のアプリケーション保護を行うには、このオプションを有効にする必要があります。

16 ［SQL Server のリカバリの有効化 (Enable SQL Server Recovery)］をクリックします。

このオプションは、仮想マシンのバックアップからの SQL データベースのリカバリを有効にします。このオプションが無効になっている場合、バックアップで仮想マシン全体をリカバリできますが、データベースを個別にリカバリすることはできません。

17 ログを切り捨てる場合、この時点で［ログの切り捨て (Truncate logs)］を有効にしないでください。この手順の後のほうの説明に従って、最初に、ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行する必要があります。

18 VMware バックアップから特定のディスクを除外する場合は、［ディスクを除外 (Exclude Disks)］タブをクリックします。

NetBackup は、SQL Server を保護する VMware バックアップからそれらのディスクを除外します。除外するディスクに Exchange データが含まれないようにしてください。

［ディスクを除外 (Exclude Disks)］タブについて詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

19 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

トランザクションログを切り捨てない場合、これ以上の処理は必要ありません。

トランザクションログを切り捨てる場合は、手順 20 を続行します。

20 ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行します。

まずこの完全バックアップを実行しない場合、ASC ジョブは失敗します。

21 バックアップが完了したら、ステップ 3 で作成したポリシーを開いてください。

22 ［VMware］タブをクリックします。

23 ［SQL Server Recovery を有効にする］の下で、［ログの切り捨て］を選択します。

SQL Server の場合、このオプションでは仮想マシンの VMware スナップショットが完了したときにトランザクションログが切り捨てられます。ログの切り捨てと必要条件について詳しくは、次の項を参照してください。

p.116 の「SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて」を参照してください。

24 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

25 VMware の完全バックアップを実行します。

スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server を保護するための VMware ポリシーの構成

このトピックでは、スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用して SQL Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成方法について説明します。NetBackup が NetApp ディスクアレイ上の CIFS 共有にアクセスする必要があることに注意してください。

スナップショットレプリケーションの管理に Replication Director を使用した SQL Server をバックアップするための VMware ポリシーの構成方法

1 マスターサーバーに管理者としてログオンします。

2 NetBackup 管理コンソールを起動します。

3 新しいポリシーを作成するか、構成するポリシーを開きます。

4 ［ポリシーの変更 (Change Policy)］ダイアログボックスで、［属性 (Attributes)］タブをクリックします。

5 ［ポリシー形式 (Policy type)］リストから、［VMware］を選択します。

6 ［ポリシーストレージ (Policy storage)］リストで、使用したいストレージライフサイクルポリシー (SLP) を選択します。スナップショットとスナップショットレプリケーションのためにこの SLP を設定する必要があります。

VMware バックアップで Replication Director を設定する方法について詳しくは、『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』を参照してください。

7 Snapshot Client および Replication Director グループで、［Replication Director を使用 (Use Replication Director)］をクリックします。

8 ［スケジュール (Schedules)］タブで、完全バックアップのスケジュールを作成します。

9 ［クライアント (Clients)］タブで、［問い合わせを使用して自動的に選択 (Select automatically through query)］をクリックします。

10 ［仮想マシンの自動選択を実行するための NetBackup ホスト (NetBackup host to perform automatic virtual machine selection)］と使うホストを選択します。

11 バックアップする仮想マシンを選択する規則を作成するには、クエリービルダーを使います。

クエリービルダーについて詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

12 ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブをクリックします。

このタブには、［クライアント (Clients)］タブで作成したクエリーが表示されます。

13 ［VMware］タブをクリックします。

このダイアログボックスのオプションについて詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

14 バックアップのカタログ化に使う［プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)］を選択します。

15 ［SQL Server のリカバリの有効化 (Enable SQL Server Recovery)］をクリックします。

このオプションは、仮想マシンのバックアップからの SQL データベースのリカバリを有効にします。このオプションが無効になっている場合、バックアップで仮想マシン全体をリカバリできますが、データベースを個別にリカバリすることはできません。

16 ログを切り捨てる場合、この時点で［ログの切り捨て (Truncate logs)］を有効にしないでください。この手順の後のほうの説明に従って、最初に、ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行する必要があります。

17 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

トランザクションログを切り捨てない場合、これ以上の処理は必要ありません。

トランザクションログを切り捨てる場合は、手順 18 を続行します。

18 ログの切り捨てを行わずに完全バックアップを実行します。

19 バックアップが完了したら、ステップ 2 で作成したポリシーを開いてください。

20 ［VMware］タブをクリックします。

21 ［SQL Server Recovery を有効にする］の下で、［ログの切り捨て］を選択します。

SQL Server の場合、このオプションでは仮想マシンの VMware スナップショットが完了したときにトランザクションログが切り捨てられます。ログの切り捨てと必要条件について詳しくは、次の項を参照してください。

p.116 の「SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて」を参照してください。

22 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

23 VMware の完全バックアップを実行します。

SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログの切り捨てについて

SQL Server を保護する VMware バックアップにおけるログを切り捨てたい場合、次の要件があります。

- 完全バックアップを作成するには、Veritas VSS providerをインストールする必要があります。VMware VSS プロバイダでは、ログを切り捨てるための基準として使うことができない、コピーのみバックアップが作成されます。

  p.109 の「Veritas VSS provider for vSphere のインストール」を参照してください。

- SQL Server 2012 以降の場合、Microsoft SQL Server Service を実行するアカウントには NetBackup Legacy Network Service の `temp` ディレクトリに対する完全な権限が必要になります。このディレクトリは `C:¥Users¥user¥AppData¥Local¥Temp` で、*User* が NetBackup Legacy Network Service を実行するアカウントになります。

- ログを切り捨てるには、まずログの切り捨てなしで VMware の完全バックアップを実行する必要があります。まずこの完全バックアップを実行しない場合、ASC ジョブは失敗します。このバックアップが完了したら、ポリシーでログの切り捨てを有効にします。

VMware バックアップからの SQL Server データベースのリストア

次の手順では、完全な VMware バックアップから SQL Server データベースをリストアする方法について説明します。

VMware バックアップから SQL Server データベースをリストアする方法

1. リストアするバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。

2. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、データベースインスタンスを展開します。

3. データベースを展開します。

4. リストアするデータベースイメージを選択します。

   SQL Server の VMware バックアップでは、［リカバリ済み (Recovered)］リカバリオプションのみを利用できます。

5. ［リストア (Restore)］をクリックします。

8

Snapshot Client を併用した NetBackup for SQL Server の使用

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server 用の NetBackup Snapshot Client について
- Snapshot Client を使用した SQL Server の操作
- SQL Server スナップショットおよびインスタントリカバリバックアップの構成要件
- SQL Server のスナップショットポリシーの構成
- SQL Server のインスタントリカバリバックアップのポリシーの構成
- コピーまたはクローキングしたスナップショットバックアップによる差分バックアップの影響
- SQL Server エージェントのグループ化バックアップについて (レガシー SQL Server ポリシー)

SQL Server 用の NetBackup Snapshot Client について

NetBackup for SQL Server には、スナップショットバックアップのサポートが含まれます。スナップショットテクノロジでは、SQL Server 仮想デバイスインターフェース (VDI: Virtual Device Interface) が静止するため、データベース操作が一時的に凍結します。その後エージェントは、コンポーネントファイルのスナップショットを作成することで、SQL Server オブジェクトのバックアップとリストアを実行できるようになります。特定の時点のデータが取得されます。取得されたスナップショットのバックアップを行っても、データベースの可

用性に影響を与えることはありません。これらのスナップショットは、ストレージユニットにバックアップされます。

別の Snapshot Client ライセンスによって、スナップショットバックアップの追加機能が提供されます。インスタントリカバリ用のスナップショットイメージを構成し、代替クライアントを構成してスナップショットバックアップを実行できます。

NetBackup for SQL Server では、次の NetBackup Snapshot Client 機能を使用できます。

スナップショットバックアップ	ある特定の時点の、クライアントボリュームの読み取り専用のディスクベースコピー。NetBackup では、クライアントのプライマリボリュームまたは元のボリュームから直接データをバックアップするのではなく、スナップショットからデータのバックアップが行われます。
インスタントリカバリ	バックアップをローカルディスクからのリカバリのために使用できるようにします。スナップショットは、テープまたは他のストレージに追加のバックアップコピーを行うためのソースにすることもできます。
オフホストバックアップ	バックアップ処理の負荷が別のバックアップエージェントに移行されます。その結果、バックアップがクライアントのコンピュータリソースに与える影響が減少します。バックアップエージェントによって、クライアントのデータがストレージデバイスに送信されます。

SQL Server に対する Snapshot Client サポートによってこれらの機能がすべて提供されても、すべてのスナップショット方式がサポートされるわけではありません。方式の選択方法については、『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。NetBackup for SQL Server で使用するために利用可能なスナップショット方法について詳しくは、NetBackup Snapshot Client の互換性リストを参照してください。

Snapshot Client を使用した SQL Server の操作

この項では、Snapshot Client を使用した SQL Server の操作について説明します。

バックアップ方式の選択について

標準または Snapshot Client のどちらのバックアップ方式を選択するかは、使用するポリシーによって異なります。Snapshot Client 用に構成されたポリシーを選択した場合、このポリシーに関する追加属性によって、Snapshot Client 機能が決定されます。使用する特定のスナップショット方式も決定されます。

スナップショットを使用する SQL Server の制限事項について

SQL Server による制限のため、特定のオブジェクトはスナップショットを介してバックアップできません。これらのオブジェクトには、データベース差分バックアップ、ファイルグループ差分バックアップおよびトランザクションログのバックアップがあります。Snapshot Client ポリシーを選択して、これらのオブジェクト形式の 1 つをバックアップする場合、NetBackup

では、ストリームベースのバックアップが実行されます。NetBackup では、このポリシー構成に指定されているストレージユニットが使用されます。ストレージユニットが指定されていない場合、サーバーのデフォルトのストレージユニットが使用されます。

NetBackup for SQL Server によるバックアップの対象

データベース管理者は、データベースおよびファイルグループなどの論理オブジェクトを排他的に使用します。ただし、アーカイブされるデータの内容に関して、ファイルベースのバックアップとストリームベースのバックアップ間の相違を把握しておくと便利です。ストリームベースのバックアップの場合、NetBackup によって、SQL Server が提供するデータストリームの内容が取得されます。ユーザーが複数のストリームを指定した場合、SQL Server によって複数のストリームが開かれ、各ストリームは、NetBackup によって個別のイメージとしてカタログ化されます。

ファイルベースのバックアップの場合、NetBackup によって、オブジェクトを構成するすべての物理ファイルで構成されるファイルリストが作成されます。このファイルリストは、スナップショットを作成する機能を持つ Snapshot Client に供給されます。複数のストリームを指定した場合、ファイルリストは複数のサブリストに分割されます。各サブリストは別々にバックアップされ、個別のイメージを構成します。ファイルベースのバックアップにストリームが複数指定されており、ストリームの数がコンポーネントファイルの数より多い場合は、ファイルベースのストリームの数がファイルの数より多くなることはありません。ストリームベースの SQL Server バックアップでは、SQL Server によって、常に、エンドユーザーが指定した数のストリームが作成されます。

SQL Server データベースのバックアップに使用されるファイルリストは、プライマリファイルグループを構成する物理ファイルで構成されます。ファイルリストは、セカンダリファイルグループおよびトランザクションログからも構成されます。通常、これらは、名前拡張子 `.mdf`、`.ndf` および `.ldf` によってそれぞれ識別されます。ファイルグループのバックアップ用のファイルリストは、このファイルグループに属する物理ファイルで構成されます。さらに、オブジェクトのバックアップ用のファイルリストは、単一の物理ファイルで構成されます。このファイルは、SQL Server ファイルオブジェクトにマッピングされるファイルです。

Snapshot Client と SQL Server のパフォーマンスに関する注意事項について

Snapshot Client を使用して物理ファイルをバックアップする場合、このバックアップは、エクステント全体で構成されます。このバックアップは、オブジェクトの実際のデータ内容だけがアーカイブされるストリームベースの SQL Server バックアップと対比されます。スナップショットテクノロジを使用して SQL Server をバックアップする場合、SQL Server の動的ファイル割り当てを使用すると便利です。この構成により、任意のコンポーネントファイルに広大な空き領域が含まれる可能性が少なくなります。

また、SQL Server ディスクの初期化に関する注意事項を確認します。

p.73 の「NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について」を参照してください。

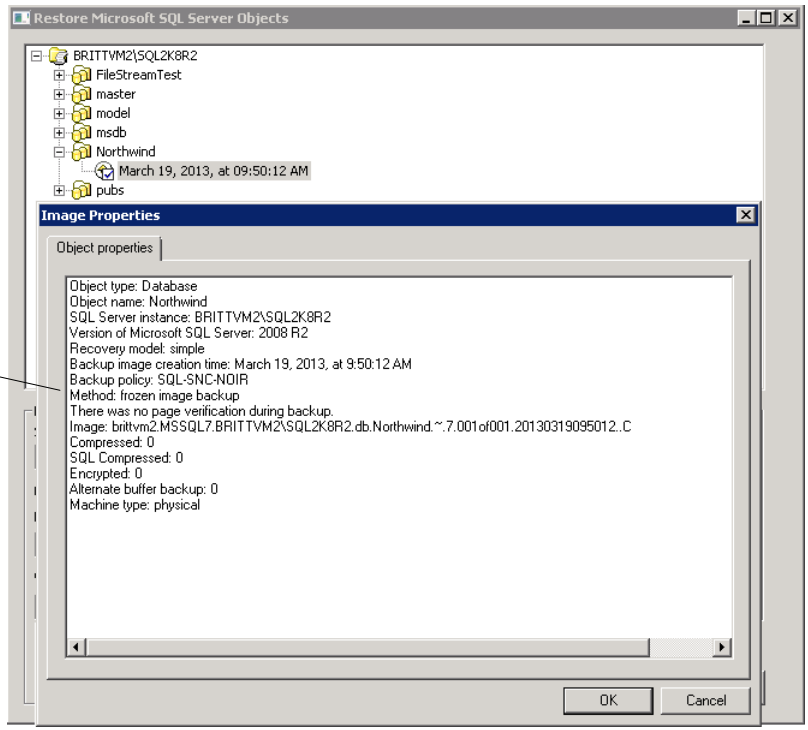
SQL Server スナップショットバックアップについて

SQL Server の Snapshot Client バックアップを実行する場合の特別な注意事項はありません。スナップショットバックアップは、バックアップオブジェクトがデータベース、ファイルグループまたはファイルであり、Snapshot Client に対してポリシーが選択されて構成されている場合に、実行されます。Snapshot Client バックアップで、差分バックアップまたはトランザクションログのバックアップを実行する場合、操作には選択したポリシーが使用されます。ただし、標準データベースバックアップは、構成したストレージユニットを使用して実行されます。

SQL Server スナップショットリストアについて

スナップショットから作成されたバックアップイメージは、標準バックアップイメージとともに表示されます。つまり、方式に関係なくすべてのバックアップ項目は、データベース階層の構成に基づいて時系列順に表示されます。また、バックアップ方式に応じた最適なリカバリ方法を決定するための重み付けは指定されません。SQL Server バックアップの作成時に使用したバックアップ方式とポリシーを確認するには、バックアップイメージを右クリックし、[プロパティ (Properties)]を選択します。

図 8-1 バックアップイメージのプロパティに表示されるバックアップ方式



バックアップが Frozen Image (スナップショット) 方式で作成されたことを示します。

SQL Server スナップショットおよびインスタントリカバリバックアップの構成要件

スナップショットバックアップ用に NetBackup for SQL Server を構成する前に、次の要件を確認します。

- 使用するスナップショット方式のハードウェア要件とソフトウェア要件について詳しくは、『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。
- NetBackup for SQL Server でサポートされるスナップショット方式およびプラットフォームについては、Veritas社のサポート Web サイトにアクセスしてください。
- SQL Server データベースおよびログファイルが格納されているボリュームを、SQL Server 専用とする必要があります。それ以外の形式のデータベース (Exchange など) は、他のボリュームに格納します。
- NetBackup Snapshot Client が正しくインストールおよび構成され、このオプションのライセンスが登録されている必要があります。詳しくは『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。
- 1 つのポリシーに対して構成可能なスナップショット方式は 1 つだけです。クライアントごとに異なるスナップショット方式を使用する場合は、クライアントのグループごとに個別のポリシーと使用するスナップショット方式を作成します。それからポリシーごとに方式を 1 つ選択します。

SQL Server のスナップショットポリシーの構成

この手順では、Snapshot Client ポリシーを構成する方法について説明します。必要に応じて、オフホストバックアップを実行できます。この項では、MS-SQL-Server ポリシー用のスナップショットバックアップに必要な構成についてのみ説明します。

p.44 の「SQL Server インテリジェントポリシーについて」を参照してください。

p.209 の「新しい SQL Server レガシーポリシーの追加」を参照してください。

SQL Server のスナップショットポリシーを構成する方法

1. SQL Server のレガシーポリシーの場合は、NetBackup MS SQL Client を使用してバックアップスクリプト(`.bch` ファイル)を作成します。
2. 構成するポリシーを開きます。
3. [属性 (Attributes)]タブをクリックします。
4. [ポリシー形式 (Policy type)]リストから、[MS-SQL-Server]を選択します。

5 ［ポリシーストレージ (Policy storage)］を選択します。

データベース差分バックアップ、ファイルグループ差分バックアップまたはトランザクションログのバックアップが、Snapshot Client を使用するポリシーの［バックアップ対象 (Backup Selections)］リストに指定されている場合、NetBackup によってストリームベースのバックアップが実行されます。選択したストレージユニットが使用されます。ストレージユニットが指定されていない場合、サーバーのデフォルトのストレージユニットが使用されます。

6 ［スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)］を選択します。

7 NetBackup によってスナップショット方式が選択されるようにするか、手動でスナップショット方式を選択するかを選択します。

次のいずれかを実行します。

- デフォルトでは、スナップショット方式は NetBackup によって選択されます。この設定を変更した後で、再度 NetBackup によって方式を自動的に選択するように指定する場合は、［Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)］をクリックします。その後、［スナップショット方式 (Snapshot method)］リストから、［auto］を選択します。
- 特定のスナップショット方式を使用する場合は、［Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)］をクリックします。［スナップショット方式 (Snapshot method)］リストから、このポリシーに使用する方式を選択します。

スナップショット方式の選択方法および自動スナップショット選択について詳しくは、『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。

8 (オプション) 代替クライアントを使用して、クライアントの処理負荷を低減する場合は、次の手順を実行します。

- 代替クライアントは、ディスクアレイを共有するクライアントである必要があります。この構成を行うには、追加構成が必要となる場合があります。『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。
- ［オフホストバックアップを実行する (Perform off-host backup)］を選択します。
- ［代替クライアントの使用 (Use alternate client)］をクリックして、代替クライアントの名前を入力します。

メモ: ［データムーバーの使用 (Use data mover)］オプションは、SQL Server ではサポートされていません。

---

9 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、SQL Server を保護する方法を選択します。

- （SQL Server インテリジェントポリシー）［インスタンスの保護 (Protect instances)］または［インスタンスグループの保護 (Protect instance groups)］を選択します。
  インスタンスオプションを選択した場合、個々のインスタンスまたはデータベースのいずれかを選択できます。
  p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。
  p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。
  p.59 の「バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加」を参照してください。
- （SQL Server レガシーポリシー）［バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)］を選択します。

10 (SQL Server インテリジェントポリシー) その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
- (省略可能) バックアップする特定のファイルグループまたはファイルを選択します。デフォルトでは、NetBackup はデータベース全体をバックアップします。
  p.57 の「バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加」を参照してください。
- (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
  p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

11 (SQL Server レガシーポリシー) その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。
- クライアントを追加します。
  p.215 の「ポリシーへのクライアントの追加」を参照してください。
- バックアップ対象リストにバッチファイルを追加します。
  p.216 の「バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 」を参照してください。

12 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

SQL Server のインスタントリカバリバックアップのポリシーの構成

次の手順では、インスタントリカバリ用のポリシーを構成する方法について説明します。必要に応じて、ディスクにだけバックアップすることができます。この項では、MS-SQL-Server ポリシー用のインスタントリカバリバックアップに必要な構成についてのみ説明します。

p.44 の「SQL Server インテリジェントポリシーについて」を参照してください。

p.209 の「新しい SQL Server レガシーポリシーの追加」を参照してください。

インスタントリカバリ用のポリシーを構成する方法

1 SQL Server レガシーポリシーの場合、NetBackup MS SQL Client インターフェースを使用してバックアップスクリプトを作成します。

2 構成するポリシーを開きます。

3 [属性 (Attributes)]タブをクリックします。

4 [ポリシー形式 (Policy type)]リストから、[MS-SQL-Server]を選択します。

5 [ポリシーストレージ (Policy storage)]を選択します。

[スケジュール (Schedules)]タブで[インスタントリカバリ (Instant Recovery)]オプションを選択した場合 (10 を参照)、ストレージユニットは使用されません。NetBackup によって、ディスクスナップショットだけが作成されます。

データベース差分バックアップ、ファイルグループ差分バックアップまたはトランザクションログのバックアップがポリシーに含まれている場合、NetBackup によってストリームベースのバックアップが実行されます。このバックアップでは、選択したストレージユニットを使用します。ストレージユニットが指定されていない場合、サーバーのデフォルトのストレージユニットが使用されます。

6 [スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]をクリックします。

7 NetBackup によってスナップショット方式が選択されるようにするか、手動でスナップショット方式を選択するかを選択します。

次のいずれかを実行します。

- デフォルトでは、スナップショット方式は NetBackup によって選択されます。この設定を変更した後で、再度 NetBackup によって方式を自動的に選択するように指定する場合は、[Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)]をクリックします。[Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)]ダイアログボックスで、[スナップショット方式 (Snapshot method)]リストから、[auto]を選択します。
- 特定のスナップショット方式を使用する場合は、[Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)]をクリックします。[Snapshot Client オプション (Snapshot Client Options)]ダイアログボックスで、[スナップショット方式 (Snapshot method)]リストからこのポリシーに使用する方式を選択します。

スナップショット方式の選択方法および自動スナップショット選択について詳しくは、『NetBackup Snapshot Client 管理者ガイド』を参照してください。

8 ［インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery)］を選択します。

これによって、スナップショットからインスタントリカバリを実行できるようにディスク上にスナップショットが保持されます。

スナップショットのみを作成するように選択しない場合は、ストレージへの通常のバックアップも実行されます (10 を参照)。

9 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、SQL Server を保護する方法を選択します。

- （SQL Server インテリジェントポリシー）［インスタンスの保護 (Protect instances)］または［インスタンスグループの保護 (Protect instance groups)］を選択します。インスタンスオプションを選択した場合、個々のインスタンスまたはデータベースのいずれかを選択できます。
  p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。
  p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。
  p.59 の「バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加」を参照してください。
- （SQL Server レガシーポリシー）［バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)］を選択します。

10 スケジュールを構成する場合、［スケジュール (Schedules)］タブをクリックします。

- (SQL Server インテリジェントポリシー) 完全バックアップスケジュールを構成します。
  p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
- (レガシーポリシー) アプリケーションおよび完全バックアップスケジュールを構成するための指示に従います。
  p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。

11 (オプション) ディスクイメージだけを作成する場合、完全バックアップスケジュール (インテリジェントポリシー) またはアプリケーションスケジュール (レガシーポリシー) を開いて、［インスタントリカバリ (Instant Recovery)］オプションを選択します。

次のオプションのいずれかを選択します。

- ［スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)］が選択された場合、NetBackup によりディスクのスナップショットが作成されます。また、NetBackup によって、ポリシーに指定したストレージユニットにクライアントのデータがバックアップされます。
- ［スナップショットのみ作成 (Snapshots only)］を選択すると、テープまたは他のストレージユニットにイメージがバックアップされません。NetBackup によって、

ディスクスナップショットだけが作成されます。このディスクスナップショットは、従来のバックアップの代替とは見なされないことに注意してください。

12 (SQL Server インテリジェントポリシー) その他のポリシー情報を次のように追加します。

- (省略可能) バックアップする特定のファイルグループまたはファイルを選択します。デフォルトでは、NetBackup はデータベース全体をバックアップします。
p.57 の「バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加」を参照してください。
- (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

13 (SQL Server レガシーポリシー) その他のポリシー情報を次のように追加します。

- クライアントを追加します。
p.215 の「ポリシーへのクライアントの追加」を参照してください。
- バックアップ対象リストにバッチファイルを追加します。
p.216 の「バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 」を参照してください。

14 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

コピーまたはクローキングしたスナップショットバックアップによる差分バックアップの影響

SQL Server は、正常終了したデータベースバックアップの履歴を msdb システムデータベースに記録します。SQL Server は、この履歴を使用して差分バックアップの基となるバックアップを決定します。具体的には、SQL Server は、msdb に最後に記録したデータベースの完全バックアップに対する累積としてデータベースの差分バックアップを作成します。この処理により、最後のデータベースの完全バックアップ後に障害が検出された場合に、クイックリカバリを実行することができます。

完全バックアップは毎日深夜に作成され、差分バックアップは、毎日午前 6 時、正午および午後 6 時に作成され、トランザクションログのバックアップは 2 時間おきに作成されるとします。火曜日の午後 7 時 50 分に障害が発生した場合、火曜日の午前 0 時のデータベースの完全バックアップ、火曜日の午後 6 時の差分バックアップ、午後 8 時のトランザクションログ (［TO 7:50 PM］を選択) の順にリストアして、指定した時点へのリカバリを実行できます。

ただし、インスタントリカバリバックアップを使用する場合、毎日の完全バックアップは、次の完全バックアップの作成後は保持できないことがあります。最後のバックアップより前の指定した時点へのリストアが必要な場合、差分バックアップは、存在していないバック

アップに基づくことになります。代替方法として、保持されていた最後の完全バックアップに基づいてリカバリします。トランザクションログイメージによる手順では長時間かかる場合があります。

この問題を解決するため、NetBackup では、msdb に記録されない SQL Server Snapshot Client バックアップを作成できます。これらのバックアップを作成するには、コピーのみバックアップ機能を使用します。この機能では、バックアップをアウトオブバンドとして帯域外で作成できます。

コピーのみバックアップを使用したサンプルバックアップスケジュール

コピーのみバックアップを使用したリカバリの実行による動作を理解するため、次の特性を備えたバックアップスケジュールの例について説明します。

- トランザクションログが頻繁に (たとえば 2 時間ごとに) バックアップされます。
- 完全バックアップが、数日に 1 回、セカンダリテープストレージに保存されます。
- データベースの差分バックアップが、毎日数回作成されます。
- インスタントリカバリバックアップが、毎日数回作成され、次のインスタントリカバリバックアップが作成されると期限切れになります。このバックアップはコピーのみとして作成されます。

表 8-1 に、このスケジュールからの抜粋を示します。

表 8-1　コピーのみバックアップを使用したサンプルバックアップスケジュール

時間 (Time)	セカンダリストレージに保存される完全バックアップ	差分バックアップ	PFI コピーのみ	トランザクションログのバックアップ
1 日目				
12:00 時	X			X
2:00 時				X
4:00 時		X		X
6:00 時			X	X
8:00 時				X
午前 10 時		X		X
正午			X	X
午後 2 時				X

時間 (Time)	セカンダリストレージに保存される完全バックアップ	差分バックアップ	PFI コピーのみ	トランザクションログのバックアップ
午後 4 時		X		X
午後 6 時			X	X
午後 8 時				X
午後 10 時		X		X
2 日目				
12:00 時			X	X
2:00 時				X

このスケジュールでは、完全バックアップは 6 時間おきに実行されます。障害が発生し、すぐに検出された場合、最後の完全バックアップをリストアできます。その場合、平均 3 時間のトランザクションログを再生することによって、リカバリを実行できます。ただし、次の完全バックアップまで障害が検出されない場合、利用可能な完全バックアップはありません。1 日目の午前 12:00 以降、使用可能ではありません。インスタントリカバリバックアップはコピーのみです。ただし、コピーのみではない最後の完全バックアップに対して、各差分バックアップが累積されます。

この例で、1 日目の午後 11 時 30 分にエラーが発生したとします。しかし、このエラーは、午前 0 時の完全バックアップの実行後、2 日目の午前 0 時 30 分まで検出されません。午後 6:00 以降、完全バックアップは存在しません。1 日目の午後 12:00 に作成されたバックアップからリカバリを始める必要があります。ただし、それ以降は完全バックアップのすべてがコピーのみであったため、午後 10:00 からの差分バックアップはそのバックアップに関して累積されています。リカバリシーケンスは、1 日目の午前 0 時のバックアップのリストア、午後 10 時の差分バックアップのリストア、1 時間半のトランザクションログバックアップのリストアの順に行われます。

コピーのみ属性はスナップショットバックアップイメージのプロパティに表示されます。差分バックアップは、自動的に適切な完全バックアップと関連付けられます。SQL エージェントによって、これらのバックアップは、データベースの完全リストアにリカバリセットを選択したとき認識されます。

コピーのみのバックアップの作成 (レガシー SQL Server ポリシー)

どのバックアップでもコピーのみとして作成できます。インスタントリカバリバックアップはコピーのみとして自動的に作成されます。レガシー SQL Server ポリシーの場合は、バックアップバッチファイルの `COPYONLY TRUE` を設定します。SQL Server インテリジェント

ポリシーの場合は、[Microsoft SQL Server]タブの[コピーのみバックアップ (Copy-only backup)]を有効にします。

p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

コピーのみバックアップを作成する方法

1. テキストエディタで既存のバッチファイルを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。

```
COPYONLY TRUE
```

3. バッチファイルを保存します。

コピーのみではないインスタントリカバリバックアップの作成(レガシー SQL Server ポリシー)

インスタントリカバリバックアップの場合、NetBackup によってバックアップイメージがコピーのみバックアップとして自動的に作成されます。バックアップをコピーのみバックアップとして作成しないようにすることもできます。

コピーのみではないインスタントリカバリバックアップを作成する方法

1. テキストエディタで既存のバッチファイルを開きます。
2. 次のコマンドを入力します。

```
COPYONLY FALSE
```

3. バッチファイルを保存します。

SQL Server エージェントのグループ化バックアップについて (レガシー SQL Server ポリシー)

メモ: この機能は、レガシー SQL Server バックアップポリシーを使用する場合にのみ利用可能です。

SQL Server エージェントには、複数のデータベースを一緒に静止して分離し、単一のスナップショットを形成する機能が装備されています。この方式によって、データベースが単一のボリュームにある場合、システムリソースの使用が最小限になります。これは、構成要素ファイルを集約することによって、データベースごとに 1 つのスナップショットを使用する代わりに、1 つのスナップショットボリュームが使用されるためです。Snapshot Client バックアップのデータベースの集約機能を、バックアップのグループ化といいます。

データベースがグループでバックアップされると、すべてのデータベースが同時に静止します。すべてのデータベースの構成要素ファイルが同じバックアップ ID で単一のストレージイメージにバックアップされます。つまり、グループのすべてのデータベースバックアップをエクスポートするために、「インポートとコピー」の手順で 1 個のイメージのみが使用されます。

グループ化バックアップの要件

グループ化バックアップを実行するには、一定の要件を満たしている必要があります。次の要件のいずれかが満たされていない場合、標準バックアップが実行されます。

- すべてのバックアップ操作が、完全バックアップである必要があります。差分バックアップはサポートされません。
- マスターデータベースをグループ化バックアップに含めることはできません。
- グループ内の各バックアップ操作に、同じポリシーを指定する必要があります。
- グループ内の各バックアップ操作に、同じ NetBackup サーバーを指定する必要があります。

最も簡単にグループ化バックアップを使用するには、[Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスを使用してデータベースを複数選択します。前述の条件が適用される場合、選択したデータベースは、グループとしてバックアップされます。

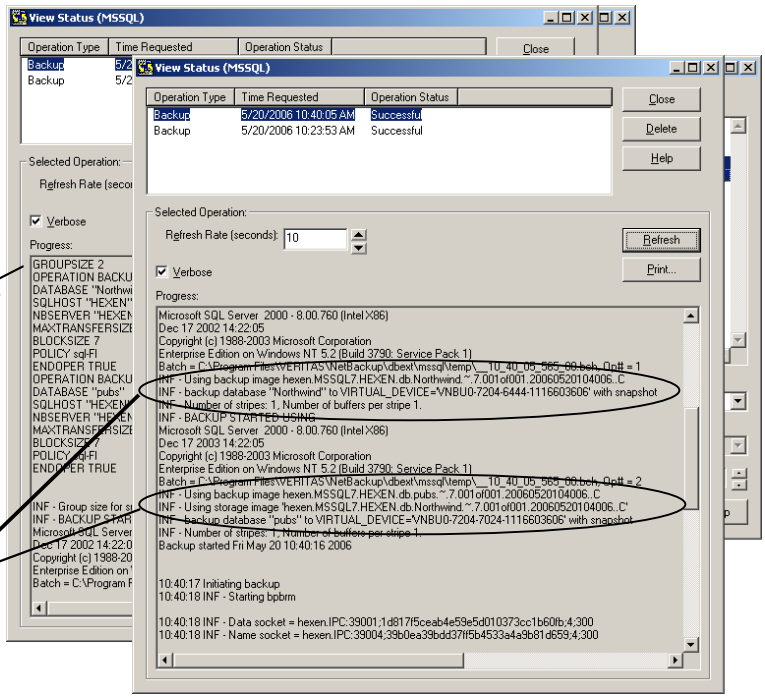
グループ化バックアップの進捗の表示

進捗レポートから、グループ化バックアップが実行されていることを確認できます。

図 8-2を参照してください。

キーワード GROUPSIZE が、バッチファイルの開始時に表示されます。このキーワードは、NetBackup でグループ化が使用され、選択した SQL Server データベースがバックアップされることを示します。適切な条件が適用されている場合、すべての操作がデータベースの完全バックアップになります。その場合、すべてのデータベースがグループとしてスナップショットがとられ、バックアップされます。この処理の場合、進捗ログには、バックアップイメージ名およびグループ内の各データベースのストレージイメージ名が表示されます。

図 8-2　グループ化バックアップ操作の進捗レポート



グループとしてバックアップされる一連のデータベースが示されます。

バックアップイメージ名およびストレージイメージ名がグループ化バックアップに示されます。

グループ化バックアップされたデータベースのリストア

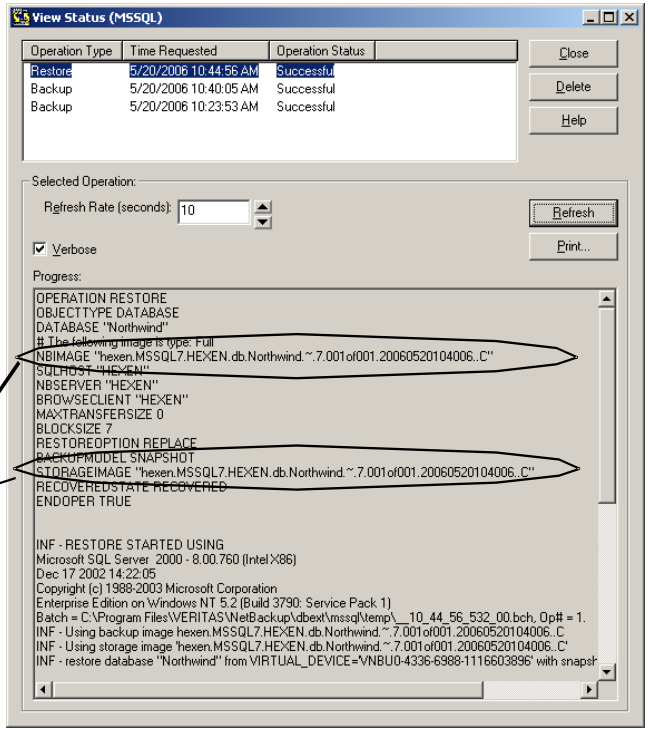
グループ化バックアップされたデータベースは、他のデータベースと同じようにリストアできます。

p.88 の「SQL Server データベースのバックアップのリストア」を参照してください。

リストア操作を開始する場合、バッチファイルによって、ストレージイメージ名とバックアップイメージ名が指定されることに注意してください。

p.133 の 図 8-3 を参照してください。

図 **8-3** リストア操作の進捗レポートに表示されるバッチファイル



グループ化バックアップの
リストア時に、ストレージ
イメージ名およびバックアップ
イメージ名が表示されます。

9

高可用性 (HA) 環境での SQL Server の保護

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server の高可用性 (HA) 環境について
- SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について
- クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server インテリジェントポリシー)
- クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server レガシーポリシー)
- 仮想 SQL Server インスタンスのリストアの実行
- NetBackup for SQL Server のデータベースミラーリング機能について
- データベースログ配布をサポートするための NetBackup の構成
- ログ配布が設定された環境での SQL Server のバックアップ

SQL Server の高可用性 (HA) 環境について

SQL Server インテリジェントポリシーは、SQL Server HA 環境の SQL Server クラスタとログ配布をサポートします。ログ配布の通告は、SQL Server レガシーポリシーの通告と同じです。

SQL Server レガシーポリシーは、SQL Server HA 環境の AlwaysOn 可用性グループ™、SQL Server クラスタ、データベースミラーリング、ログ配布をサポートします。

これらの HA ソリューションのそれぞれについての詳細な説明は、SQL Server Books Online を参照してください。各ソリューションは代替 SQL Server インストール上で選択されたデータベースの 1 つ以上のコピーを同期させます。手動または自動フェールオー

バーにより、ミッションクリティカルなデータベースアプリケーションによる継続的なアクセスを実現しています。

p.135 の「SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について」を参照してください。

p.154 の「クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server インテリジェントポリシー) 」を参照してください。

p.156 の「クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。

p.157 の「NetBackup for SQL Server のデータベースミラーリング機能について」を参照してください。

p.161 の「データベースログ配布をサポートするための NetBackup の構成」を参照してください。

SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について

NetBackup for SQL Server は SQL Server AlwaysOn 可用性グループデータベースのバックアップとリストアをサポートします。サポートされるバージョンと環境については、『アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リスト』を参照してください。

可用性グループのバックアップポリシーを構成して実行する場合は次の点に注意してください。

- NetBackup はレガシーバックアップポリシー ([バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)]オプションを設定) による AG のバックアップをサポートします。インテリジェントポリシーは現時点では AG バックアップをサポートしません。
- 次の方法で AG 環境を保護できます。
  - 優先レプリカを保護するポリシーの使用
    p.136 の「SQL Server 可用性グループの優先レプリカの保護について (レガシーバックアップポリシー)」を参照してください。
  - AG 内の特定のノードを保護するポリシーの使用
    p.142 の「SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について 」を参照してください。
- p.146 の「可用性グループが NetBackup ドメインをクロスするときの SQL Server バックアップの構成」を参照してください。
  p.142 の「SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について 」を参照してください。

- NetBackup は複数 NIC 環境の AG のバックアップをサポートします。詳しくは、次の項を参照してください。
  p.180 の「複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について」を参照してください。
- AG のバックアップイメージのタイムスタンプは、協定世界時 (UTC) を反映します。

可用性グループのバックアップの制限事項

可用性グループ (AG) のバックアップには次の制限事項があります。

- NetBackup は、AG データベースの場合、次の種類のバックアップをサポートしません。
  - ファイルグループまたはファイルのスナップショットバックアップ
  - インスタントリカバリバックアップ
  - VMware バックアップ
  - 読み取り可能でないセカンダリレプリカのバックアップ
    レプリカへのユーザー接続を許可した場合は、NetBackup はそのレプリカのデータベースのみをバックアップできます。
    セカンダリレプリカが優先レプリカである場合にそれが読み取り不可である場合は、バックアップが失敗します。セカンダリレプリカが優先レプリカでない場合は、NetBackup はそのレプリカのバックアップを省略します。

SQL Server ではセカンダリレプリカで次の種類のバックアップをサポートしていません。

- 完全バックアップ
  セカンダリレプリカで完全バックアップが実行される場合、NetBackup は完全バックアップをコピーのみのバックアップに変換します。
- 差分バックアップ
  この種類のバックアップは失敗します。
- コピーのみのトランザクションログのバックアップ
  この種類のバックアップは失敗します。

SQL Server 可用性グループの優先レプリカの保護について (レガシーバックアップポリシー)

この項では、SQL Server の可用性グループ (AG) の優先レプリカを保護する方法について説明します。

優先レプリカを保護するように NetBackup ポリシーを構成する場合は、次の点に注意してください。

- 作成したバックアップバッチファイルで、PREFERREDREPLICA TRUE キーワードを使って SQL Server のバックアップ使用設定を優先します。これらの使用設定には、優先レプリカ、バックアップの優先度、除外されたレプリカが含まれます。バッチファイルの各バックアップ操作にこのキーワードを含めます。
- NetBackup では、SQL Server が指定しているとおり、優先レプリカがバックアップされます。バックアップポリシーに［クライアント (Clients)］リストの AG の各ノードが含まれている場合は、NetBackup は AG 環境の完全保護のみを実行できます。さらに、［バックアップ対象 (Backup Selections)］リストのすべてのバッチファイルがすべての AG ノードで存在する必要があります。
- AG に関するサポートと制限事項の情報を確認します。
p.135 の「SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について」を参照してください。

メモ: SQL Server 可用性グループを作成した後に、次の構成手順を実行します。

表 9-1 SQL Server 可用性グループの優先レプリカの保護について

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の SQL Server 構成が存在することを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。
手順 2	可用性グループの各ノードで、NetBackup クライアントをインストールします。	p.21 の「NetBackup サーバーおよびクライアントの要件」を参照してください。
手順 3	可用性グループの各ノードで、NetBackup サービスを構成します。	p.194 の「SQL Server のバックアップとリストアのための NetBackup サービスの設定」を参照してください。
手順 4	分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定します。	AG の各ノードに Windows Server フェールオーバークラスタ (WSFC) 名をマッピングします。FCI を備えている AG では、その他のマッピングを設定する必要があります。 マスターサーバーの［分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)］ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。 p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。
手順 5	環境内でホストの自動検出マッピングを確認します。	NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの［ホスト管理 (Host Management)］プロパティで、この設定を実行します。 p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 6	実行する各バックアップ形式のポリシーを作成します。	p.138 の「SQL Server 可用性グループの優先レプリカの自動バックアップポリシーの設定 (レガシー SQL Server ポリシー)」を参照してください。
手順 7	可用性グループの各ノードで、実行するバックアップの各形式のバッチファイルを作成します。	p.139 の「優先レプリカを保護するポリシーのバッチファイルの作成」を参照してください。 p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。
手順 8	作成したポリシーにバッチファイルを追加します。	p.141 の「優先レプリカを保護するポリシーへのバッチファイルの追加」を参照してください。

SQL Server 可用性グループの優先レプリカの自動バックアップポリシーの設定 (レガシー SQL Server ポリシー)

この項では、SQL Server 可用性グループ(AG)の優先レプリカの自動(スケジュール)バックアップを作成する方法について説明します。実行する各バックアップ形式のポリシーを作成します。たとえば、

ポリシー A　スケジュール: 完全バックアップ、毎週実行
バックアップ対象: 完全バックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A、ノード B、ノード C

ポリシー B　スケジュール: 完全バックアップ、毎日実行
バックアップ対象: 完全差分バックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A、ノード B、ノード C

ポリシー C　スケジュール: 完全バックアップ、RTO と RPO ごとの実行
バックアップ対象: トランザクションログのバックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A、ノード B、ノード C

SQL Server 可用性グループの優先レプリカの自動バックアップポリシーを構成する方法

1. マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。
2. NetBackup 管理コンソールを開きます。
3. サイトに複数のマスターサーバーが存在する場合は、ポリシーを追加するマスターサーバーを選択します。
4. [処理 (Actions)]>[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]を選択します。

5 ［新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)］ダイアログボックスの［ポリシー名 (Policy name)］ボックスに、新しいポリシーの一意の名前を入力します。

6 ［OK］をクリックします。

7 ［属性 (Attributes)］タブで、次のように構成します。

- ［MS-SQL-Server］のポリシー形式を選択します。
- ストレージユニットを指定します。

p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。

8 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)］を選択します。

タブ名が［クライアント (Clients)］に変わると、［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、スクリプトを指定したり参照したりできるようになります。

9 ［スケジュール (Schedules)］タブで、［完全バックアップ (Full Backup)］スケジュールを追加します。

NetBackup では、Default-Application-Backup というスケジュールも作成されます。このスケジュールを使って、ポリシーの保持レベルを設定します。詳しくは『NetBackup 管理者ガイド』を参照してください。

p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。

10 ［クライアント (Clients)］タブで、可用性グループの各ノードの名前を追加します。

各ノードの NetBackup のクライアント名を使います。レプリカがフェールオーバークラスタインスタンス (FCI) でホストされる場合、仮想クラスタのインスタンス名を使用します。

11 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

12 実行するバックアップの各形式 (完全、完全差分、トランザクションログ) のポリシーを作成するには、この手順の 4 から 11 を繰り返します。

バックアップの各形式で別のポリシーが必要です。

13 AG の各ノードで、各ポリシーを使って実行するバックアップの各形式のバッチファイルを作成します。

p.139 の「優先レプリカを保護するポリシーのバッチファイルの作成」を参照してください。

優先レプリカを保護するポリシーのバッチファイルの作成

この項では、可用性グループ（AG）を保護するバックアップポリシーのバッチファイルを作成する方法について説明します。これらのバッチファイルでは、NetBackup で SQL Server の優先レプリカを保護するために PREFERREDREPLICA キーワードも使います。

AG のバッチファイルを作成するには、各ノードに個別にログオンする必要があります。次に、NetBackup MS SQL Client を使って各ノードでバッチファイルを作成します。

優先レプリカを保護するポリシーのバッチファイルを作成する方法

1. この手順は、実行するバックアップの各タイプに対して個別のポリシーがすでに作成されていることを想定しています。

   p.138 の「SQL Server 可用性グループの優先レプリカの自動バックアップポリシーの設定 (レガシー SQL Server ポリシー)」を参照してください。

2. AG の各ノードでこの手順の手順 3 から 14 までを実行します。

   各ノードに個別にログオンして、そのノードからバッチファイルを作成する必要があります。そうすることで、各ノードの正しい設定がバッチファイルに適用されます。あるノードでバッチファイルを作成して AG の別のノードにそのバッチファイルをコピーすると、バックアップが失敗する場合があります。

3. AG のノードのいずれかにログオンします。
4. NetBackup MS SQL Client を起動します。
5. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。
6. [インスタンス (Instance)]ドロップダウンリストで、AG をホストするインスタンスを選択します。
7. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。
8. 次のいずれかの方法で、バックアップするオブジェクトを選択します。
   - 1 つ以上のデータベース、ファイルグループまたはファイルを選択します。
   - システムデータベース(`DATABASE $ALL`)を含むすべてのデータベースをバックアップするには、インスタンスを選択します。[バックアップ (Back up)]グループから、[すべて (All)]を選択します。
9. [バックアップ形式 (Type of Backup)]とそのほかの設定を選択します。
10. [NetBackup ポリシー (NetBackup Policy)]フィールドに、作成した MS-SQL Server ポリシーの名前を入力します。
11. [バックアップスクリプト (Backup script)]グループから、[保存する (Save)]を選択します。
12. [バックアップ (Backup)]をクリックし、バッチファイルを開きます。
13. バッチファイルの各操作に対して、キーワード `PREFERREDREPLICA TRUE` を追加します。

    このキーワードは、AG のすべてのノードではなく、優先レプリカでのみバックアップを実行するように NetBackup に指令します。

14 バッチファイルを保存して閉じます。

バッチファイルの場所をメモします。各ノードのバッチファイルを同じファイル場所に保存します。この方法では、バッチファイルのファイル場所を 1 つの[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストに入力する必要があります。

15 実行するその他のバックアップのタイプに対して手順 7 から 14 までを繰り返します。たとえば、完全、完全差分、トランザクションログです。

バッチファイルを作成する方法について、より詳細な情報を参照できます。

p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。

16 この手順(手順 3 から 15まで)を繰り返して、その他の AG ノードのバッチファイルを作成します。

17 AG のすべてのノードのバッチファイルを作成したら、以前作成したポリシーにそれらのバッチファイルを追加します。

p.141 の「優先レプリカを保護するポリシーへのバッチファイルの追加」を参照してください。

優先レプリカを保護するポリシーへのバッチファイルの追加

この項では、可用性グループ (AG) の優先レプリカを保護するバックアップポリシーに、作成したバッチファイルを追加する方法を説明します。

優先レプリカを保護するポリシーへのバッチファイルを追加する方法

1 この手順はすでにポリシーを作成済みで、AG の各ノードでバッチファイルを作成済みであることを想定しています。

p.138 の「SQL Server 可用性グループの優先レプリカの自動バックアップポリシーの設定 (レガシー SQL Server ポリシー)」を参照してください。

p.141 の「優先レプリカを保護するポリシーへのバッチファイルの追加」を参照してください。

2 作成したポリシーを開きます。

3 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、各 AG ノードの作成したバッチファイルを追加します。

ポリシーに 1 つのみのバックアップ形式のバッチファイルを含めます。(たとえば、完全、完全差分、またはトランザクションログ)

4 [OK]をクリックして、ポリシーを保存します。

5 作成した各ポリシーで、この手順を繰り返します。

SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について

このトピックでは、SQL Server レガシーポリシーを使って SQL Server 可用性グループ (AG) の特定のノードを保護する方法について説明します。

可用性グループの特定のノードを保護するように NetBackup ポリシーを構成するときは次の点に注意してください。

- このバックアップシナリオでは、バッチファイルで PREFERREDREPLICA TRUE キーワードを使わないでください。バックアップポリシーが優先レプリカをホストするノードを含まない場合は、バックアップが省略されます。
- AG に関するサポートと制限事項の情報を確認します。
p.135 の「SQL Server 可用性グループを保護するための NetBackup の使用について」を参照してください。

メモ: SQL Server 可用性グループを作成した後に、次の構成手順を実行します。

表 9-2 SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の SQL Server 構成が存在することを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。
手順 2	保護するノードで、NetBackup クライアントをインストールします。	p.21 の「NetBackup サーバーおよびクライアントの要件」を参照してください。
手順 3	保護するノードで、NetBackup サービスを構成します。	p.194 の「SQL Server のバックアップとリストアのための NetBackup サービスの設定」を参照してください。
手順 4	実行する各バックアップ形式のポリシーを作成します。	p.143 の「SQL サーバーの可用性グループの特定のノードでの自動バックアップポリシーの構成」を参照してください。
手順 5	保護するノードで、実行するバックアップの各形式のバッチファイルを作成します。	p.144 の「可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの作成」を参照してください。 p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。
手順 6	作成したポリシーにバッチファイルを追加します。	p.146 の「可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの追加」を参照してください。

SQL サーバーの可用性グループの特定のノードでの自動バックアップポリシーの構成

この項では、SQL Server 可用性グループ（AG）の特定のノードでの自動（スケジュール）バックアップのバックアップポリシーを作成する方法について説明します。実行する各バックアップ形式のポリシーを作成します。たとえば、

ポリシー A　スケジュール: 完全バックアップ、毎週実行
バックアップ対象: 完全バックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A

ポリシー B　スケジュール: 完全バックアップ、毎日実行
バックアップ対象: 完全差分バックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A

ポリシー C　スケジュール: 完全バックアップ、RTO と RPO ごとの実行
バックアップ対象: トランザクションログのバックアップのバッチファイル
クライアント: ノード A

SQL Server 可用性グループの特定のノードの自動バックアップポリシーを構成する方法

1. マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。
2. NetBackup 管理コンソールを開きます。
3. サイトに複数のマスターサーバーが存在する場合は、ポリシーを追加するマスターサーバーを選択します。
4. ［処理 (Actions)］>［新規 (New)］>［ポリシー (Policy)］を選択します。
5. ［新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)］ダイアログボックスの［ポリシー名 (Policy name)］ボックスに、新しいポリシーの一意の名前を入力します。
6. ［OK］をクリックします。
7. ［属性 (Attributes)］タブで、次のように構成します。
   - ［MS-SQL-Server］のポリシー形式を選択します。
   - ストレージユニットを指定します。

   p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。

8 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)］を選択します。

タブ名が［クライアント (Clients)］に変わると、［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、スクリプトを指定したり参照したりできるようになります。

9 ［スケジュール (Schedules)］タブで、［完全バックアップ (Full Backup)］スケジュールを追加します。

NetBackup では、Default-Application-Backup というスケジュールも作成されます。このスケジュールを使って、ポリシーの保持レベルを設定します。詳しくは『NetBackup 管理者ガイド』を参照してください。

p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。

10 ［クライアント (Clients)］タブで、保護対象のレプリカをホストする AG のノードの名前を追加します。

ノードの NetBackup のクライアント名を使います。レプリカがフェールオーバークラスタインスタンス (FCI) でホストされる場合、仮想クラスタのインスタンス名を使用します。

11 ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。

12 実行するバックアップの各形式 (完全、完全差分、トランザクションログ) のポリシーを作成するには、この手順の 4 から 11 を繰り返します。

バックアップの各形式で別のポリシーが必要です。

13 各ポリシーで実行するバックアップ形式のバッチファイルを作成します。

p.144 の「可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの作成」を参照してください。

可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの作成

この項では、可用性グループ (AG) の特定のノードを保護するバックアップポリシーのためのバッチファイルを作成する方法について説明します。

特定の可用性グループのノードを保護するポリシーのためのバッチファイルを作成するには

1 この手順では、すでにポリシーを作成済みであることを想定しています。

p.143 の「SQL サーバーの可用性グループの特定のノードでの自動バックアップポリシーの構成」を参照してください。

2 保護対象のレプリカをホストする AG ノードにログオンします。

3 NetBackup MS SQL Client を起動します。

4 [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。

5 [インスタンス (Instance)]ドロップダウンリストで、AG をホストするインスタンスを選択します。

6 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。

7 次のいずれかの方法で、バックアップするオブジェクトを選択します。

- 1 つ以上のデータベース、ファイルグループまたはファイルを選択します。
- システムデータベース(`DATABASE $ALL`)を含むすべてのデータベースをバックアップするには、インスタンスを選択します。[バックアップ (Back up)]グループから、[すべて (All)]を選択します。

8 [バックアップ形式 (Type of Backup)]とそのほかの設定を選択します。

9 [NetBackup ポリシー (NetBackup Policy)]フィールドに、作成した MS-SQL Server ポリシーの名前を入力します。

10 [バックアップスクリプト (Backup script)]グループから、[保存する (Save)]を選択します。

11 [バックアップ (Backup)]をクリックし、バッチファイルを保存します。

バッチファイルで `PREFERREDREPLICA TRUE` キーワードを使わないでください。バックアップポリシーが優先レプリカをホストするノードを含まない場合は、バックアップが省略されます。

12 実行する他のどのバックアップ形式でも手順 6 から 11 までを繰り返します。たとえば、完全、完全差分、トランザクションログです。

バッチファイルを作成する方法について、より詳細な情報を参照できます。

p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。

13 すべてのバッチファイルを作成したら、それらのファイルを以前作成したポリシーに追加します。

p.146 の「可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの追加」を参照してください。

可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの追加

可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルを追加する方法

1. この手順はすでにポリシーを作成済みで、AG の特定ノードでバッチファイルを作成済みであることを想定しています。

   p.143 の「SQL サーバーの可用性グループの特定のノードでの自動バックアップポリシーの構成」を参照してください。

   p.144 の「可用性グループの特定のノードを保護するポリシーのためのバッチファイルの作成」を参照してください。

2. 作成したポリシーを開きます。
3. ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、作成したバッチファイルを追加します。

   ポリシーに 1 つのみのバックアップ形式のバッチファイルを含めます。（たとえば、完全、完全差分、またはトランザクションログ）

4. ［OK］をクリックして、ポリシーを保存します。
5. 作成した各ポリシーで、この手順を繰り返します。

可用性グループが NetBackup ドメインをクロスするときの SQL Server バックアップの構成

この手順では、可用性グループ（AG）が NetBackup ドメインをクロスするときに SQL Server 可用性グループをバックアップするように NetBackup を構成する方法について説明します。AG の単一のノードをバックアップするように NetBackup を構成します。NetBackup はその他の AG ノードを保護する別の NetBackup ドメインにそのバックアップをレプリケートします。

この手順では次を想定しています。

- AG の 1 つ以上のノードが異なる NetBackup ドメインに存在している。
- AG のノードを含む NetBackup のソースドメインとターゲットドメインで次のストレージが利用可能である。
  - OpenStorage の場合は、各ドメインに同じ種類のディスク装置。ディスク装置の種類は、NetBackup 自動イメージレプリケーション（A.I.R）に対応している必要があります。
  - NetBackup 重複排除の場合は、各ドメインに、メディアサーバー重複排除プールとして NetBackup が使うことのできるストレージ。

ストレージデバイス、A.I.R.、これらのコンポーネントの構成方法について詳しくは、p.149 の「追加のリソース」を参照してください。を参照してください。

可用性グループが NetBackup ドメインをクロスするときに SQL Server バックアップを構成する方法

1. AG ノードが存在する各ドメインで、NetBackup マスターサーバーをインストールして構成します。
2. 各ドメインで、必要なメディアサーバーをインストールして構成します。
3. 両方のドメインの信頼を確立します。対象 A.I.R. のマスターサーバー間で信頼関係を確立する方法については、『セキュリティおよび暗号化ガイド 』を参照してください。
4. バックアップを行う AG（または特定のレプリカ）のノードを選択します。

   このドメインのバックアップはソースバックアップとして動作し、このドメイン自体はソースドメインとして動作します。他の NetBackup ドメインはターゲットドメインとして動作し、レプリケーション操作のターゲットストレージをホストします。
5. 各ドメインで、ストレージサーバーを構成します。
   - ［ストレージサーバーの構成ウィザード (Storage Server Configuration Wizard)］を開くには、［メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)］>［ディスクストレージサーバーの構成 (Configure Disk Storage Servers)］を選択します。
   - ［ようこそ (Welcome)］パネルで、構成するディスクストレージの種類を選択します。
   - ディスクプールやストレージユニットを作成する場合もこのウィザードを使います。
6. ソースドメインのマスターサーバーで、NetBackup 管理コンソールを開きます。
   - ターゲットストレージサーバーを追加します。

     この構成を開くには、［メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)］>［クレデンシャル (Credentials)］>［ストレージサーバー (Storage Server)］を選択します。ストレージサーバーを編集して、ターゲットサーバーを［レプリケーション (Replication)］タブに追加します。
   - ターゲットリモートマスターサーバーを信頼できるマスターサーバーのリストに追加します。

     マスターサーバーのホストプロパティで、［サーバー (Servers)］ノードをクリックします。［信頼できるマスターサーバー (Trusted Master Servers)］タブで、ターゲットリモートマスターサーバーを追加します。

7 各ターゲットドメイン内のマスターサーバーで、ストレージライフサイクルポリシー（SLP）*IMPORT_AG* を作成して、ソースドメインからバックアップイメージをインポートします。

［インポート (Import)］操作で、次のプロパティを指定する必要があります。

操作 (Operation)	インポート
宛先ストレージ (Destination storage)	使うストレージユニットを選択します。
保持形式 (Retention type)	ターゲットの保持 (Target Retention) この SLP の保持設定はバックアップポリシーの保持設定を上書きします。

8 ソースドメインのマスターサーバーで、*EXPORT_AG* という SLP を作成して、バックアップを実行し、そのバックアップをターゲットドメインにレプリケートします。

［バックアップ (Backup)］操作では、次のプロパティを指定する必要があります。

操作 (Operation)	バックアップ
宛先ストレージ (Destination storage)	使うストレージユニットを選択します。
保持形式 (Retention type)	固定 (Fixed) この SLP の保持設定はバックアップポリシーの保持設定を上書きします。

［レプリケーション (Replication)］操作では、次のプロパティを指定する必要があります。

操作 (Operation)	レプリケーション (Replication)
バックアップの送信先 (Send the backups to)	特定のマスターサーバー (A specific Master Server)
ターゲットマスターサーバー (Target master server)	ターゲットマスターサーバーを選択します。
ターゲットインポート SLP (Target import SLP)	手順 7 で作成した *IMPORT_AG* SLP を選択します。

9 各マスターサーバーについて、必要に応じてホストプロパティで SLP パラメータを編集します。

これらのパラメータを構成するには、[ホストプロパティ (Host Properties)] を展開して、[マスターサーバー (Master Servers)]を選択します。編集するマスターサーバーをダブルクリックします。[SLP パラメータ (SLP Parameters)]をクリックします。

10 ソースドメインのマスターサーバーで、特定の AG ノードをバックアップする MS-SQL-Server バックアップポリシーを作成します。

- [ポリシーストレージ (Policy storage)]の場合は、手順 8 で作成した *EXPORT_AG* SLP を選択します。
- AG の特定のノードのポリシーを作成するための指示に従ってください。
p.142 の「SQL Server 可用性グループの特定のノードの保護について」を参照してください。

追加のリソース

『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』

『NetBackup 重複排除ガイド』

『NetBackup OpenStorage Solutions ガイド』

http://www.netbackup.com/compatibility

SQL Server 可用性グループデータベースのプライマリとセカンダリレプリカへのリストア

状況によって、SQL Server 可用性グループ (AG) データベースをプライマリとセカンダリレプリカの両方にリストアしなければならない場合があります。そのような状況には、次の場合にデータベースをリストアすることも含まれます。

- ディザスタリカバリの後
- データベースの論理的な破損が発生した後
- AG のクローンまたはテスト環境へのリストア
- 過去のある時点へのリストア

SQL Server 可用性グループデータベースをプライマリとセカンダリレプリカにリストアする方法

1. 分散アプリケーションのリストアのマッピングをまだ設定していない場合は、設定します。

   AG の各ノードに Windows Server フェールオーバークラスタ (WSFC) 名をマッピングします。FCI を備えている AG では、その他のマッピングを設定する必要があります。マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。

   p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。

2. 環境内のホストの自動検出マッピングを確認していない場合は、確認します。

   NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。

   p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

3. プライマリレプリカをホストする AG ノードにログオンします。
4. SQL Server Management Studio を開いて、次のタスクを実行します。
   - データベースでデータの移動を停止します。
   - AG からデータベースを削除します。
5. データベースへのすべての接続を閉じます。
6. SQL Server からプライマリデータベースを削除します。
7. NetBackup MS SQL Client を起動します。
8. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。
9. [インスタンス (Instance)]リストで、AG をホストするインスタンスを選択します。
10. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。

    このプライマリデータベースのリストアは、セカンダリデータベースのリストアと並列して実行することをお勧めします。

11 ［バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)］ダイアログボックスの［ソースクライアント (Source Client)］で WSFC（Windows Server Failover Clustering）クラスタの完全修飾ドメイン名（FQDN）を選択または入力します。

クラスタ名は、Failover Cluster Manager またはバックアップのジョブの詳細で確認できます。

NetBackup には、可用性グループに含まれるデータベースが表示されます。バックアップ内の任意のシステムまたはユーザーデータベースをリストアするには、ノード名を使って参照とリストア操作を別個に実行します。

12 ［OK］をクリックします。

13 ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、最新の完全バックアップイメージとトランザクションログのバックアップを選択します。

14 ［REPLACE オプションを使用する (Use replace option)］を選択します。

15 ［リカバリ (Recovery)］リストから、[復旧する (Recovered)］を選択します。

16 ［リストア (Restore)］をクリックします。

17 リストアが完了したら、［最初のデータの同期をスキップ (Skip initial data synchronization)］オプションを使って、データベースを AG に追加します。

18 セカンダリレプリカをホストするノードにログオンします。

19 セカンダリレプリカのデータベースへのすべての接続を閉じます。

20 SQL Server からセカンダリデータベースを削除します。

21 NetBackup MS SQL Client を起動します。

22 ［ファイル (File)］>［SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)］を選択します。

23 ［インスタンス (Instance)］リストで、AG をホストするインスタンスを選択します。

24 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)］を選択します。

25 ［バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)］ダイアログボックスの［ソースクライアント (Source Client)］で WSFC（Windows Server Failover Clustering）クラスタの完全修飾ドメイン名（FQDN）を選択または入力します。

クラスタ名は、Failover Cluster Manager またはバックアップのジョブの詳細で確認できます。

NetBackup には、可用性グループに含まれるデータベースが表示されます。バックアップ内の任意のシステムデータベースまたはユーザーデータベースをリストアするには、ノード名を使って参照とリストア操作を別個に実行します。

26 ［OK］をクリックします。

27 ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、プライマリレプリカにリストアしたイメージと同じイメージを選択します。

28 ［リカバリ (Recovery)］リストから、[リカバリしない (Not recovered)］を選択します。

29 ［REPLACE オプションを使用する (Use replace option)］を選択します。

30 AG のノードが異なるデータベースファイルパスを使う場合は、セカンダリレプリカへのリストアを行うために移動テンプレートを作成する必要があります。［スクリプト (Scripting)］リストから［移動テンプレートの作成 (Create a move template)］を選択します。

p.93 の「SQL Server データベースの移動」を参照してください。

31 ［リストア (Restore)］をクリックします。

32 リストアが完了したら、データベースを AG に接続します。

33 AG の追加ノードに対して、手順 18 から手順 32 を繰り返します。

SQL Server 可用性グループのデータベースのセカンダリレプリカへのリストア

この手順では、セカンダリレプリカへの SQL Server 可用性グループ (AG) のデータベースをセカンダリレプリカにリストアする方法を説明します。セカンダリレプリカが長時間にわたり利用不能でプライマリと同期する必要がある場合はこの手順を行います。または、AG に新しいセカンダリレプリカを追加した後でこれらの手順を行うこともできます。

SQL Server 可用性グループのデータベースをセカンダリレプリカにリストアするには

1 分散アプリケーションのリストアのマッピングをまだ設定していない場合は、設定します。

AG の各ノードに Windows Server フェールオーバークラスタ (WSFC) 名をマッピングします。FCI を備えている AG では、その他のマッピングを設定する必要があります。

マスターサーバーの［分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)］ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。

p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。

2 環境内のホストの自動検出マッピングを確認していない場合は、確認します。

NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの［ホスト管理 (Host Management)］プロパティで、この設定を実行します。

p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

3 セカンダリレプリカをホストするノードにログオンします。

4 セカンダリレプリカのデータベースへのすべての接続を閉じます。

5 AG からセカンダリデータベースを削除します。

6 NetBackup MS SQL Client を起動します。

7 [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。

8 [インスタンス (Instance)]リストで、AG をホストするインスタンスを選択します。

9 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。

10 [バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)]ダイアログボックスの[ソースクライアント (Source Client)]で WSFC（Windows Server Failover Clustering）クラスタの完全修飾ドメイン名（FQDN）を選択または入力します。

クラスタ名は、Failover Cluster Manager またはバックアップのジョブの詳細で確認できます。

NetBackup には、可用性グループに含まれるデータベースが表示されます。バックアップ内の任意のシステムデータベースまたはユーザーデータベースをリストアするには、ノード名を使って参照とリストア操作を別個に実行します。

11 [OK]をクリックします。

12 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、最新の完全バックアップイメージとトランザクションログのバックアップを選択します。

13 [リカバリ (Recovery)]リストから、[リカバリしない (Not recovered)]を選択します。

14 [REPLACE オプションを使用する (Use replace option)]を選択します。

15 AG のノードが異なるデータベースファイルパスを使う場合は、セカンダリレプリカへのリストアを行うために移動テンプレートを作成する必要があります。[スクリプト (Scripting)]リストから[移動テンプレートの作成 (Create a move template)]を選択します。

p.93 の「SQL Server データベースの移動」を参照してください。

16 [リストア (Restore)]をクリックします。

17 リストアが完了したら、データベースを AG に接続します。

可用性グループが NetBackup ドメインをクロスしたときの可用性グループデータベースのリストア

別の NetBackup ドメインにある AG ノートによってバックアップされた可用性グループ（AG）データベースをリストアするには、最初に NetBackup で自動イメージレプリケーショ

ン(A.I.R.)を構成する必要があります。バックアップが完了して、ターゲットノードにレプリケートされている必要があります。バックアップがレプリケートされると、その他の AG データベースのリストアの実行と同じ方法でターゲットノードでリストアを実行できます。

メモ: ターゲット AG ノードへのレプリケーションは即座に発生しない場合があります。レプリケーションが発生するまでの時間は各マスターサーバーの設定によって異なります。

---

p.146 の「可用性グループが NetBackup ドメインをクロスするときの SQL Server バックアップの構成」を参照してください。

p.152 の「SQL Server 可用性グループのデータベースのセカンダリレプリカへのリストア」を参照してください。

p.149 の「SQL Server 可用性グループデータベースのプライマリとセカンダリレプリカへのリストア」を参照してください。

クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server インテリジェントポリシー)

この手順では、SQL Server インテリジェントポリシーで SQL Server クラスタインスタンスを保護する方法について説明します。仮想 SQL Server (VIRTUALSERVER) を作成したら次の手順を実行します。次の手順は、マスターサーバーで実行するか、またはマスターサーバー用に動作する NetBackup リモートクライアントコンソールで実行する必要があります。

SQL Server クラスタに複数の NIC を備えている場合は、別の手順に従う必要があります。

p.185 の「複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)」を参照してください。

クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップを設定するには (SQL Server インテリジェントポリシー)

1. NetBackup 管理コンソールを開きます。
2. ポリシーを作成します (例: VIRTSQLPOLICY)。
3. ［属性 (Attributes)］タブで、次のように構成します。
   - ［MS-SQL-Server］のポリシー形式を選択します。
   - ストレージユニットを指定します。仮想メディアサーバーを使用している場合は、その仮想メディアサーバーに属するストレージユニットを指定します。

4 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［インスタンスの保護 (Protect instances)］を選択します。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

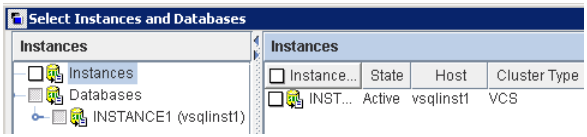
5 保護するインスタンスやデータベースを追加します。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。

p.59 の「バックアップポリシーへのインスタンスグループの追加」を参照してください。

クラスタインスタンスの場合、ホスト名は SQL Server クラスタの仮想名です。



6 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
- (省略可能) バックアップする特定のファイルグループまたはファイルを選択します。デフォルトでは、NetBackup はデータベース全体をバックアップします。
  p.57 の「バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加」を参照してください。
- (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
  p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

7 SQL Server クラスタの仮想名をクラスタ内の各ノードにマッピングします。

マスターサーバーの［分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)］ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。

p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。

8 環境内の SQL Server ホストに［マッピング済みのホスト名 (Mapped Host Names)］を設定します。

マスターサーバーの［ホスト管理 (Host Management)］で、このプロパティを設定します。

p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server レガシーポリシー)

この手順では、バッチファイルとクライアントを使うレガシーポリシーで SQL Server クラスタインスタンスを保護する方法について説明します。仮想 SQL Server (VIRTUALSERVER) を作成したら次の手順を実行します。次の手順は、マスターサーバーで実行するか、またはマスターサーバー用に動作する NetBackup リモートクライアントコンソールで実行する必要があります。

SQL Server クラスタに複数の NIC を備えている場合は、別の手順に従う必要があります。

p.186 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。

クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップを設定するには

1. NetBackup 管理コンソールを開きます。
2. ポリシーを作成します (例: VIRTSQLPOLICY)。
3. ［属性 (Attributes)］タブで、次のように構成します。
   - ［MS-SQL-Server］のポリシー形式を選択します。
   - ストレージユニットを指定します。仮想メディアサーバーを使用している場合は、その仮想メディアサーバーに属するストレージユニットを指定します。
4. ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)］を選択します。
5. ［スケジュール (Schedules)］タブで、自動バックアップのスケジュールを追加します。
6. ［クライアント (Clients)］タブで、仮想 SQL Server の名前 (VIRTUALSERVER) を追加します。
7. ［バックアップ対象 (Backup Selections)］タブで、1 つ以上のスクリプト名 (バッチファイル) を追加します。

8 SQL Server クラスタの仮想名をクラスタ内の各ノードにマッピングします。

マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。

p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。

9 環境内の SQL Server ホストに[マッピング済みのホスト名 (Mapped Host Names)]を設定します。

マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]で、このプロパティを設定します。

p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

仮想 SQL Server インスタンスのリストアの実行

この手順は、仮想 SQL Server インスタンスのリストアを実行する方法について説明します。

仮想 SQL Server インスタンス上でリストアを実行する方法

1 アクティブノードで NetBackup MS SQL Client を開きます。

2 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。

3 [バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)]ダイアログボックスで、[SQL ホスト (SQL Host)]リストから、SQL Server の仮想サーバー名 (VIRTUALSERVER) を選択します。

4 [OK]をクリックします。

5 [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで、バックアップイメージリストまたはトランザクションログイメージリストを選択します。

6 [OK]をクリックします。

NetBackup for SQL Server のデータベースミラーリング機能について

メモ: データベースミラーリングは、SQL Server インテリジェントポリシーではサポートされません。

データベースミラーリングは SQL Server データベースの可用性を高めるソフトウェアソリューションです。データベースミラーリングでは、同じ SQL Server データベースのコピーが含まれている 2 つのデータベースインスタンス (通常は異なるホスト上にある) を使用します。これらのデータベースは名前も内容も同一です。コピーにはプリンシパルおよびミラーがあります。ミラーは、トランザクションが行われるプリンシパルのホットスタンバイとして機能します。ミラーは、トランザクションログのポーティングによってプリンシパルと緊密に同期化されます。プリンシパルに障害が発生した場合は、すぐにミラーが利用可能になります。

データベースミラーリングのバックアップおよびリストア手順を設定するときには、これらの操作がプリンシパルデータベースでのみ利用可能であることに注意する必要があります。

データベースミラーリングについて詳しくは、SQL Server Books Online を参照してください。

データベースミラーリングをサポートするための NetBackup の設定

データベースミラーリングを NetBackup で使用するには、プリンシパルとミラーの両方を同じマスターサーバーのクライアントとして設定する必要があります。

データベースミラーリングをサポートするように NetBackup を設定する方法

1. 両方のデータベースが含まれるホストのサーバーリストで同じマスターサーバーを指定します。
2. プリンシパルをバックアップするために使用する任意のポリシーで、ミラーデータベースが含まれるホストを指定します。

   p.159 の「ミラー化されたパートナーの同時バックアップの実行」を参照してください。
3. マスターサーバーで、両方のミラーリングパートナーのリダイレクトされたリストアの権限を設定します。

   p.97 の「リダイレクトリストアの権限の構成」を参照してください。
4. (該当する場合) バックアップポリシー内のクライアントに対して完全修飾ドメイン名 (FQDN) を指定する場合、短いクライアント名のためのエイリアスを作成する必要があります。このエイリアスによって、バックアップイメージを正常に参照し、これをミラー化された環境にリストアできます。NetBackup は、`client1` などのクライアントホストの短い名前を使用して、ミラー化されたパートナーバックアップイメージを見つけようとします。ただし、この場合にバックアップイメージは FQDN (`client1.domain.com` など) を使用して格納されます。

   エイリアスは次のいずれかの方法で作成できます。

   - NetBackup クライアントで、次のタッチファイルを作成します。

     install_path¥dbext¥mssql¥ClientNameMapping.txt

     エントリ `<short name of client host> <FQDN of client host>` を追加します。次に例を示します。

```
client1 client1.domain.com
```

- NetBackup マスターサーバーで、bpclient コマンドを使ってエイリアスを作成します。

```
bpclient -client client_name -M master_server -add_alias alias_name
```

次に例を示します。

```
bpclient -client client1.domain.com -M master.domain.com -add_alias hpe013-vm02
```

-client 引数には FQDN を使う必要があります。

ミラー化されたパートナーの同時バックアップの実行

バックアップはプリンシパル上でのみ実行可能であるため、フェールオーバーによってスケジュールバックアップが失敗するのを回避する必要があります。両方のパートナーのバックアップが同時に開始され、ミラー上の操作が抑制されるように設定してください。

ミラーリングされたデータベースを復元するときは、現在プリンシパルの役割が設定されているノードにリストアする必要があります。SQL Server Books Online を参照してください。

両方のパートナーのバックアップを同時に開始する方法

1. プリンシパルのバックアップのスケジュールとポリシーを作成します。
2. クライアントリストにミラーリングパートナーを含んでいるホストを追加します。
3. バッチファイルを作成し、バックアップ対象リストに追加します。
4. ポリシーのバックアップ対象リストで指定したバッチファイルと同じ名前のバッチファイルをミラーリングパートナー上に作成します。

   ミラーリングパートナー上のバッチファイルは、1 つの例外を除き、プリンシパルで使用されるものと同一である必要があります。SQLHOST と SQLINSTANCE の値は異なります。

ミラーリングされたデータベースのバックアップイメージのリストア

メモ: ミラーリングされたデータベースをリストアする前に、ミラーリング属性を削除する必要があります。

ミラーリングされたデータベースの場合、NetBackup プリンシパルとミラーのサーバーの両方またはいずれかにバックアップイメージを作成できます。[データベースのリストア (Restore Database)]ダイアログボックスは、両方のサーバーにあるバックアップイメージを表示します。バックアップ元のパートナーを判断するには、イメージのプロパティページを参照します。バックアップイメージを表示するには、いずれかのミラーリングパートナー

を含む[ホスト名 (Host Name)]を選択できます。ただし、NetBackup がそのパートナーのためにバックアップを行ったことが条件です。

たとえば、ミラーリングパートナーを次のように仮定します。プリンシパルは現在 HostA で、バックアップはすべて HostB 上で行われたと想定します。

- プリンシパル
  ホスト名: HostA
  SQL Server インスタンス: Solaria
  データベース: Accounting
- ミラー
  ホスト名: HostB
  SQL Server インスタンス: Moonbeam
  データベース: Accounting

バックアップイメージが HostA で排他的に作成された場合、または HostA と HostB の両方で作成された場合は、両方のパートナーのイメージを表示できます。[SQL ホスト (SQL Host)]リストで HostA を選択します。

ミラーリングされたバックアップイメージをリストアするには

1. プリンシパルミラーでミラーリングを無効にします。

   SQL Server Management Studio の適切なコマンドを使うか、直接 ALTER DATABASE を使うことができます。

2. プリンシパルサーバーで、NetBackup MS SQL Client を起動します。

   ミラーデータベースをリストアするときは、プリンシパルサーバーから NetBackup MS SQL Client を実行する必要があります。プリンシパルのパートナーを判断する方法について詳しくは、SQL Server Books Online を参照してください。

   前の例では、プリンシパルは HostA です。

3. [ファイル (File)]メニューで、[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server Objects)]を選択します。

4. [バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)]ダイアログボックスで、[SQL ホスト (SQL Host)]リストからミラーサーバーを選択します。

   前の例では、ミラーは HostB です。

5. [OK]をクリックします。

6. 通常どおり、リストアに進みます。

   NetBackup は、必要に応じて両方のパートナーのイメージを含むデータベースのリカバリスクリプトを作成します。

データベースログ配布をサポートするための NetBackup の構成

ログ配布は SQL Server 機能の 1 つで、この機能を使用すると、環境の全体的な可用性を向上できる場合があります。この機能では、プライマリサーバーを使用します。プライマリサーバーには、動作中のデータベース、モニターおよび 1 つ以上のセカンダリサーバーが含まれます。ログ配布では、トランザクションログのコピーがトランザクションごとにセカンダリサーバーに配布されます。この構成によって、プライマリサーバーがオフラインになった場合に備えて、各セカンダリサーバーをスタンバイ状態にしておくことができます。

NetBackup でログ配布を使用するには、プライマリとセカンダリの両方を同じマスターサーバーのクライアントとして設定する必要があります。トランザクションログのバックアップで、ログの切り捨てを無効にする必要があります。

データベースログ配布をサポートするために NetBackup を構成するには

1. 両方のデータベースが含まれるホストのサーバーリストで同じマスターサーバーを指定します。
2. プライマリをバックアップするために使用する任意のポリシーで、セカンダリデータベースが含まれるホストを指定します。

   p.161 の「ログ配布が設定された環境での SQL Server のバックアップ」を参照してください。
3. マスターサーバーで、プライマリサーバーとセカンダリサーバーの両方のリダイレクトリストアの権限を設定します。

   p.97 の「リダイレクトリストアの権限の構成」を参照してください。

ログ配布が設定された環境での SQL Server のバックアップ

多くのサイトでは、プライマリサーバーの負荷を最小限にするために、セカンダリサーバーを使用してプライマリサーバーの特定のアクティビティの負荷を分散します。ただし、セカンダリサーバー (またはスタンバイサーバー) 上でバックアップを実行することはできません。データベースのバックアップおよびリストアは、常にプライマリサーバー上で行う必要があります。この要件は、Microsoft 社のサポート技術情報の記事 311115 で説明されている、Microsoft SQL Server の制限事項に基づいています。

セカンダリサーバーでバックアップを実行する場合は、dbclient ログに次のようなメッセージが追加されます。

```
16:33:26 [1208,2348] <16> CODBCaccess::LogODBCerr: DBMS MSG - ODBC message. ODBC return
```

```
code <-1>, SQL State <37000>, Message Text <[Microsoft][ODBC SQL Server Driver][SQL
Server]Database 'Mumbo' is  in warm-standby state (set by executing RESTORE WITH
STANDBY) and cannot be backed up until the entire load sequence is completed.>
```

10

バックアップおよびリカバリの概念

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server のバックアップおよびリカバリの概念について
- NetBackup for SQL Server のコンポーネント
- NetBackup での SQL Server ホストおよびインスタンス名の解決方法
- NetBackup for SQL Server でのデータベースのバックアップ方法
- NetBackup for SQL Server でのデータベースのリカバリ方法
- SQL Server ファイルとファイルグループの保護
- SQL Server ファイルとファイルグループのリカバリ時の注意事項について
- 読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小
- SQL Server のバックアップまたはリストア操作時のデータ転送速度に影響を与える要素
- SQL Server のリカバリでの考慮事項について

SQL Server のバックアップおよびリカバリの概念について

SQL Server をインストールすると、Windows ホスト上に SQL Server インスタンスが作成されます。1 つのホスト上に、デフォルトインスタンスや名前付きインスタンスを含む複数のインスタンスをインストールできます。参照してバックアップするデータベースインスタンスを選択できます。NetBackup MS SQL Client から、[ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。

SQL Server システムデータベースの種類について

SQL Server インスタンスは、1 つのエンティティとしてバックアップすることはできません。SQL Server バックアップの最も大きな単位はデータベースです。SQL Server には、システムデータベースとユーザーデータベースがあります。

システムデータベースは次のとおりです。

master

このデータベースは、インストールの中枢です。インスタンスを記述する大量のメタデータが含まれます。master データベースの最新のバックアップを保持する必要があります。SQL Server インストールに変更を加えた場合 (master 以外のデータベースを作成または変更したときなど) は、必ず master をバックアップしてください。master 上では、データベースの完全バックアップのみを実行できます。master のコンポーネントファイルのバックアップ、差分バックアップまたはトランザクションログのバックアップを実行することはできません。master データベースのリカバリでは特別な考慮事項が必要となります。

p.260 の「SQL Server のディザスタリカバリの準備」を参照してください。

msdb

msdb は、Microsoft SQL Agent によって、スケジュール、警告、およびバックアップ履歴の記録に使用されます。完全リカバリオプションセットまたは一括ロードリカバリオプションセットが設定されている場合は、すべてのバックアップ形式が実行可能です。

model

model データベースは、Create Database 文の実行時、新しいデータベースのテンプレートとして機能します。完全リカバリオプションセットまたは一括ロードリカバリオプションセットが設定されている場合は、すべてのバックアップ形式が実行可能です。

tempdb

tempdb は、アプリケーションで使用される一時データベースです。バックアップすることができないため、NetBackup for SQL Server バックアップブラウザには表示されません。

SQL Server データベースバックアップについて

データベースでは、次の種類のバックアップ操作を実行できます。

完全

データベースが、そのコンポーネントファイルもすべて含め、単一のイメージとしてバックアップされます。データベースの完全バックアップには、ログファイルが含められます。

メモ: 完全バックアップの後、トランザクションログは自動的には切り捨てられません。したがって、一般的には、ディスク領域を確保しておくために、完全バックアップが正常終了した後、トランザクションログを手動で切り捨てます。

差分
最後の完全バックアップ以降に行われたすべての変更が単一のイメージにバックアップされます。

トランザクションログ
トランザクションログのバックアップは、完全復旧オプションおよび一括ロード復旧オプションでのみ使用できます。この操作では、トランザクションログのアクティブでないエントリもバックアップされます。トランザクションログのバックアップを選択した場合、次のオプションを使用できます。

- ログは切り捨てて、バックアップする (Back up and truncate transaction log)
- ログは切り捨てないで、バックアップする (Back up transaction log, but do not truncate it)
- 最終ログのバックアップおよびリストア (Back up and restore tail log)(レガシーの SQL Server バックアップポリシー)

4 番目のオプションでは、バックアップは実行されますが、永続的なバックアップイメージは作成されません。この形式のトランザクションログバックアップは、通常、データベースがリカバリされ、まだオンラインに戻っていないファイルグループが存在する場合に、ページレベルのリストアを行った後で使用します。最終ログをバックアップおよびリカバリすると、SQL Server によって、データベースが使用可能な状態に戻されます。

SQL Server ファイルグループのバックアップについて

データベースバックアップに加えて、個別のイメージを使用して、データベースを構成する論理ファイルグループとファイルをバックアップできます。

ファイルグループは、次の方法でバックアップできます。

ファイルグループのバックアップ
バックアップは、単一のファイルグループから作成できます。[Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスのオブジェクトブラウザで個々のファイルグループを選択すると、ファイルグループのバックアップ用のスクリプトが作成されます。

読み書き可能なファイルグループのバックアップ
データベース内の読み書き可能なファイルグループだけを含むバックアップです。データベース内のファイルグループのすべてが読み書き可能に設定されている場合、読み書き可能なファイルグループのバックアップの内容はデータベースの完全バックアップと同じです。個々のデータベースを選択し、「読み書き可能なファイルグループ」形式のバックアップを選択した場合、読み書き可能なファイルグループバックアップのスクリプトを作成できます。

ファイルグループのすべてのデータベースファイルのバックアップ
ファイルグループをバックアップする場合は、ファイルグループ内のすべてのデータベースファイルをバックアップすると効果的です。

注意: 部分的なデータベースのバックアップの内容はユーザーが定義したものであるため、これらのバックアップの内容は、NetBackup for SQL Server によるリカバリが実行される際に必要なバックアップとして使用されません。このため、NetBackup でデータベースのリカバリを実行する場合、部分的なバックアップは適切でない場合があります。

SQL Server のレガシーバックアップポリシーの場合は、データベースの部分的なバックアップも実行できます。この場合、データベースバックアップには、ユーザーがファイルグループをその場で選択して含めることができます。個々のデータベースを選択し、「部分的データベースのテンプレート作成」形式のバックアップを選択した場合、部分的データベースバックアップのテンプレートを作成できます。テンプレートは、すべてのファイルグループがコメントアウトされた状態で作成されます。ファイルグループからコメントを削除することによって、部分的なバックアップに含めるファイルグループを選択できます。

SQL Server の差分バックアップについて

差分バックアップはファイルグループのバックアップの単位および完全なデータベースで作成できます。差分バックアップには、完全バックアップでオブジェクトが最後に取得されてから、このオブジェクトの内容に加えられた変更が含まれます。

メモ: SQL Server では、データベースファイルに差分バックアップを作成することはできません。

NetBackup for SQL Server のコンポーネント

表 10-1 に、NetBackup for SQL Server のコンポーネントを示します。

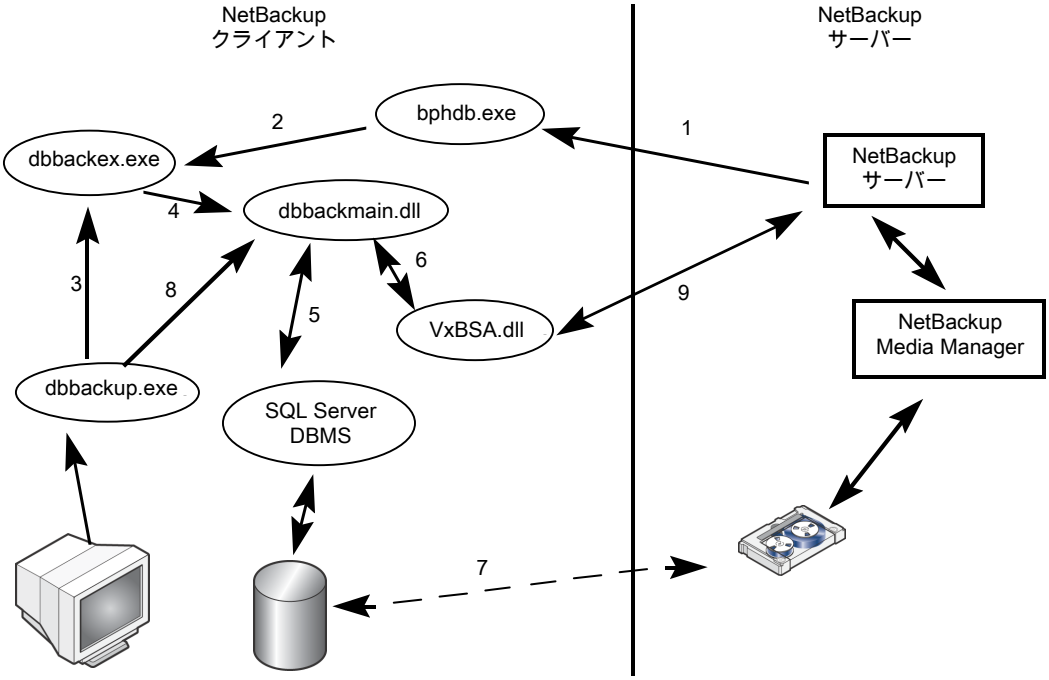
表 10-1 NetBackup for SQL Server のコンポーネント

コンポーネント	ファイル名	説明
グラフィカルユーザーインターフェース (GUI)	dbbackup.exe	このインターフェースを次の目的に使います。 ■ データベースオブジェクトとバックアップイメージの参照。 ■ リストアスクリプトの作成とリストア操作の実行。 ■ (レガシー SQL Server ポリシー) バックアップスクリプトの作成とバックアップ操作の実行。
ドライバ	dbbackex.exe	バックアップおよびリストア操作を開始します。
ライブラリ	dbbackmain.dll	バックアップとリストア、SQL Server へのアクセス、および NetBackup for SQL Server で実行されるその他の操作を支援します。

これらのコンポーネントは、NetBackup for SQL Server を NetBackup サーバーに接続する共通 NetBackup クライアントモジュールである `VxBSA.dll` とも連動します。

図 10-1 に、NetBackup for SQL Server とその他のソフトウェアコンポーネントとの関係を示します。

図 10-1 NetBackup for SQL Server コンポーネント



NetBackup for SQL Server と他のソフトウェアコンポーネントの間で、次の相互作用が発生します。

- すべてのバックアップまたはリストア操作は、`dbbackex.exe` を介して次のいずれかの方法で開始されます。
  - スケジュールバックアップ
    NetBackup scheduler によって `bphdb` (1) が呼び出され、さらに bphdb (1) によって `dbbackex` (2) が呼び出されます。
  - GUI によって開始されるバックアップ
    `dbbackup.exe` によって `dbbackex.exe` (3) が起動されます。
  - コマンドライン
    `dbbackex.exe` は、コマンドラインまたはサードパーティツールから直接起動されます。

- dbbackex.exe は、dbbackmain.dll (4) への関数呼び出しによって、バックアップまたはリストア操作を行います。操作は、dbbackmain.dll が SQL Server と NetBackup サーバー間で 1 つ以上のデータストリームを実行するときに行われます。データストリーム (7) は、VDI (5) と XBSA インターフェース (6) を介して接続されます。VDI は SQL Server と通信し、XBSA は NetBackup データベースクライアントと通信します。
- (レガシー SQL Server ポリシー) NetBackup for SQL Server GUI (dbbackup.exe) では、SQL Server オブジェクト (通常は、データベース、ファイルグループ、データベースファイルなど) を参照できます。dbbackup.exe は dbbackmain.dll (8) を起動して、SQL Server のマスターデータベースにアクセスします。NetBackup for SQL Server では、ODBC 経由で SQL Server に関する情報にアクセスします。
- NetBackup for SQL Server GUI (dbbackup.exe) では、SQL Server バックアップイメージを参照することもできます。参照できるイメージは、NetBackup カタログに含まれています。カタログの内容にアクセスするには、GUI で dbbackmain.dll を起動します。dbbackmain.dll は VxBSA 関数呼び出しを使用して、NetBackup サーバーのデータベースマネージャにアクセスします。

NetBackup での SQL Server ホストおよびインスタンス名の解決方法

通常、SQL Server のインストールは、インストールが存在するホストの名前とインスタンス名の組み合わせによって識別されます。インスタンス名を省略した場合、NetBackup では、そのインストールは、ホスト上のデフォルトインストールであると想定されます。たとえば、1 つのホストには、TIGER、TIGER¥ACCOUNTING、TIGER¥WAREHOUSE などの複数の SQL Server インストールが含まれている場合があります。SQL Server のクラスタインスタンスは複数のホストに同時に存在し、仮想名で識別されます。

ホスト名および SQL Server インテリジェントポリシー

SQL Server インテリジェントポリシーを使うと、バックアップは次のようにカタログ登録されます。

環境	カタログ名	例
インスタンスまたはデータベース	インスタンス管理に登録されているホスト名 通常 NetBackup はインスタンスを自動的に検出し、NetBackup クライアント名を用いてそのインスタンスを登録します。	sqlhost1
SQL Server クラスタ	SQL Server の仮想名	virtsql

環境	カタログ名	例
複数 NIC	SQL Server ホストのプライベートインターフェース名	sqlhost1-NB
複数 NIC 環境の SQL Server クラスタ	仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名	virtsql-NB

ホスト名およびレガシー SQL Server ポリシー

環境	カタログ名	例
インスタンスまたはデータベース	NetBackup クライアント名 通常、SQL Server が存在するホスト名またはそのホストの NetBIOS 名。IP 名 (たとえば、`20.81.74.123`) または完全修飾ドメイン名 (`sqlhost1.mycompany.com`) の場合もあります。	sqlhost1
SQL Server クラスタ	SQL Server の仮想名	virtsql
複数 NIC	SQL Server ホストのプライベートインターフェース名	sqlhost1-NB
複数 NIC 環境の SQL Server クラスタ	仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名	virtsql-NB
SQL Server 可用性グループ (AG)	Windows Server フェールオーバークラスタ (WSFC) の完全修飾ドメイン名 (FQDN)	sql-ag-cluster mycompany.com

例

ほとんどの場合、NetBackup Microsoft SQL Client を使用してバックアップイメージを参照するときは、[SQL ホスト (SQL host)] 名を指定するだけですみます。この設定は、[バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)] ダイアログボックスに表示されます。

NetBackup によって、そのホスト上のすべてのインスタンスのバックアップイメージが表示されます。ただし、NetBackup で必要なバックアップイメージを表示するには、次の特殊な場合を考慮してください。

- ホスト名 (tiger1、tiger.apexworks.com など) とは異なる名前のネットワークインターフェース上のバックアップ。

  この場合、バックアップイメージは、NetBIOS 名ではなく、ネットワークインターフェース名で格納されます。これらのイメージを取得するには、次の指示を参照してください。

  p.184 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する」を参照してください。

- UNIX (または Linux) サーバーからのバックアップ。
  UNIX 名では大文字と小文字の区別があり、Windows 名ではその区別がないため、この処理で問題が発生する可能性があります。この場合、NetBackup は、すべての文字を大文字または小文字で統一してクライアント名を指定し、バックアップイメージを取得しようとします。UNIX クライアント名に大文字と小文字が混在している場合は、クライアント名を[ソースクライアント (Source Client)]フィールドで指定する必要があります。
  SQL ホスト: TIGER
  ソースクライアント: Tiger
- NetBackup クライアント名が修飾されたドメイン名である。SQL Server のホスト名または登録済みのホスト名 (インテリジェントポリシー) は NetBIOS 名です。
  バックアップイメージを取得するには、[SQL ホスト (SQL Host)]に NetBIOS 名を指定し、[ソースクライアント (Source Client)]に完全修飾ドメイン名を指定します。
  SQL ホスト: Tiger
  ソースクライアント: tiger.apexworks.com
- NetBackup クライアント名が IP アドレスである。SQL Server のホスト名または登録済みのホスト名 (インテリジェントポリシー) は NetBIOS 名です。
  バックアップイメージを取得するには、[SQL ホスト (SQL Host)]に NetBIOS 名を指定し、[ソースクライアント (Source Client)]に IP アドレスを指定します。
  SQL ホスト: Tiger
  ソースクライアント (Source Client): 10.80.136.68
- SQL Server クラスタのバックアップ
  イメージはクラスタ名で格納されるため、この処理では問題は発生しません。[SQL ホスト名 (SQL Host name)]に SQL Server の仮想名を指定して[ソースクライアント (Source Client)]のデフォルト値を使います。

NetBackup for SQL Server でのデータベースのバックアップ方法

バックアップが実行されると、NetBackup for SQL Server は、バックアップスクリプトを作成し、SQL Server バックアップ文を生成し、SQL Server にログインして ODBC 経由で SQL Server に SQL 文を配信します。次に、データベースエージェントは、1 つ以上の VDI オブジェクトを使用して SQL Server に接続します。バックアップストライプごとに 1 つの仮想デバイスが作成されます。また、ストライプごとに VxBSA セッションが開始されます。これらの個別のセッションにより、NetBackup は、SQL Server から生成されたストリームごとにバックアップジョブを開始できます。

バックアップが完了すると、データベースエージェントは、バックアップされたオブジェクトの詳細なプロパティ(他のオブジェクトとの関係など)を取得します。エージェントは、この情報を NetBackup カタログに書き込み、バックアップイメージと関連付けます。複数のス

トライプがある場合は、メタデータが最初のバックアップイメージと関連付けられます。付属のストライプは、共通の命名規則に従って相互に関連付けられます。

NetBackup for SQL Server でのデータベースのリカバリ方法

NetBackup MS SQL Client では、データベースの構成を反映した論理階層でバックアップイメージが表示されます。トランザクションログまたは差分イメージを選択すると、選択したデータベースのイメージとともに格納されているメタデータが NetBackup によって確認されます。その後、最も効率的なリカバリセットが決定されます。次に、エージェントによって、リストアを一連のスクリプトにしたものが含まれるバッチファイルが生成されます。スクリプトが実行されると、データベースがリカバリされます。

個々のリストア操作は、バックアップと同じように行われます。SQL Server リストア文が生成されて、ODBC によって SQL Server に提供されます。VDI 接続が行われます。その後、Media Manager と SQL Server 間のデータフローを開始する VxBSA セッションが開始されます。バックアップ時に生成されたストライプの数に応じて、ストリーム数 (および対応する仮想デバイスと VxBSA セッションの数) が決定されます。

すべてのリカバリ操作が完了すると、SQL Server エージェントは、データベースをリカバリ済みの状態に設定する最後の手順を実行します。データベースは再びオンラインになり、利用可能になります。

SQL Server ファイルとファイルグループの保護

SQL Server を保護するための計画の一環としてファイルおよびファイルグループをバックアップする場合、データベースに完全復旧モデルまたは一括ログ復旧モデルを使用する必要があります。また、連続したトランザクションログのバックアップを保持する必要があります。データベースのファイルおよびファイルグループを作成し、これらに個々のデータベースコンポーネントを配置する必要があります。NetBackup では、データベースのファイルおよびファイルグループのバックアップおよびリストアを正常に実行できるように、データベースのレイアウトに制限があります。

ファイルまたはファイルグループのバックアップの場合、表とそのインデックスが同じファイルグループ内に存在することを確認してください。

たとえば、次の Transact-SQL 文で示されるレイアウトは使用できません。

```
use master
CREATE DATABASE MultiFileDB
ON
PRIMARY ( NAME = FileX,
          FILENAME = 'd:¥mssql¥data¥FileX.mdf'),
FILEGROUP AltGroup
```

```
( NAME = AltGroupFil,
  FILENAME = 'd:¥mssql¥data¥AltGroupFil.ndf')
GO
use MultiFileDB
CREATE TABLE Table1 (col1 char(10),col2 char(10), col3 char(10)) on AltGroup
go
create unique clustered index index4 on Table1 (col2)
go
```

この例では、Table1 はファイルグループ AltGroup に配置されていますが、このテーブルのインデックスは (デフォルトで) プライマリファイルグループに配置されていることに注意してください。

指標のいずれかと異なるファイルグループに表を配置する場合、バックアップが失敗する可能性があります。次の SQL Server エラーメッセージが表示されます。

```
Database file <file name> is subject to logical recovery and
must be among the files to be backed up as part of the file
or filegroup backup.
```

SQL Server ファイルとファイルグループのリカバリ時の注意事項について

常に、データベース全体を構成するファイルおよびファイルグループ全部のバックアップを保持します。バックアップをとった期間全体に及ぶトランザクションログのバックアップも必要です。両方の種類のバックアップがある場合、ファイルおよびファイルグループバックアップからデータベースを正常にリストアできることが保証されます。連続したトランザクションログのバックアップを保持するには、ファイルバックアップまたはファイルグループバックアップを行うたびにトランザクションログのバックアップを実行する必要があります。複数のファイルまたはファイルグループをすぐにバックアップする場合、トランザクションログはこれらのバックアップの最後のバックアップの後にのみバックアップしてかまいません。トランザクションログがバックアップされていない場合、SQL Server でファイルまたはファイルグループをリストアすることはできません。

SQL Server では、新しく作成されたファイルまたはファイルグループのトランザクションログ内の記録は維持されません。そのため、ファイルまたはファイルグループのいずれかをデータベースに追加した後、すぐにバックアップを行う必要があります。データベース内のすべてのファイルグループのバックアップを実行して、後続のバックアップが実行されたときに NetBackup によって正しいリカバリセットが選択されるようにしておきます。同様に、データベースファイルを作成した後、そのデータベースファイルが属するファイルグループのすべてのファイルをバックアップすることをお勧めします。

読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小

アプリケーションの多くは、変更されないデータを大量に含んでいます。たとえば、時間に基づいてパーティション化する場合、履歴データは変更されずに永久保存されます。変更の対象となるのは常にデータベースのほんの一部だけです。静的ファイルグループはコピーのみとして分類できます。NetBackup では、ファイルグループを読み取り専用に指定して、バックアップボリュームの合計とリカバリ速度を最適化することができます。

バックアップで読み取り専用ファイルグループを使用することの利点は、メディアの使用量の合計を縮小できることです。読み取り専用ファイルグループを一度だけバックアップし、そのバックアップイメージを永久に保持します。この方針により、読み書き可能なデータだけが定期的にバックアップされるため、バックアップ操作にかかる時間が短縮されます。

リカバリでの利点は、データベースをより迅速にオンラインに戻すことができることです。読み取り専用ファイルグループは、ディスクエラーやその他のハードウェアの障害によって破損していないかぎり、バックアップメディアからリストアする必要はありません。

インテリジェントポリシー構成の場合、次のトピックを参照してください。

p.64 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

p.65 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

レガシーポリシー構成の場合、次のトピックを参照してください。

p.225 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

p.226 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

SQL Server のバックアップまたはリストア操作時のデータ転送速度に影響を与える要素

次の要素が、SQL Server のバックアップまたはリストア操作時のデータ転送速度に影響を与える可能性があります。[最大転送サイズ (Maximum transfer size)]、[ストライプあたりのクライアントバッファ (Client buffers per stripe)]、[ストライプ (Stripes)]、共有メモリおよび代替バッファ方式。詳しくは、次のトピックおよびリソースを参照してください。

- p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。
- p.73 の「NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について」を参照してください。
- TechNote 33423

SQL Server のリカバリでの考慮事項について

アプリケーション環境の復旧計画を定義するときには、次の要因を考慮に入れてください。

トランザクションログ	「SQL Server のトランザクションログについて」 「トランザクションログのバックアップについて」
リカバリおよびリカバリ戦略	「リカバリ方針について」 「データベースのリカバリについて」 「リカバリのステージングについて」
差分バックアップ	「差分バックアップについて」
ファイルおよびファイルグループのバックアップ	「ファイルとファイルグループのバックアップについて」

この項に示す情報の多くは、Microsoft 社の SQL Server Books Online に基づいています。詳しくは、この資料を参照してください。

SQL Server のトランザクションログについて

SQL Server では、各データベースについて先行書き込みトランザクションログが保持されます。このログは、データベースの更新をキャッシュメモリに保持し、データがコミットされるまでディスクに書き込まれないようにする場合に役立ちます。データベースへの書き込みは、チェックポイントプロセスの一部として行われます。

SQL Server では、チェックポイントの間隔は recovery interval (復旧間隔) に基づいて決定されます。この間隔は、システムの再起動時に許容される最大の時間間隔を示す構成パラメータです。チェックポイントでは、システムの再起動に不要なトランザクションログの部分が無効になり、必要に応じて切り捨てられる場合があります。リカバリ方針によって、トランザクションログが切り捨てられるかどうかが判断されます。

p.174 の「リカバリ方針について」を参照してください。

チェックポイントプロセスによってトランザクションログが切り捨てられなかった場合、このトランザクションログをバックアップできます。その場合、指定した時点への (Point In Time) リカバリ、ディスククラッシュによる障害時の対策、または移動操作やコピー操作に使用できます。

リカバリ方針について

SQL Server では、次のレベルのデータベースリカバリが提供されます。各レベルでは、バックアップパフォーマンスとリカバリの詳細度の両方が異なります。

レベルは次のとおりです。

単純	この方法では、データベースのチェックポイント以降はトランザクションログのアクティブでない部分が保持されません。この方法を使用すると、使用されるログ領域を最小限に抑えることができます。ただし、データベースをリストアできるのは最後の完全バックアップまでです。指定した時点への (Point in Time) リカバリやマーク付きトランザクションまでのリカバリなどのトランザクションログのリストアはサポートされていません。また、Create Index、Select Into、Bulk Copy などの操作がログに記録されないため、バルク操作で最大のパフォーマンスを実現できます。
完全	この方法を使用すると、切り捨てが行われるまでトランザクションログのアクティブでないエントリが保持されます (通常、アクティブでないエントリの切り捨ては、バックアップ時に行われます)。そのため、トランザクションログを使用して、指定した時点 (Point in Time) またはマーク付きトランザクションのいずれかへのリカバリを実行できます。復旧モデルが[完全]の場合は最も詳細なリカバリが可能ですが、ほぼすべてのログ領域が使用されるため、バルク操作ではパフォーマンスが低下します。
一括ログ	この方法は、バルク操作がログに記録されないためにリカバリできないことを除いて、[完全]の場合と同じです。

トランザクションログのバックアップについて

デフォルトでは、トランザクションログは、バックアップ後に切り捨てられます。ただし、データベースの完全バックアップまたは差分バックアップの後には、切り捨ては行われません。データベースが完全復旧モードまたは一括ログ復旧モードに設定されている必要があります。

トランザクションログのバックアップの間隔を決定する際の主な考慮事項は、次のとおりです。

- ログ領域の確保。
- ディスククラッシュの発生時に、障害ポイントからさかのぼってリカバリ可能にしておく必要がある期間。

トランザクションの発生率の高い環境では、ピーク時になると、数分間隔でトランザクションログのバックアップを行う場合もあります。(レガシー SQL Server ポリシーは、時間単位の増分で実行するようにのみスケジュール設定できることに注意してください。)

差分バックアップについて

トランザクションログのバックアップとは異なり、差分バックアップはデータベース自体のバックアップです。差分バックアップには、最後の完全バックアップ以降にデータベースに対して行われたすべての変更が含まれます。最後の完全バックアップ以降に複数の差分バックアップを作成した場合、最新の完全なデータベースをリストアしてから最後の差分バックアップをリストアします。中間の差分バックアップをリストアする必要はありません。

差分バックアップには、次のバックアップ形式が含まれます。

- データベースの差分バックアップ
- 個々のファイルグループの差分バックアップ
- 読み書き可能なファイルグループの差分バックアップ (データベース内のすべての読み書き可能なファイルグループの差分を含むすべてのバックアップ)
- 部分的な差分ファイルグループ (ユーザーが選択したファイルグループのみの差分を含むすべてのバックアップ)

注意: Microsoft 社は、同じオブジェクトに対して複数の形式の差分バックアップを作成しないことを推奨しています。

注意: NetBackup では、同じオブジェクトに対して複数の形式の差分バックアップが検出された場合、リカバリの実行方針を決定する際に差分イメージは考慮されません。

---

p.177 の「リカバリのステージングについて」を参照してください。

通常のバックアップ手順では、データベースの完全バックアップ、差分バックアップ、トランザクションログのバックアップの順に実行間隔が短くなります。たとえば、データベースの完全バックアップを隔週、差分バックアップを毎晩行う場合があります。それから、ミッションクリティカルなアプリケーションまたはボリュームが大きいアプリケーションのいずれかでは、トランザクションログのバックアップをより頻繁に行う場合があります。

ファイルとファイルグループのバックアップについて

SQL Server では、個々のファイルグループおよびファイルを独立したイメージとしてバックアップすることもできます。ファイルグループは、1 つ以上のデータベースファイルで構成されます。ファイルグループの構成要素のファイルのバックアップは、ファイルグループ自体のバックアップと論理的に同じです。

一般的に、ファイルグループおよびファイルのバックアップは、物理ディスクの場所がテーブルやインデックスなどの論理オブジェクトにマッピングされている、緊密なアーキテクチャのアプリケーションで使用されます。例えば、表およびインデックスです。

このような環境でファイルおよびファイルグループのバックアップを使用するには、次のような要因があります。

- データベースの、変更が多い、またはミッションクリティカルな部分について、これらの部分のバックアップを他の部分より頻繁に行う必要がある。
- データベースの規模が大きいため、データベースの完全バックアップには、割り当てられている時間帯よりも長い時間がかかる。そのため、1 つ以上のファイルまたはファイルグループの完全バックアップを交互に行う方が実行可能性が高い。

- データの一部を読み取り専用ファイルグループに配置して、バックアップボリュームおよびリカバリ速度を最適化する必要がある。
  p.173 の「読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小」を参照してください。

ディスク障害の場合、ファイルグループバックアップまたはファイルバックアップから、障害が発生したユニットのみをリカバリするように選択できます。データベース全体をリストアする必要はありません。

ファイルグループおよびファイルのバックアップを使用するには、トランザクションログのバックアップを保持する必要があります。

たとえば、ファイルグループおよびファイルを使用してデータベースの完全リストアを実行するには、次の項目のリストアが必要です。

- 構成要素であるすべてのファイルグループおよびファイル
- すべてのトランザクションログセグメント
  これらのトランザクションログセグメントは、最初のコンポーネントのバックアップから開始し、最後のコンポーネントのバックアップの時点まで続く必要があります。

データベースのリカバリについて

リストア処理中は、データベースに対して[リカバリ (Recovery)]オプションを指定してリストアコマンドを実行するまで、データベースは「ローディングモード」になっています。データベースをリカバリモードにするまで、すべてのリストアコマンドは[復旧しない (Not Recovered)]オプションを使用して実行されます。このように、データベースを任意の状態にするための追加のリストア文を引き続き実行できます。データベースは、リカバリオプションを指定して最後のリストア文が適用された後、再度使用可能になります。

リストアを実行する際は、任意のリカバリオプションを選択できます。

p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

リカバリのステージングについて

NetBackup for SQL Server は、実行したバックアップおよびこれらのバックアップを実行した時刻をトラッキングします。[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスを開くことによって、バックアップの履歴を表示することができます。

p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

このダイアログボックスには、指定したパラメータ内のすべての SQL Server のバックアップイメージが表示されます。イメージは、実行するバックアップ形式に基づいて、ツリー形式で表示されます。

リストアにトランザクションログを選択すると、NetBackup for SQL Server ではイメージセットが自動的に検索されます。このイメージは、データベースの完全復旧を実行するた

めに使用されます。復旧用のセットには、選択されたトランザクションログイメージの他に、データベースを復旧状態に再構成するための追加のイメージが含まれます。

リカバリセットには、データベースの完全イメージ、ファイルグループイメージとファイルイメージ、およびデータベースまたはファイルグループの差分イメージを含むことができます。リカバリセットには、部分的および読み書き可能なイメージに含まれるファイルグループ、またはこれらのイメージに含まれるファイルグループの差分を含むことができます。リカバリセットに、ファイルグループ、ファイル、部分的または読み書き可能なイメージが含まれる場合、これには 1 つ以上のトランザクションログイメージも含まれます。

読み書き可能なファイルグループも完全なリカバリセットですが、書き込み可能なファイルグループのバックアップ (差分バックアップを含む) のみが含まれます。読み取り専用ファイルグループのイメージは、変更を想定されないので必要ありません。読み書き可能なファイルグループのリカバリセットにも、1 つ以上のトランザクションログイメージが含まれます。

完全復旧用のリカバリセットが検出されると、セットに含まれるすべてのイメージが自動的に確認されます。また、[完全復旧する (Stage full recovery)] が有効になります。完全復旧用のリカバリセットを表示するには、トランザクションログを右クリックし、[プロパティ (Properties)] を選択し、[リカバリセット (Recovery Set)] タブをクリックします。

11

複数の NIC を備えている場合の NetBackup for SQL Server の使用

この章では以下の項目について説明しています。

- 複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について
- プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する
- 複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップ用バッチファイルを作成する (SQL Server レガシーポリシー)
- 複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのリストアを実行する

複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について

管理者の多くは、バックアップの通信をルーティングするために使用する SQL Server ホストマシンに対して独立したネットワークインターフェースを確保することを必要としています。この種の環境では、バックアップポリシーと SQL Server のバックアップを作成する NetBackup クライアントの追加設定が必要です。リストアを実行するには、特別な設定も必要です。

メモ: NetBackup 8.1 では、プライベートネットワークに SQL Server クラスタがある場合、追加設定が必要です。分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定する必要があります。また、環境内のホストの自動検出マッピングを確認する必要があります。

p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定」を参照してください。

p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

複数 NIC 環境には次の独立したネットワークリソースが存在します。

- 各 SQL Server ホストのパブリック名 (たとえば、`sqlhost1` や `sqlhost2`)
- 各 SQL Server ホストのバックアップで使うプライベートインターフェース名 (たとえば、`sqlhost1-NB` や `sqlhost2-NB`)

複数 NIC 環境の SQL Server クラスタには次の追加リソースが存在します。

- SQL Server の仮想パブリック名 (たとえば、`virtsql`)
- SQL Server の仮想プライベート名 (たとえば、`virtsql-NB`)

複数 NIC 環境で NetBackup for SQL Server を使うには次の必要条件があります。

- NetBackup クライアント名として SQL Server ホストのプライベート名を使って SQL Server に NetBackup クライアントをインストールします。
  インストール後に NetBackup クライアント名を設定することもできます。
  p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。
- ホストまたはクライアントのプライベートインターフェース名を含めたバックアップポリシーを設定します。
  p.182 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)」を参照してください。
  p.183 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。
  p.185 の「複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)」を参照してください。

p.186 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。

SQL Server レガシーポリシーで SQL Server クラスタを保護する場合はバックアップバッチファイルを編集する必要があります。BROWSECLIENT パラメータには SQL Server ホストまたは仮想 SQL Server のプライベート名を示す必要があります。

- 複数の NIC を備えた環境でのリストアについては、次のトピックを参照してください。

  p.184 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する」を参照してください。

  SQL Server クラスタからリストアを実行する場合は、リストアバッチファイルを編集する必要があります。バッチファイルで、仮想 SQL Server のプライベート名を示すように BROWSECLIENT パラメータを変更する必要があります。

  p.188 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのリストアを実行する」を参照してください。

プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成

プライベートネットワークインターフェースを使ってバックアップを実行するには、NetBackup でクライアントのプライベート名を使う必要があります。パブリックインターフェース名を使って NetBackup クライアントをインストールした場合は、次の手順に従ってプライベートインターフェース名として NetBackup クライアント名を設定します。

クラスタ環境では、その他の設定も必要です。その場合、NetBackup では SQL Server クラスタのプライベート仮想名を使う必要があります。

p.156 の「クラスタ化された SQL Server インスタンスのバックアップの設定 (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。

プライベートインターフェース名を使って NetBackup クライアントを構成するには

1. バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
2. [ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティ (NetBackup Client Properties)]を選択します。
3. [一般 (General)]タブをクリックします。
4. [クライアント名 (Client name)]ボックスで、クライアントのプライベート名を指定します。

   たとえば、コンピュータ sqlhost1 のプライベート名は sqlhost1-NB です。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)

このトピックでは、複数の NIC を備えている場合に SQL Server を保護するために SQL Server インテリジェントポリシーを作成する方法について説明します。プライベートインターフェースを使ってバックアップおよびリストアを実行できるようにするには、次の設定を変更する必要があります。

- NetBackup クライアント名として SQL Server ホストのプライベート名を使って SQL Server に NetBackup クライアントをインストールします。
  インストール後に NetBackup クライアント名を設定することもできます。
  p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。
- バックアップポリシーに、SQL Server ホストのプライベートインターフェース名を含める必要があります。
  NetBackup は、インスタンスの検出中に NetBackup クライアント名が付いたインスタンスを自動的に追加します。プライベートインターフェース名を使って NetBackup クライアントをインストールした場合、NetBackup はバックアップを実行するときにプライベート名を使います。

複数 NIC を備えたクラスタで SQL Server のバックアップポリシーを設定するには (SQL Server インテリジェントポリシー)

1. パブリックインターフェース名を使って SQL Server に NetBackup クライアントをインストールする場合は、手順に従ってプライベートインターフェース名として NetBackup クライアント名を設定します。

   p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。
2. NetBackup 管理コンソールを開きます。
3. ［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］、［アプリケーション (Applications)］、［Microsoft SQL Server］の順に展開します。
4. ［すべてのインスタンス (All Instances)］ をクリックします。
5. SQL Server ホストのプライベートインターフェース名 (sqlhost1-NB) を含むインスタンスを見つけて登録します。
6. 新しいポリシーを作成するか、既存のポリシーを開きます。
7. ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［インスタンスの保護 (Protect instances)］を選択します。
8. [新規 (New)] をクリックします。

9 保護するインスタンスやデータベースを追加する場合は、SQL Server のプライベートインターフェース名 (sqlhost1-NB) を含むインスタンスを選択または展開します。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。

10 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
- バックアップ対象リストにデータベースオブジェクトを追加します。
  p.57 の「[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ」を参照してください。
- (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
  p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)

このトピックでは、複数 NIC を備えた SQL Server を保護するためにバッチファイルを使うレガシーバックアップポリシーを設定する方法について説明します。プライベートインターフェースを使ってバックアップおよびリストアを実行できるようにするには、次の設定を変更する必要があります。

- NetBackup クライアント名として SQL Server ホストのプライベート名を使って SQL Server に NetBackup クライアントをインストールします。
  インストール後に NetBackup クライアント名を設定することもできます。
  p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。
- バックアップポリシーに、SQL Server ホストのプライベートインターフェース名を含める必要があります。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定するには (レガシーバックアップポリシー)

1 パブリックインターフェース名を使って SQL Server に NetBackup クライアントをインストールする場合は、手順に従ってプライベートインターフェース名として NetBackup クライアント名を設定します。

p.181 の「プライベートインターフェース名を使った NetBackup クライアントの構成」を参照してください。

2 NetBackup 管理コンソールを開きます。

3 新しいポリシーを作成するか、既存のポリシーを開きます。

4 ［クライアント (Clients)］タブで新しいクライアントを追加します。

クライアント名にはプライベートインターフェース名を指定します。たとえば、パブリック名が sqlhost1 だとします。sqlhost1 のバックアップの作成に使うプライベートインターフェースは、sqlhost1-NB です。

5 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。
- バッチファイルを作成してバックアップ対象リストに追加します。
p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。
p.216 の「バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する

複数 NIC 環境で SQL Server のリストアを実行するには、次の操作を実行する必要があります。

- ホストのパブリック名を使って SQL Server ホストに接続します。
- バックアップイメージを参照する場合は、［SQL ホスト (SQL Host)］名に SQL Server のパブリック名を指定します。［ソースクライアント (Source Client)］に SQL Server のプライベート名を指定します。

クラスタ環境で SQL Server ポリシーを使う場合は、別の手順に従う必要があります。

p.188 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのリストアを実行する」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行するには

1 NetBackup MS SQL Client を起動します。

2 ［ファイル (File)］>［SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)］を選択します。

3 ［ホスト (Host)］フィールドで、SQL Server ホストのパブリック名を指定します。

4 ［OK］をクリックします。

5 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)］を選択します。

6 ［SQL ホスト (SQL Host)］フィールドで、SQL Server ホストのパブリック名 (sqlhost1) を指定します。

7 ［ソースクライアント (Source Client)］フィールドで、SQL Server ホストのプライベートインターフェース名 (`sqlhost1-NB`) を指定します。

8 ［OK］をクリックします。

プライベートネットワークインターフェースで実行された［SQL ホスト (SQL Host)］の SQL Server バックアップを示すダイアログボックスが表示されます。

9 通常どおり、リストアを続行します。

p.88 の「SQL Server データベースのバックアップのリストア」を参照してください。

複数の NIC が存在する場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server インテリジェントポリシー)

この項では、複数の NIC を備えている場合に SQL Server を保護するために SQL Server インテリジェントポリシーを作成する方法について説明します。NetBackup は、インスタンスの検出中に NetBackup クライアント名が付いたインスタンスを自動的に追加します。複数 NIC 環境の仮想 SQL Server の場合は、インスタンスを追加して仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名で登録する必要があります。この名前は、バックアップポリシーに追加するインスタンス名です。

複数 NIC を備えた SQL Server クラスタのバックアップポリシーを設定するには (SQL Server インテリジェントポリシー)

1 NetBackup 管理コンソールを開きます。

2 ［NetBackup の管理 (NetBackup Management)］、［アプリケーション (Applications)］、［Microsoft SQL Server］の順に展開します。

3 ［すべてのインスタンス (All Instances)］ をクリックします。

4 手動で新しいインスタンスを追加して登録します。［ホスト (Host)］には、仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名 (`virtsql-NB`) を指定する

5 新しいポリシーを作成するか、既存のポリシーを開きます。

6 ［インスタンスとデータベース (Instances and Databases)］タブで、［インスタンスの保護 (Protect instances)］を選択します。

7 [新規 (New)] をクリックします。

8 保護するインスタンスやデータベースを追加する場合は、仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名 (VIRTSQL-NB) を含むインスタンスを選択または展開します。

p.51 の「ポリシーへのインスタンスの追加」を参照してください。

p.53 の「ポリシーへのデータベースの追加」を参照してください。

9 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.47 の「スケジュールプロパティについて」を参照してください。
- バックアップ対象リストにデータベースオブジェクトを追加します。
  p.57 の「バックアップ対象リストへのファイルグループまたはファイルの追加」を参照してください。
- (省略可能) 調整パラメータに変更を加えます。
  p.60 の「SQL Server バックアップの調整パラメータについて」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップを設定する (SQL Server レガシーポリシー)

このトピックでは、複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタを保護するために SQL Server レガシーバックアップポリシーを作成する方法について説明します。バックアップポリシーを作成するときに、仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名を含むクライアントを対象にする必要があります。ホストのパブリック名は使わないでください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server のバックアップを設定するには (レガシーバックアップポリシー)

1 NetBackup 管理コンソールを開きます。

2 新しいポリシーを作成するか、既存のポリシーを開きます。

3 ［クライアント (Clients)］タブで新しいクライアントを追加します。

  クライアント名には仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名を使います。たとえば、virtsql-NB です。

4 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。

- 仮想 SQL Server のプライベートインターフェース名を含むバッチファイルを作成します。次に、このバッチファイルをバックアップ対象リストに追加します。
  p.187 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップ用バッチファイルを作成する (SQL Server レガシーポリシー)」を参照してください。
  p.216 の「バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのバックアップ用バッチファイルを作成する (SQL Server レガシーポリシー)

このトピックでは、複数 NIC 接続で SQL Server クラスタを保護するためにレガシーバックアップポリシーのバッチファイルを作成する方法について説明します。バッチファイルを作成するには、仮想 SQL Server のパブリック名を使って SQL Server ホストに接続する必要があります。バッチファイルには、仮想 SQL Server のプライベート名を含める必要があります。

複数 NIC 接続で SQL Server クラスタのバックアップ用バッチファイルを作成するには

1. SQL Server クラスタのノードで、NetBackup for SQL Server インターフェースを開きます。
2. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。
3. [ホスト (Host)]フィールドで、仮想 SQL Server ホストのパブリック名 (`virtsql`) を指定します。
4. [適用 (Apply)]、[閉じる (Close)]の順にクリックします。
5. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。
6. バックアップするデータベースを選択します。
7. バックアップオプションを選択します。

   メモ: [バックアップ (Backup)]ダイアログボックスから、バックアップをすぐに実行しないでください。生成されたバッチファイルを正常に実行するには、その内容を変更する必要があります。

8. [バックアップスクリプト (Backup script)]オプションから、[保存する (Save)]をクリックします。

9 ［バックアップ (Backup)］ボタンをクリックします。

次のようなバッチファイルが作成されます。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "ACCOUNTING"
SQLHOST "VIRTSQL"
NBSERVER "THOR"
BROWSECLIENT "VIRTSQL"
MAXTRANSFERSIZE 0
BLOCKSIZE 7
ENDOPER TRUE
```

10 BROWSECLIENT と関連付けられた行の値を、仮想 SQL Server のパブリック名からプライベート名に変更します。

```
OPERATION BACK
UPDATABASE "ACCOUNTING"
SQLHOST "VIRTSQL"
NBSERVER "THOR"
BROWSECLIENT "VIRTSQL-NB"
MAXTRANSFERSIZE 0
BLOCKSIZE 7
ENDOPER TRUE
```

11 クラスタ内のすべてのノードまたは共有場所に修正したバッチファイルを置きます。この方法は、スケジュールバックアップで利用できます。

バックアップ開始時にどのノードがアクティブであるかにかかわらず、バックアップが行われます。

複数の NIC を備えている場合に SQL Server クラスタのリストアを実行する

複数 NIC 環境で SQL Server クラスタのリストアを実行するには、次の操作を実行する必要があります。

- ホストのパブリック名を使って仮想 SQL Server ホストに接続します。
- バックアップイメージを参照する場合は、［SQL ホスト (SQL Host)］名に仮想 SQL Server のパブリック名を指定します。［ソースクライアント (Source Client)］に仮想 SQL Server のプライベート名を指定します。
- リストア用のバッチファイルを作成し、手動で編集して仮想 SQL Server のプライベート名を指定します。

クラスタ環境でない場合は、別の手順に従う必要があります。

p.184 の「複数の NIC を備えている場合に SQL Server のリストアを実行する」を参照してください。

複数の NIC を備えている場合にクラスタのリストアを実行するには

1. クラスタの特定のノードで NetBackup for SQL Server インターフェースを開きます。
2. [ファイル (File)]>[SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)]を選択します。
3. [ホスト (Host)]フィールドで、仮想 SQL Server ホストのパブリック名 (`virtsql`) を指定します。
4. [適用 (Apply)]、[閉じる (Close)]の順にクリックします。
5. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。
6. [バックアップ履歴のオプション (Backup History Options)]ダイアログボックスで次の項目を指定します。

SQL ホスト (SQL Host)	仮想 SQL Server のパブリック名 (`virtsql`)
ソースクライアント	仮想 SQL Server のプライベート名 (`virtsql-NB`)

7. [OK]をクリックします。
8. リストアするデータベースを選択します。

   p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。

   メモ: [Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスから、リストアをすぐに実行しないでください。生成されたバッチファイルを正常に実行するには、その内容を変更する必要があります。

9. リストアオプションを選択します。
10. [リストアスクリプト (Restore script)]オプションから、[保存する (Save)]を選択します。

11 ［リストア (Restore)］をクリックします。

NetBackup MS SQL クライアントで次のようなバッチファイルを生成します。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DATABASE "ACCOUNTING"
NBIMAGE "SQLHOST1.MSSQL7.VIRTSQL.db.ACCOUNTING.~.7.001of001.20040306111309..C"
SQLHOST "VIRTSQL"
NBSERVER "THOR"
BROWSECLIENT "VIRTSQL"
MAXTRANSFERSIZE 0
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE RECOVERED
ENDOPER TRUE
```

12 BROWSECLIENT と関連付けられた行の値を、仮想 SQL Server のパブリック名からプライベート名に変更します。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DATABASE "ACCOUNTING"
NBIMAGE "SQLHOST1.MSSQL7.VIRTSQL.db.ACCOUNTING.~.7.001of001.20040306111309..C"
SQLHOST "VIRTSQL"
NBSERVER "THOR"
BROWSECLIENT "VIRTSQL-NB"
MAXTRANSFERSIZE 0
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE RECOVERED
ENDOPER TRUE
```

13 ［ファイル (File)］>［スクリプトファイルの管理 (Manage script files)］を選択します。

14 変更されたバッチファイルを選択して、［開始 (Start)］をクリックします。

12

クライアントとバッチファイルを使用した SQL Server レガシーポリシーでのバックアップの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server のレガシーポリシーについて
- SQL Server レガシーポリシーを使用するバックアップの設定について
- SQL Server のバックアップとリストアのための NetBackup サービスの設定
- NetBackup レガシーバックアップポリシーのある SQL Server セキュリティについて
- NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について
- 新しい SQL Server レガシーポリシーの追加
- スケジュールプロパティについて
- ポリシーへのクライアントの追加
- バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加
- SQL Server ホストおよびインスタンスの選択
- SQL Server バックアップ操作のオプション
- バックアップ用に選択されたオブジェクトのプロパティの表示について
- SQL Server データベースのユーザー主導型バックアップの実行

- SQL Server トランザクションログのバックアップ
- SQL Server データベースファイルグループのバックアップ
- 読み取り専用ファイルグループのバックアップ
- 読み書き可能なファイルグループのバックアップ
- SQL Server データベースファイルのバックアップ
- 部分的なデータベースのバックアップの実行
- リモート SQL Server インストールのバックアップの実行
- NetBackup for SQL Server のファイルチェックポイントについて
- 失敗した SQL Server バックアップの自動再試行について

SQL Server のレガシーポリシーについて

レガシー NetBackup for SQL ポリシーには、SQL Server データベースクライアントのリストと SQL Server バックアップコマンドを含むバッチファイルが含まれています。バックアップをスケジュール設定すると、NetBackup はポリシーにある各クライアントのバッチファイルのコマンドを実行します。バッチファイルに選択したオプションを保存する、NetBackup MS SQL クライアントインターフェースを使ってバッチファイルを作成します。または、このバッチファイルは手動でも作成できます。

レガシー SQL Server ポリシーには、次の条件があります。

- 使用するストレージユニットおよびストレージメディア
- ポリシー属性
- バックアップスケジュール: 自動スケジュール（完全バックアップ）とアプリケーションスケジュール。
- バックアップするクライアント
- クライアントで実行するバックアップバッチファイル

レガシーバックアップポリシーを設定するには、NetBackup 管理コンソールを使います。このポリシーユーティリティには、この種類のポリシーを作成または変更する必要のあるすべての設定とパラメータが含まれています。

［ポリシーの構成ウィザード (Policy Configuration Wizard)］は、レガシー SQL Server ポリシーでは利用できません。

SQL Server レガシーポリシーを使用するバックアップの設定について

表 12-1　SQL Server レガシーポリシーを使用して SQL Server のバックアップを設定する手順

手順	処理	説明
手順 1	サポート対象の SQL Server 構成が存在することを確認します。	アプリケーションとデータベースエージェントの互換性リストを参照してください。
手順 2	NetBackup サーバーと SQL Server ソフトウェアの必要条件を満たしていることを確認します。	p.21 の「NetBackup サーバーおよびクライアントの要件」を参照してください。
手順 3	NetBackup サービスのログオンアカウントを構成します。	NetBackup Client Service と NetBackup Legacy Network Service のログオンアカウントは、特定の要件を満たす必要があります。 p.27 の「SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する」を参照してください。
手順 4	NetBackup for SQL Server が SQL Server のセキュリティをどのように使用しているかを確認します。	p.195 の「NetBackup レガシーバックアップポリシーのある SQL Server セキュリティについて」を参照してください。
手順 5	ポリシーのバッチファイルを設定します。	p.196 の「NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について」を参照してください。
手順 6	SQL Server レガシーポリシーを設定します。	p.209 の「新しい SQL Server レガシーポリシーの追加」を参照してください。
手順 7	SQL Server AG またはクラスタがある場合は、分散アプリケーションのリストアのマッピングを設定する必要があります。	マスターサーバーの[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed Application Restore Mapping)]ホストプロパティで、その他のマッピングを設定します。 p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。
手順 8	SQL Server AG またはクラスタがある場合は、環境内のホストの自動検出マッピングを確認する必要があります。	NetBackup が環境内で検出した有効な自動検出マッピングそれぞれを承認する必要があります。マスターサーバーの[ホスト管理 (Host Management)]プロパティで、この設定を実行します。 p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

SQL Server のバックアップとリストアのための NetBackup サービスの設定

NetBackup は、バックアップやリストアを実行する際に、NetBackup Client サービスおよび NetBackup Legacy Network Service を使用して SQL Serverにアクセスします。適切な設定により、これらのサービスは、ローカルシステムアカウントまたは必要な権限を持つ別のアカウントを使ってログオンできます。

これらのサービスのログオンアカウントには次の項目が必要です。

- 両方のサービスが同じログオンアカウントを使う必要があります。
- SQL Server の「sysadmin」ロール。
- ログオンアカウントでローカルシステムを使う場合、要件は SQL Server バージョンによって異なります。
  - SQL Server 2008 では、sysadmin ロールは自動的に NT AUTHORITY¥SYSTEM および BUILTIN¥Administrators グループに適用されます。
  - SQL Server 2012 以降の場合、最初に sysadmin ロールを手動で NT AUTHORITY¥SYSTEM または BUILTIN¥Administrators グループに適用する必要があります。
- SQL Server クラスタや SQL Server 可用性グループ (AG) の場合は、クラスタまたは AG のノードごとに NetBackup サービスを設定します。
- VMware バックアップの場合、サービスのログオンアカウントで異なる設定が必要となります。
  p.110 の「SQL Server を保護する VMware バックアップの NetBackup サービスの設定」を参照してください。

SQL Server のバックアップやリストアのために NetBackup サービスを設定するには

1. sysadmin ロールがあるアカウントで、Windows ホストにログオンします。
2. SQL Server のインスタンスで標準または混合セキュリティを使用する場合、次の手順を実行します。
   - NetBackup MS SQL Client を起動します。
   - ［ファイル (File)］>［SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)］を選択します。
   - SQL Server のユーザー ID とパスワードを指定します。
   - ［適用 (Apply)］をクリックします。
   - ［閉じる (Close)］をクリックします。
3. Windows のサービスアプリケーションを開始します。

4 ［NetBackup Client Service］エントリをダブルクリックします。

5 ［ログオン］タブをクリックします。

6 ［ローカルシステムアカウント (Local System account)］が選択されていることを確認します。

7 ［OK］をクリックします。

8 別のログオンアカウントを選択した場合は、Service を停止して、再起動します。

9 NetBackup Legacy Network Service エントリをダブルクリックします。

10 ［ログオン］タブをクリックします。

11 ［ローカルシステムアカウント (Local System account)］が選択されていることを確認します。

12 ［OK］をクリックします。

13 別のログオンアカウントを選択した場合は、Service を停止して、再起動します。

NetBackup レガシーバックアップポリシーのある SQL Server セキュリティについて

NetBackup for SQL Server は、SQL Server のバックアップコマンドとリストアコマンドを使って SQL master データベースに問い合わせます。これらの操作は、SQL Server のインストール時に選択したセキュリティ方式 (統合セキュリティまたは標準セキュリティのいずれか) に従って検証されます。統合セキュリティとは、標準の SQL Server ベースのログオンの代わりに、Windows の認証を使用することを意味します。

メモ: Microsoft 社では、統合セキュリティの使用を推奨しています。SQL サーバーベースのログオンとは異なり、Windows ログオンは標準 Windows セキュリティツールによってトレースできます。NetBackup for SQL Server は、SQL Server の任意のレベルの統合セキュリティと標準セキュリティの両方をサポートしています。

統合セキュリティを使う場合、ログに記録する Windows アカウントが認証に使われます。SQL Server では、NetBackup MS SQL Client またはバッチファイルで入力したユーザー ID とパスワードは無視されます。

標準セキュリティを使用する場合、SQL Server ベースのユーザー ID とパスワードを指定する必要があります。クレデンシャルを指定すると、NetBackup は次のレジストリキー配下のレジストリにその情報を格納します (パスワードは暗号化されます)。

```
HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥VERITAS¥NETBACKUP¥NetBackup for
Microsoft SQL Server¥
```

NetBackup for SQL Server でのバッチファイルの使用について

NetBackup for SQL Server でバックアップとリストア操作を開始するには、バッチファイルを使用します。バッチファイルは、拡張子 .bch を持ち、通常は、*install_path*¥*NetBackup*¥DbExt¥MsSql¥ ディレクトリから実行されます。

次の方法のいずれかで操作を開始する場合、バッチファイルを作成する必要があります。

- ［スクリプトの管理 (Manage Scripts)］ダイアログボックス
- dbbackex コマンドライン
- バッチファイルおよびクライアントを使う自動スケジュールバックアップ

バッチファイルの使用ルール

バッチファイルを作成し、使用する前に、次の情報を確認します。

- バッチファイルがクライアントに存在することを確認します。
  p.278 の「NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録」を参照してください。
- バッチファイルは Unicode のテキストです。
- バッチファイルは、連続して実行される一連の操作で構成されます。レガシー SQL Server バックアップポリシーの場合、バッチファイルをバックアップ操作およびリストア操作のために作成します。SQL Server インテリジェントポリシーの場合、バッチファイルを同じ方法でリストア操作のために作成します。
- それぞれの操作は、*<keyword value>* の対の列で構成され、これらの指定に従って全体の操作が定義されます。
- キーワードには大文字と小文字の区別がありませんが、値には大文字と小文字が区別されます。通常、大文字でキーワードと値の両方をコード化できます。例外は NBIMAGE キーワードオプションです。NetBackup サーバーで表示される値と完全に同じ値を指定する必要があります。
- 操作はネストされません。
- BATCHSIZE、GROUPSIZE、RESTARTTYPE、NUMRESTARTS、および RESTARTWAITSECONDS パラメータを除き、*<keyword value>* の対はグローバルではありません。BATCHSIZE、GROUPSIZE、RESTARTTYPE、NUMRESTARTS、または RESTARTWAITSECONDS を使用すると、最初の操作時にバッチファイルに一度のみ表示されます。
- SQLINSTANCE $ALL を使用すると、バッチファイルの最初の操作時に表示されます。バッチファイル内の各操作は、バッチファイルを実行したクライアント上のすべての

SQL Server インスタンスに対して実行されます。また、後続の操作で SQLHOST または SQLINSTANCE を指定する必要はありません。

- 操作中は、ENDOPER TRUE で各操作を終了する必要がある場合を除き、*<keyword value>* のペアは任意の順番で表示される可能性があります。
- 行の先頭をハッシュマーク (#) で始めることによって、バッチファイルにコメント行を含めることができます。
- STOPAT、RESTORETOMARK、RESTORETOMARKAFTERTIME、RESTOREBEFOREMARK、および RESTOREBEFOREMARKAFTERTIME は相互に排他的なリストアパラメータです。バッチファイルで RESTORETOMARKAFTERTIME または RESTOREBEFOREMARKAFTERTIME のいずれかを使用する場合は、STOPAFTER キーワードを使用して日時文字列を指定する必要があります。
- バッチファイルから MAXTRANSFERSIZE キーワードを削除した場合、デフォルトは 0 または最大転送サイズである 64 KB になります。バッチファイルからキーワード BLOCKSIZE を削除すると、デフォルトは 0 または 0.5 KB のブロックサイズになります。デフォルト値 0 は、これらのキーワードを使用せずに手動でバッチファイルを作成する場合にも適用されます。

バッチファイルで使用するキーワードおよび値

表 12-2 に、バッチファイルで使用できるキーワードおよび値を示します。

表 12-2　バッチファイルで使用するキーワードおよび値

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
ALTCLIENT(BROWSECLIENT と同じ)	文字列	不要	なし	ローカルホスト以外のホストからイメージをリストアします。
BACKUPMODEL	BACKUPMODEL_ CONVENTIONAL, BACKUPMODEL_ SNAPSHOT	不要	BACKUPMODEL_ CONVENTIONAL	リストアの場合のみ有効です。バックアップがスナップショット方式によって作成されたかどうかを示します。
BATCHSIZE	整数	不要	1	データベースインスタンスごとに、同時に開始するバックアップ処理の数です。バッチファイル内のすべての操作に適用されます。最初の操作の終了前に表示する必要があります。範囲は 1 から 32 です。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
BLOCKSIZE	整数	不要	0	バックアップ操作にのみ適用されます。ブロックサイズは、512 バイト× $2^{BLOCKSIZE}$ で計算されます。範囲は 0 から 7 です。
BROWSECLIENT(ALTCLIENT と同じ)	文字列	不要	なし	ローカルホスト以外のホストからイメージをリストアします。
BUFFERS				NUMBUFS を参照してください。
CONSISTENCYCHECK	FULLINCLUDINGINDICES, FULLEXCLUDINGINDICES, PHYSICALCHECKONLY, CHECKCATALOG	不要	なし	指定した一貫性チェックをリストアの完了後に実行します。
CONVERTBACKUP	TRUE、FALSE	不要	FALSE	データベースやファイルグループの完全バックアップを以前に実行していない場合、NetBackup は差分バックアップまたはログバックアップを完全バックアップに変換します。 このオプションでは、完全リカバリデータベースが単純リカバリモデルに切り替えられ、完全リカバリモデルに戻されたかどうかも検出されます。このシナリオでは、ログチェーンは分割され、SQL Server は、以降のログバックアップを作成するには、その前に差分バックアップを必要とします。NetBackup がこの状況を検出した場合は、バックアップはデータベースの差分バックアップに変換されます。 p.212 の「完全バックアップへの差分バックアップの変換」を参照してください。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
COPYONLY	TRUE、FALSE	不要	説明を参照	TRUEの場合、SQL Server によって帯域外 (アウトオブバンド) のバックアップが作成されるため、通常のバックアップシーケンスは妨げられません。デフォルト値は、インスタントリカバリによるデータベースの完全バックアップの場合を除き、FALSE です。 p.127 の「コピーまたはクローキングしたスナップショットバックアップによる差分バックアップの影響」を参照してください。
DATABASE	文字列	必要	なし	データベースの名前を指定します。バックアップ操作では、値 $ALL を指定するとすべてのデータベース (tempdb 以外) が指定されます。
DBMS	MSSQL	不要	MSSQL	MSSQL のみを指定できます。
DSN	文字列	不要	GUI ユーザーセッションから保存	ODBC データソース名を指定します。現在は使用されていません。
DUMPOPTION	INCREMENTAL	不要	なし	INCREMENTAL を指定して、増分バックアップからリストアを行います。
ENABLESERVICEBROKER	TRUE	不要	なし	リストア操作の後で SQL Server Service Broker を有効にします。有効にするには、RECOVERED が RECOVERED STATE に設定されている必要があります。各**リストア**操作にこのキーワードを含めてください。
ENDOPER	TRUE	必要	なし	バッチファイルで指定したそれぞれの操作を終了します。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
EXCLUDE	文字列	不要	なし	DATABASE $ALL をバッチ操作で指定した場合に、エクスクルードするデータベースの名前を指定します。 EXCLUDE は、DATABASE $ALL を使用した場合のみバッチファイルで使用できます。
GROUPSIZE	1 から 32 の整数	不要	なし	単一の SQL Server バックアップイメージとしてスナップショットがとられるデータベース数。 (レガシーポリシー) 可用性グループバックアップの場合、グループ化されたバックアップ内のすべてのデータベースがその可用性グループの一部である必要があります。NetBackup は AG データベースと AG 以外のデータベースの両方を含む、グループ化したスナップショットのバックアップをサポートしません。 (インテリジェントポリシー) NetBackup はグループ化したスナップショットのバックアップをサポートしません。
INHIBITALTBUFFER METHOD	TRUE、FALSE	不要	FALSE	NetBackup で代替バッファ方式を使用可能にするかどうかを指定します。
MAXRESTARTSETS	整数	不要	なし	MAXRESTARTSETS を使用して、ファイルのチェックポイントを有効にします。有効な範囲は、2 から 32 です。このパラメータは個別のストリーム数を指定し、バックアップ要求はこの数に分割されます。
MAXTRANSFERSIZE	整数	不要	0	最大転送サイズは、64 KB × $2^{\text{MAXTRANSFERSIZE}}$ で計算されます。範囲は 0 から 6 です。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
MOVE	ファイルグループ	不要	なし	ファイルグループ名を指定します。MOVE リストア形式に使われます。SQL Server レガシーポリシーを使用して作成されたバックアップに対しては、PARTIAL リストア形式も適用されます。
NBIMAGE	文字列	必要 *	なし	リストア操作用の NetBackup イメージを指定します。NBSERVER の「注意」を参照してください。 * リストア操作で必要
NBSCHED	文字列	不要	なし	NetBackup ポリシーに複数のアプリケーションバックアップポリシースケジュールが存在する場合、NBSCHED を使用してそのいずれかを選択します。
NBSERVER	文字列	不要	なし	バックアップ操作またはリストア操作に使用するマスターサーバーを指定します。 **メモ:** NBSERVER をバッチファイル操作で指定していない場合、マスターサーバーの名前はデフォルト (HKEY_CURRENT_USER¥Software¥VERITAS¥NetBackup¥NetBackup for Microsoft SQL Server¥DEFAULT_SQL_NB_MASTER_SERVER に指定された名前) になります。
NUMBUFS	整数	不要	1	ストライプごとのバッファ数を指定します。範囲は 1 から 32 です。
NUMRETRIES				NUMRESTARTS を参照してください。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
NUMRESTARTS	1-9	不要	1	RESTARTTYPE AUTO が指定されている場合のバックアップ再試行回数。このキーワードは、バッチファイルの最初の操作時に 1 回のみ使用します。
OBJECTNAME	文字列	必要 *	なし	ファイルまたはファイルグループのバックアップおよびリストアを行う場合に、ファイル名またはファイルグループ名を指定します。 *OBJECTTYPE が FILE または FILEGROUP の場合のみ必要
OBJECTTYPE	DATABASE, TRXLOG, FILEGROUP, FILE	不要	DATABASE	データベース、トランザクションログ、ファイルグループ、またはファイルのうち、バックアップまたはリストアする対象を指定します。
OPERATION	BACKUP, RESTORE	不要	BACKUP	操作の種類 (バックアップまたはリストア) を指定します。
PAGE	Page ID	不要	なし	バックアップが SQL Server インテリジェントポリシーを使用して実行される場合のリストアに対しては無視されます。 ページリストア操作用のページ ID を指定します。
PARTIAL	TRUE、FALSE	不要	FALSE	バックアップが SQL Server インテリジェントポリシーを使用して実行される場合のリストアに対しては無視されます。 NetBackup による部分的なバックアップまたはリストアの実行を指定します。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
PASSWORD	文字列	不要	null	SQL Server にログインするためのパスワードを指定します。このキーワードは統合セキュリティを使用すると無視されます。
RECOVERED STATE	RECOVERED, STANDBY, NOTRECOVERED, TRUE, FALSE	不要	RECOVERED	RECOVERED は、データベースをリカバリ済みの状態にリストアすることを意味します。NOTRECOVERED は、データベースをリストア後にロード状態のままにすることを意味します。STANDBY は、データベースをスタンバイ状態にリストアすることを意味します。STANDBY を使用する場合は、STANDBYPATH キーワードも使用する必要があります。TRUE および FALSE を RECOVEREDSTATE の値として使用すると、RECOVERED および NOTRECOVERED と同じ効果が得られます。
RESTARTTYPE	AUTO, MANUAL	不要	なし	バックアップの場合のみ有効です。失敗したオブジェクトのバックアップを自動的に再試行するには、AUTO を使用します。バックアップに失敗したオブジェクトのバックアップ用にバッチファイルを作成するには、MANUAL を使用します。このキーワードは、バッチファイルの最初の操作時に 1 回のみ使用します。
RESTARTWAITSECONDS	整数	不要	60	バックアップに失敗してから 2 回目のバックアップを試行するまでの時間。このキーワードは、バッチファイルの最初の操作時に 1 回のみ使用します。
RESTOREBEFOREMARK	文字列	不要	なし	トランザクションログマークを指定します。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
RESTOREBEFOREMARK AFTERTIME	文字列	不要	なし	トランザクションログマークを指定します。
RESTOREOPTION	REPLACE	不要	なし	リストア時に NetBackup で SQL Server の置換オプションを使用するように指定します。
RESTOREPAGES	TRUE、FALSE	不要	FALSE	バックアップが SQL Server インテリジェントポリシーを使用して実行される場合のリストアに対しては無視されます。 NetBackup によるページリストア操作の実行を指定します。
RESTORETOMARK	文字列	不要	なし	トランザクションログマークを指定します。
RESTORETOMARK AFTERTIME	文字列	不要	なし	トランザクションログマークを指定します。
RESTORETYPE	FULL, PARTIAL, MOVE	不要	FULL	Full は完全なデータベースリストアを、Move はデータベースの移動を示します。 RESTORETYPE は、RESTORE データベース操作にのみ適用されます。MOVE を使用するには、バッチファイルに 1 つ以上の <MOVE><filegroup> および <TO><file path> という一連のキーワードを含める必要があります。 (SQL Server レガシーポリシーのみ) Partial は部分的なデータベースリストアを示します。 PARTIAL を使用する場合、NBIMAGE キーワードが参照するバックアップイメージが存在するデータベースのすべてのファイルグループを PARTIAL として指定する必要があります。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
RETRYTYPE				RESTARTTYPE を参照してください。
RETRYWAITSECONDS				RESTARTWAITSECONDS を参照してください。
ROLLBACKVOLUME	TRUE、FALSE	不要	FALSE	NetBackup でボリュームロールバック方式を使用して、インスタントリカバリバックアップのリカバリを実行するように指定します。
SQLCOMPRESSION	TRUE、FALSE	不要	FALSE	バックアップイメージで SQL Server の圧縮を使用します。SQL Server の圧縮を有効にした場合、NetBackup の圧縮を有効にしないでください。
SQLHOST	文字列	不要		SQL Server ホストの名前を指定します。 SQLHOST をバッチファイル操作で指定していない場合、SQL Server ホストは HKEY_CURRENT_USER¥Software¥VERITAS¥NetBackup¥NetBackup for Microsoft SQL Server¥DEFAULT_SQL_HOST から取得されます。キーワード SQLINSTANCE を指定していない場合は、デフォルトの SQL Server インスタンスが SQL ホスト用に指定されます。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
SQLINSTANCE	文字列	不要		SQL Server インスタンスの名前。または、バックアップ操作の場合は、$ALL を指定して、デフォルトインスタンスを含むすべての SQL Server インスタンスを指定します。 SQLINSTANCE $ALL を使用すると、バッチファイルの最初の操作時に表示されます。バッチファイル内の各操作は、バッチファイルを実行したクライアント上のすべての SQL Server インスタンスに対して実行されます。また、後続の操作で SQLHOST または SQLINSTANCE を指定する必要はありません。
STANDBYPATH	文字列	不要	なし	スタンバイ REDO ログに使用する完全修飾ファイルパスを指定します。
STOPAFTER	日時文字列	不要	なし	RESTORETOMARK オプションの日時を指定します。日時文字列の形式は YYYY/MMDDHH:MM:SS です。
STOPAT	日時文字列	不要	なし	トランザクションログの指定した時点のリカバリを指定します。日時文字列の形式は YYYY/MMDDHH:MM:SS です。
STORAGEIMAGE	文字列	不要	なし	グループ化された Snapshot Client スナップショットを使用してバックアップされたデータベースをリストアする場合に使用されます。STORAGEIMAGE では、物理ファイルが関連付けられるイメージが識別されます。
STRIPES	整数	不要	1	ストライプ数を指定します。範囲は 1 から 32 です。

キーワード	値	必須	デフォルト	説明
TO	ファイルパス	不要	なし	ファイルグループの宛先パスを指定します。各 MOVE キーワードに必要です。各 MOVE エントリの後に続けて指定する必要があります。値は一重引用符で区切ることができます。
TRACELEVEL	MIN, MID, MAX	不要	MIN	トレースレベルを指定します。
TRXOPTION	NOTRUNC, TAILLOG	不要	なし	SQL Server トランザクションログのバックアップオプションを指定します。 NOTRUNC を指定しない場合、トランザクションログはバックアップされ、切り捨てられます。TAILLOG を選択した場合、最終ログはバックアップされ、切り捨てられます。
USERID	文字列	不要	sa	SQL Server にログインするためのユーザー ID を指定します。このキーワードは統合セキュリティを使用すると無視されます。
VDITIMEOUTSECONDS	整数	不要	300	SQL Server 仮想デバイスインターフェースのタイムアウト間隔を指定します。
VERIFYONLY	TRUE、FALSE	不要	FALSE	SQL Server でバックアップイメージの検証のみを行い、リストアは行わないように指定します。
VERIFYOPTION	NONE, STOPONERROR CONTINUEAFTERERROR	不要	NONE	このオプションは、アクティブページを持つデータベースに対してのみ有効です。STOPONERROR は検証を実行し、検証エラーが発生すると、検証を停止します。CONTINUEAFTERERROR は検証を実行し、検証エラーが発生しても、検証を継続します。

バッチファイルの作成

[Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]および[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスを使用して、NetBackup for SQL Server スクリプトを含むバッチファイルを作成できます。このスクリプトは、[スクリプトの管理 (Manage Scripts)]ダイアログボックスから後で実行できます。

`dbbackex` コマンドラインプログラムまたは NetBackup スケジューラを使用してスクリプトを起動することもできます。バッチファイルの例も参照してください。

p.262 の「レガシー SQL Server ポリシーのサンプルバックアップバッチファイルについて」を参照してください。

バッチファイルを作成する方法

1. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択するか、[ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。
2. バックアップまたはリストアするオブジェクトを選択します。
3. バックアップオプションまたはリストアオプションを選択します。

   p.218 の「SQL Server バックアップ操作のオプション」を参照してください。

   p.84 の「NetBackup for SQL Server のオプション」を参照してください。
4. [バックアップスクリプト (Backup script)]または[リストアスクリプト (Restore script)]グループで、[保存する (Save)]をクリックします。
5. [バックアップ (Backup)]ボタンまたは[リストア (Restore)]ボタンをクリックします。
6. バッチファイルのために次のフォルダを指定します。

   install_path¥NetBackup¥DbExt¥MsSql¥ フォルダ

   バッチファイルは、実行するホスト上に存在している必要があります。リモートホストで操作を実行する場合、バッチファイルはそのリモートホスト上に存在している必要があります。

   p.278 の「NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録」を参照してください。
7. ファイルには、拡張子 `.bch` を持つ一意の名前を付けます。

8 ［保存 (Save)］をクリックします。

既存のファイルの名前を選択することもできます。NetBackup によって、そのファイルに新しいスクリプトが追加されます。

9 ［はい (Yes)］をクリックして、バッチファイルを開き、編集します。

p.262 の「レガシー SQL Server ポリシーのサンプルバックアップバッチファイルについて」を参照してください。

バッチファイルの実行

バッチファイルを作成すると、それを、NetBackup for SQL Server インターフェースから手動で実行できるようになります。

バッチファイルを実行する方法

1 アクセスするホストおよびインスタンスにログオンします。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

2 ［ファイル (File)］>［スクリプトファイルの管理 (Manage script files)］を選択します。

3 バッチファイルをダブルクリックします。

4 ［開始 (Start)］をクリックします。

5 操作を監視する場合は、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

新しい SQL Server レガシーポリシーの追加

このトピックでは、バックアップを実行するときにクライアントおよびバッチファイルを使用する SQL Server レガシーポリシーを作成する方法を説明します。

メモ: 複数ストリームのバックアップおよびリストアを実行する場合、または複数のネットワークインターフェースを使用する場合は、他の構成を実行する必要があります。

p.79 の「SQL Server マルチストライプバックアップの構成」を参照してください。

p.180 の「複数 NIC を備えている場合の SQL Server バックアップの設定について」を参照してください。

新しい SQL Server レガシーポリシーを追加する方法

1 マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (UNIX) としてログオンします。

2 NetBackup 管理コンソールを開きます。

3 サイトに複数のマスターサーバーが存在する場合は、ポリシーを追加するマスターサーバーを選択します。

4 左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]を展開し、[ポリシー (Policies)]を選択します。

5 [処理 (Actions)]>[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]を選択します。

6 [新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスの[ポリシー名 (Policy name)]ボックスに、新しいポリシーの一意の名前を入力します。

7 [OK]をクリックします。

8 [新しいポリシーの追加 (Add New Policy)]ダイアログボックスで、[ポリシー形式 (Policy type)]リストから[MS-SQL-Server]を選択します。

ご使用のマスターサーバーにデータベースエージェントのライセンスが登録されていない場合、ドロップダウンリストにデータベースエージェントのポリシー形式は表示されません。

9 [属性 (Attributes)]タブの入力を完了します。

p.47 の「ポリシー属性」を参照してください。

10 [インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブで、[バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)]を選択します。

タブ名が[クライアント (Clients)]に変わると、[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、スクリプトを指定したり参照したりできるようになります。

11 その他のポリシー情報を次のように追加します。

- スケジュールを追加します。
  p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。
- クライアントを追加します。
  p.215 の「ポリシーへのクライアントの追加」を参照してください。
- バックアップ対象リストにバッチファイルを追加します。
  p.216 の「バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加 」を参照してください。

12 必要なすべてのスケジュール、クライアントおよびバックアップ対象の追加が終了したら、[OK]をクリックします。

スケジュールプロパティについて

それぞれのポリシーには、独自のスケジュールセットがあります。このスケジュールによって、自動バックアップの開始を制御することや、ユーザーによる操作の開始時期を指定することができます。データベースバックアップとファイルシステムのバックアップで意味が異なるスケジュールプロパティについて説明します。その他のスケジュールプロパティは、

ユーザー固有のバックアップ方針やシステム構成によって異なります。『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

表 12-3 スケジュールプロパティの説明

プロパティ	説明
バックアップ形式 (Type of backup)	このスケジュールで制御できるバックアップ形式を指定します。バックアップ対象のリストには、構成するポリシーに適用されるバックアップ形式だけが表示されます。 p.211 の「レガシーポリシーのバックアップ形式」を参照してください。
スケジュール形式 (Schedule Type)	次のいずれかの方法で自動バックアップをスケジュールできます。 ■ 間隔 (Frequency) 間隔 (Frequency) は、このスケジュールで次のバックアップ操作が開始するまでの期間を指定します。たとえば、バックアップ間隔を 7 日に設定して、正常なバックアップが水曜日に行われるように設定したとします。次の完全バックアップは、次の水曜日まで行われません。通常、増分バックアップは、完全バックアップより短い間隔で行います。 ■ カレンダー (Calendar) 特定の日付、週の特定の曜日または月の特定の日に基づいてバックアップ操作をスケジュールすることができます。
コピーを複数作成する (Multiple copies)	ポリシーで複数のバックアップのコピーを指定する場合、アプリケーションバックアップスケジュールで[コピーを複数作成する (Multiple copies)]を構成します。Snapshot Client を使う場合には、自動スケジュールの[コピーを複数作成する (Multiple copies)]も指定します。

レガシーポリシーのバックアップ形式

表 12-4 は、クライアントとバッチファイルを使う NetBackup for SQL Server レガシーポリシーで指定できるバックアップ形式を示しています。インテリジェントポリシーには、異なるバックアップ形式のセットがあります。

表 12-4 レガシーポリシーのバックアップ形式

バックアップ形式	説明
アプリケーションバックアップ (Application Backup)	アプリケーションバックアップスケジュールでは、クライアントから実行される NetBackup の操作をユーザーが制御できます。これらの操作には、クライアントから開始する操作と、マスターサーバー上で完全スケジュールによって開始される操作の両方が含まれます。NetBackup では、ユーザーがバックアップを手動で開始すると、アプリケーションバックアップスケジュールが使用されます。それぞれのデータベースポリシーに対して、1 つ以上のアプリケーションバックアップスケジュールを構成する必要があります。Default-Application-Backup スケジュールは、アプリケーションバックアップスケジュールとして自動的に構成されます。

バックアップ形式	説明
完全バックアップ (Full Backup)	このスケジュールでは、バッチファイル（完全、差分またはトランザクションログ）で示されるバックアップを NetBackup が自動的に開始する日時を指定します。ファイルリストに出現する順に、バッチファイルが実行されます。ポリシーに複数のクライアントが存在する場合、各クライアントに対してバッチファイルが実行されます。 p.197 の「バッチファイルで使用するキーワードおよび値」を参照してください。 p.212 の「完全バックアップへの差分バックアップの変換」を参照してください。

完全バックアップへの差分バックアップの変換

差分バックアップを実行するときにデータベースまたはファイルグループの完全バックアップがまだ存在しない場合は、NetBackup でバックアップを完全バックアップに変換できます。同様に、NetBackup はデータベースの完全バックアップがすでに存在しない場合にトランザクションログのバックアップを変換できます。この動作は、キーワード CONVERTBACKUP を使って有効にします。

p.197 の「バッチファイルで使用するキーワードおよび値」を参照してください。

NetBackup では、データベースまたはファイルグループの完全バックアップを実行したことがない場合のみ差分バックアップが変換されます。完全バックアップが NetBackup カタログに存在しないにもかかわらず、SQL Server が既存の完全 LSN を検出する場合には、NetBackup は完全バックアップではなく差分バックアップを実行します。この場合は、ネーティブツールを使った完全バックアップのリストアや、NetBackup MS SQL Client を使った差分バックアップのリストアが可能です。または、バックアップが NetBackup で期限切れになった場合、完全バックアップを NetBackup カタログにインポートできます。その場合は、NetBackup MS SQL Client を使って完全と差分の両方のバックアップをリストアできます。

エージェントは、各データベースに対して過去に完全バックアップが実行されているかどうかを確認します。以前の完全バックアップが存在しない場合は、バックアップが次のように完全バックアップに変換されます。

- バックアップを作成するデータベースを選択すると、バックアップが完全データベースバックアップに変換されます。
  ［バックアップ形式 (Type of Backup)］に［読み書き可能なファイルグループ (Read-write filegroups)］を選択すると、バックアップが読み書き可能なファイルグループの完全バックアップに変換されます。
- バックアップを作成するファイルグループを選択すると、NetBackup により次が実行されます。

- 選択したファイルグループがデフォルトのデータベースファイルグループである場合には、NetBackup はバックアップを完全ファイルグループバックアップに変換します。
- 選択したファイルグループがセカンダリファイルグループであり、プライマリファイルグループのバックアップが存在しない場合には、NetBackup はバックアップを部分的な完全データベースバックアップに変換します。このバックアップには、選択したファイルグループとデフォルトのファイルグループが含まれます。
- 選択したファイルグループがセカンダリファイルグループであり、プライマリファイルグループのバックアップが存在する場合には、NetBackup は選択したファイルグループの完全ファイルグループバックアップにバックアップを変換します。

- 部分的な差分バックアップを実行する場合、NetBackup により次が実行されます。
  - デフォルトのファイルグループに対して以前の完全バックアップが存在しない場合、NetBackup ではそのファイルグループがバックアップに追加され、操作が部分的な完全バックアップに変換されます。
  - デフォルトのファイルグループに対して以前の完全バックアップが存在するが、ファイルリスト内のセカンダリファイルグループに完全バックアップがない場合は、操作が部分的な完全バックアップに変換されます。
- CONVERTBACKUP オプションでは、完全復旧データベースが単純復旧モデルに切り替えられ、その後で完全復旧モデルに戻されたかどうかも検出されます。このシナリオでは、ログチェーンは分割され、SQL Server は、以降のログバックアップを作成するには、その前に差分バックアップを必要とします。NetBackup がこの状況を検出した場合は、バックアップはデータベースの差分バックアップに変換されます。

アプリケーションバックアップスケジュールの構成

データベースバックアップには、アプリケーションバックアップスケジュールが必要です。ポリシーにこのスケジュール形式が含まれていない場合、バックアップを実行することはできません。NetBackup for SQL Server は、このスケジュールを自動的に作成し、Default-Application-Backup と名前を付けます。

アプリケーションバックアップスケジュールのバックアップ処理時間帯には、スケジュールされているすべてのジョブとクライアントによって開始されているジョブが発生する時間帯が含まれる必要があります。この時間帯は、バックアップの開始が自動スケジュールによるものであるか、またはクライアントによるものであるかにかかわらず、アプリケーションバックアップによって NetBackup for SQL Server からのバックアップ要求が許可されているために必要です。アプリケーションバックアップスケジュールの時間帯は、曜日および 24 時制で設定できます。この時間帯によって、アプリケーションバックアップスケジュールのために操作が実行できなくなることはありません。

読み取り専用ファイルグループを含むポリシーの場合は、保持レベルの設定に[無制限 (infinity)]を指定してスケジュールを作成することを検討してください。このレベルでは、冗長なバックアップを回避できます。

アプリケーションバックアップスケジュールを構成する方法

1. [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[スケジュール (Schedules)]タブをクリックします。

   [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスにアクセスするには、NetBackup 管理コンソールのポリシーリスト内のポリシー名をダブルクリックします。

2. [Default-Application-Backup]という名前のスケジュールをダブルクリックします。

3. スケジュールに対する他のプロパティを指定します。

   p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。

アプリケーションバックアップスケジュールの例

次の点を前提とします。

- 就業時間の 8 時から 13 時までの間にユーザーがデータベースバックアップ操作を実行する。
- 18 時から 22 時の間にこのポリシーを使用する自動バックアップが開始される。

この場合、アプリケーションバックアップスケジュールは、8 時に開始して 14 時間継続することになります。また、スケジュールの各日付に 2 つのウィンドウがあります。1 つは開始時刻が 0800 で期間は 5 時間、もう 1 つは開始時刻が 1800 で期間は 4 時間です。

表 12-5 NetBackup for SQL Server アプリケーションバックアップスケジュールの設定例

スケジュールオプション	設定
保持 (Retention)	2 週間
バックアップ処理時間帯 (Backup Window)	日曜日から土曜日 00:08:00 - 22:00:00

自動バックアップスケジュールの構成

複数のバッチファイルを同じポリシーに配置すると、そのポリシーの各自動バックアップセッション中にこれらのバッチファイルが実行されます。複数の SQL Server バックアップ操作を異なるスケジュールで実行することもできます。この場合、異なる自動バックアップスケジュールを使用して複数のポリシーを作成することができます。適切な自動バックアップスケジュールを使用するポリシーに各バッチファイルを割り当てます。

NetBackup に自動バックアップを実行させるか、または Snapshot Client 機能を使用する場合は、1 つ以上の自動バックアップスケジュールが必要です。

自動バックアップスケジュールを構成する方法

1. ［ポリシーの変更 (Change Policy)］ダイアログボックスで、［スケジュール (Schedules)］タブをクリックします。
2. ［新規 (New)］をクリックします。
3. 一意のスケジュール名を指定します。
4. ［完全バックアップ (Full Backup)］のスケジュールを選択します。

   p.211 の「レガシーポリシーのバックアップ形式」を参照してください。
5. スケジュールに対する他のプロパティを指定します。

   p.210 の「スケジュールプロパティについて 」を参照してください。
6. ［OK］をクリックします。

自動バックアップスケジュールの例

表 12-6 に、自動バックアップスケジュールの設定例を示します。

表 12-6 NetBackup for SQL Server の自動バックアップスケジュールの設定例

スケジュールプロパティ	設定
保持 (Retention)	2 週間
間隔 (Frequency)	毎週
バックアップ処理時間帯 (Backup Window)	日曜日 18:00:00 - 22:00:00

ポリシーへのクライアントの追加

クライアントリストには、自動バックアップ中にバッチファイルが実行されるホストが含まれます。NetBackup クライアントは、1 つ以上のポリシー内に存在している必要があり、複数のポリシー内に存在することも可能です。

NetBackup for SQL Server ポリシーの場合は、追加するクライアントに次の項目をインストールしているか、利用可能である必要があります。

- SQL Server
- NetBackup クライアントまたはサーバー
- バックアップまたはリストアバッチファイル

メモ: 各クライアントにそれぞれのバッチファイルが存在している必要があります。

クライアントを NetBackup for SQL Server ポリシーに追加する方法

1. 編集するポリシーを開くか、新しいポリシーを作成します。

   [ポリシー (Policy)]ダイアログボックスを開くには、NetBackup 管理コンソールのポリシーリスト内のポリシー名をダブルクリックします。

2. クライアントを追加するには、まず[インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブで[バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)]を選択する必要があります。

3. [クライアント (Clients)]タブをクリックします。

4. [新規 (New)]をクリックします。

5. クライアントの名前を入力して、クライアントのハードウェアとオペレーティングシステムを選択します。

   SQL Server をクラスタ内にインストールしている場合は、クライアント名として SQL Server の仮想名を指定します。

   メモ: NetBackup 8.1 では、SQL Server クラスタ内の複数のノードに NetBackup をインストールしている場合、構成を追加する必要があります。

   p.68 の「ホスト管理での自動検出されたマッピングの確認」を参照してください。

   p.67 の「分散アプリケーション、クラスタ、または仮想マシンのリストアマッピングの設定 」を参照してください。

6. 次のいずれかを選択します。

   - 別のクライアントを追加する場合、[追加 (Add)]をクリックします。
   - 他に追加するクライアントがない場合は、[OK]をクリックします。

7. [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

バックアップ対象リストへのバッチファイルの追加

データベースポリシーのバックアップ対象のリストは、その他のポリシーのバックアップ対象のリストと意味が異なります。たとえば、標準または Microsoft Windows ポリシー形式では、バックアップするファイルおよびディレクトリを一覧表示します。データベースポリシーでは、実行するバッチファイルを指定できます。(NetBackup for SQL Server では、スクリプトはバッチファイルと呼ばれ、`.bch` 拡張子があります。)バッチファイルは、開始するバックアップ操作を記述します。これらは、手動または NetBackup サーバーによるスケ

ジュール操作に従って開始できます。これらのファイルはクライアント上に置かれ、NetBackup for SQL Server および SQL Server の操作を指示します。

スケジュールバックアップを実行するポリシーが必要な場合は、バッチファイルを追加します。バックアップ対象リストに一覧表示されているすべてのバッチファイルが、手動バックアップと自動バックアップのスケジュールに対して実行されます。[スケジュール (Schedules)]タブでスケジュールを作成します。NetBackup は、[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストに表示されている順にバッチファイルを実行します。

メモ: エラーや誤操作を避けるため、バックアップ対象リスト内の正しいバッチファイル名を指定します。

バックアップ対象リストにバッチファイルを追加するには

1. バッチファイルがクライアントに存在することを確認します。

   p.278 の「NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録」を参照してください。

2. 編集するポリシーを開くか、新しいポリシーを作成します。
3. バッチファイルを追加する前に、次の操作を実行する必要があります。
   - [インスタンスとデータベース (Instances and Databases)]タブで、[バッチファイルで使用するクライアント (Clients for use with batch files)]を選択します。
   - [クライアント (Clients)]タブで、1 つ以上のクライアントを追加します。
4. [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブをクリックします。
5. [新規 (New)]をクリックします。
6. [バックアップ対象の追加 (Add Backup Selection)]ダイアログボックスで、使用するバッチファイルの名前を指定します。次のいずれかの方法でファイル名を指定します。
   - [参照 (Browse)]をクリックします。バッチファイルを検索して選択し、[OK]をクリックします。
   - [スクリプト (Script)]フィールドで、クライアント上のバッチファイルのフルパス名を入力して[追加 (Add)]をクリックします。
     次に例を示します。

     ```
     install_path¥NetBackup¥DbExt¥Mssql¥bkup.bch
     ```

     バッチファイルのフルパス名を指定する必要があります。
7. 他にバッチファイルがあれば追加します。
8. [OK]をクリックすると、バックアップ対象リストにバッチファイルが追加されます。
9. [OK]をクリックします。

SQL Server ホストおよびインスタンスの選択

NetBackup MS SQL Client がアクセスする SQL Server ホストおよびインスタンスを設定する手順は、次のとおりです。ユーザー ID とパスワードは、ホストが標準または混合のセキュリティを使用する場合にのみ必要となります。該当する場合、最初に NetBackup MS SQL クライアントを開くときにのみ、これらのクレデンシャルを指定する必要があります。

SQL Server ホストおよびインスタンスを選択する方法

1. NetBackup MS SQL Client を起動します。
2. ［ファイル (File)］>［SQL Server の接続のプロパティの設定 (Set SQL Server connection properties)］を選択します。
3. ［SQL Server の接続のプロパティ (SQL Server connection properties)］ダイアログボックスで、［ホスト (Host)］ドロップダウンメニューから、SQL Server ホストを選択します。

   ホスト名がドロップダウンメニューに表示されない場合は、入力することができます。リモートホストを選択して［適用 (Apply)］をクリックすると、［ホストの種類 (Host type)］が［リモート (remote)］に指定されます。
4. ［インスタンス (Instance)］ドロップダウンメニューから、SQL Server インスタンスを選択します。

   インスタンス名がドロップダウンメニューに表示されない場合は、入力することができます。［インスタンス (Instance)］フィールドを［デフォルト(default)］または空 (空白ではない) に設定すると、デフォルトのインスタンスを指定することができます。
5. 変更を保存するには、［適用 (Apply)］をクリックします。
6. ［閉じる (Close)］をクリックします。

SQL Server バックアップ操作のオプション

表 12-7 では、バックアップを実行する場合に使用可能なオプションについて説明します。［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)］を選択すると、これらのオプションが［Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスに表示されます。

注意: ポリシーが複数のストライプを使用するようにも構成されている場合、スケジュールの多重化を有効にしないでください。1 つのバックアップポリシーに対して多重化と複数のストライプの両方が構成されていると、リストアに失敗します。

表 12-7 SQL Server バックアップ操作のオプション

オプション	説明
データベースオブジェクト (Expand database)	このペインを使用して、使用中のデータベースを全検索できます。SQL Server インスタンスを展開すると、そのデータベースが表示されます。各データベースを展開してそのファイルグループを表示したり、ファイルグループを展開してそのファイルを表示したりすることができます。このペインで任意のオブジェクトを選択して、右ペインに構成オブジェクトを表示できます。
バックアップするデータベースオブジェクトの選択 (Select database(s) for backup from *instance host¥instance*)	このペインからバックアップを行うオブジェクトを選択します。このペインには、左ペインで選択されたホストおよびインスタンスを構成するデータベースオブジェクトのリストが表示されます。このペインでは、1 つ以上のオブジェクト (データベース) を選択できます。
バックアップ形式 (Type of Backup)	利用可能なバックアップ形式は次のとおりです。 ■ 完全 (Full) データベースの完全バックアップを作成します。 ■ 完全差分 (Full differential) 差分バックアップを作成します。 ■ トランザクションログ (transaction log) トランザクションログのバックアップを作成します。この形式のバックアップは、データベースに対してのみ使用できます。このバックアップ形式を選択する場合、[トランザクションログバックアップオプション (Transaction log backup options)]リストからバックアップオプションを選択する必要があります。 ■ 読み書き可能なファイルグループ (Read/write filegroups) データベースに読み書き可能なファイルグループのバックアップを作成します。 ■ 読み書き可能なファイルグループの差分 (Differential on read/write filegroups) データベースに読み書き可能なファイルグループの差分バックアップを作成します。 ■ 部分的なバックアップ用のテンプレートを作成 (Create a template for partial backup) データベースに、選択したファイルグループのバックアップだけを作成します。 ■ 部分的な差分バックアップ用のテンプレートを作成 (Create a template for partial differential backup) データベースに、選択したファイルグループの差分バックアップだけを作成します。
トランザクションログバックアップオプション (Transaction log backup options)	次のオプションは、トランザクションログのバックアップ形式を選択した場合に使用できます。 ■ トランザクションログは切り捨てて、バックアップする (Back up and truncate transaction log) トランザクションログをバックアップし、トランザクションログのアクティブでないエントリを削除します。 ■ トランザクションログは切り捨てないで、バックアップする (Back up transaction log, but do not truncate it) トランザクションログを切り捨てずにバックアップします。 ■ 最終ログのバックアップおよびリストア (Back up and restore tail log) ディスクから最終ログをバックアップおよびリカバリします。

オプション	説明
SQL 圧縮の使用 (Use SQL compression)	SQL Server を使用してバックアップイメージを圧縮するには、このオプションを選択します。SQL Server の圧縮を有効にした場合、NetBackup の圧縮を有効にしないでください。
バックアップスクリプト (Backup script)	■ すぐに実行する (Launch immediately) バックアップ操作をすぐに開始します。 ローカルホスト上ではない SQL Server インスタンスにログインすると、[すぐに実行する (Launch immediately)] が無効になります。ローカル以外のホスト用のスクリプトを生成した場合、スクリプトはそのホスト上で実行する必要があります。 ■ 保存 (Save) スクリプトを生成して後で実行します。
バックアップ (Back up)	右ペインで、次のバックアップオプションの 1 つを選択します。 ■ 選択したビュー (Selected 選択したオブジェクトだけをバックアップします。 ■ 選択したオブジェクト以外 (All but selected) 選択したオブジェクト以外のオブジェクトをすべてバックアップします。 ■ すべて (All) すべてのオブジェクトをバックアップします。
ストライプ (Stripes)	このボックスは、SQL Server でバックアップ用に作成するバックアップストライプの数を設定する場合に使用します。1 から 32 の数字を入力します。 注意: ポリシーが複数のストライプを使用するようにも構成されている場合、スケジュールの多重化を有効にしないでください。1 つのバックアップポリシーに対して多重化と複数のストライプの両方が構成されていると、リストアに失敗します。 p.79 の「SQL Server マルチストライプバックアップの構成」を参照してください。
選んだ項目に対する再開オプション (Resume options for this selection)	■ 失敗したバックアップを再開しない (Do not resume unsuccessful backups) ■ 最初からやりなおす (Retry from the beginning) 60 秒の待機後に、失敗したバックアップを再開します。 ■ 作業を保存し、失敗した時点からやりなおす (Save work and restart at point of failure) バックアップを複数のストリームに分割し、別々にバックアップします。失敗したストリームは、60 秒後に再開されます。 このオプションは、次の条件を満たす場合に使用できます。 ■ オブジェクトが 1 つだけ選択されている。 ■ バックアップ対象として選択されているオブジェクトがデータベースまたはファイルグループであり、完全バックアップ形式である。 ■ SQL Server オブジェクトが「完全」または「一括ログ」リカバリ方式を使っている。

オプション	説明
NetBackup ポリシー (NetBackup policy)	ホストが NetBackup マスターサーバーの場合、このリストには、MS-SQL-Server 形式の有効なポリシーがすべて含まれています。これらのポリシーから 1 つ選択することも、ポリシー名を入力することもできます。 デフォルトは[<任意>(<any>)]です。デフォルトを選択すると、NetBackup によって、使用する MS-SQL-Server ポリシーが選択されます。
ページ検証形式 (Page verification type)	オブジェクトに、[破損ページの検出 (torn page detection)]または[チェックサム (checksum)]のページ検証形式が指定されている場合に、このリストは有効になります。右ペインにあるすべてのオブジェクトには、適切な検証形式が指定されている必要があります。 これは、ページ検証を使用している場合、パフォーマンスが低下することを示します。 ■ 検証を実行しない (Do not perform verification) バックアップの実行前にページ検証が実行されません。 ■ 検証を実行する (Perform verification) バックアップの実行時にページ検証を実行します。
バックアップ (Backup)	データベースのバックアップを起動するか、データベースのバックアップスクリプトを生成します。このオプションは、バックアップするオブジェクトが選択されている場合にのみ有効になります。

バックアップ用に選択されたオブジェクトのプロパティの表示について

オブジェクトを右クリックすることによって、[Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスにオブジェクトのプロパティを表示できます。表 12-8 に、バックアップ用に選択されるオブジェクトのプロパティを示します。

バックアップに選択されたオブジェクトのプロパティの表示方法

1. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。
2. [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの右ペインでオブジェクトを右クリックして、[プロパティ (Properties)]を選択します。
3. 完了後、[OK]をクリックします。

表 12-8　バックアップ用に選択されるオブジェクトのプロパティ

プロパティ	説明
オブジェクト形式 (Object type)	データベース、データベースファイルグループ、データベースファイルまたはトランザクションログ。

プロパティ	説明
オブジェクト名 (Object name)	オブジェクトの名前。
親 (データベース、インスタンス、ファイルグループなど) (Parent (database, instance, filegroup, etc.))	オブジェクトの親の名前。
SQL Server インスタンス (SQL Server instance)	オブジェクトが属する SQL Server インスタンス。
ファイルサイズ (File size)	コンポーネントファイルのサイズ。このサイズは、バックアップスナップショットのサイズとほぼ一致している必要があります。
データサイズ (Data size)	バックアップストリームのサイズ。データベースにだけ適用されます。
ページ検証形式 (Page verification type)	選択したデータベース、ファイルグループおよび論理ファイルに対して構成される SQL Server のページ検証の形式。利用可能な値は、[なし (none)]、[破損ページの検出 (torn page detection)]または[チェックサム (checksum)]です。
読み取り専用(read-only) / 読み書き可能 (read-write)	ファイルグループに適用される属性。
オンライン(on-line) / オフライン (off-line)	ファイルグループの状態。
パス (Path)	データベースファイルの絶対パス (データベースファイルのみ)。

SQL Server データベースのユーザー主導型バックアップの実行

この手順では、データベースバックアップを実行する方法について説明します。

SQL Server データベースのユーザー主導型バックアップを実行する方法

1. NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。
2. アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

   p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。
3. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。

4 [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを選択します。

5 右ペインで、バックアップするデータベースを 1 つ以上選択します。

6 [バックアップ形式 (Type of backup)]を選択します。

次のいずれかを選択します。

- 完全バックアップを実行するには、[完全バックアップ (Full Backup)]を選択します。
- 差分オプションを使用してデータベースをバックアップする場合は、[完全差分 (Full differential)]を選択します。

7 バックアップオプションを選択します。

p.218 の「SQL Server バックアップ操作のオプション」を参照してください。

8 [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。

9 バックアップを開始するように求められたら、[はい (Yes)]をクリックします。

10 バックアップの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

SQL Server トランザクションログのバックアップ

この手順では、トランザクションログのバックアップを実行する方法について説明します。

注意: データベースのバックアップ後に生成された一連の全トランザクションログが、同じ NetBackup サーバーで保持されていることを確認してください。すべてのトランザクションログを同じ設備にバックアップし、他のログより前に期限切れになるログがないようにします。

トランザクションログをバックアップする方法

1 SQL Server では、復旧モデルを[完全 (Full)]または[一括ログ (Bulk-logged)]に設定します。

2 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

3 アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

4 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server Objects)]を選択します。

5 [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを選択します。

6 右ペインで、トランザクションログをバックアップするデータベースを 1 つ以上選択します。

7 ［バックアップ形式 (Type of Backup)］リストで、［トランザクションログ (transaction log)］を選択します。

8 ドロップダウンメニューから、トランザクションログオプションを選択します。詳しくは、次の表を参照してください。

トランザクションログは切り捨てて、バックアップする (Back up and truncate transaction log)	トランザクションログをバックアップし、トランザクションログのアクティブでないエントリを削除します。
トランザクションログは切り捨てて、バックアップしない (Truncate transaction log, but do not back it up)	バックアップを実行しないでログを切り捨てます。
最終ログのバックアップおよびリストア (Back up and restore tail log)	ディスクから最終ログをバックアップおよびリカバリします。

9 バックアップオプションを選択します。

10 ［バックアップ (Backup)］ボタンをクリックします。

バックアップの進捗状況を表示するには、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

SQL Server データベースファイルグループのバックアップ

バックアップ戦略で読み書き可能および読み取り専用ファイルグループを使用する方法について、詳細情報を参照できます。

p.226 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

p.225 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

データベースファイルグループをバックアップする方法

1 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

2 アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

3 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)］を選択します。

4 ［Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスの左ペインで、インスタンス名を展開します。

5 ファイルグループをバックアップするデータベースを選択します。

6 右ペインで、バックアップするファイルグループを 1 つ以上選択します。

7 バックアップオプションを選択します。

8 ［バックアップ (Backup)］ボタンをクリックします。

バックアップの進捗状況を表示するには、［ファイル (File)］>［状態の表示 (View status)］を選択します。

読み取り専用ファイルグループのバックアップ

バックアップ戦略で読み取り専用および読み書き可能ファイルグループを使用する場合、メディアの使用量の合計を縮小し、バックアップ操作にかかる時間の合計を短縮できます。読み取り専用ファイルグループをバックアップするには、まず、このバックアップ形式用に異なるポリシーを作成する必要があります。すべての読み取り専用ファイルグループがバックアップされていることも確認できます。

p.173 の「読み取り専用ファイルグループによるバックアップサイズおよび時間の縮小」を参照してください。

p.226 の「SQL Server 読み取り専用バックアップセットの表示」を参照してください。

読み取り専用ファイルグループをバックアップする方法

1 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

2 読み取り専用ファイルグループを含むバッチファイルを作成します。

完全バックアップまたは個々のファイルグループおよび個々のファイルのバックアップの組み合わせに、すべての読み取り専用ファイルグループを含める必要があります。このバックアップは一度だけ実行する必要があります。

3 NetBackup 管理コンソールで、読み取り専用ファイルグループ用のバックアップポリシーを作成します。

- アプリケーションバックアップスケジュールで、［保持 (Retention)］レベルに［無制限 (Infinite)］を設定します。
- バックアップ対象リストに作成したバッチファイルを追加します。

4 読み取り専用ファイルグループをバックアップします。

5 必要に応じて、読み取り専用バックアップセットを表示することで、すべての読み取り専用グループがバックアップされていることを確認します。

p.226 の「SQL Server 読み取り専用バックアップセットの表示」を参照してください。

SQL Server 読み取り専用バックアップセットの表示

読み書き可能なファイルグループに対してのみ定期的にバックアップを実行する場合、読み取り専用ファイルグループのバックアップが保持されているかどうかを確認できます。

読み取り専用バックアップセットを表示する方法

1. NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。
2. 読み取り専用バックアップセットを含むバックアップイメージを表示します。

   p.83 の「SQL Server バックアップイメージの表示」を参照してください。
3. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスで、インスタンス名を展開します。
4. データベースを右クリックし、［プロパティ (Properties)］を選択します。
5. ［読み取り専用バックアップセット (Read-only backup set)］タブをクリックします。

   データベースに読み取り専用ファイルグループが含まれていない場合は、［このデータベースには読み取り専用ファイルグループが存在しません。(This database does not contain any read-only filegroups.)］というメッセージが表示されます。一部の読み取り専用ファイルグループについてバックアップが存在していない場合は、バックアップされていないファイルグループのリストが表示されます。最後に、すべての読み取り専用ファイルグループのバックアップが検出された場合、このバックアップを含む最新のイメージの名前が表示されます。
6. バックアップされていない読み取り専用ファイルグループが存在する場合は、それらをできるだけ早くバックアップします。これらのバックアップは、完全リカバリを確実に実行できるようにします。
7. ［OK］をクリックします。

読み書き可能なファイルグループのバックアップ

バックアップ戦略で読み取り専用および読み書き可能ファイルグループを使用する場合、メディアの使用量の合計を縮小し、バックアップ操作にかかる時間の合計を短縮できます。読み取り専用ファイルグループのバックアップに関する詳細情報を参照できます。

p.226 の「読み書き可能なファイルグループのバックアップ」を参照してください。

p.225 の「読み取り専用ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

メモ: ファイルグループを読み書き可能から読み取り専用に変更した場合は、すぐにそのファイルグループをバックアップしてください。

読み書き可能なファイルグループをバックアップする方法

1 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

2 ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)］を選択します。

3 ［Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを選択します。

4 右ペインで、バックアップするデータベースを 1 つ以上選択します。

5 ［バックアップ形式 (Type of Backup)］を次のように選択します。

- 読み書き可能なファイルグループの完全バックアップを実行するには、［読み書き可能なファイルグループ (Read/write filegroups)］を選択します。
- 読み書き可能なファイルグループの差分バックアップを実行するには、［読み書き可能なファイルグループの差分 (Differential on read/write filegroups)］を選択します。

6 バックアップオプションを選択します。

7 ［バックアップスクリプト (Backup script)］グループから、［保存する (Save)］を選択します。

8 ［バックアップ (Backup)］ボタンをクリックします。

バッチファイルが保存される場所に注意してください。このバッチファイルは読み書き可能なファイルグループをバックアップするポリシーに追加されます。

9 NetBackup 管理コンソールを開きます。

10 読み書き可能なファイルグループのバックアップポリシーを作成します。

- 目的の保持期間で完全バックアップのスケジュールを 1 つ作成します。
- バックアップ対象リストに作成したバッチファイルを追加します。

11 (省略可能) 手動で読み書き可能なファイルグループをバックアップすることもできます。

この時点で手動バックアップを実行しない場合、手順 10 で作成したスケジュールによって自動的にバックアップが実行されます。

SQL Server データベースファイルのバックアップ

この手順では、データベースファイルをバックアップする方法について説明します。

データベースファイルをバックアップする方法

1 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

2 アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

3 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。

4 [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの左ペインで、インスタンス名とデータベースを展開します。

5 左ペインで、バックアップするファイルが含まれているファイルグループを選択します。

6 右ペインで、バックアップするファイルを 1 つ以上選択します。

7 バックアップオプションを選択します。

8 [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。

バックアップの進捗状況を表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。

部分的なデータベースのバックアップの実行

この手順では、部分的なデータベースのバックアップを実行するために、スクリプトを作成する方法について説明します。

部分的なデータベースのバックアップを実行する方法

1 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

2 アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

3 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。

4 [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを選択します。

5 右ペインで、バックアップするデータベースを選択します。

6 [バックアップ形式 (Type of Backup)]に、次のいずれかを選択します。

- 部分的なバックアップ用のテンプレートを作成 (Create a template for partial backup)。

- 部分的な差分バックアップ用のテンプレートを作成 (Create a template for partial differential backup)。

7 バックアップオプションを選択します。

8 [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。

9 [Save Script As]ダイアログボックスで、ファイル名を指定し、[OK] をクリックします。

10 テンプレートを開くように求められたら、[はい (Yes)]をクリックします。

11 バックアップに含めるファイルグループをアンコメントして、テンプレートを編集します。1 つ以上のファイルグループをアンコメントする必要があります。

次に例を示します。

```
#
#  If you wish to include filegroup DBA_FG1 in the partial backup,
#  then remove the hash mark that precedes the following line.
#FILEGROUP DBA_FG1
```

次のように変更します。

```
#
#  If you wish to include filegroup DBA_FG1 in the partial backup,
#  then remove the hash mark that precedes the following line.
FILEGROUP DBA_FG1
```

12 テンプレートの修正が終了したら、それを保存します。

13 バックアップを実行するには、[ファイル (File)]>[スクリプトファイルの管理 (Manage script files)]を選択し、作成したスクリプトを選択して[開始 (Start)]をクリックします。

リモート SQL Server インストールのバックアップの実行

NetBackup for SQL Server を使って、リモートホストのデータベースをバックアップできます。生成されたバッチファイルは、リモートホストに保存する必要があります。操作は、ローカルインストールされた NetBackup for SQL Server、自動バックアップポリシー、または手動バックアップから開始できます。

リモート SQL Server インストールのバックアップを実行する方法

1 アクセスするホストおよびインスタンスを選択します。

p.218 の「SQL Server ホストおよびインスタンスの選択」を参照してください。

2 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。

3 操作のオプションを選択します。

p.218 の「SQL Server バックアップ操作のオプション」を参照してください。

[バックアップ (Backup)]ダイアログボックスで[保存する (Save)]が有効になっています。生成したスクリプトはログオンしているリモートホストで実行する必要があるため、[すぐに実行する (Launch immediately)]は無効になっています。

4 [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。

5 [Save Script As]ダイアログボックスで、リモートホストの *install_path*¥NetBackup¥DbExt¥MsSql¥ フォルダに移動し、そのフォルダにバッチファイルを保存します。

6 バックアップ操作を開始します。

次のいずれかを実行します。

- ローカルインストールされた NetBackup for SQL Server から操作を実行します。
- リモート SQL Server クライアントを含む新しいポリシーを作成します。ポリシーの[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストにバッチファイルを追加します。

NetBackup for SQL Server のファイルチェックポイントについて

大容量のバックアップを実行する必要があり、処理が完了する前に失敗した場合に備えて完了した作業を保存する必要がある場合は、ファイルのチェックポイントを使用します。ファイルのチェックポイントが有効な場合、データベースまたはファイルグループはファイルセットに分割され、別のユニットとしてバックアップされます。ファイルのチェックポイントは、次のバッチファイルコマンドによって開始されます。

MAXRESTARTSETS *integer*

バックアップ処理は *integer* 値と等しい数の操作に分割されます。ファイルの数が *integer* 値未満の場合、分割された操作の数はファイルの数と同じになります。

ファイルのチェックポイントは、ストリームとして、またはスナップショットオプションを使用してバックアップされるデータベースおよびファイルグループで使用できます。ただし、次の制限事項があります。

- バックアップオブジェクトには、2 つ以上のファイルを含める必要があります。
- データベースのリカバリモデルに「単純」を指定できません。
- スナップショットオプションがバックアップに使用される場合、この方式はインスタントリカバリではありません。ただし、ストレージユニットへのインスタントリカバリを使用するファイルのチェックポイントはサポートされます。

- ファイルのチェックポイントのバックアップに使用するバッチファイルでは、データベースまたはファイルグループを 1 つだけ指定できます。DATABASE $ALL オプションは使用できません。

データベース全体のバックアップにファイルのチェックポイントを使用する場合、NetBackup for SQL Server はデータベースをファイルセットのコンポーネントに自動的に分割します。コンポーネントからのデータベースのリカバリには、トランザクションログのリストアが必要です。[バックアップ (Backup)]ダイアログボックスからファイルのチェックポイントが選択されると、NetBackup for SQL Server は生成されたバッチファイルにバックアップログの指示句を自動的に含めます。

失敗した SQL Server バックアップの自動再試行について

NetBackup for SQL Server には、失敗したバックアップを再試行するための次のオプションが用意されています。

自動再試行	NetBackup for SQL Server は、バッチファイルの実行が原因で失敗したバックアップをトラッキングします。最初のバックアップ試行が完了すると、エージェントは失敗した操作のみを対象にしてバッチファイルを上書きします。上書きされたバッチファイルは自動的に起動されます。
手動再試行	手動再試行は自動再試行と類似していますが、上書きされたバッチファイルは NetBackup によって起動されません。代わりに、*install_path*¥dbext¥mssql¥temp ディレクトリにバッチファイルが書き込まれます。その後、ユーザーは新しいバッチファイルを実行するタイミングを選択できます。

自動再試行を使用するには、次の行をバッチファイルに追加します。

```
RESTARTTYPE AUTO
```

デフォルトでは、失敗したバックアップは、60 秒後に 1 回、自動的に再試行されます。バックアップの失敗を受けて遅延を変更する場合は、次の行をバッチファイルに追加します。

```
RESTARTWAITSECONDS <integer>
```

再試行の数を指定することもできます。次の行をバッチファイルに追加します。

```
NUMRESTARTS <1 to 9>
```

手動再試行を使用するには、次の行をバッチファイルに追加します。

```
RESTARTTYPE MANUAL
```

再試行は、ファイルのチェックポイントとともに使用することもできます。操作で失敗したどの部分も自動または手動で起動できる新しいバッチファイルに書き込めます。

p.230 の「NetBackup for SQL Server のファイルチェックポイントについて」を参照してください。

NetBackup for SQL Server クライアントの[バックアップ (Backup)]ダイアログボックスで、自動再試行とともにファイルのチェックポイントを有効にすることができます。単一のデータベース (またはファイルグループ) を選択した後で[選んだ項目に対する再開オプション (Resume options for this selection)]リストから[作業を保存し、失敗した時点からやりなおす (Save work and restart at point of failure)]を選択します。

この処理によって、次のスクリプトを含むバッチファイルが作成されます。

```
MAXRESTARTSETS 32
RESTARTWAITSECONDS 60
NUMRESTARTS 1
```

`MAXRESTARTSETS 32` は、最大 32 のピースが個別にバックアップされることを意味します。キーワードの `RESTARTWAITSECONDS` と `NUMRESTARTS` は次と同義です。

```
RETRYWAITSECONDS 60
NUMRETRIES 1
```

これらのキーワードは次の事項を示します。まず、最初のバックアップに失敗したすべてのピースに対して自動再試行が 60 秒後に起動されます。次に、再開が 1 度だけ試行されます。これらのパラメータのいずれかを手動で変更できます。

また、再試行スクリプトを自動的に起動しない選択もできます。`NUMRETRIES` コマンドを `RETRYTYPE MANUAL` に置き換えます。たとえば、次のように置換します。

```
NUMRETRIES 1
```

次のように変更します。

```
RETRYTYPE MANUAL
```

メモ: このトピックに示すすべてのキーワードと値の対は、バッチファイルの最初の操作でのみ使用されます。

13

dbbackex によるユーザー主導操作の実行

この章では以下の項目について説明しています。

- dbbackex を使った SQL Server のユーザー主導の操作の実行
- クライアントのスケジューラと dbbackex の併用

dbbackex を使った SQL Server のユーザー主導の操作の実行

dbbackex は、SQL Server のバックアップとリストアを実行するために使用可能なコマンドラインインターフェースプログラムです。dbbackex を開始するには、コマンドプロンプトから次を実行します。

```
install_path¥NetBackup¥bin¥dbbackex -f file [-p policy][-u userid][-pw password]
[-s server][-np]
```

次のパラメータの説明を参照してください。

ファイル　　開始する操作を記述したバッチファイルの名前です。

p.209 の「バッチファイルの実行」を参照してください。

ポリシー

バッチファイルに指定された操作を実行するために NetBackup が使う、MS-SQL-Server ポリシー形式です。

このパラメータは、リストア操作では無視されます。NetBackup サーバーでは、各リストア用のバッチファイルに指定されたイメージ名にのみ基づいてダンプファイルを取得できます。ポリシー名は、データベースのバックアップに使用されます。policy を省略すると、NetBackup サーバーでは、ポリシーリスト内で最初に検出されたアクティブな SQL Server ポリシーを使用します。このポリシー名は、バッチファイルに指定されたすべてのバックアップ操作に使用されます。

userid

データベース管理システムにログインするための SQL Server ユーザー ID です。

パスワード

データベース管理システムにログインするための SQL Server パスワードです。

サーバー

バックアップまたはリストアを行う NetBackup マスターサーバーのホスト名です。

このパラメータを省略すると、クライアントでは、Windows の NetBackup クライアント構成に従ってデフォルトのサーバーが使用されます。詳しくは『NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストア スタートガイド』を参照してください。

-np

このオプションを指定すると、dbbackex の操作完了時に、操作の状態を示すメッセージボックスが作成されません。

指定しない場合は、dbbackex の操作完了時にメッセージが表示されます。このメッセージには、バッチファイル内の操作が正常に実行された回数および失敗した回数が示されます。

メモ: どのオプションも二重引用符で区切ることができます。たとえば、ファイル名に空白が含まれている場合、二重引用符を使用します。

メモ: SQL Server のログオンパスワードを保護するには、-u または -pw パラメータを使用しないでください。これらのパラメータを省略すると、NetBackup for SQL Server が、暗号化されたファイルから SQL Server のデフォルトログオンデータを強制的に読み込むように設定できます。

---

p.82 の「NetBackup MS SQL Client の初回の起動」を参照してください。

クライアントのスケジューラと dbbackex の併用

dbbackex では、任意のクライアントのスケジューラを使用して自動的に NetBackup for SQL Server 操作を開始することができます。

利用可能なスケジューラは次のとおりです。

- Windows タスクスケジューラ:このスケジューラの使用方法については、Microsoft Windows のオンラインマニュアルを参照してください。
- SQL Server スケジューラ:このスケジューラは、SQL Server と緊密に統合されています。このスケジューラには、Microsoft SQL Server Enterprise Manager を介してアクセスできます。

SQL Server スケジューラの 1 つの明確な利点は、データベース保守操作のスクリプトを作成できることです。これらの操作は、定義するデータベースイベントの結果として開始されます。たとえば、dbbackex を開始するスクリプトを作成して、特定のトランザクションログをバックアップするように指定できます。また、このデータベースのトランザクションログがいっぱいになるとき、そのスクリプトを呼び出すアラートを作成できます。

メモ: クライアントのスケジューラから dbbackex を使用する場合、-np オプションを指定して、メッセージボックスが生成されないようにする必要があります。ただし、dbbackex のスケジューラを使用する前に、次の項目を考慮します。コンソールで -np オプションを使用せずに dbbackex 構文を試行します。このコマンドを実行して、操作のために作成したバッチファイルの正常な完了をテストします。

14

bplist を使用した SQL Server バックアップのリストの取得

この章では以下の項目について説明しています。

- bplist を使った SQL Server バックアップの取得について
- NetBackup for SQL Server のバックアップ名について

bplist を使った SQL Server バックアップの取得について

bplist コマンドを使用して、イメージを取得できます。NetBackup for SQL Server インターフェースを使用せずに手動でリストアスクリプトを作成する場合は、このコマンドを使用します。bplist について詳しくは『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

特定のクライアントの特定のサーバーからすべての NetBackup for SQL Server バックアップを抽出するには、Windows コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。

```
install_path¥NetBackup¥bin¥bplist -C client -t 15 -S server -R ¥
```

ここで、*client* は NetBackup for SQL Server が存在するホストマシン、*server* は NetBackup サーバーのホストマシンです。

次の例では、クライアント juneberry からサーバー Cole にバックアップされた SQL Server バックアップのリストを取得する方法を示します。

```
C:¥Program Files¥NetBackup¥bin¥bplist -C juneberry -t 15 -S cole -R ¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY.db.pubs.~.7.001of003.20140920101716..C:¥
```

```
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY.db.pubs.~.7.002of003.20140920101716..C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY.db.pubs.~.7.003of003.20140920101716..C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY.fil.pubs.pubsnew.7.001of001.20140919175149..C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY¥NEWINSTANCE.trx.abc.~.7.001of001.20140902170920..C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY¥NEWINSTANCE.fg.abc.PRIMARY.7.001of001.20140902170824.C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY¥NEWINSTANCE.db.Howard's
Barbeque.~.7.001of001.20140901085255..C:¥
juneberry.MSSQL7.JUNEBERRY¥NEWINSTANCE.inc.Howard's
Barbeque.~.7.001of001.20140903108552..C:¥
juneberry.MSSQL7.COLE.db.pubs.~.7.001of001.20140907100101..C:¥
juneberry.MSSQL7.COLE.db.pubs.~.7.001of001.20140908200234..C:¥
```

メモ: 行の終わりにあるコロンおよび円記号は、バックアップ名の一部ではありません。

NetBackup for SQL Server のバックアップ名について

バックアップ名は、次のコンポーネントから構成される文字列です。これらのコンポーネントは区切り文字で区切られます。区切り文字は、バックアップイメージ名の末尾にある C の直前の文字で指定されます。

図 14-1 データベースファイルグループのバックアップイメージ名

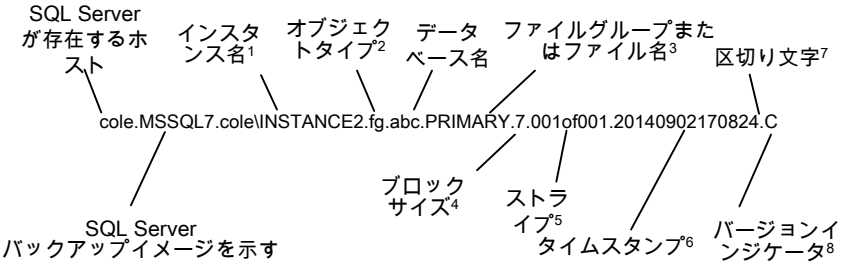
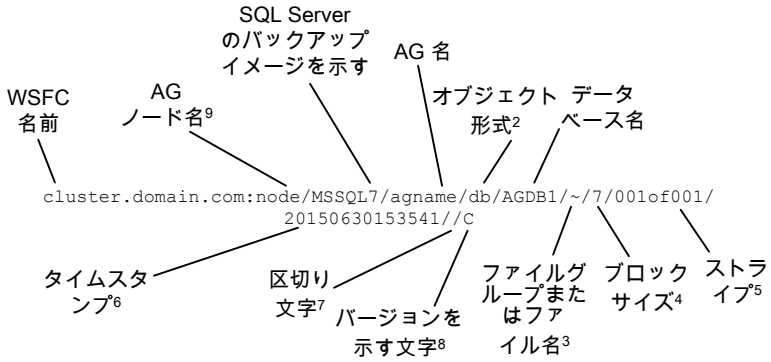


図 14-2 可用性グループ (AG) データベースのバックアップイメージ名



1 - インスタンス名の形式は、*<host>¥<instance-name>* です。デフォルトのインスタンス名は、ホストマシンの名前です。

2 - オブジェクト形式は次の通りです。

db	データベース
inc	データベースの差分
trx	トランザクションログ
fg	ファイルグループ
fgd	ファイルグループの差分
fil	ファイル

3 - ファイル名またはファイルグループ名。オブジェクト形式がファイルまたはファイルグループの場合に表示されます。それ以外の場合は、~ 記号が使用されます。

4 - ブロックサイズ。

5 - ストライプは *<total stripes>* の *<stripe number>* で指定され、ストライプでないバックアップは常に `001of001` です。ストライピングされたバックアップの場合、*<total stripes>* は、バックアップストライプの総数です。*<stripe number>* は、そのバックアップにおけるバックアップの番号で、001 から始まります。

6 - タイムスタンプの形式は、*YYYYMMDDHHMMSS* となります。AG のバックアップイメージのタイムスタンプは、協定世界時 (UTC) を反映します。AG 以外のバックアップイメージの場合、タイムスタンプは NetBackup サーバーに設定されているタイムゾーンを反映します。

7 - 区切り文字。そのすぐ後にバージョンを示す文字が続きます。AG 以外のデータベースイメージの場合、この文字はデフォルトでは ピリオド (.) です。AG データベースイメー

ジの場合、この文字はスラッシュ (/) です。いずれかのフィールドでピリオドまたはスラッシュが使用されている場合、区切り文字には他の記号が使用されます。

8 -「C」は、NetBackup のバージョンに関係なくすべての SQL Server バックアップイメージ名に適用されます。

9 - AG データベースのバックアップイメージの形式は、*<WindowsServerFailoverCluster>*:*<nodename>*/MSSQL7/*<AGname>* です。

15

SAP 環境の SQL Server のバックアップとリストア (レガシー SQL Server ポリシー)

この章では以下の項目について説明しています。

- SAP 環境での SQL Server バックアップおよびリストアについて
- SAP 環境の SQL Server の手動バックアップについて
- SAP 環境での SQL Server のポリシー構成について

SAP 環境での SQL Server バックアップおよびリストアについて

メモ: SAP 環境での SQL Server は、SQL Server インテリジェントポリシーに対してはサポートされません。

NetBackup では、あらかじめ定義されたバックアップ戦略に従って、SAP のスケジュールバックアップを実行できます。または、手動バックアップを実行することもできます。このバックアップは計画されず、例外的な状況で必要になることがあります。この章で説明する方法は、CCMS の SAP/MS SQL Server DBA の SAP で推奨される方法に基づいています。

SAP の R/3 データベースでの NetBackup のバックアップおよびリストア手順は、他の SQL Server データベースの場合と同じです。

データベースの完全または差分バックアップおよびトランザクションログのバックアップを実行するスクリプトを作成できます。NetBackup では、データベースのバックアップおよびリストアに加えて、SAP ファイルシステムをバックアップすることもできます。

SAP 環境での SQL Server の自動バックアップ用バッチファイルの作成

NetBackup for SQL Server でデータベースのバックアップおよびリストア操作を開始するには、バッチファイルを使用します。バッチファイルは、データベースのバックアップ用とトランザクションログのバックアップ用の両方を作成する必要があります。これらのバッチファイルは、作成したバックアップポリシーのバックアップ対象リストに追加する必要があります。

データベースバックアップのバッチファイルの作成

この項では、データベースバックアップのバッチファイルを作成する方法について説明します。

データベースのバックアップ用のスクリプトを作成する方法

1. NetBackup MS SQL Client を起動します。
2. ［ファイル (File)］>［SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)］を選択します。
3. ［Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)］ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを展開します。
4. 右ペインで、R/3 データベースを選択します。
5. ［バックアップ形式 (Type of Backup)］リストで、実行するバックアップの形式 (［完全 (Full)］または［完全差分 (Full differential)］) を選択します。
6. ［バックアップスクリプト (Backup Script)］から、［保存する (Save)］を選択します。
7. ［バックアップ (Backup)］ボタンをクリックします。
8. ファイル名を指定し、［保存 (Save)］をクリックします。

   既存のファイルの名前を選択することもできます。NetBackup によって、そのファイルに新しいスクリプトが追加されます。
9. ［はい (Yes)］をクリックして、バッチファイルを開き、編集します。

トランザクションログのバックアップのバッチファイルの作成

この項では、トランザクションログのバックアップのバッチファイルを作成する方法について説明します。

トランザクションログのバックアップのバッチファイルを作成する方法

1. トランザクションログのバックアップを開始する前に、データベース管理者は、[トランザクションログバックアップオプション (Transaction log backup options)]データベースオプションをオフにする必要があります。SQL Server インターフェースのこのオプションは、データベースに適用されます。

   データベースのダンプ後に生成される一連のトランザクションログは、すべて同じ NetBackup サーバー上に保持する必要があります。NetBackup for SQL Server でデータベースのリストアを正常に実行するには、これらのガイドラインに従ってバックアップ方針を決定する必要があります。

2. [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup SQL Server objects)]を選択します。
3. [Microsoft SQL Server オブジェクトのバックアップ (Backup Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスの左ペインで、データベースインスタンスを展開します。
4. 右ペインで、R/3 データベースを選択します。
5. [バックアップ形式 (Type of Backup)]で、[トランザクションログ (transaction log)]を選択します。
6. [バックアップスクリプト (Backup Script)]から、[保存する (Save)]を選択します。
7. [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。
8. ファイル名を指定し、[保存 (Save)]をクリックします。

   既存のファイルの名前を選択することもできます。NetBackup によって、そのファイルに新しいスクリプトが追加されます。

9. [はい (Yes)]をクリックして、バッチファイルを開き、編集します。

SQL Server でのバックアップの監視

スケジュールバックアップが正常に完了したことを、定期的に確認します。

次の項目を確認します。

- 最新のバックアップが正常に実行されたこと。
  p.247 の「NetBackup for SQL Server の操作の監視について」を参照してください。
- バックアップサイクルのすべてのバックアップがスケジュールに従って実行されていること。バックアップが連続していない場合、その後のデータベースのリストアの際に、重大な問題が発生する場合があります。

R/3 データベースのリストア

この項では、R/3 データベースをリストアする方法について説明します。

次のシナリオに基づいてリストアを実行する方法を判断します。

- 差分バックアップのスケジュールを行った場合は、そのリストア形式の情報を参照してください。
  p.243 の「リストア操作への差分バックアップの組み込みについて」を参照してください。
- R/3 データベースのディスクシステムまたはトランザクションログのディスクシステムが破損した場合は、そのシナリオの指示に従ってください。
  p.243 の「ディスククラッシュ後の R/3 データベースのリストア」を参照してください。
- R/3 データベースの通常のリストアを実行する場合は、そのリストア形式の指示に従ってください。
  p.244 の「データベースバックアップおよびトランザクションログのバックアップのリストア」を参照してください。

リストア操作への差分バックアップの組み込みについて

差分バックアップをバックアップ方針に組み込む場合のリストア処理は、使用できるバックアップ形式によって異なります。

リストアを実行する方法は、次のどの差分バックアップがあるかに基づいて判断します。

- データベースの最後の完全バックアップ後に差分バックアップが作成された場合は、データベースの最後のバックアップをリストアしてから、最新の差分バックアップをリストアします。その後、後続のすべてのトランザクションログを適用します。
- データベースの最後の完全バックアップ以降に差分バックアップが作成されていない場合は、データベースの最後の完全バックアップをリストアしてから、後続のすべてのトランザクションログを適用します。
- 複数の差分バックアップが使用できるが、最新のバックアップが読み込みできない場合、最新の完全データベースバックアップをリストアします。また、最新の読み取り可能な差分バックアップをリストアし、その後作成されたすべてのトランザクションログを適用します。

ディスククラッシュ後の R/3 データベースのリストア

この項では、R/3 データベースのディスクシステムまたはトランザクションログのディスクシステムが破損した場合にデータベースをリストアする方法について説明します。この処理は次の 3 つのディスクシステムを備えた構成でのみ適用されます。R/3 データベース用のシステム、R/3 トランザクションログ用のシステム、およびその他すべてに関連するシステムです。

メモ: リストア操作の実行中に、R/3 データベースを使用しないでください。すべての SAP サービスが停止していることを確認してから、NetBackup によるリストアを試行してください。

警告: R/3 データベースが存在するディスクシステムが破損した場合は、現在使用中のトランザクションログをすぐにバックアップすることが重要です。このログバックアップは、データの損失を防ぐために行われます。現行のログをバックアップしなかった場合、データベースは、最後にトランザクションログをバックアップした時点の状態にしかリストアできません。それ以降に R/3 システムで行われた作業は失われます。

ディスククラッシュ後に R/3 データベースをリストアする方法

1. 現行のトランザクションログをバックアップします。
2. 破損ディスクを交換します。

   RAID ディスクシステムでは、通常、破損ディスクを簡単に交換できます。ディスクの交換方法が不明な場合は、ハードウェアベンダーのマニュアルを参照してください。新しいディスクをフォーマットして、破損ディスクと同じドライブ文字を割り当てる必要があります。
3. データベースおよびトランザクションログをリストアします。

   リストア操作の主要なフェーズは、データベースのバックアップの再ロードおよび利用可能なトランザクションログの適用です。データベースバックアップが再ロードされると、データベースファイルは自動的に再作成されます。データは、バックアップデバイスから新しく作成されたファイルにコピーされます。データがコピーされると、トランザクションログが作成時と同じ順序で適用されます。最後に、データベースに障害が発生した時点で完了していなかったオープン状態のトランザクションがロールバックされます。

データベースバックアップおよびトランザクションログのバックアップのリストア

NetBackup MS-SQL Server Agent の GUI を使用すると、自動的なリカバリの実行が可能になります。最新のトランザクションログのバックアップを選択することによって、GUI によりデータベースの前回の完全バックアップが自動的にリストアされます。また、任意の差分バックアップと後続のトランザクションログのバックアップがリストアされます。このオプションを使用して、リストアする時点を指定することもできます。

メモ: リストア操作の実行中に、R/3 データベースを使用しないでください。すべての SAP サービスが停止していることを確認してから、NetBackup によるリストアを試行してください。

警告: R/3 データベースをリストアするには、まずデータベースの最新のバックアップをリストアしてから、後続のトランザクションログをリストアします。リストアの実行中にトランザクションを実行したり、データベースサーバーを停止したりしないでください。サーバーを停止すると、ログにチェックポイントが書き込まれるため、それ以降のトランザクションログをリストアできなくなります。

データベースバックアップおよびトランザクションログのバックアップをリストアする方法

1. データベースの最新のバックアップをリストアします。
2. データベースの最新の差分バックアップをリストアします (利用可能な場合)。
3. 後続のすべてのトランザクションログのバックアップをリストアします。
4. トランザクションログの最新のバックアップをリストアします。

SAP 環境の SQL Server の手動バックアップについて

マスターサーバーの管理者は、NetBackup 管理コンソールを使用して自動バックアップスケジュールを手動で実行できます。これは、MS-SQL-Server ポリシーに対してスケジュールできますが、その場合 R/3 データベースはバックアップスクリプトで指定されます。

詳しくは『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』で手動バックアップに関するセクションを参照してください。

SAP 環境での SQL Server のポリシー構成について

SAP 環境のバックアップを自動的に実行するには、バックアップポリシーを作成する必要があります。R/3 データベースのバックアップの場合、MS-SQL-Server ポリシー形式を選択してバックアップポリシーを作成する必要があります。データベースおよびトランザクションログのバックアップを開始するバッチファイルを、ポリシーの［バックアップ対象 (Backup Selections)］リストに追加する必要があります。

必要なバッチファイルを作成する方法と、バックアップポリシーを構成する方法についての情報を参照できます。

実行可能ディスクのバックアップ (ファイルシステムのバックアップ) の場合、Windows ポリシー形式を選択してバックアップポリシーを作成する必要があります。

Windows ポリシーについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

16

トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup for SQL Server の操作の監視について
- SQL Server のトラブルシューティング用の NetBackup レポートについて
- SQL Server のトラブルシューティング用のデバッグログについて
- NetBackup for SQL Server の最大トレースレベルの設定
- インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング
- 大規模な SQL Server データベースのリストアにおけるタイムアウトエラーの最小化について
- SQL Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング
- バックアップジョブ完了の遅延
- SQL Server の VMware バックアップ中に発生する SQL Server のログの切り捨てエラー
- SQL Server の圧縮バックアップイメージを単一のストライプとして、または複数のストライプを含むイメージとしてリストアすると、SQL Server のリストアが失敗する
- 可用性グループクラスタに不正なバックアップイメージが表示される
- SQL Server のホスト名または SQL Server データベース名の末尾にスペースがあると SQL Server データベースのリストアは状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する
- SQL Server のホスト名、データベース名、データベース論理名の末尾にスペースがあると移動操作は状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する

NetBackup for SQL Server の操作の監視について

NetBackup 管理コンソールの[アクティビティモニター (Activity Monitor)]は、NetBackup for SQL Server の操作を監視するために使用します。

このエージェントでは、NetBackup MS SQL クライアントインターフェースで表示できる自身の進捗レポートも作成されます。レポートを表示するには、[ファイル (File)]>[状態の表示 (View status)]を選択します。レポートは *install_path*¥NetBackup¥logs¥user_ops¥MsSql¥logs に保存されます。

ジョブの詳細および進捗レポートには次の種類の情報が含まれます。

- 操作に関する概略
- 操作の進捗状況に関する情報
- 操作の失敗の原因となるエラー状態または警告
- 操作の結果 (成功または失敗、および所要時間)

進捗レポートには次のような操作に関する追加詳細も含まれます。

- 操作のために NetBackup がバッチファイルに含めた SQL Server コマンド。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "TestDB1"
OBJECTTYPE DATABASE
COPYONLY FALSE
BLOCKSIZE 7
MAXTRANSFERSIZE 6
NUMBUFS 2
STRIPES 1
SQLCOMPRESSION FALSE
VERIFYOPTION NONE
```

- バックアップを実行した NetBackup サーバー、バックアップのために選択した SQL Server インスタンスおよびホスト、その他のポリシー情報。

```
NBSERVER "servera"
SQLINSTANCE "SQL2K14"
SQLHOST "SERVERA"
POLICY "sql-server"
NBSCHED "full"

INF - Setting backup catalog name to: servera
```

- SQL Server で発生したバックアップまたはリストア操作の進捗と、エラーが発生した場合はエラー。

```
USER - Operation inhibited by NetBackup for Microsoft SQL
Server: Only a full or incremental database backup can be performed

on database <Archive> because it uses the simple recovery model
or
has 'truncate log on checkpoint' set.

INF - OPERATION #1 of batch
C:¥NBU¥Veritas¥NetBackup¥dbext¥mssql¥temp¥__01_35_42_508_00.bch
FAILED with STATUS 1 (0 is normal). Elapsed time = 6(6) seconds.

INF - Results of executing
<C:¥NBU¥Veritas¥NetBackup¥dbext¥mssql¥temp¥__01_35_42_508_00.bch>:

<0> operations succeeded. <1> operations failed.

INF - The following object(s) were not backed up successfully.

INF - Archive
```

SQL Server のトラブルシューティング用の NetBackup レポートについて

管理者には、管理インターフェースから操作の進捗レポートにアクセスする権限があります。生成されている可能性のあるレポートは、[バックアップ状態 (Backup Status)]、[クライアントバックアップ (Client Backups)]、[問題 (Problems)]、[すべてのログエントリ (All Log Entries)]、[メディアリスト (Media Lists)]、[メディアの内容 (Media Contents)]、[メディア上のイメージ (Images on Media)]、[メディアのログ (Media Logs)]、[メディアの概略 (Media Summary)]および[書き込み済みメディア (Media Written)]です。特定の期間、クライアントまたはマスターサーバーを対象としてこのようなレポートを生成することも可能です。詳しくは『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

SQL Server のトラブルシューティング用のデバッグログについて

NetBackup マスターサーバーおよびクライアントソフトウェアでは、NetBackup の操作中に発生する可能性のある問題のトラブルシューティングのために、広範囲なデバッグログ

のセットを提供します。デバッグログは、SQL のバックアップ操作およびリストア操作でも使用できます。問題の原因を判断できたら、デバッグログを無効にすることができます。

デバッグログに記録される情報の量は制御できます。

p.250 の「デバッグレベルの設定」を参照してください。

これらのデバッグログの内容について詳しくは、『NetBackup トラブルシューティングガイド』を参照してください。

その他の NetBackup クライアントログと NetBackup マスターサーバーログについて詳しくは、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースのオンラインヘルプと『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

SQL Server のトラブルシューティング用のすべての NetBackup デバッグログの作成

次の手順に従って、NetBackup のすべてのデバッグログを作成することができます。

すべてのデバッグログを作成する方法

◆ 次のバッチファイルを実行します。

```
install_path¥NetBackup¥logs¥mklogdir.bat
```

p.249 の「SQL Server のバックアップ操作のデバッグログについて」を参照してください。

p.250 の「SQL Server のリストア操作のデバッグログについて」を参照してください。

SQL Server のバックアップ操作のデバッグログについて

バックアップを実行した後、デバッグログの情報は *install_path*¥NetBackup¥logs ディレクトリに配置されます。プロセスごとにサブディレクトリが作成されます。デバッグログファイルは ALL_ADMINS.mmddyy_0000x.log と名付けられます。統合ログ (VxUL) の場合、ログファイルはベリタス製品に共通の形式です。ログ記録について詳しくは、『NetBackup トラブルシューティングガイド』を参照してください。

クライアント (Client)

次のログを参照してください。

- bphdb (スケジュールバックアップのみ)
- dbclient
- ncfnbcs (VxUL)
- nbdisco (VxUL)
- user_ops¥mssql¥logs

マスターサーバー

nbars (VxUL)

スナップショットバックアップ	次のログを参照してください。 ■ bpbkar (Snapshot Client) ■ nbfsd (Snapshot Client) ■ bppfi インスタントリカバリ
VMware バックアップ (VMware backups)	ASC の問題とエラーのために、次のログはバックアップ済みである VM で作成されます。 ■ bpbkar ■ dbclient ■ ncfnbcs (VxUL)

SQL Server のリストア操作のデバッグログについて

次のログは、リストア操作に適用されます。

クライアント (Client)	次のログを参照してください。 ■ bpbkar (Snapshot Client) ■ bpfis (Snapshot Client) ■ bppfi (インスタントリカバリ) ■ dbclient ■ user_ops¥mssql¥logs
Replication Director を使ったスナップショットからの VMware リストア (VMware restores from snapshots using Replication Director)	Veritas VSS provider ログを参照してください。 p.251 の「Veritas VSS provider ログ」を参照してください。

デバッグレベルの設定

デバッグログに記録される情報の量を制御するには、[データベース (Database)] デバッグレベルを変更します。通常は、デフォルト値の 0 (ゼロ) で十分です。ただし、障害分析をするために、テクニカルサポートより、デフォルト以外の大きな値を設定するように依頼することがあります。

このデバッグログは、*install_path*¥NetBackup¥logs に存在します。

[クライアントのトレースレベル (Client Trace Level)] についての情報も利用可能です。p.252 の「NetBackup for SQL Server の最大トレースレベルの設定」を参照してください。

デバッグレベルを設定する方法

1. バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを開きます。
2. ［ファイル (File)］>［NetBackup クライアントのプロパティ (NetBackup Client Properties)］を選択します。
3. ［トラブルシューティング (Troubleshooting)］タブをクリックします。
4. ［全般 (General)］デバッグレベルを設定します。
5. ［詳細 (Verbose)］デバッグレベルを設定します。
6. ［データベース (Database)］デバッグレベルを設定します。
7. ［OK］をクリックして、変更を保存します。

Veritas VSS provider ログ

Veritas VSS provider は Windows イベントログにアクティビティを記録します。次の場所では、デバッグログも利用可能です。

install_path¥Veritas VSS provider¥logs

レジストリで **Veritas VSS provider** のログを有効にする

SQL Server がインストールされている NetBackup コンピューターで Veritas VSS provider のログを有効にします。

レジストリで Veritas VSS provider のログを有効にする方法

1. NetBackup がインストールされているコンピュータに管理者 (Administrator) としてログオンします。
2. レジストリエディタを開きます。
3. 次のキーを開きます。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥Logging

4. CreateDebugLog という名前で新しい DWORD 値を作成します。
5. 新しい値を右クリックして、［修正］をクリックします。
6. ［値のデータ (Value data)］ボックスに、1 と入力します。
7. ［OK］をクリックします。

Veritas VSS provider のログのデバッグレベルを上げる

ログのデバッグレベルを上げるには、C:¥Windows フォルダの pre-freeze-script.bat ファイルと post-thaw-script.bat ファイルの両方を修正します。スクリプト内の BeVssRequestor.exe がコールされる行に -log パラメータを追加します。VMware によって呼び出されるスクリプトが決定されます。

Veritas VSS provider のログのデバッグレベルを上げる方法

1 pre-freeze-script.bat の次の行を変更します。

```
BeVssRequestor.exe -pre2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!
!VMBackupType! !ExcludeList!
```

この行を次のように変更します。

```
BeVssRequestor.exe -pre2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!
!VMBackupType! !ExcludeList! -log
```

2 また post-thaw-script.bat の次の行も変更します。

```
BeVssRequestor.exe -post2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!
!VMBackupType! !ExcludeList!
```

この行を次のように変更します。

```
BeVssRequestor.exe -post2 -logscreen !SkipExReplica! !SkipSQL!
!VMBackupType! !ExcludeList! -log
```

NetBackup for SQL Server の最大トレースレベルの設定

メモ: SQL Server のバックアップの場合、この機能はレガシーの SQL Server バックアップポリシーを使用する場合にのみ利用可能です。

NetBackup MS SQL Client またはバッチファイルで最大トレースレベルを設定できます。最大レベルでは出力が大量になるため、通常、内部デバッグにのみ適しています。

NetBackup MS SQL Client で最大トレースレベルを設定する方法

1 NetBackup MS SQL Client を起動します。

2 [ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティの設定 (Set NetBackup client properties)]を選択します。

3 [クライアントのトレースレベル (Client Trace Level)]グループで[高 (Maximum)]を選択します。

バックアップまたはリストアバッチファイルでトレースレベルを最大に設定する方法

1 NetBackup MS SQL Client を起動します。

2 [ファイル (File)]>[スクリプトファイルの管理 (Manage script files)]を選択します。

3 変更するバッチファイルを選択し、[ファイルを開く (Open File)]をクリックします。

4 次の行を追加します。

TRACELEVEL MAX

5 ファイルを保存します。

インスタンス管理を使ったクレデンシャルの検証のトラブルシューティング

このトピックでは、アプリケーションユーティリティで SQL Server インスタンスを登録するときに検証エラーを引き起こす可能性のある状況について説明します。

インスタンスまたはインスタンスグループの検証は、次の理由により失敗する場合があります。

- ホスト名が無効な場合、次のメッセージが表示されます。

```
Status Code: 40 Could not validate credentials. Failed to connect

to client: <client>.
```

- ホスト名が正しくても、ホストが停止しているためにホストに接続できない場合、次のメッセージが表示されます。

```
Status code: 46 The validation operation timed out waiting for a
response from the client
```

- ホスト名が正しくても、ユーザー名とパスワードが無効な場合、次のメッセージが表示されます。

```
Status Code: 41 Validation of operating system user/password
failed for client: <client>.
```

- クレデンシャルに「sysadmin」ロールがない場合、検証が失敗します。

```
STATUS 1939: The specified user does not have SQL Server
System Administrator privileges.
```

- NetBackup Client Service または NetBackup Legacy Network Service がログオンアカウントで同一のユーザーを使わないが、必要とする場合。

```
Invalid configuration detected. The service user for the
Netbackup Client and Netbackup Legacy Network services must be the

same user. Change the service users in the Windows Service Manager
```

```
and try again.
```

p.27 の「SQL Server のバックアップおよびリストア用に NetBackup サービスを設定する」を参照してください。

- ユーザーアカウントに必要なローカルセキュリティ権限である[認証後にクライアントを偽装 (Impersonate a client after authentication)]と[プロセスレベルトークンの置き換え (Replace a process level token)]がありません。

```
Status Code 41
```

これらの権限は、クレデンシャル設定[これらの特定のクレデンシャルを使う (Use these specific credentials)]を使う場合に必要です。
p.29 の「SQL Server のローカルセキュリティ権限の設定」を参照してください。

大規模な SQL Server データベースのリストアにおけるタイムアウトエラーの最小化について

大規模な SQL Server のリストアでは、データが NetBackup メディアから読み込まれる前に[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]というエラーが発生する場合があります。このエラーは、リストア操作が開始される前に SQL Server でデータベースファイルの事前書き込みが必要な場合があるために発生します。この処理に必要な時間は、データベースファイルのサイズと、ホストマシンによるディスクへの書き込み速度によって決定されます。たとえば、システムで毎秒 60 MB の速度でディスクへの書き込みが可能であり、データベースのサイズが 2.4 TB である場合を考えます。実際にリストアが開始可能になるまでに、SQL Server によるディスクの準備に 12 時間以上かかります。実際の遅延は、計算値よりさらに 20 % から 40 % 長くなる場合があります。

タイムアウトの問題は、NetBackup の[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]設定の値を大きくすることによって解決できます。サーバー上の NetBackup 管理コンソールを使用して、リストアが必要なデータベースが存在する各クライアントのプロパティを変更します。デフォルトの[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]設定は、300 秒 (5 分) です。大規模な SQL Server データベースが含まれるクライアントがある場合、この値を大きくする必要がある場合があります。

SQL Server リストア中にファイルの初期化を排除できます。次のトピックを参照してください。

p.73 の「NetBackup for SQL のパフォーマンスに影響を与える要素について」を参照してください。

SQL Server の VMware のバックアップとリストアのトラブルシューティング

アプリケーションを保護する VMware バックアップを実行するときには、次の点に注意してください。

- 1 つのアプリケーション状態キャプチャジョブは、ポリシーで選択されるアプリケーションに関係なく、VM ごとに作成されます。
- VMware ディスクのレイアウトが前回の検出から変更されていると、ASC ジョブが失敗する場合があります。この場合、[VM 選択問い合わせ結果を再利用 (Reuse VM selection query results for)] オプションの値を小さく設定して、NetBackup に仮想マシンの再検出を強制する必要があります。『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。
- ASC ジョブが失敗しても、VMware スナップショットまたはバックアップは続行されます。アプリケーション固有のデータはリストアできません。

  SQL Server Management Studio (SSMS) に問い合わせを行うと、データベースがバックアップされたことが示される場合があります。この場合、データベースがスキップされても、スナップショットは成功しています。
- 失敗の結果、検出ジョブまたは親ジョブが状態コード 1 で終了します。
- ASC メッセージは ASC ジョブの詳細にフィルタリングされます。
- 特定アプリケーションのリカバリを有効にしたが、そのアプリケーションが VM に存在しない場合、ASC ジョブは状態 0 を返します。
- ASC ジョブの詳細はアクティビティモニターのジョブの詳細で見つけることができます。
- バックアップ時に Veritas VSS provider または VMware VSS プロバイダがいずれもインストールされていない場合、SQL Server データベースは静止していません。この場合、リストアされた後の SQL Server データベースのリカバリに手動の手順が必要になることがあります。
- `bpfis` が実行され、VSS スナップショットバックアップをシミュレートします。このシミュレーションはアプリケーションの論理情報を取得するために必要になります。

バックアップジョブ完了の遅延

NetBackup for SQL Server のバックアップジョブがデータの転送を完了したにもかかわらず、ジョブが完了する前にハングアップしたように見える場合があります。遅延は次のいずれかが原因である可能性があります。

- ネットワークの問題
- ストレージ転送の遅延

- NetBackup サーバーのバックアップ前処理

遅延の原因を特定するには、次の記事を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/TECH198864

SQL Server の VMware バックアップ中に発生する SQL Server のログの切り捨てエラー

データベース名に特殊文字が含まれたり、%TEMP% ディレクトリのパスが長すぎると、SQL Server の VMware バックアップ中に SQL Server のトランザクションログの切り捨てが失敗することがあります。SQL Server のログの切り捨て中に、SQL Server エージェントの NetBackup は一時ログバックアップを作成します。このバックアップは、ターゲットのバックアップデバイスの一部として現在のユーザーに設定されている %TEMP% ディレクトリおよびデータベース名を指定します。SQL Server では、バックアップデバイスに使用できるパスは 259 文字に制限されています。特定の状況下では、SQL Server エージェントが 259 文字よりも長いバックアップデバイスを生成し、ログの切り捨ての失敗を引き起こすことがあります。

次の状況がこのエラーを発生させます。

- 259 文字よりも長い %TEMP% ディレクトリが構成されている。
- データベース名と %TEMP% ディレクトリのパスを合わせた長さが 259 文字より長い。

この問題の回避策としては、パスが 259 文字より短くなるよう %TEMP% ディレクトリを構成するという方法があります。

SQL Server の圧縮バックアップイメージを単一のストライプとして、または複数のストライプを含むイメージとしてリストアすると、SQL Server のリストアが失敗する

この問題は、SQL Server が圧縮データのバッファによりビジー状態で、特定の時間内に送信されたデータをすべて処理できない場合に発生します。Windows Server ではデフォルトで、TCP 接続は TCP 接続状態が 2 分間 FIN_WAIT_2 に設定された後に閉じる必要があります。詳しくは、次の Microsoft 記事を参照してください。

https://support.microsoft.com/en-us/kb/923200/

メモ: TCPFinWait2Delay 値が存在しない場合、REG_DWORD レジストリ値としてその値を作成する必要があります。そうしないと、Windows はデフォルト値 240 を使います。

TCP 接続が FIN_WAIT_2 状態を維持する時間を増やす方法

1. NetBackup メディアサーバーで `regedit.exe` を開きます。
2. 次のレジストリサブキーを見つけて選択します。

   `HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Tcpip¥Parameters`
3. TCPFinWait2Delay をダブルクリックします。
4. 300 の値を入力します。
5. メディアサーバーを再起動します。
6. リストアが正常に完了したら、レジストリ設定を削除するか、設定を元の値に戻します。

   この設定の値を増やす場合は、すべての TCP/IP 接続に対して悪影響を及ぼします。値を増やすことにより、メディアサーバーで実行している他のアプリケーション用のポートが不足する場合があります。
7. メディアサーバーを再起動します。

可用性グループクラスタに不正なバックアップイメージが表示される

同一の短縮クラスタ名を持つが、異なるドメインに存在する複数の可用性グループクラスタのバックアップを実行できます。ただし、バックアップを参照する場合は、WSFC（Windows Server Failover Clustering）クラスタの完全修飾ドメイン名（FQDN）を入力することが重要です。NetBackup MS SQL Client で、[ソースクライアント (Source Client)] に WSFC クラスタの FQDN を入力します。短縮クラスタ名を使うと、NetBackup でバックアップイメージの正しいリストが表示されない場合があります。

SQL Server のホスト名または SQL Server データベース名の末尾にスペースがあると SQL Server データベースのリストアは状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する

SQL Server のホスト名または SQL Server データベース名の末尾に 1 つ以上のスペースがあると、NetBackup はリストアスクリプトを正しく生成しません。SQL Server のホスト名やデータベース名の末尾のスペースはスクリプトでは切り捨てられます。リストアを正常に実行するには、NetBackup MS SQL クライアントでリストアスクリプトの作成や編集を行う必要があります。

スクリプトで、DATABASE 行や NBIMAGE 行の SQL Server ホスト名または SQL Server データベース名を正しい名前に編集します。たとえば、デフォルトインスタンスを使っている場合にサーバーホスト名が「ACCT」でデータベース名が「DatabaseA」だとします。サーバーホスト名とデータベース名の末尾のスペースに注目してください。

次の行を変更します。

```
DATABASE "DatabaseA"
NBIMAGE "ACCT.MSSQL7.ACCT.db.DatabaseA.~.7.001of001.20151118121736..C"
```

目的:

```
DATABASE "DatabaseA   "
NBIMAGE "ACCT.MSSQL7.ACCT   .db.DatabaseA   .~.7.001of001.20151118121736..C"
```

SQL Server のホスト名、データベース名、データベース論理名の末尾にスペースがあると移動操作は状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗する

SQL Server のホスト名、データベース名、データベース論理名の末尾に 1 つ以上のスペースがあると移動操作は状態コード 5 またはエラー (-1) で失敗します。移動操作を正常に実行するには、NetBackup MS SQL クライアントで移動スクリプトの作成や編集を行う必要があります。

この問題の回避策について詳しくは、ベリタスサポート Web サイトにある次の TechNote を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/000099850

17

SQL Server のディザスタリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

- SQL Server のディザスタリカバリについて
- SQL Server のディザスタリカバリの準備
- ディザスタリカバリの後の SQL Server のデータベースのリカバリ

SQL Server のディザスタリカバリについて

SQL Server には、一時的な軽度の問題を自動的に修正する機能があります。ただし、この自動リカバリ機能は、ほとんどの障害に対応できません。たとえば、データベースの破損の程度が深刻である場合や、重大な障害が発生した場合は、システム管理者がリカバリを開始します。

ユーザー主導リカバリでは、システムの完全バックアップからサーバー全体 (SQL Server データベースを含む) をリストアできます。または、リカバリに SQL Server データベースのみの、新しくインストールした SQL Server または利用可能な他の SQL Server へのリストアを含めることができます。

サーバー全体をリストアすると、障害の発生時にそのサーバーに存在していた他のアプリケーションおよびデータもリカバリできるという利点があります。リストアは、次のいずれかの方法で行います。

- サーバーの手動リカバリ:システムの完全バックアップからサーバーを手動でリストアします。
  p.260 の「SQL Server のディザスタリカバリの準備」を参照してください。
- NetBackup Bare Metal Restore。BMR では、オペレーティングシステム、システム構成およびすべてのシステムファイルとデータファイルがリストアされ、システムリカバ

リが自動的に行われます。詳しくは『NetBackup Bare Metal Restore 管理者ガイド』を参照してください。

サーバーのリカバリが完了するか、または新しくインストールしたサーバーが利用可能になると、SQL Server データベースのリカバリを開始できます。

SQL Server のディザスタリカバリの準備

SQL Server のディザスタリカバリ計画を作成する場合は、master データベースの破損からリカバリする方法を検討する必要があります。ホストマシンの損失についても検討する必要があります。master データベースが破損すると、SQL Server は起動されません。障害の発生時には、システムデータベースを再構築する必要がある場合もあります。ただし、このプロセスでは、アプリケーションデータベースのスキーマ情報は再作成されません。データベース図式をリカバリするには、NetBackup MS SQL Client を使用して master データベースの最新のバックアップをリストアします。

SQL Server のディザスタリカバリでは、その他のデータ損失からのリカバリ方針が決定されている必要があります。データ損失には、ディスクエラー、ソフトウェアのエラー、人為的なミスなどが含まれます。ディザスタリカバリの準備として、master データベースを頻繁にバックアップする必要があります。データベースを追加または削除した後や、スキーマ定義が生成される操作を実行した後には、頻繁にバックアップを行います。

ディザスタリカバリの後の SQL Server のデータベースのリカバリ

ディザスタリカバリする場合、新しくインストールした SQL Server にリストアすることをお勧めします。ただし、アクティブな他のデータベースが存在する既存の SQL Server をリストアできます。サーバーは、同じハードウェアプラットフォームの同じバージョンの Windows で実行されている必要があります。SQL Server のバージョンと SQL Server の Service Pack レベルも元のサーバーと同じである必要があります。

SQL Server データベースをリカバリする方法

1 既存の SQL Server にリストアする場合は、次のいずれかを選択します。

- 新しい SQL Server インストールの場合、またはマスターデータベースが完全な状態であるときは、手順 4 に進みます。

- マスタデータベースが破損している場合は、まずマスターデータベースを再構築する必要があります。2 に進みます。

2 マスターデータベースを再構築する方法の手順については、次の記事を参照してください。正しい SQL Server バージョンを選択するには[その他のバージョン (Other Versions)]ドロップダウンリストをクリックします。

http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms144259.aspx

コマンドプロンプトでデフォルトインスタンスのシステムデータベースを再構築する方法について説明した情報を検索します。

3 再構成が完了したら、SQL Server サービスを再起動します (必要な場合)。

4 マスターデータベースのリストアを開始するには、シングルユーザーモードで SQL Server を開始します。

シングルユーザーモードで SQL Server を開始する手順は、次の記事で説明されています。

http://msdn.microsoft.com/en-AU/library/ms188236.aspx

正しい SQL Server バージョンを選択するには[その他のバージョン (Other Versions)]ドロップダウンリストをクリックします。

5 NetBackup MS SQL Client インターフェースを開きます。

6 リストア操作に必要なすべてのメディアを検索します。

7 [ファイル (File)]>[SQL Server オブジェクトのリストア (Restore SQL Server objects)]を選択します。

8 リストアする master データベースのコピーを含むバックアップイメージを選択します。

この時点では master データベースのみを選択します。

9 [リストア (Restore)]をクリックします。

10 リストアの完了後、SQL Server サービスを再起動します。

11 残りの SQL Server データベースのリストアを続行します。

SQL データベース、差分、トランザクションログ、ファイルおよびファイルグループをリストアする手順に従います。

すべてのリストア操作が正常に完了したら、SQL Server データベースのリカバリは完了です。

リカバリの完了後は、Veritas はできるだけ早くデータベースの完全バックアップを実行することをお勧めします。

A

バッチファイルの例

この付録では以下の項目について説明しています。

- レガシー SQL Server ポリシーのサンプルバックアップバッチファイルについて
- サンプルリストアバッチファイルについて

レガシー SQL Server ポリシーのサンプルバックアップバッチファイルについて

レガシー SQL Server ポリシーは、バッチファイルを使用してバックアップ操作を開始します。これらの例はバッチファイルを使ったさまざまなバックアップ操作の実行方法を示します。

次の例のバッチファイルが利用可能です。

- 「スクリプトによるデータベースのバックアップ」
- 「スクリプトによるストライプ化されたデータベースのバックアップの実行とストライプごとの複数の内部バッファの許可 」
- 「スクリプトによる 1 つの操作の実行と SQL Server にログインするためのユーザー ID とパスワードの指定」
- 「スクリプトによる複数の操作の逐次的な実行」
- 「スクリプトによる一連の操作の並列実行」
- 「スクリプトによるバックアップの最大転送サイズとブロックサイズの指定」
- 「バックアップからインスタンスとデータベースをエクスクルードするための環境変数を使用するスクリプト 」

スクリプトによるデータベースのバックアップ

この操作のパラメータには、特定のデフォルト値が定義されます。たとえば、バックアップストライプ数は 1、トレースレベルは最小値で、オブジェクト形式はトランザクションログではなくデータベースです。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによるストライプ化されたデータベースのバックアップの実行とストライプごとの複数の内部バッファの許可

この例では、4 つのデータストリームを使用して BUSINESS データベースをバックアップします。各データストリームで 2 つのバッファを使用します。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
STRIPES 4
NUMBUFS 2
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによる 1 つの操作の実行と SQL Server にログインするためのユーザー ID とパスワードの指定

SQL Server の標準セキュリティを使用している場合は、ユーザー ID およびパスワードのみを指定します。

p.195 の「NetBackup レガシーバックアップポリシーのある SQL Server セキュリティについて」を参照してください。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
SQLHOST "CADOO"
```

```
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
USERID JSMITH
PASSWORD my.Pwd
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによる複数の操作の逐次的な実行

このバッチファイルの例では、5 つの異なるバックアップを逐次的に実行します。それぞれの操作を完全に指定する必要があります。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
OBJECTTYPE DATABASE
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
STRIPES 5
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "RECREATION"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "EDUCATION"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
STRIPES 2
ENDOPER TRUE
```

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "GOVERNANCE"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "SURVIVAL"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによる一連の操作の並列実行

この例は、前の例に類似していますが、最初の操作に BATCHSIZE 3 が含まれる点が異なります。

p.264 の「スクリプトによる複数の操作の逐次的な実行」を参照してください。

この設定により、NetBackup では最初の 3 つの操作を並行して開始します。それらが完了した後、次の 3 つの操作を開始します。この例では 5 つの操作が行われるため、2 番目のバッチセットには 2 つの操作が含まれます。

```
BATCHSIZE 3
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
OBJECTTYPE DATABASE
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
STRIPES 5
ENDOPER TRUE
```

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "RECREATION"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "EDUCATION"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
STRIPES 2
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "GOVERNANCE"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "SURVIVAL"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
OBJECTYPE TRXLOG
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによるバックアップの最大転送サイズとブロックサイズの指定

このバッチファイルの例では、64 KB × 2^4 (1 MB) の最大転送サイズで「business」データベースをバックアップします。最大ブロックサイズは、512 バイト× 2^6 (32 KB) です。

```
OPERATION BACKUP
DATABASE "BUSINESS"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
MAXTRANSFERSIZE 4
BLOCKSIZE 6
ENDOPER TRUE
```

バックアップからインスタンスとデータベースをエクスクルードするための環境変数を使用するスクリプト

バッチファイルで SQLINSTANCE $ALL を使用して、ホスト上のすべての SQL Server インスタンスをバックアップするように指定できます。たとえば、次のバッチファイルでは、master、model および msdb データベースをバックアップします。これらのデータベースは、バッチファイルが実行されるホスト上のすべての SQL Server インスタンスでバックアップされます。

```
SQLINSTANCE $ALL
OPERATION BACKUP
DATABASE "master"
NBSERVER "BEARING"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
NUMBUFS 2
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "msdb"
NBSERVER "BEARING"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
NUMBUFS 2
ENDOPER TRUE

OPERATION BACKUP
DATABASE "model"
NBSERVER "BEARING"
MAXTRANSFERSIZE 6
```

```
BLOCKSIZE 7
NUMBUFS 2
ENDOPER TRUE
```

バックアップからホスト上の SQL Server インスタンスをエクスクルードするには、Windows 環境変数 NB_SQL_INSTANCE_EXCLUDE を作成します。エクスクルードするインスタンス名のリストを指定します。リストには 1 つ以上の名前を入れて、それぞれをセミコロンで区切ります。

たとえば、次の値を使用すると、デフォルトの SQL Server インスタンスと ABC-PRODUCTS という名前のインスタンスがバックアップからエクスクルードされます。

```
#DEFAULT#;ABC-PRODUCTS;
```

ローカルホストのデフォルトの SQL Server インスタンスは #default# と指定されます。

Windows 環境変数 NB_SQL_DATABASE_EXCLUDE を作成して、バックアップから個々のデータベースをエクスクルードすることもできます。変数の値には、データベース名のリストを指定します。

たとえば、次のバッチファイルを使用します。

```
SQLINSTANCE $ALL
OPERATION BACKUP
DATABASE $ALL
NBSERVER "BEARING"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
NUMBUFS 2
ENDOPER TRUE
```

環境変数 NB_SQL_DATABASE_EXCLUDE を使って、データベース「master」、「accounting」、「pubs」をエクスクルードできます。変数の値には、エクスクルードするデータベースを指定します。それぞれのデータベース名をセミコロンで区切ります。

```
MASTER;ACCOUNTING;PUBS
```

NB_SQL_DATABASE_EXCLUDE 変数は、DATABASE $ALL が指定されているバッチファイルにのみ適用されます。キーワードと値の対 (EXCLUDE <database>) と同じ機能が実行されます。両方の変数が使用された場合は、相互に修飾され、エクスクルードするデータベースが決定されます。

サンプルリストアバッチファイルについて

バッチファイルを使ってリストア操作を開始できます。次の例のリストアバッチファイルが利用可能です。

- 「スクリプトによるデータベースのリストア 」
- 「スクリプトによる複数のストライプからのデータベースのリストア」
- 「スクリプトによる指定した時点までのデータベースのトランザクションログのリストア 」
- 「スクリプトによるデータベースバックアップ、差分バックアップ、一連のトランザクションバックアップからのデータベースリストアの実行」
- 「スクリプトによるファイルグループのバックアップ、複数ファイルバックアップ、トランザクションログのバックアップからのデータベースリストアの実行」

スクリプトによるデータベースのリストア

この例では、次のバックアップに基づいて pubs というデータベースをリストアします。

```
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.db.pubs.~.7.001of001.20140628123631..C"
```

リストアに使用できるバックアップを検索するには、バックアップ時に作成された dbclient ログファイルを参照するか、または bplist を使用します。

p.236 の「bplist を使った SQL Server バックアップの取得について」を参照してください。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DATABASE "pubs"
# The following image is type: Full
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.db.pubs.~.7.001of001.20140628123631..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE RECOVERED
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによる複数のストライプからのデータベースのリストア

ストライピングしたリストアを実行する場合、ストライプ数および最初のバックアップイメージの名前を指定する必要があります。この例では、バックアップイメージには文字列 .001of004 が埋め込まれており、4 つのバックアップのうちの最初のバックアップであることを示しています。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DATABASE "Northwind"
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO.db.Northwind.~.0.001of004.20140216151937..C"
STRIPES 004
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
BROWSECLIENT "CADOO"
RECOVEREDSTATE RECOVERED
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによるファイルグループのバックアップ、複数ファイルバックアップ、トランザクションログのバックアップからのデータベースリストアの実行

この例では、[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで生成するデータベースの完全リストアのスクリプトを示します。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE FILEGROUP
DATABASE "DatabaseR"
OBJECTNAME "PRIMARY"
# The following image is type: Filegroup
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.fg.DatabaseR.PRIMARY.7.001of001.20140701095634..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE FILEGROUP
DATABASE "DatabaseR"
OBJECTNAME "DBR_FG2"
# The following image is type: Filegroup
```

```
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.fg.DatabaseR.DBR_FG2.7.001of001.20140701095425..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE FILE
DATABASE "DatabaseR"
OBJECTNAME "DBR_FG1_File1"
# The following image is type: File
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.fil.DatabaseR.DBR_FG1_File1.7.001of001.20140701100824..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE FILE
DATABASE "DatabaseR"
OBJECTNAME "DBR_FG1_File2"
# The following image is type: File
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.fil.DatabaseR.DBR_FG1_File2.7.001of001.20140701100908..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE
```

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE FILE
DATABASE "DatabaseR"
OBJECTNAME "DBR_FG1_File3"
# The following image is type: File
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.fil.DatabaseR.DBR_FG1_File3.7.001of001.20140701100953..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE TRXLOG
DATABASE "DatabaseR"
# The following image is type: transaction log
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.trx.DatabaseR.~.7.001of001.20140701100030..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE TRXLOG
DATABASE "DatabaseR"
# The following image is type: transaction log
NBIMAGE "ca.MSSQL7.CA¥SECOND.trx.DatabaseR.~.7.001of001.20140701110015..C"
SQLHOST "CA"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CA"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
```

```
RECOVEREDSTATE RECOVERED
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによる指定した時点までのデータベースのトランザクションログのリストア

このスクリプトは、データベースをリストアした後に実行されます。データベースは、指定した時点 (2014 年 2 月 16 日 2:03:00 P.M.) までリストアされます。この時刻は、バックアップログの日付 (2014 年 2 月 16 日 2:03:21 P.M.) より前です。

次の点に注意してください。

- STOPAT を指定しない場合、データベースはバックアップログの日付までリストアされます。
- データベースのバックアップおよび関連付けられたログファイルのリストアを手動で実行する必要はありません。[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスでスクリプトを作成します。
- RECOVEREDSTATE を指定していないため、このスクリプトが正常に実行された後、データベースはリカバリ済みの状態にリストアされます。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE TRXLOG
STOPAT 20140216/14:03:00
DATABASE Northwind
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO.trx.Northwind.~.0.001of001.20140216140321..C"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "CHISEL"
BROWSECLIENT "CADOO"
ENDOPER TRUE
```

スクリプトによるデータベースバックアップ、差分バックアップ、一連のトランザクションバックアップからのデータベースリストアの実行

この例では、[Microsoft SQL Server オブジェクトのリストア (Restore Microsoft SQL Server Objects)]ダイアログボックスで生成するスクリプトを示します。

```
OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DATABASE "DatabaseA"
# The following image is type: Full
```

```
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.db.DatabaseA.~.7.001of001.20140701094227..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE DATABASE
DUMPOPTION INCREMENTAL
DATABASE "DatabaseA"
# The following image is type: Full database differential
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.inc.DatabaseA.~.7.001of001.20140701103323..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE TRXLOG
DATABASE "DatabaseA"
# The following image is type: transaction log
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.trx.DatabaseA.~.7.001of001.20140701090005..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
```

```
OBJECTTYPE TRXLOG
DATABASE "DatabaseA"
# The following image is type: transaction log
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.trx.DatabaseA.~.7.001of001.20140701100030..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE

OPERATION RESTORE
OBJECTTYPE TRXLOG
DATABASE "DatabaseA"
# The following image is type: transaction log
NBIMAGE "cadoo.MSSQL7.CADOO¥SECOND.trx.DatabaseA.~.7.001of001.20140701110015..C"
SQLHOST "CADOO"
SQLINSTANCE "SECOND"
NBSERVER "BOW"
BROWSECLIENT "CADOO"
MAXTRANSFERSIZE 6
BLOCKSIZE 7
RESTOREOPTION REPLACE
RECOVEREDSTATE NOTRECOVERED
ENDOPER TRUE
```

B

多重化されたバックアップ

この付録では以下の項目について説明しています。

- SQL Server 多重バックアップの構成
- 多重化された SQL Server バックアップのリストア

SQL Server 多重バックアップの構成

多重化を使用すると、同じテープに複数のバックアップをインターリーブできます。この機能は、同じテープドライブを使用して同時に多数のバックアップを作成する場合に有効です。

ただし、SQL Server がリストア時にストリームを要求する方法によっては、多重化のために SQL Server のリカバリが妨げられる可能性があります。複数ストリームのバックアップを実行するときに多重化を有効にした場合は、リストアを実行する方法の情報を参照してください。多重バックアップをリストアするには、ストライプごとにリストアを設定する必要があります。

p.102 の「複数ストリームの SQL Server バックアップのリストア」を参照してください。

多重バックアップを作成する場合は次のように設定します。

- バックアップポリシーで、使う[ストライプ (Stripes)]の数を選択します。
  SQL Server インテリジェントポリシーの場合は、[Microsoft SQL Server]ページでこのオプションを設定します。レガシー SQL Server ポリシーの場合は、バックアップバッチファイルを作成するときに[ストライプ (Stripes)]オプションを設定します。
- ポリシーのスケジュールで、[メディアの多重化 (Media multiplexing)]を、使うバックアップストライプの数に設定します。
  レガシー SQL Server ポリシーの場合は、[アプリケーションバックアップ (Application Backup)]スケジュールの多重化を有効にします。
- このスケジュールに関連付けられたストレージユニットで、[多重化を有効にする (Enable Multiplexing)]を選択し、[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]を使用するストライプの数に設定します。

多重化された SQL Server バックアップのリストア

ほとんどの場合、Veritas は複数の SQL Server ストリームを同じバックアップから 1 つのテープに多重化することはお勧めしません。ただし、バックアップイメージを Vault 処理したりエクスポートしたりする場合は、この操作が必要になります。この形式の多重化バックアップのリストアでは、バックアップテープからのデータブロックのアクセスを同期化するときに NetBackup がタイムアウトする場合があります。このタイムアウトを回避するには、リカバリバッチファイルのストライプパラメータを、`STRIPES N` から `STRIPES 1` に変更します。

この値を変更すると、リストアが単一ストリームで実行されます。NetBackup によって *N* バックアップイメージが 1 回に 1 つずつ SQL Server に送信されます。それぞれのイメージのリストアが終了するとテープが巻き戻されます。

C

承認された場所の登録

この付録では以下の項目について説明しています。

- NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録

NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録

NetBackup は、バックアップ中にスクリプトがデフォルトのスクリプト格納場所および承認を受けた場所にあるかを確認します。スクリプトの承認を受けたデフォルトの格納場所は、UNIX の場合は `usr/openv/netbackup/ext/db_ext`、Windows の場合は `install_path¥netbackup¥dbext` です。スクリプトがデフォルトのスクリプト格納場所または承認を受けた場所にない場合、ポリシーのジョブは失敗します。スクリプトをデフォルトのスクリプト格納場所または追加の承認を受けた場所に移動すれば、NetBackup はスクリプトを認識します。スクリプトの格納場所を変更した場合、その変更をポリシーに反映する必要があります。ディレクトリの承認を受けることも可能で、承認されたディレクトリに格納されたスクリプトは NetBackup に認識されるようになります。ディレクトリ全体の承認が必要な場合は、承認を受ける場所をスクリプトの絶対パスにすることもできます。

デフォルトのスクリプト格納場所がお使いの環境で機能しない場合、次の手順に従ってスクリプト格納のための承認を受けた場所を 1 つ以上入力します。`nbsetconfig` を使用してスクリプトを格納する、承認を受けた場所を入力します。`bpsetconfig` も使用できますが、マスターサーバーまたはメディアサーバーでしか利用できません。

メモ: すべてのユーザーにスクリプトの書き込み権限を与えることは推奨しません。NetBackup は、ネットワークまたはリモートの場所からスクリプトを実行することを許可しません。すべてのスクリプトは、ローカルに格納してローカルで実行する必要があります。NetBackup をアンインストールする際は、NetBackup の `db_ext` (UNIX の場合) または `dbext` (Windows の場合) に格納されている作成済みのスクリプトを保護する必要があります。

承認を受けた場所とスクリプトについて詳しくは、ナレッジベースの記事を参照してください。

http://www.veritas.com/docs/000126002

承認を受けた場所を追加するには

1. クライアントでコマンドプロンプトを開きます。
2. `nbsetconfig` を使って承認を受けた場所の値を入力します。これらのコマンドは、クライアントの特権ユーザーが実行する必要があります。

   以下に、Oracle エージェントに設定できるパスの例を示します。エージェントに適したパスを使用します。

   - UNIX の場合:

     ```
     [root@client26 bin]# ./nbsetconfig
     nbsetconfig>DB_SCRIPT_PATH = /Oracle/scripts
     nbsetconfig>DB_SCRIPT_PATH = /db/Oracle/scripts/full_backup.sh
     nbsetconfig>
     <ctrl-D>
     ```

   - Windows の場合:

     ```
     C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin>nbsetconfig
     nbsetconfig> DB_SCRIPT_PATH=c:¥db_scripts
     nbsetconfig> DB_SCRIPT_PATH=e:¥oracle¥fullbackup¥full_rman.sh
     nbsetconfig>
     <ctrl-Z>
     ```

メモ: テキストファイルからの読み取りや、bpsetconfig を使用した NetBackup サーバーからのクライアントのリモート設定などのオプションについては、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。スクリプトの格納場所や承認を受けた場所を一覧にしたテキストファイルがある場合、nbsetconfig または bpsetconfig を使用すると、そのテキストファイルから読み込むことができます。
DB_SCRIPT_PATH=none のエントリでは、クライアント上でスクリプトを実行できません。none エントリは、スクリプトを実行できないように管理者がサーバーを完全にロックダウンする場合に便利です。

---

3 (該当する場合) これらの手順は、バックアップの実行が可能なクラスタ化されたデータベースまたはエージェントノードで実行します。

4 (該当する場合) スクリプトの格納場所がデフォルトの場所または承認を受けた場所に変更された場合、ポリシーを更新します。